

京都大学大学院工学研究科・工学部

# 自己点検・評価報告書Ⅲ

教 育 編

2006年（平成18年）10月

京都大学大学院工学研究科・工学部

# 自己点検・評価報告書Ⅲ

教 育 編

2006 年（平成 18 年）10 月



## は じ め に

高等教育セクターとしての大学は、社会で能力を発揮し得る人材の育成を第一義とする組織であることは言うまでもありません。近年、多元価値社会の到来とともに、大学が果たすべき高等教育の役割は一層大きくなっています。国立大学法人京都大学は、国民の税すなわち社会における経済活動の余剰によってそのコストが賄われる非営利組織であり、それ故に教育はもとより、研究、社会連携、さらには組織運営等、大学組織が取り組むべき活動全般に亘って成果を挙げることが求められています。この場合の成果は社会的価値の創出を指します。個々の大学活動の目的を徹底検証して明確かつ具体的な目標を設定し、それぞれ所定の成果を挙げるためには、組織を効果的に機能させるマネジメントが必要です。また、目標に照らして自らの成果を点検・評価する作業を通じ、目的に合致しなくなった目標や実現不可能になった目標を洗い出し、自らの成果についてフィードバックする自己管理体制を確立しなければなりません。このような機能を担うのが「自己点検・評価」だと言えます。

各大学の教育研究活動等の状況について自ら点検及び評価を行い、その結果を公表する「自己点検・評価」は、平成3（1991）年度の大学設置基準の大綱化により努力義務とされ、さらに平成11（1999）年度の大学設置基準の改正により法的に義務化されるに至りました。さらに、平成16（2004）年度の国立大学法人化を契機として、自主的な管理運営が可能になる一方で、その活動状況について「自己点検・評価」を実施し、併せて第三者評価機関による事後チェックを受ける義務を負うこととなりました。この間、大学院重点化を経て、「自己点検・評価」が矢継ぎ早に実施された結果、「評価疲れ」の声が学内外で聞かれますが、ここでの「評価」は二重の意味をもって語られているように思われます。それは、いまや義務化された「第三者評価」を受けなければならない外圧（＝外部者による評価）、及びそれに対応するための「自己点検・評価」に時間とエネルギーを費やさなければならない精神的負担の両面です。しかしながら、これらの評価は大学の活動実績に対する「成績表」ではなく、大学の使命を果たすための教育研究活動や組織運営の改善に向けたナイーブな作業の行動指標と位置づけるべきもののなのです。

工学研究科並びに工学部では、それぞれの教育活動について「自己点検・評価」作業を実施して参りましたが、この度その結果を「自己点検・自己評価報告書（教育編）2004」にまとめ、広く学内外に公表する運びになりました。工学研究科・工学部の教育活動の現況をご理解いただくとともに、その質を向上させる持続的取組みに資するため、自己点検・評価の結果に対する忌憚のないご意見やご叱責を賜りますれば幸いです。

最後に、本報告書の発刊につきましては、終始取りまとめに当たっていただいた自己点検・評価委員会に負うところが大きく、委員各位のご尽力に対して厚く謝意を表する次第です。

2006 年 10 月

京都大学大学院工学研究科長・工学部長      西本 清一



## 目 次

|                                  |     |
|----------------------------------|-----|
| はじめに .....                       | 1   |
| (Ⅰ) 学科長へのアンケート集計結果 .....         | 2   |
| (研究室配属、OB会組織、学科の概要)              |     |
| (Ⅱ) 専攻長へのアンケート集計結果 .....         | 9   |
| (研究室配属、OB会組織、専攻の概要)              |     |
| (Ⅲ) 工学部教授への教育に関するアンケート集計結果 ..... | 26  |
| 1. 所属工学研究科専攻名と年齢                 |     |
| 2. 教育理念、目的、目標                    |     |
| 3. 全学共通科目                        |     |
| 4. 学部授業                          |     |
| 5. 特別研究(卒業研究)                    |     |
| 6. 教育改善システム                      |     |
| 7. 学科におけるカリキュラムと教育システム           |     |
| 8. JABEE への対応                    |     |
| 9. キャンパスの分散化(桂移転)と学部教育のあり方       |     |
| 10. 社会の動向と授業内容                   |     |
| 11. 大学院入学と講義、研究指導                |     |
| 12. 大学院学生に対する奨学金、RA, COE 制度      |     |
| 13. 社会と大学院教育                     |     |
| 14. 学生の講義への出席率、出席率と成績との関係        |     |
| 15. 学生像                          |     |
| (Ⅳ) 学部学生(2回生以上)へのアンケート集計結果 ..... | 157 |
| (Ⅴ) 卒業生へのアンケート集計結果 .....         | 217 |
| 1. 京都大学工学部入学に際して                 |     |
| 2. 在学中の課外活動                      |     |
| 3. 学習環境                          |     |
| 4. 科目履修                          |     |
| 5. カリキュラム・授業(外国語を除外)             |     |
| 6. 外国語の授業                        |     |
| 7. 授業に関する満足度                     |     |
| 8. 学部の授業における教官との対話機会             |     |
| 9. 学生時代の経済状況                     |     |
| 10. 大学院                          |     |
| 参考資料 .....                       | 257 |



## はじめに

本冊子は、平成 17 年 7 月に（Ⅰ）学科長アンケート、（Ⅱ）専攻長アンケート、（Ⅲ）工学部兼担の教授に対して行った工学部教育に関するアンケート、（Ⅳ）学部学生（2 回生以上）へのアンケート、および（Ⅴ）卒業生へのアンケートを行なった結果に対する集計を要約したものである。巻末には参考資料として、アンケート本文、工学研究科・工学部概要などを掲載した。

京都大学工学部の中期計画・中期目標に定められた学部ならびに大学院における教育に関する自己点検・自己評価を行うのが目的である。この自己点検・評価結果は、教育に関する外部評価を行うための基礎資料である。学部教育と大学院教育に関する集計結果を区別するために、異なった紙の色を用いて印刷してある。

アンケートとその回答は 10.5 ポイントで示し、点検・評価委員会による要約・説明は 9 ポイントで表記した。また必要に応じて資料のコピーを示した。

なお、大学院の各専攻、学部の各学科の理念・学生数などに関する工学研究科と工学部の概要は <http://www-s.kogaku.kyoto-u.ac.jp/publish/publish.htm> にまとめられ以下のように公表されている。

### **大学院工学研究科・工学部概要**

工学部／工学研究科の組織や様々な統計情報を掲載

### **工学部案内（工学部紹介冊子 2007）**

工学部受験生を対象に、各学科の特色や研究内容、卒業生の進路等を掲載

### **工学研究科案内**

工学研究科の受験生を対象に各専攻の特色や研究内容等を掲載



# (I) 学科長へのアンケート集計結果

## 地球工学科

A. 研究室配属は、どのようにして決定されていますか。

- 1 主に、学生の希望に基づいて決めている。
- 2 主に、教員の選択に基づいて決めている。
- 3 学生と教員の話し合いにより決めている。
- 4 成績などに基づき、機械的に決めている。
- 5 その他（具体的にお書きください）

回答 1

B. 学科の卒業生が所属するOB会組織

### 京土会

<http://kyodokai-1kuciv.kyoto-u.ac.jp>

主な活動： 名簿および会報の作成

### 水曜会

<http://www.suiyokwai.jp>

主な活動： 名簿と会報の発行、総会の開催

C. 学科の概要

20 世紀の文明は、人口の急増と産業技術の高度化、およびそれに伴う資源の大量消費や環境汚染問題の顕在化によって、深刻な矛盾をもたらした。この地球という美しい生命共同体とその環境を守りつつ、人類の文明を発展させるための実学として「地球工学」がある。地球工学は、地下数十 km から地上数万 km を視野に入れて地球空間を合理的に開発・保全し、また、人類の持続可能な発展とその将来を開拓・保証するための学問領域であり、文明の運営に必要な資源・エネルギーの技術体系<資源工学>、文明を支える基盤としてのインフラストラクチャーの技術体系<土木工学>、人間・自然環境の均衡を維持する技術体系<環境工学>の 3 つの部門によって構成されている。地球工学科の教育では、地球工学の基礎となる自然科学の知識を十分に身に付けるとともに、幅広い教養を養うことを目標としている。地球工学の基本原則や関連する科学技術を総合的に理解しうる基礎学力および、それぞれの専門分野における深い知識を修得し、課題発見・解決方法の提案・検証・とりまとめを行う能力を養う。さらに、新しい文明像を求める志と構想力を持ち、国際社会において指導的立場に立って活躍できる人材を育成する。

## 建築学科

### A．研究室配属はどのようにして決定されていますか。

回答 5

学生の希望に基づいて決めているが、研究室ごとの定員を超えた場合は、教員による選考が行われ、選考されなかった学生については、学生の希望を聞いて、学科長が調整している。

### B．学科の卒業生が所属するOB会組織

京大建築会 <http://www.archi.kyoto-u.ac.jp/~kenchikukai/>

主な活動：名簿・会報の作成および同窓会活動、記念祝賀会（5年に1度）

### C．学科の概要

京都大学工学部建築学科は、大正9（1920）年8月に創設された。その後、昭和28（1953）年4月に大学院工学研究科修士課程および博士課程が設置され、同年5月に建築学専攻が発足したことにより、高等研究・教育の基盤が整備されるにいたった。さらに、昭和39（1964）年4月に建築学第二学科が開設された。平成8（1996）年4月に、工学一貫教育と大学院重点化構想の下に、改組が行われて学部は教育組織として活動することになり、建築学科と建築学第二学科が建築学科（大学科）として統合されることになった。

京都大学工学部建築学科の教育理念と目標は以下の通りである。

人間の生活環境を構成し、安全で健康にして快適な生活を発展させるよりどころとなる建築は、複雑な技術の総合の上に行われる創造的な努力によって作りだされる。建築学は、他の工学分野と同様に、人間生活に必要なものを生産する技術であるが、作りだされるもの一すなわち建築―は他と比較にならないほど人間生活のあらゆる面に密接かつ深く係わっており、最もヒューマンな技術といえる。このような建築の特色から、教科課程も自然科学、人文科学、社会科学の広い分野にまたがっており、卒業後の進路も建築・構造・環境の設計及び施工に従事する建築家及び技術者、行政的な指導、監督にあたる建築行政担当者、各種開発事業に携わるプランナーなど実に多様である。従って建築学科では、単に自然科学の面に才能をもつ学生だけでなく、人文科学、社会科学、さらには芸術にも深い関心をもつ学生もひとしく歓迎し、いずれもその才能を十分に伸ばすことができるように総合的な教育を基礎に据えている。このような幅広い内容を有する建築学の特性から、専門分野によるコース分けは行われていない。あえて、教育課程の分類を行うとすれば次のような系が存在する。

建築学科の教科課程は対象領域や研究手法の観点から、計画系、構造系、環境工学系の三つの系に大別することができる。

計画系では、豊かな人間生活の基礎となる住宅から種々の建築物及びそれらの集合体である地域・都市空間までを対象とし、空間の形成原理を解明し、空間構成計画、設計、都市計画などの方法や、美的観点からも優れた建築物を設計する方法について教育研究を行っている。さらに歴史的考究に基づく洞察力、現状認識のための調査分析の能力、空間を構成するための造形能力などを養うための教育を行っている。

構造系では、建築物を地震や台風などの自然の力から守り、その建物として寿命を全うするための構造工学・構造技術を教育研究している。構造技術の発達は従来経験しなかった超高層

建築や全天候野球場などの大規模構造の建設を可能にしてきた。さらに合理的な設計理論、構造法、施工法の展開が望まれ、自然科学を基礎とした広範な能力を発揮することができる人材を育成するための教育を行っている。

環境工学系では、熱・空気・光・音などの物理的環境要素と人間への生理・心理的影響を総合的に評価した環境計画、それを安全で最適に実現する設備計画について教育・研究している。最近の技術の進歩はめざましく、建築への要求が多様化、高度化しており、環境・安全計画は極めて重要になってきている。したがって、自然科学を基礎としてこれらを解決するための能力の習得を目指した教育を行っている。

また、現代の社会ニーズに応じて、人間の認知・行動や環境の持続可能性に対する理解に基づき、共に望ましい生活環境とその実現のための設計方法、生産・マネジメントシステム、情報システム、及び保全再生技術の構築をめざして、上記の3つの系を横断する教育や研究を進めるとともに、学際的領域の知識や技術を習得した人材を育成するための実践的教育を行っている。

建築家・建築技術者となるには、これらの諸領域について技術とその基礎となる原理を深く修得していくことが望まれるので、比較的基礎的な科目から次第に専門分野に至るように、また、なるべく各自の特性を活かした選択が可能なように履修課程が構成されている。さらに高度に専門的な学術知識を修得し研究能力を養うために、建築学科では大半の学生が大学院修士課程に進学し、その進路は建築学専攻、都市環境工学専攻などとなっている。

## 物理工学科

### A．研究室配属は、どのようにして決定されていますか。

コース、サブコースにより若干異なった方法が取られていますが、学科全体を要約すると、「学生の希望先と成績に基づき、それぞれのコース、サブコースで定めた手順に則り、配属先を決定する」のが一般的になっています。

### B．学科の卒業生が所属するOB会組織

**機械系：** 京都大学機械系工学会（京機会）

<http://www.hi-ho.ne.jp/dai2seiki/>

主な活動： 総会開催（1回以上）、大会開催、ニュースレター発行（1回以上）、卒業生名簿発行（数年に1回）、その他本会の目的に沿う諸活動

**材料系：** 水曜会

<http://www.suiyokwai.jp>

主な活動： 名簿と会報の発行、大会の開催

### エネルギー理工学コース

**(エネルギー応用工学サブコース・エネルギー科学研究科)：** 京エネ会

<http://web.kyoto-inet.or.jp/org/kyoene/>

### エネルギー理工学コース

**(原子核工学サブコース)：** けしの実会

<http://www.nucleng.kyoto-u.ac.jp/Dep/poppy.htm>

主な活動： 懇親会開催（1回以上）、卒業生名簿発行（数年に1回）、その他本会の目的に沿う諸活動

**宇宙基礎工学コース：** 京都大学工学部 航空工学科・応用物理学科 同窓会

主な活動： 3年に1回の割合で同窓会総会、講演会（卒業生による講演）、懇親会などの同窓会を開催

## C. 学科の概要

人類はいま所謂エネルギー、環境、経済のトリレンマに直面しています。こうした困難な時代を乗り越え、新しい時代に相応しい豊かで安全な地球社会を構築するためには、新しいシステム、材料、エネルギー源の開発、宇宙空間の利用など、数多くの工学的課題を克服する必要があります。そして、そこには人類の英知を絞った創造的で新しい技術の開発が求められます。物理工学科では物理学に関連した広い分野における基礎学術の修得と、それをベースにさらに高度な科学技術の創造に繋がる教育・研究の場を提供することを目指しています。本学科には機械システム学コース、材料科学コース、エネルギー理工学コースそして宇宙基礎工学コースの4つのコースがあり、一般教育、基礎工学教育、専門教育の4年一貫教育の中で、それぞれのコースの特徴を生かした将来の専門分野に応じた教育と研究が行われています。機械システム学コースでは材料、熱、流体の力学や物性、量子物理、機械システムの解析と設計・生産・制御について、材料科学コースでは、物質のミクロ・ナノ構造制御と環境調和型プロセッシング、電子、磁気、力学物性と機能、量子論と熱力学に立脚した材料設計やナノテクノロジーについて、エネルギー理工学コースではエネルギー応用工学コースと原子核工学サブコースに分かれ、種々のエネルギーの変換利用技術、材料の物性・創製・リサイクルなどについて、また、宇宙基礎工学コースでは航空宇宙工学に関連する基礎的学問分野について一体となった教育を行っています。こうした教育課程はエネルギー科学研究科、情報学研究科、エネルギー理工学研究所、原子炉実験所、再生医科学研究所、国際融合創造センターの協力の下で行われ、学際的な広がりをもつ幅広い専門教育が特色となっています。

# 電気電子工学科

## A. 研究室配属は、どのようにして決定されていますか。

回答 1、4

1、4の方法を併用し、成績優秀者から順次希望に従って配属している。

## B. 学科の卒業生が所属するOB会組織

**洛友会**

<http://www.rakuyukai.org/>

主な活動： 総会、会報の発行、9支部での各種会合・親睦行事  
教室との連携行事（懇話会、機関誌の発行）

### C. 学科の概要

電気電子工学科では、「21世紀のエネルギーと情報社会をハードとソフトで支える」ことを理念として、電気エネルギーの効率的生成と利用、高度情報通信ネットワーク、システム・制御・計算機、電子材料・デバイス、医療応用などの幅広い分野において、優れた人材を育成することを目指した教育を進めている。このように広範な領域の教育に対応するため、まず基礎的な共通科目や実験・演習科目を学習した後、学生個々人がその志望に応じた多様な選択が行えるように専門科目のカリキュラムを構成している。これによって、電気電子工学に関連する科学技術分野を総合的に理解しうる基礎学力を養うとともに、興味のあるテーマについて深く学習することを可能とし、広い視野と創造的な専門能力を兼ね備えた人材を生み出すことを意図している。

具体的には、(1) 光・電子デバイスに用いられる半導体、誘電体、磁性体、超伝導体などの電子材料に関する基礎科学や、ナノテクを応用した新しいデバイスの創成技術、(2) それらを応用した計測・制御や情報・通信に関するハードウェアとソフトウェアの技術、(3) 電気エネルギーの生成と伝送、利用にかかわる個々の要素やシステムに関する理論と実用技術、という3つの学術分野を主要な柱として、基礎から応用までの総合的な教育を行っている。実際の教育には、工学研究科の電気工学専攻・電子工学専攻、情報学研究科の通信情報システム専攻とその他の専攻、エネルギー科学研究科のいくつかの専攻、ならびに工学研究科附属イオン工学実験施設、生存圏研究所、エネルギー理工学研究所、ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー、国際融合創造センター、高等教育研究開発推進センター、学術情報メディアセンターに所属する教員が、相互に協力しながらそれぞれの専門に応じてあたっている。

## 情報学科

### A. 研究室配属は、どのようにして決定されていますか。

回答 5

学生から提出される配属希望、研究室から提出される受け入れ上限・下限数（ただし、研究室の教員配置状況により制約がある）、学生の成績を勘案して決定している。

### B. 学科の卒業生が所属するOB会組織

**数理工学コース関係：** 数理会

<http://www.kuamp.kyoto-u.ac.jp/alumni.html>

主な活動： 新入会員歓迎会、数理工学シンポジウムの開催、会員名簿の作成

**計算機科学コース関係：** 情洛会（旧：工学部情報工学教室同窓会）

<http://www.jouraku.kuis.kyoto-u.ac.jp>

主な活動： 定期的に総会、講演会、ニュースレター、名簿発行を行っている。

### C. 学科の概要

**情報学科の特色：**

現在の高度情報化社会においては、対象とするシステムはますます巨大化・複雑化し、多く



の場合、工学の各専門分野が融合した形態をとっている。このような情勢に対処するためには、システムの機能とそこに流れる情報とを究明し、それにもとづいて効率的なデザインを考えることが重要である。

情報学科では、数学や物理を基礎とした数理的思考で高度なシステムの実際問題を解決し、計算機のハードウェア、システムソフトウェア、情報システムを設計・活用できる人材を育てることを目標として、基礎から応用までの総合的な教育研究を行っている。

情報学科は、数理工学コースと計算機科学コースの2つのコースからなっており、2つのコースの特色は以下の通りである。

#### **数理工学コース：**

数理工学コースでは、数理科学の根幹としての数学と物理、システム工学の基本的分野である制御理論、数理的手法の応用をはかるオペレーションズリサーチなどを中心に、システム理論、最適化理論、離散数学などの諸分野の話題も加えた教育、研究を行っている。さらに、これらの成果を具体的に適用するために必要となる計算機・情報・通信に関する教育・研究を行っている。豊かな数学的・物理的知識を備え、工学における基礎と柔軟な発想を重視しつつ、各専門分野の共通領域を総合的に研究すると同時に、工学全般にわたって広い視野に立つ技術者や研究者を育成している。

#### **計算機科学コース：**

計算機科学コースでは、情報とは何かを追求し、その処理・伝達・蓄積に関する教育・研究を行っている。すなわち、情報と通信の理論、計算の理論、論理回路設計、計算アルゴリズムの設計と解析、コンピュータハードウェア・ソフトウェアの構成の原理と各種技法、オペレーティングシステム、コンピュータによる言語・音声・画像の情報処理、人工知能、知能工学、コンピュータネットワーク、情報システムとその構築法、メディア処理と各種応用、認知科学など、広範囲にわたる先端技術について、情報化社会の中核となる技術者・研究者の育成を行っている。

## **工業化学科**

### **A．研究室配属はどのようにして決定されていますか。**

回答 1、5

学生の第一希望を優先して成績順に決定する。研究室の受け入れ定員を超える場合は、受け入れ可能な研究室を提示して面談の上、決定している。

### **B．学科の卒業生が所属するOB会組織**

#### **工化会**

<http://photo.polym.kyoto-u.ac.jp/kouka/>

主な活動： 名簿の編さん発行、工化会講演会の開催、特別講演会の開催、工業化学科学生の教育活動への援助

## C. 学科の概要

工業化学科は京都大学における最も歴史の古い学科の1つで、大学開校の翌年の明治31年(1898)に理工科大学の1学科として開設された。それ以後、我が国の産業の発展と質的な躍進に対応して、石油化学科、化学工学科、高分子化学科、合成化学科、および分子工学専攻が設立された。これら京都大学工学部化学系の教室は、基礎理論から応用、製造にいたる化学に関連するすべての分野を網羅し、基礎を重視すると同時に工業的応用をも目指す独特の学風を形成してきた。そして、卒業生は、学術領域における福井謙一博士、野依良治博士のノーベル化学賞受賞はもとより、学術・産業の広い領域で活躍し、今日の日本の科学技術の礎を築いてきた。

しかし、21世紀を迎え、化学に対する要請はますます高度化かつ多様化してきている。このような変化に対応するために、従来の学科にとらわれない幅広い教育とより高度な研究が必要になってきた。これを実現するために、平成5年、化学系学科の再編が行われ、新しい内容の「工業化学科」として統合された。このように現在の工業化学科は、伝統ある名称を引き継ぎ、新生した総合化学科であり、狭い専門にとらわれず基礎化学と基礎工学を重視する教育を実施し、伝統ある学風をますます発展させている。

一方、大学院も同時に改組され、材料化学専攻、物質エネルギー化学専攻、分子工学専攻、高分子化学専攻、合成・生物化学専攻、化学工学専攻の6専攻に再編成された。これら専攻のなかには旧専攻の名称を踏襲したものもあるが、その編成は一新されている。各専攻とも、先端的萌芽的研究促進のための大学院専任講座が設けられており、また学問の高度化と学際領域の研究促進のために従来の講座が複数集まり、基幹講座としての大講座を構成している。さらに学内の化学研究所、再生医科学研究所、エネルギー理工学研究所、国際融合創造センター、福井謙一記念研究センター、および原子炉実験所の研究部門が協力講座として参加しており、化学系全専攻が包含する分野は化学に関するほとんど全てにわたっている。

現代社会において化学の果たしている役割はとりわけ大きく、人類が豊かで健康的な生活を送れるのは、化学の力によって種々の製品(プラスチック、合成繊維、肥料、医薬品、電子材料、セラミックスなど)が絶えずつくりだされているからである。また、いままでよりもはるかに少ないエネルギーで環境を汚さないプラスチックをつくったり、太陽エネルギーを高い効率で電気に変える画期的な材料をみつけたり、バイオテクノロジーの力を借りて有用な物質を合成したり、資源を無駄なくきれいに使うための新しい方法を開発することなどが、環境の破壊を防ぎ、人類の生存をまもる大きな力となる。このように、実際に“もの”をつくる「化学」に対する期待と要請がますます高まってきている。

工業化学科では、このような社会の要請に応える研究者、技術者を養成するために、有機化学・無機化学をはじめ化学の基礎理論はもちろんのこと、物理学・生物学などとの境界領域にある化学およびそれと関連する工学の基礎知識を広い範囲で一貫して修得させる教育を行っている。

## (II) 専攻長へのアンケート集計結果

### 社会基盤工学専攻

#### A. 研究室当り配属される学生数は、例年どの程度でしょうか？

学部学生・・・3名から5名

M1学生・・・3名から5名

#### B. 研究室配属は、どのようにして決定されていますか。

回答 1

#### C. 専攻の卒業生が所属するOB会組織

##### 京土会

<http://kyodokai-1.kuciv.kyoto-u.ac.jp>

主な活動： 名簿と会報の発行、総会の開催

##### 水曜会

<http://www.suiyokwai.jp>

主な活動： 名簿と会報の発行、大会の開催

#### D. 専攻の概要

20世紀は急速な科学的発展をもたらすと同時に環境問題に代表される様々な負の遺産を残した。20世紀型社会の持つ問題を科学技術の面から解決し、安全で、持続可能な地球社会の基本となる社会基盤を構築するためには、新しいパラダイムに基づいた科学技術の飛躍的向上が不可欠である。

持続的文明社会においては、いかにして重要な社会基盤構造物を、安全かつ経済的に計画、設計、施工、維持管理すればよいだろうか。さらに、地殻に内在する資源・エネルギーや地下空間を有効利用するにはどのような探査・開発、地質情報・地殻評価技術が必要であろうか。

社会基盤工学専攻は、工学基礎の立場からこれらの問題に取り組む。すなわち、地球上の生命生息空間とその中の構築物、地下に存在する資源を研究対象とし、基本的な社会基盤の構築、資源・エネルギーの有効利用と、安全で持続可能な地球社会の創出のための技術革新に挑戦する。

### 都市社会工学専攻

#### A. 研究室当り配属される学生数は、例年どの程度でしょうか？

学部学生・・・3名から5名

M1学生・・・3名から5名



**B．研究室配属は、どのようにして決定されていますか。**

回答 1

**C．専攻の卒業生が所属するOB会組織**

なし

**D．専攻の概要**

都市社会工学は人間活動の基盤となる、持続可能で安全、かつ、国際競争力のある都市システムの創造を目的とする総合工学です。

都市社会システムの構築に積極的に貢献し、社会をリードしていくことのできる人材の育成を教育目標としています。

本専攻は、本専攻所属の教員から構成される都市社会基盤工学（専任）、都市社会計画学（基幹）、ライフライン工学（基幹）、社会基盤マネジメント工学（基幹）、および防災研究所の協力講座に所属する教員により構成される都市国土管理工学（協力）の6講座から成り、専攻の教育に必要な広範囲にわたる内容の講義科目を確実に提供します。

## 都市環境工学専攻

**A．研究室当り配属される学生数は、例年どの程度でしょうか？**

学部学生・・・5名から10名

M1学生・・・5名から10名

**B．研究室配属は、どのようにして決定されていますか。**

回答 1

**C．専攻の卒業生が所属するOB会組織**

**京土会**

<http://kyodokai-1.kuciv.kyoto-u.ac.jp>

主な活動： 名簿と会報の発行、総会の開催

**水曜会**

<http://www.suiyokwai.jp>

主な活動： 名簿と会報の発行、大会の開催

**京大建築会**

<http://www.archi.kyoto-u.ac.jp/~kenchikukai/>

主な活動： 会報の発行、同窓会活動、記念祝賀会（5年に一度）

**D．専攻の概要**

大量消費と大量生産に裏付けされた経済産業システムを基盤とする都市化の流れは、現代の人類社会に物質的利便性、安全性を提供する一方で、地球温暖化やオゾン層破壊等の地球環境

問題に代表されるように、人類社会に地球制約の限界を超えさせようとしている。

人間活動の影響でその余裕を失いつつある自然環境・生態系、利便性を偏重した結果生じてきた様々な社会的不安や不快感、ますます高齢化・価値観の多様化が進む社会において、これらの問題を克服することが今求められている。

都市環境工学専攻は、人々の個別の生活空間から都市・地域、更に地球規模に至る幅広い場において、人々の個性を育む生活様式と豊かな自然環境・生態系の維持・育成を支える、新たな学問体系の創生と工学・技術の教育・研究を目指している。

本専攻では、まず自然環境と人間が一体として存在するものであることを認識し、現存する様々な環境問題の解決に取り組むとともに、自然環境と共生・調和した安全・健康・快適かつ持続可能な高度福祉社会・生活圏を創造しようとしている。

具体的には次のような目的を設定している：直面する環境問題の解決、安全かつ健康な都市環境の構築、自然環境と共生・調和した国土・都市環境の創生・維持、人間性豊かな福祉社会と都市環境の実現、国際的な視点と広く深い視野を備えた新しい型の技術者、研究者、プランナーの養成

## 建築学専攻

### A．研究室当り配属される学生数は、例年どの程度でしょうか？

学部学生・・・3名から5名

M1学生・・・3名から5名

### B．研究室配属は、どのようにして決定されていますか。

回答 5

①大学院入試の時に受験生に第5志望まで出させる、②志望区分ごとに受け入れ可能人数を設定している、③志望区分、受け入れ可能人数、及び入試の成績によって機械的に研究室配属を決定する（ただし、研究室による偏りになるべく避けるため、志望区分ごとに優先合格枠を設定している）。合格者の中から辞退者が生じた場合は、この手続きを繰り返していく。そのため、研究室配属の最終確定は、かなり遅い時期になる。

### C．専攻の卒業生が所属するOB会組織

**京大建築会**

<http://www.archi.kyoto-u.ac.jp/~kenchikukai/>

主な活動： 会報の発行、同窓会活動、記念祝賀会（5年に一度）

### D．専攻の概要

環境が急激に変化する中で、現代社会が要求する高度で多様な機能を持つ建築空間を実現するためには、基礎的分野の研究、先端的分野の研究を推進するとともに、建築を自然環境と生活環境のなかで総合的に捉え直した研究が必要となる。すなわち、専門分野の研究相互の有機的結合を強化し、総合化を進める研究が不可欠である。

それゆえ本専攻では、総合化のための創造的方法論とその実施システムの構築、関連分野での基礎的および先端的研究についての教育・研究を行う。

講座〔分野〕としては、建築保全再生学、人間生活環境学、建築史学、建築構法学、建築環境計画学〔建築環境計画学、生活空間環境制御学〕、建築設計学〔建築設計学、生活空間設計学〕、建築構造学〔建築力学〕、建築生産工学〔建築社会システム工学、空間構造開発工学〕、建築防災工学（協力）〔建築耐震工学、建築安全制御学、風環境学〕、建築創造工学（融合部門リエゾン）を設置している。

## 機械理工学専攻

### A．研究室当り配属される学生数は、例年どの程度でしょうか？

学部学生・・・3名から5名

M1学生・・・3名から5名

### B．研究室配属は、どのようにして決定されていますか。

回答 1

### C．専攻の卒業生が所属するOB会組織

京都大学機械系工学会（京機会）

<http://www.hi-ho.ne.jp/dai2seiki/>

主な活動： 総会開催、大会開催、ニュースレター発行、卒業生名簿発行、その他本会の目的に沿う諸活動

### D．専攻の概要

機械工学の対象は、ミクロからマクロにわたる広範囲な物理系であり、現象の解析・システムの設計から製品の利用・保守・廃棄・再利用を含めたライフサイクル全般の技術に関する教育・研究が本専攻で行われます。すなわち、それらの技術をささえる、材料・熱・流体等に関する力学（物理）現象の解析、および、機械力学、振動、制御、機械の設計、製造、検査、評価、トラブル対策、機械システムの設計と制御、に関する教育・研究を行ない、社会、産業界、学問の分野で求められているニーズに応えるべく、機械工学およびその基礎となる工学の学理を習得することを基本としています。そして、深い洞察力と知的蓄積を背景にした豊かな創造力を有し、日本の産業基盤の中核となる技術者・研究者を養成します。また、新しい技術分野に挑戦する際の未知の局面において、従来の固定観念や偏見にとらわれない自由で柔軟な発想ができ、ダイナミックな行動力を有し、機械工学の基礎である幅広い学問と現実の問題に関する技術要請を系統的に結びつけて設計技術として融合させることのできる技術者・研究者群のリーダーを育成します。

## マイクロエンジニアリング専攻

### A．研究室当り配属される学生数は、例年どの程度でしょうか？

学部学生・・・3名から5名

M1学生・・・3名から5名

### B．研究室配属は、どのようにして決定されていますか。

回答 1

### C．専攻の卒業生が所属するOB会組織

京都大学機械系工学会（京機会）

<http://www.hi-ho.ne.jp/dai2seiki/>

主な活動： 総会開催、大会開催、ニュースレター発行、卒業生名簿発行、その他本会の目的に沿う諸活動

### D．専攻の概要

マイクロエンジニアリング専攻は、21世紀における人間社会・生活に大きな変革をもたらす原動力として期待されている微小な機械の研究開発能力を有する研究者・技術者を養成するための教育課程です。

本専攻では、機械工学の基本知識をベースに、ナノメートルオーダーからマイクロメートルオーダーの微小領域特有の物理現象を解明し、ナノレベルで発現する量子効果を利用するために必要な量子工学、材料を創製し加工するための微小領域における材料工学・微細加工学、ナノ・マイクロシステムを構築し思い通りに動かすためのシステム工学・制御工学、などの学問分野を修得します。

また、最も精密な微小機械の集合である生体に学び、微小機械を生体・バイオテクノロジー分野と融合をするための生体機械工学なども修得します。ナノ・マイクロエンジニアリングに関する講義科目群の履修、および微小機械に関わる先端的なテーマに積極的に取り組む研究活動を通じて、ナノからマイクロの領域における微小機械に関する先端分野の高度な研究能力を有する研究者・技術者の養成を目指しています。

ナノ・マイクロエンジニアリングは、工学のみならずバイオエンジニアリング分野や医学・生命科学分野をはじめとする多くの分野に関連することから、近年急速に発展している異分野との融合領域と位置づけられます。本専攻の修了者は、機械工学を取り巻く異分野との融合領域における研究開発のリーダーとして幅広く活躍することが期待されています。

このような教育研究を行うために、本専攻には、構造材料強度学講座、ナノシステム創成工学講座、ナノサイエンス講座、マイクロシステム創成講座に加えて、ナノバイオメカニクス講座が協力講座として設置されています。

## 航空宇宙工学専攻

### A．研究室当り配属される学生数は、例年どの程度でしょうか？

学部学生・・・3名から5名

M1学生・・・3名から5名

### B．研究室配属は、どのようにして決定されていますか。

回答 1

### C．専攻の卒業生が所属するOB会組織

京都大学工学部航空工学科・応用物理学科同窓会

ホームページ：なし

主な活動：同窓会総会、講演会、懇親会、名簿発行

### D．専攻の概要

航空宇宙、特に宇宙は、今21世紀において、最大のニューフロンティアの一つであることにかわりはなく、航空宇宙工学は、種々の工学分野の極限的な先端技術が必要とする最先端工学・総合工学といえます。

航空宇宙工学が相対する工学諸問題はたくさんありますが、おおよそ、航空宇宙機の航行にかかわる航空宇宙環境との相互作用、航空宇宙機の推進、航空宇宙機の材料・構造強度、ならびに航空宇宙機のシステム・制御、に大別できます。これら工学諸問題の多くは、航空宇宙固有のものではなく地上の機器に相対する工学の分野でも生じますが、航空宇宙という特殊で過酷な環境に対する非常に高い耐性と信頼性、および軽量・低消費エネルギーであることが求められます。

このような航空宇宙の工学諸問題に相対し、それらを解決するには、種々の工学基礎に対する深い理解の上に立って、真に革新的でかつ高い信頼性を有する先端技術を開発していくことが重要です。航空宇宙工学専攻では、航空宇宙工学に関連する分野の基礎研究を行い、航空宇宙工学の諸問題、ひいては工学全般の先端的諸問題の解決に寄与する学術成果を蓄積するとともに、極限流体力学、先進的航空宇宙システム工学、先進的宇宙探査工学など、新しい学術分野の開拓をめざしています。

また、本専攻では、これら学術的価値の高い基礎研究とともに、航空宇宙工学をはじめとした先端工学の広い分野の発展に資する人材を育成することを大きな目的としています。教育に当たっては、多くの技術的知識よりも基礎的科目を重視し、十分な基礎学力とそれらを自在に使いこなす豊かな思考力と応用力・想像力を有する前途有為な研究者・技術者の育成を目指しています。

さらに、これら研究と教育は、国際交流にも重点を置き、広い視野に立って行っています。

## 原子核工学専攻

### A．研究室当り配属される学生数は、例年どの程度でしょうか？

学部学生・・・3名から5名

M1学生・・・3名から5名

### B．研究室配属は、どのようにして決定されていますか。

回答 1

### C．専攻の卒業生が所属するOB会組織

#### けしの実会

<http://www.nucleng.kyoto-u.ac.jp/Dep/keshi/poppy.htm>

主な活動： 講演会の開催、会報の発行、名簿の発行

### D．専攻の概要

原子核工学専攻は1957年（昭和32年）4月に設置され、発足後4年間に計6講座が開設された。1994年（平成6年）の工学研究科改組に伴って大講座制の原子核工学専攻が新たに構成され、現在に至っている。1999年（平成11年）には工学研究科附属量子理工学研究実験センターが新たに発足し、協力講座として専攻に加わるとともに、原子核工学専攻と密接な協力関係のもとで運営されている。現在、原子核工学専攻は1専任講座、2基幹講座、2協力講座（量子理工学研究実験センター、原子炉実験所）から構成され、大学院教育と研究を行っている。

専攻では、素粒子、原子核、原子や分子など、量子の科学に立脚したミクロな観点から、量子ビーム、ナノテクノロジー、アトムテクノロジーなど最先端科学を切り開く量子テクノロジーを追求するとともに、物質、エネルギー、生命、環境などへの工学的応用を展開し、循環型システムを構築することを理念として掲げている。そして、これらの体系的かつ立体的な教育・研究を通じて、ミクロの視点からの分析能力とシステムとしての戦略的思考能力を有する先端的研究者や高度専門技術者などの人材を育成することを目指している。

## 材料工学専攻

### A．研究室当り配属される学生数は、例年どの程度でしょうか？

学部学生・・・3名から5名

M1学生・・・3名から5名

### B．研究室配属は、どのようにして決定されていますか。

回答 1



### C. 専攻の卒業生が所属するOB会組織

#### 水曜会

<http://www.suiyokwai.jp>

主な活動： 名簿と会報の発行、大会の開催

### D. 専攻の概要

材料工学専攻では、量子物理・化学、統計物理学、熱力学、材料化学などの自然科学の体系的知識を身につけ、その基礎的素養のもとに、材料の持つ多様な性質とそのミクロな構造に依存した物理発現機構を解明する研究者の育成を目指し教育を行うとともに、新しい材料の設計開発とその製造・加工プロセスの研究を進めている。すなわち、わが国の先端技術の開拓のために、航空機、自動車、巨大構造物等の社会基盤整備に重要な金属材料、情報産業や宇宙開発に不可欠な、電子材料、磁性材料、超伝導材料などの機能性無機・有機材料、さらに省資源・省エネルギー等の環境調和性を重要視するというコンセプトに基づくエコマテリアルなどの基礎研究と開発を推進している。

## 電気工学専攻

### A. 研究室当り配属される学生数は、例年どの程度でしょうか？

学部学生・・・3名から5名

M1学生・・・3名から5名

### B. 研究室配属は、どのようにして決定されていますか。

回答 4

### C. 専攻の卒業生が所属するOB会組織

#### 洛友会

<http://www.rakuyukai.org/>

主な活動： 総会、会報の発行、9支部での各種会合・親睦行事  
教室との連携行事（懇話会、機関誌の発行）

### D. 専攻の概要

電磁界理論、電気回路網理論、およびシステム理論など、電気に関する基礎理論を通した真理の探究、ならびにその学理に基づく社会基盤の調和的発展と工学的諸問題の解決を目的とした教育と研究を行う。応用分野としては、電気エネルギーの発生・伝送・変換と有効利用、超伝導現象の各種応用、大規模シミュレーションなどの計算工学、計測・自動制御、マンマシンシステム、生体システム、医療工学などを対象とする。これによって、自然環境と科学技術の調和ある発展に指導的役割を果たすことのできる人材の育成と、工学理念に調和した社会の実現に寄与するとともに、知と工と技の創造的融合を図ることによって科学技術の高度化に貢献することを目標としている。

## 電子工学専攻

### A. 研究室当り配属される学生数は、例年どの程度でしょうか？

学部学生・・・3名から5名

M1学生・・・3名から5名

### B. 研究室配属は、どのようにして決定されていますか。

回答 1、4

### C. 専攻の卒業生が所属するOB会組織

#### 洛友会

<http://www.rakuyukai.org/>

主な活動： 総会、会報の発行、9支部での各種会合・親睦行事

教室との連携行事（懇話会、機関誌の発行）

### D. 専攻の概要

電子・量子論的観点に立脚して、自然環境と調和のある人間社会の持続的発展の根幹となるハードウェアを構築するために必要な学理と応用技術に関する教育と研究を行う。それによって、エレクトロニクス進化ならびに異分野との学際的な融合をはかり、エネルギー、通信、情報システムなどの分野における基盤技術の構築と人材の育成を行う。具体的には、超伝導体、半導体、有機分子などの各種電子材料の物性を電子や光子などの量子論を基礎として解明し、原子・分子レベルやナノスケールでの人工的構造を利用した新規機能材料やデバイスの創製ならびにそれらの集積化と、イオンやプラズマを利用した新しいプロセス技術の開発をするための研究・教育を推進する。

## 材料化学専攻

### A. 研究室当り配属される学生数は、例年どの程度でしょうか？

学部学生・・・3名から5名

M1学生・・・3名から5名

### B. 研究室配属は、どのようにして決定されていますか。

回答 4

### C. 専攻の卒業生が所属するOB会組織

#### 工化会

<http://photo.polym.kyoto-u.ac.jp/kouka/>

主な活動： 名簿の編さん発行、工化会講演会の開催、特別講演会の開催、工業化学科学生の教育活動への援助



## D. 専攻の概要

高度な科学技術に基づく社会の発展に伴い、多種多様な新しい物質や新しい材料の開発に対する要請がますます強くなっています。これは、紛れもなく、これら新物質・新材料の開発を行う先端科学が、現在の人類社会の生活および産業基盤を支えていることにほかなりません。また、科学が将来において果たすべき役割に、ますます期待が膨らんでいることを物語っています。

科学は今、新物質を作る技術に加えて、物質を構成する分子の生い立ちや性質を調べ、物質特有の機能を探索する学問に変貌しつつあります。材料化学専攻では、無機材料、有機材料、高分子材料、ナノマテリアルを中心に、その構造と性質・反応性を分子レベルおよびナノレベルで解明しながら、新しい機能や性質を持った材料を科学的に設計するとともに、その創製方法を確立することを目的として研究・教育を行っています。

材料化学専攻は、機能材料設計学講座（専任講座）、無機材料化学講座（基幹講座：無機構造化学分野、応用固体化学分野）、有機材料化学講座（基幹講座：有機反応化学分野、天然物有機化学分野、材料解析化学分野）、高分子材料化学分野（基幹講座：高分子機能物性分野、生体材料化学分野）の4講座7分野と1協力講座（国際融合創造センター創造部門ナノマテリアル分野）とで構成されています。

本専攻では、統合的科学に基づいた新規機能材料の開発を推進するため、専攻内のみならず専攻を超えた研究交流や研究協力体制の構築を進めています。また、外国からの学生、研究者の受け入れや海外の研究機関との連携も積極的に推進し、材料研究の国際的な研究・教育拠点となるよう、研究・教育環境の整備を図っています。

## 物質エネルギー化学専攻

### A. 研究室当り配属される学生数は、例年どの程度でしょうか？

学部学生・・・3名から5名

M1学生・・・3名から5名

### B. 研究室配属は、どのようにして決定されていますか。

回答 5

希望を優先し、定員を超える場合は、成績に基づき順位をつけ決定する。

### C. 専攻の卒業生が所属するOB会組織

**洛朋会（燃化、石化、物質同窓会）**

<http://www.ehcc.kyoto-u.ac.jp/home-j.htm>

主な活動： 総会の開催（年1回）、講演会、同窓会誌の発行

**工化会**

<http://photo.polym.kyoto-u.ac.jp/kouka/>

主な活動： 名簿の編さん発行、工化会講演会の開催、特別講演会の開催、工業化学科学生の教育活動への援助

#### D．専攻の概要

前世紀における文明の飛躍的な発展は、天然資源の大量消費と環境への大きな負荷をともなうものであった。21 世紀における人類の持続的発展を可能とする環境調和型文明を構築するためには、社会を支える科学技術は根本的な質的発展、すなわち、最少の資源と最少のエネルギーを用い、環境への負荷を最小にして、高い付加価値を有する物質と質の良いエネルギーを得てこれを貯蔵する技術と、資源の循環およびエネルギーの高効率利用をはかる技術の創成を必要としている。これを可能にするためには、物質とエネルギーに関する新しい先端科学技術の開拓が不可欠であり、物質変換およびエネルギー変換を支える化学は、その中心的役割を担う学術領域である。このような時代の要請に根本から応えるために、物質エネルギー化学専攻では、第一に、基礎化学の効果的な継承と学理の発展、第二に、それを基盤とした独創性の高い応用化学の展開を推進することを基軸として、新しい環境調和型の物質変換およびエネルギー変換と資源の高効率循環を可能にするための研究を行う。

## 分子工学専攻

#### A．研究室当り配属される学生数は、例年どの程度でしょうか？

学部学生・・・3 名から 5 名

M1 学生・・・3 名から 5 名

#### B．研究室配属は、どのようにして決定されていますか。

回答 1、4

研究室定員を予め定め、学生の希望に基づき配分する。定員を超えた場合は成績順に配属する。

#### C．専攻の卒業生が所属するOB会組織

##### 工化会

<http://photo.polym.kyoto-u.ac.jp/kouka/>

主な活動： 名簿の編さん発行、工化会講演会の開催、特別講演会の開催、工業化学科学生の教育活動への援助

#### D．専攻の概要

化学は物質の変換を扱う学問であるとともに、物性を電子構造・分子の配列と相互作用などとの関連で論じ、新しい機能をもつ分子や材料の設計を行う学問としてますますその分野をひろげつつある。分子工学は、原子・分子・高分子などがかわる微視的現象を対象とする基礎学問を支柱として、原子・分子・高分子の相互作用を理論的、実験的に解明し、その成果を分子レベルで直接工学に応用する新しい学問領域であり、いわばナノサイエンス・ナノ工学に先鞭をつけたものであるといってもよく、その重要性は化学の新しい展開の中で、強く認識されている。特にわが国では、分子工学による先端的技術の発展に大きな期待が寄せられている。新しい電子材料、分子生物工学における機能性物質、高性能の有機・無機・高分子材料、高選択

性触媒、エネルギー・情報関連材料などの開発などは、現在分子工学で対象とすべき重要な研究テーマである。

分子工学専攻は、分子論的視野に立ち、斬新な発想で基礎から応用への展開ができる研究者・技術者を育成することを目的としている。

## 高分子化学専攻

### A．研究室当り配属される学生数は、例年どの程度でしょうか？

学部学生・・・3名から5名

M1学生・・・3名から5名

### B．研究室配属は、どのようにして決定されていますか。

回答 1

### C．専攻の卒業生が所属するOB会組織

工化会

<http://photo.polym.kyoto-u.ac.jp/kouka/>

主な活動： 名簿の編さん発行、工化会講演会の開催、特別講演会の開催、工業化学科学生の教育活動への援助

### D．専攻の概要

高分子は人類の現代生活を支える必需物資として、産業の基幹となる資材として、さらに化学・繊維から医療や電子産業、航空宇宙分野まで、豊かな社会と先端技術を実現する機能材料として、幅広い領域に展開しています。21世紀に入って、高分子が活躍する分野はますます拡大し、人間社会における重要性も増大するものと思われます。

本専攻では、このような高分子の生成、反応、構造、物性、機能について基礎研究と教育をおこなうとともに、その成果を社会に還元し、関連する学術分野との連携を通して、新たな科学技術の創成に貢献することを目指しています。また、高分子を基礎とする先端領域において活躍できる独創的な研究能力を備えた研究者、技術者の養成をしています。

以上のように、高分子化学の重要な役割、社会からの期待の大きさに応えて、今後とも世界における高分子研究の中心として、教育研究活動をおこないます。

## 合成・生物化学専攻

### A．研究室当り配属される学生数は、例年どの程度でしょうか？

学部学生・・・3名から5名

M1学生・・・3名から5名

## B. 研究室配属は、どのようにして決定されていますか。

回答 1

## C. 専攻の卒業生が所属するOB会組織

### 合成化学科合成・生物化学専攻同窓会

<http://www.sbchem.kyoto-u.ac.jp>

主な活動： 同窓会の開催

### 工化会

<http://photo.polym.kyoto-u.ac.jp/kouka/>

主な活動： 名簿の編さん発行、工化会講演会の開催、特別講演会の開催、工業化学科学生の教育活動への援助

## D. 専攻の概要

合成・生物化学専攻は「合成化学と生物化学との学際領域の開拓に向け、物質合成の基礎と応用、バイオテクノロジー、物質変換の理論等を確立すること」を目標として平成5年に設立されました。合成化学の主たる目的は、物質を構成する分子の構造・物性・相互作用の相関関係を理論・実証の両面から考察し、多彩な構造と機能を合理的に設計する指針と、効率よく合成する手法を確立することです。医薬品であれ集積記憶素子であれ、機能（インテリジェント）物質の発見が私達の生活の質を飛躍的に向上させ、新しい産業基盤を生み出してきました。分子とその集合体は構造・機能に関し無限の多様性と可能性を秘めており、人類にとって機能物質の探索が終わることはないでしょう。一方、生物化学は生命現象に関わる物質の構造と役割を化学的に明らかにすることを主な使命とし、生命科学技術の発展に大きく貢献してきました。従来、合成化学と生物化学は独自の発展を遂げてきましたが、近年、合成化学と生物化学のバリアは狭まる状況にあります。合成化学においては、構造や機能における究極の手本が生物の合目的性にあるとの認識が、生物化学においては、合成化学の産物や分子設計の手法が、生命現象の解析や修飾・改変、分析・診断などに大きな威力を発揮してきた事実が、その背景にあります。

歴史的には、生物の研究は全体から部分へ（個体から器官へ、器官から細胞へ、細胞から生体分子へ）、すなわち解析的なトップダウン型の道を辿りました。一方、合成化学の手法は簡単な分子からより大きな、より複雑な系を組み立てるボトムアップ型であります。両者が交わる、いわゆるナノ領域は、生体においてはタンパク質や核酸などの機能素子が物質変換や電子移動、エネルギー産生、情報処理などの高度機能を発揮する場です。基盤とする学問分野が化学か生物か、あるいは物理であるかにかかわらず、技術革新の要がナノ領域の制御にあるといっても過言ではありません。このことは、それを支えるナノテクノロジー、バイオテクノロジー、さらにはそれらを融合したナノバイオテクノロジーが化学と生物の学際領域として重要である所以でもあります。

合成・生物化学専攻では、基礎科学の振興と応用の立場から合成化学、生物化学を推し進めるとともに、その学際領域を創造性豊かな化学生物学（Chemical Biology）の研究分野として確立することを理念・目的としています。そして、専攻全体として、分子レベル・ナノレベル・バイオレベルそれぞれの階層における構造制御・物性制御・機能制御・システム制御を理

論的な視点と分子テクノロジー・ナノテクノロジー・バイオテクノロジー・ナノバイオテクノロジーの方法論を駆使した総合精密科学として推進します。

このような研究領域の特性に照らし、合成・生物化学専攻では大学院教育においては専門分野に関する先端講義と、合成化学、生物化学の相関領域を補完する合成・生物化学特論を提供し、化学反応の理論と基本原理から微生物研究に渡る幅広い分野への高度な専門知識と、学際領域へ躊躇することなく踏みこめる学問的背景を兼ね備えた人材の育成を目指しています。

また、有機化学の重要性に鑑み、修士1年生を対象とした教員団による週2回の講義と演習からなる先端有機化学を開講し、短期間での専門知識のレベルアップと先制的研究を担っていくプロ意識の醸成を図っています。

さらに、特論の一つとして、21世紀COEプロジェクト「京都大学化学連携研究教育拠点」事業の一環である京大化学連携講義「新規物質創製変換」を開講し、部局間の交流を通じて学生の旺盛な知的好奇心に応えています。

## 化学工学専攻

### A. 研究室当り配属される学生数は、例年どの程度でしょうか？

学部学生・・・3名から5名

M1学生・・・3名から5名

### B. 研究室配属は、どのようにして決定されていますか。

回答 4

成績優先で決めているが、学生に全ての研究室に対して志望順位をつけさせて大学院入試成績の順に志望研究室に割り振る。なお、各研究室の最小および最大配属人数を決めている

### C. 専攻の卒業生が所属するOB会組織

#### 洛窓会

<http://www.cheme.kyoto-u.ac.jp/alumni/alumni.htm>

主な活動： 年報「化学工学教室・洛窓会の動き」の刊行、卒業生名簿の刊行、洛窓会総会の実施、洛窓会・産学間交流活動委員会合同講演会の実施、懇親会の実施、洛窓会東京支部での講演会の実施、化学工学卒業生が学生に語る会の実施

#### 工化会

<http://photo.polym.kyoto-u.ac.jp/kouka/>

主な活動： 名簿の編さん発行、工化会講演会の開催、特別講演会の開催、工業化学科学生の教育活動への援助

### D. 専攻の概要

化学工学の特徴は対象とするプロセスから要素となる現象を抽出し、その本質と動的特性を定量的に捉え、さらに、最適システムを構築して物質・材料の高機能化と効率的生産のための方法論を探究することにある。



化学工学専攻では、人類社会に有用な機能を持つ物質および材料を化学的変換によって創出し、工業規模で生産するための方法論に関して教育・研究をおこなうために、以下の講座、分野が設けられている。①化学工学基礎講座（移動現象論分野、界面制御工学分野、反応工学分野）、②化学システム工学講座（分離工学分野、粒子系工学分野、材料プロセス工学分野、プロセスシステム工学分野）、③環境プロセス工学講座、④融合プロセス工学講座（国際融合創造センターと連携）。

## イオン工学実験施設

### 附属センター・施設概要

ナノテクノロジーの開発や地球社会との共生といった技術的、社会的要請にこたえるために、新規性・発展性・学際性を保持したクラスターイオン工学に関する研究・教育、および新しいイオン工学材料の開発に関する研究・教育を行う。また、外国人客員部門における研究を通して、海外の研究組織との共同研究を推進する。

## 流域圏総合環境質研究センター

### 附属センター・施設概要

#### 1・目的

流域圏総合環境質研究センターは、健康で文化的かつ福祉に富んだ環境質を求める社会的ニーズの増大と、これらを脅かす多様で重篤な衛生リスク要因の増大を鑑み、旧環境質制御研究センター（1995年4月－2005年3月）が積み上げてきた各汚染源に対する個別制御・評価・緩和に関する世界的レベルの成果を継承しつつ、河川流域全体にその研究対象を拡大し、広域管理、予見および監視といったシステム工学的手法を導入し、空間的・時間的広がりの中で研究・教育を展開することを目的として活動している。

#### 2・設立

流域圏総合環境質研究センターは、2005年4月に設立され、活動をはじめている。組織は、「環境質管理分野」、「環境質予見分野」および客員分野として「環境質監視分野」の3分野で構成されている。前身は、「環境質制御研究センター」である。

#### 3・場所

流域圏総合環境質研究センターは、大津市由美浜にあり、隣に大津市下水処理場、近くに大津プリンスホテルがある。京都大学本部吉田キャンパスからは、道のりで17kmほどの距離であり、車では約40分（非渋滞時）で到着できる。電車・バスなどの公共交通機関を利用した場合は、1時間15分程度のアクセスである。最近、付近の琵琶湖湖岸は砂浜公園化され、周辺環境が飛躍的に良くなった。

#### 4・施設設備

流域圏総合環境質研究センターは2,484m<sup>2</sup>（うち95.7m<sup>2</sup>は大津市よりの使用許可地で、残りは京都大学所有）の敷地に実験棟、旧研究棟、新研究棟などの施設を有している。実験棟お

よび旧研究棟は、旧環境質制御研究センター開設当初よりあったが、新研究棟は旧環境質制御研究センター開設2年後に完成している。研究室面積は合計 239m<sup>2</sup>、実験室面積は合計 583m<sup>2</sup>であり、一人当たりの面積にすると（平均的學生・院生数 30 名とする）、研究室面積 8m<sup>2</sup>、実験室面積 19m<sup>2</sup>となる。

流域圏総合環境質研究センターには、1995 年度特別設備予算で購入された LC-MS 他、多数の環境試料を分析するための機器を有し、研究活動に利用している。

## 5・活動

流域圏総合環境質研究センターは教育および研究の充実を目標として活動しており、環境質管理分野と環境質予見分野は都市環境工学専攻の協力講座として大学院教育に加わり、学部教育でも卒業研究指導や学部科目の講義等で参加している。環境質監視分野は外国人客員教授からなる分野であり、本研究センターのみならず、関連の都市環境工学専攻・都市社会工学専攻の教員・学生への国際的教育や共同研究の遂行などで、大きく寄与している。

また、流域圏総合環境質研究センターに在籍する院生学生数は、約 30 人であるが、つねに留学生（アフリカ、東アジア、南アジア、米国）がおり、国際的な雰囲気の中で活発な研究活動が行われている。

## 6・歴史

流域圏総合環境質研究センターに至る歴史は、1971 年に開設された工学部衛生工学科の「水質汚濁シミュレーション設備」の設置にさかのぼる。当時、琵琶湖の重金属・PCB 汚染、富栄養化、水道臭気問題、流域下水道の建設など、水質汚濁関連諸問題が起こり、それに応えるべく滋賀県、大津市の援助と衛生工学科の努力で設置された。その後社会情勢は一時環境問題離れが起きたが、琵琶湖の水環境問題は改善が進まず現在に至っている。

1985 年には、その 14 年間の活動を踏まえて、工学部附属「環境微量汚染制御実験施設」の設置（定員：教授 1、助教授 1、助手 1）に至った。当時琵琶湖の地域の問題であった環境問題は、地球上のすべての湖沼やダム湖に共通する問題として認識されるようになり、現在では地球環境問題の中に琵琶湖の経験、活動が活かされつつある。

環境微量汚染制御実験施設は 10 年の時限を条件に設置された施設であるが、その成果が認められ、1995 年 4 月からは、環境質制御研究センターとして拡充され、再出発をした。定員は、（教授 2、助教授 2、助手 1、外国人客員研究員 1）に増え、さらに平成 9 年には新たな研究棟も完成している。

環境質制御研究センターは、環境微量汚染制御実験施設と同様に 10 年の時限を条件に設置された施設であった。その教育・研究成果が認められ、2005 年 4 月からは、流域圏総合環境質研究センターとして改組され、現在積極的な研究・教育活動を展開している。

# 量子理工学研究実験センター

## 附属センター・施設概要

附属量子理工学研究実験センターは平成 11 年 4 月に設置された 10 年時限の研究施設で、教授 1・助教授 2・助手 1 名から構成されている。原子核工学専攻放射実験室（宇治地区）並びに宇治総合研究実験棟に居室・実験室・研究設備を有している。原子核工学専攻の協力講座と



して量子理工学講座を担当し、学部学生・大学院生の教育研究に携わっている。

センターの主な研究設備には、複数台の MeV エネルギー粒子加速器・クラスター照射装置・極短パルスレーザーなどの大型装置をはじめ各種の分析・観察装置があり、量子ビームを中軸とした広範な研究活動の展開と産学連携プロジェクト等を推進している。研究目的は「量子ビームを活用した極端環境下のナノスケール領域で発現する様々な量子現象の理解とその奥にある法則・原理を見いだすこと、並びにそれらを利用した高付加価値機能を備えた新材料の創製」である。また、原子核工学専攻等との連携により、原子力エネルギーに関連した基礎研究を行っている。

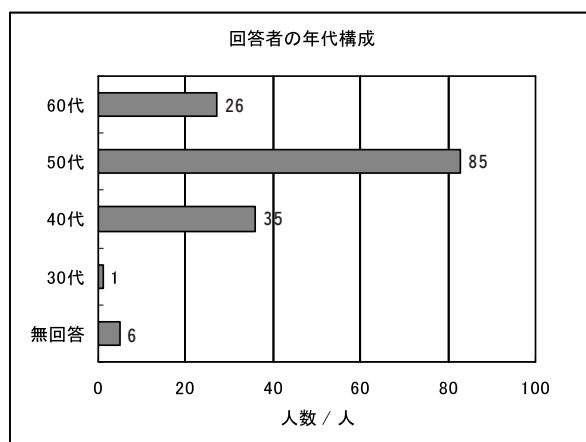
学内の研究支援活動として、粒子加速器の学内共同利用化と分析支援の推進と共に、研究用核燃料物質の安全管理業務を行っている。

### (Ⅲ) 工学部教授への教育に関するアンケート集計結果

#### 1. 所属、年齢をご記入ください。

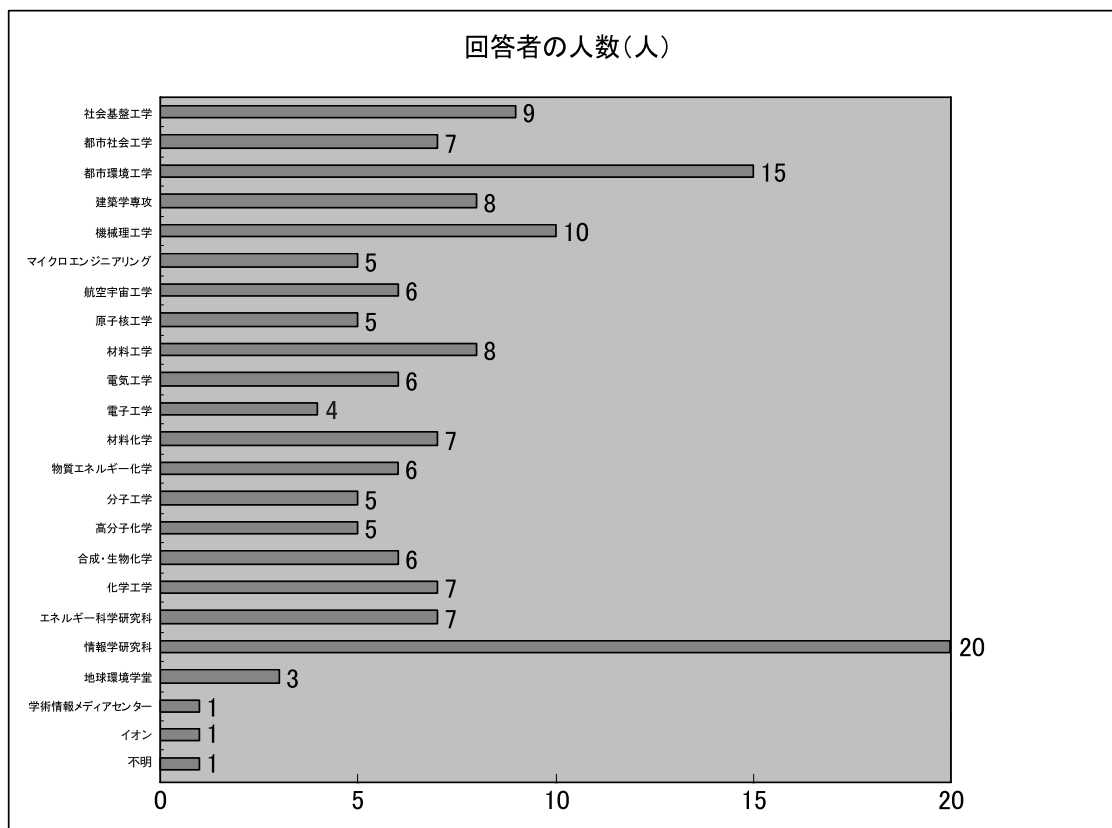
##### ・回答者の年代構成

平成 17 年 7 月に工学部兼担の教授 196 名に対して「教育活動に関する点検・評価質問書」を配布し、8 月に回収した。回収数は 152 (78 %) であった。工学部教育に携わっている教員には、教授・助教授・講師・助手があるが、本アンケートは教員の代表として教授に対してのみアンケートを行った。教授以外の教員に対しては、研究アンケートなども同時に行ったため、アンケート調査が過重な負担とならないように配慮したためである。



##### ・回答者の所属

回答者の所属は、工学研究科にあっては各専攻ごと、工学研究科以外の部局からの兼担教授はエネルギー科学研究科・情報学研究科・地球環境学堂・学術情報メディアセンター等のくくりによって集計した。「工学部」は大学入学から卒業までの工学部専門教育に責任をもつ。「研究科」は大学院の研究・教育全般に責任をもつ。工学部の専任教授は存在せず、工学部教育は大学院重点化によって、工学研究科・エネルギー科学研究科・情報学研究科・地球環境学堂などの大学院に所属する教員が責任をもつことになったからである。回答者の所属は大学院の専攻・研究科で分類したが、アンケートに対する回答は基本的には大学院教育に対するものではなく、工学部教育に対するものである。一部分離不可能な回答が含まれている。



## 2. 教育理念、目的、目標について

工学研究科・工学部の「基本理念」は、研究科長が京都大学工学広報（No.41，2004.4）\*に述べているように「学問の本質は真理の探求である。その中において、工学は人類の生活に直接・間接に関与する学術分野を担うものであり、分野の性格上、地球社会の持続的な発展と文化の創造に対して大きな責任を負っている。京都大学工学研究科・工学部は、上の認識のもとで、基礎研究を重視して自然環境と調和のとれた科学技術の発展を図るとともに、高度の専門能力と高い倫理性、ならびに豊かな教養と個性を兼ね備えた人材を育成する。このような研究・教育を進めるにあたっては、地域社会との連携と国際交流の推進に留意しつつ、研究・教育組織の自治と個々人の人権を尊重して研究科・学部の運営を行い、社会的な説明責任に応えるべく可能な限りの努力をする。」と決められました。

・この京都大学工学部・工学研究科の教育・研究の理念・目的に対して、ご意見を記述してください。また、京都大学の「自由の学風」は、学生の「主体性」（ここでいう主体性とは、自分自身で決断し行動する能力を意味する）があってはじめて維持できるものです。学生の「主体性」を伸ばすために有効と考えておられることがありましたら記述してください。

\*資料 1

この質問の目的は、工学研究科・工学部の「基本理念」が工学部教育に携わっている教授に周知徹底されているかどうかを調べることであった。大学評価基準（機関別認証評価）において工学部の基本理念が明確に定められ、教員・学生など大学構成員に周知されているとともに社会に公表されていることが外部評価の第一番

目の最重要項目として挙げられているからである。このアンケートを機に「基本理念」が周知徹底されることも意図した。京都大学の「自由の学風」は、新入生の科目履修の手引きのまえがきなどに総長が詳しく説明し、京大教員・学生の共通の理念となっている。工学広報にある基本理念は大学のホームページでも公開されている。工学部であってもノーベル賞に代表される「基礎研究の重視」と、「倫理と教養と個性」を兼ね備えた人材を育成するという目標は改めて基本理念といわれると驚くほどに、多くの教員の間に空気のように浸透している理念であることが今回のアンケートによってわかった。多くの教員が日々学生の「主体性」を伸ばすためにはどうしたらよいか真剣に考えていることがこのアンケート結果からうかがうことができた。

## ◆巻頭言◆

## 工学研究科・工学部の基本理念について

工学研究科長・工学部長 荒木光彦



皆様もよく御存知のように、本年4月1日から国立大学法人京都大学が発足し、京都大学も法人の下で運営される大学となりました。これは制度上の変化であり、研究教育の本質には何等影響するものではない、いや影響するものであってはならないと考えています。しかし、適用される法令が変わり、大学全体の運営のあり方も一新されるという大きな変革でありますから、京都大学が1つの節目を迎えたことは確かです。この節目の年にあたって、私達が研究教育に関してどのような考えを持ち、それを具体的にどう進めようとしているかを見直しておくことも重要と思います。

京都大学工学研究科・工学部の研究教育に対する姿勢は、その基本理念としてつぎのようにまとめられています。

「学問の本質は真理の探求である。その中であって、工学は人類の生活に直接・間接に関与する学術分野を担うものであり、分野の性格上、地球社会の永続的な発展と文化の創造に対して大きな責任を負っている。京都大学工学研究科・工学部は、上の認識のもとで、基礎研究を重視して自然環境と調和のとれた科学技術の発展を図るとともに、高度の専門能力と高い倫理性、ならびに豊かな教養と個性を兼ね備えた人材を育成する。このような研究・教育を進めるにあたっては、地域社会との連携と国際交流の推進に留意しつつ、研究・教育組織の自治と個々人の人権を尊重して研究科・学部を運営を行い、社会的な説明責任に応えるべく可能な限りの努力をする。」

私達の研究教育に対する考え方は上の理念につくされています。しかし、この文章は、ごく一般的な観点から基本的なところを短くまとめたものである

ため、おおむね抽象的な表現に終始しています。そこで、私自身の解釈も加えつつ、理念の言おうとするところ、さらにはそれをどう推し進めようとしているかを具体的に説明してみたいと思います。

まず理念の最初の部分に、“学問の本質は真理の探究である。その中であって、工学は人類の生活に直接・間接に関与する学術分野を担うものであり、分野の性格上、地球社会の永続的な発展と文化の創造に対して大きな責任を負っている。”とあります。これが、「工学とは何か？」という問に対する私達の答えであります。何となく漠然としてとらえどころがないかも知れません。もし、2番目の文章を“……、工学は技術に関する学術分野を担うものであり、……”と変えれば少し具体性を帯びてわかり易くなると感じられるのではないのでしょうか。このように表現しても間違いというほどではなかったと思いますが、そうしてしまうと工学の広がりや狭く規定しすぎる可能性があるため、始めにあげたような表現になっています。

“技術”という言葉を開いたとき、多くの人達は携帯電話、計算機、航空機、自動化された工場と言った具体的な対象物、その中でも特にハイテクと呼ばれる分野、およびそれに関連する設計製作手段や運用方法などを思い浮かべられるでしょう。これらの（もちろん、いわゆるハイテクに限定するものではありません）“技術的対象物”の設計・製作・改良、その設計過程や製作過程に含まれる法則性の解明と体系化、さらに新しい“技術的製品”の開発などは工学の重要な内容です。しかし、工学をその範囲に限定してしまえば、私達の研究科・学部での研究活動の一部分を切り捨ててしまうことになり、また、「工学者」としての責任を果たすことも出来ないと考えます。

たとえば、建築物のデザインなどは、“技術”と



いう言葉に吸収しがたい豊かな内容を含んでいます。また、私達の工業化学科は、福井謙一博士・野依良治博士というノーベル賞学者を送り出してきたわけですが、その研究内容はむしろ化学を基礎に戻って研究し直したという性格を帯びたものであり、技術という言葉に含めてしまうのには抵抗があります。一方、携帯電話のために希少資源を使うとすれば、その有限性に十分留意したりサイクルのシステム化というところまで考えられるべきでしょう。多数の計算機が使われるようになった現代ではその電力消費が結果的に地球環境に大きな影響を与えつつあること、新しい通信や移動の手段が人類の“文化”に大きな影響を与えてきた、また与えつつあることなどは、これまでも注目されてきました。しかし、それ程顕著でなくとも、ほとんどの“技術”が地球環境および人間の生活スタイルに何らかの影響を与えています。このように、技術の基礎となる学理から技術の効果に至るまでの広い範囲を研究対象としていこう、いや研究対象としなければならない、という姿勢を示すことが重要であるということで、最初に記した表現になりました。上にあげたような広い観点からの研究が現時点で十分に行われているものではありませんから、将来展開への決意を込めた表現でもあると御理解いただければ幸いです。

以上が、私達の考える“工学”の範囲ですが、その研究にどう取り組み、教育をどう進めていくかという点も重要です。まず、「研究にどう取り組んでいくか」という点については、冒頭の文章の通りです。私達はまず真理の探求を目指します。もう少し詳しくは、“……、基礎研究を重視して自然環境と調和のとれた科学技術の発展”を図ります。また、それに際し、“……、地域社会との連携と国際交流の推進に留意”します。

少し附言します。昨今、大学に対して産官学連携や社会貢献ということが強く求められています。前者を少しかみくだいて言えば、「大学は、日本という大きな企業連合体の研究所の役割を果たしなさい」ということと理解できます。私達としても、真理を求めた結果が産業界の役に立つという場合には、もちろん喜んで特許を申請し企業化へ向けた協力を努めます。また分野によっては、初めからそう

いう目的で研究を始める場合もあると考えます。という意味での産官学連携には、私達の工学研究科・工学部も極めて積極的に取り組む所存です。具体的には、工学研究科内に産官学連携推進のブレーンとなるべき部門をスタートさせ、また全学レベルの国際融合創造センターとも密接な協力関係を保ちながら、この課題に取り組んでいます。

ただ、ここで次の2点に御注意いただきたいと思っています。前述のように、私達は「工学」をかなり広く捉えていますから、当面は企業化と結びつきそうもない分野や、元来、特許や利益とはあまり縁がない分野も数多く存在します。しかし、そういう分野であっても、私達が考える意味の工学として重要と判断されれば、その研究を着実に継続させていくべきと考えています。一方、真理を求めた結果、短期的に見れば特定企業の利益に反するような知見が得られる場合もあるでしょう。そういう場合においても、その成果の発表をためらうべきではない、という姿勢が「学問の本質は真理の探究である。」の一文に含まれています。

もう一つの視点である社会貢献について述べます。社会貢献の1つの形は、私達が得た知識をわかり易い形でお話することでしょう。これにつきましては、夏季休業中に「工学部公開講座」および「受験生のための工学部オープンセミナー」を行い、さらに全学レベルの公開講座や学外の講演会へ講師を派遣して、貢献に努めています。社会貢献としては、上記以外にも、技術講習会の講師や審議会・選考委員会などの委員を勤めることが考えられます。これらの面でもすでに多くの教員が貢献していますが、今後もより積極的に対応できるようにルールやシステムを整備したいと考えています。

次に、理念の最後の文章にある“地域社会との連携”という側面をみておきます。この連携には色々な内容が含まれると思いますが、私達の能力を最も直接的に生かせる形として、地域企業に対する技術協力があります。これについては、従来、教員が個人的レベルで引き受けることが多かったように思います。私自身も、地域企業との共同研究を実施してきました。その経験から、連携を成功させるには、「具体的な問題の解決に、どの分野のどういう知見



が役に立つのか」の見極めが本質的と考えます。企業と大学との協力関係構築という立場から、この問題はマッチングと呼ばれています。全国的大企業の場合ですと、社内に研究所を持っていたり、学会などを通して大学教員とのつながりが深かったり、比較的容易に適切な共同研究の相手を見つけることが出来ます。しかし、地域の中小企業が新しい分野の技術を必要とする場合には、マッチングが大きな関門となっていると思います。そういう場合のマッチング方法として、大学の教員がキーワードを示し、その中（組合せも含めて）から企業側が適当な相手を探すというシステムがよく使われています。これにはそれなりに期待したいのですが、示されたキーワードの意味を正しく理解するためにはその背景の理解が必要である、その理解を得るには学会などに出席して最近の研究動向に触れておくことが重要である、といったことで難しいところがあります。むしろ逆に、企業の方にプレゼンテーションしていただいて、大学の教員が名のり出るという方法もあるのではないかと思います。しかし、この方法にも、提示された課題に対応できるだけの参加者が集められるかという問題が伴います。というようなことですが、色々と試行錯誤していきたいと考えています。

最後になりましたが、教育について述べます。理念の中には、“……、高度の専門能力と高い倫理性、ならびに豊かな教養と個性を兼ね備えた人材を育成する”とあります。これが教育に対する姿勢ですが、やはり抽象的な言葉が並んでいるし、“高度、高い、豊かな”と言ってもどの程度のレベルを目指しているのかあまり明確ではありません。“時代を超えて受け継いでもらえるような表現にしよう”ということで、こういうものになってしまったのですが、説明を加えます。

私達としては、学部4年間、修士2年間、博士後期課程3年間のそれぞれで、どういう内容とレベルの教育をするかということについて、一定の方針をたてています。その基準は、研究者となるのであれば博士後期課程修了段階で世界的レベルでの最先端の研究を主体的に進めていけること、技術者となるのであれば数年の実務経験の後に世界的レベルでの

技術開発に携わるだけの能力を有すること、さらに将来は総合的視野をもって学問や技術の発展をリード出来ること、といったところにあります。

上の基準から逆算して、学部では、教養教育、当該分野の専門基礎教育、および教育者・創造的エンジニアとしての基礎的トレーニングを行っています。教養教育は社会・人文的教養、語学、体育等の一般的素養の教育です。研究者・技術者である以前に一般社会人として必要とされる基本的知識・能力・姿勢を養うとともに、研究者・技術者としての活動に不可欠な倫理観の基礎を培っていただくことを目的としています。当該分野の専門教育においては、学理の基礎と原理の習得を重視しています。これにより、幅広い応用能力が涵養され、将来まったく新しい未知なる課題へ取り組むことが可能となることを期待しています。以上の教育は、講義・演習・実験・実習・少人数セミナー・教官およびTAによる個別指導などの多様な手段を有機的に組み合わせさせて実施しています。研究者・創造的技術者としての基礎的トレーニングは、主として最終学年で課される卒業研究を通して実施されます。また、調査能力、コミュニケーション能力、計画作成・遂行能力、プレゼンテーション能力、報告書作成能力など付帯的項目の教育も重要と考え、その基礎を演習・実習・実験などにおいて、総合的・実践的訓練を卒業研究の中で行うものとしています。卒業研究は以上のように学部教育の総まとめという位置づけにあります。具体的には本人の希望および習得分野に応じて先端的研究にかかわる課題を選択し、教員の個別指導のもとで研究してもらいます。これによって、

- ・世界的な研究レベルを体験的に認識すること。
- ・研究達成に対する喜びを実感すること。

を期待しています。

大学院修士課程の教育は、学部における基礎的教育の上に、研究者・創造的エンジニアとしての素養をより高めることを目指しています。具体的には、専門分野についての深い知識と理解を得るとともに、関連分野についての広い展望が持てるように、講義・演習・研修等を用意しています。これに加えて、世界最先端に位置するテーマの研究を分担してもらいます。研究遂行にあたって、教員は知識・技

術・研究の方向性などについて必要な指導をある程度具体的に行うが、研究自体は自主的に遂行してもらうこと、としています。また、学生間の議論の場を用意して、その相互協力を薦めるとともに、TAなどの形で学部教育に参加する機会を作って指導者としての要件に触れられるように工夫しています。これによって、独立した研究者・技術者となる基礎的準備が整うものと考えています。

大学院博士後期課程は、独立した研究者として自立していく期間と位置づけています。研究室の研究環境が許す範囲で、世界的レベルで評価され得る研究テーマを選んでもらいます。指導教員は必要な助言を与えますが、研究遂行は学生主導となります。また、博士後期課程の学生には、授業のTAのほか、学部卒業研究の指導にも参加協力してもらって、指導者としての訓練の一部としています。これによって、博士後期課程修了時には、独立した研究者として活躍できる能力が備わるものと期待しています。

以上のように、学部、修士課程、博士後期課程と進むに従って、学生の自主性をより重んじることとなりますが、そのいずれの段階でも世界的レベルで最先端と考えられるテーマ、またはそのようなテーマに関連する課題を扱ってもらうことが重要と考えています。そのためには、教員自身がそのレベルの研究に取り組んでいる必要があります。この意味で、私達の教育は研究と不可分一体の形で進められていると言えます。ただし、世界的レベルの最先端のテーマとは、必ずしも現在ジャーナルを賑わしている話題とは限りません。むしろ、現在はほとんど表だって取り上げられていないが、将来重要となるようなテーマこそ、本当の世界最先端であるということも忘れずに研究を進めています。なお、以上のようにまとめてしまうと、すべての学生に一律のカリキュラムを課しているような印象を与えるかも知れませんが、決してそうではありません。卒業研究では、もちろん、個々の学生が違ったテーマを選ぶわけですが、一般の授業についても、学生が自らの学業を自らで構築することが重要と考え、必修科目を極力少なくしています。

随分長い巻頭言になってしまいましたので、これで失礼します。理念の中には、国際交流および社会

的説明責任という事柄が述べられていますが、これらにつきましてはそれぞれの担当の方からあらためて説明していただく機会があろうかと思います。

(電気工学専攻 教授)

## 社会基盤工学専攻

■工学研究科の理念は自身の理念に一致している。学生の人格を尊重し、学生との会話を持つことが大切だと考えて実行している。(50代)

■主体性を持った学生は、それまでの人生の中でその様に育って来ており、数年間の教育で主体性を持たせることは不可能と考えています。基本的には学生は主体性を持っていないと考えて指導し、それに対する学生の反応によって主体性を持って研究出来る人材を見つけた方が早いと思っています。(50代)

■京都大学の学生は一般に優秀であるので、最も重要なことは個々の学生がどのような分野に向いているかを判断し、そして、知的好奇心を刺激することである。(50代)

■基礎知識の上に自分自身で考えることの重要性を認識させること。(60代)

■この工学部の理念で基本的によいと思います。ある研究者が教育・研究の重要性を以下の3つに大別しています。1) 社会に役立つ、やった方がよい研究。2) やってもやらなくてもよい研究。3) やると社会にむしろ害になる研究。京都大学工学部・工学研究科は、3)をやってはならないが、2)は多くの先生がやっているかもしれない。1)をやるのが研究の理念であり、それを育てるのが教育と考えられる。上記の3種類をいかに評価・判別するかが現在真に問われている。あとは綺麗に作文するのみです。(60代)

■教育研究の理念はこれで結構と思う。「主体性」については、文化の継承者であることを自覚させるとともに、授業やインターンシップなどを通じ、自分の将来像を描ける情報を早期に提供すべきであろう。(60代)

## 都市社会工学専攻

■学生の主体性を伸ばすためには、彼らの知的好奇心を育むこと、自分達への期待が大きいと認識させることが重要。(40代)

■「理念・目的」に全面的に賛同する。学部生に関しては、「自由の学風」を云々する前に、学科に必要な「学ぶべき内容の最低限の修得」を確実にすることが先決と考える。上記の修得なくして学部・学科に所属している学生の主体性は存在しないように思われる。問の意味の主体性は独立に議論する意味がないと考える。(40代)

■学生が論理的に物を考え、人に論理的に説明できる能力を養う必要があると思います。(50代)

■入試のやり方を変える。より多彩な評価基準で選考する。教師を信用するな、教科書を信用するなという観点から学習させる。(50代)

■インセンティブを与えるシステムを充実する必要があります。特に国際的なスカラシップの敢行、学生によるベンチャーの立ち上げ等に関して日本は非常に遅れている。(50代)

■学部では基礎の修得に務める。大学院ではミニテーマを自ら確立して、報告させている。(60代)

■学生の主体性を伸ばすことは、学生にリスクを負わせることでもある。そのリスクを軽減する努力が教員や大学側に求められている。(60代)

## 都市環境工学専攻

■上述の理念・目的に賛同します。学生の主体性を伸ばすために、国際雑誌への投稿をもっと



積極的にするべきだと思います。(40代)

■特別研究\*、修士論文の作成は自主性・主体性を確立させるのに不可欠である。これらが支障なく実施できるスペース、資金、施設を確保する責務がある。(40代)

\*特別研究：卒業研究、卒業論文。

■理念・目的については賛同いたします。学生の主体性を伸ばすため ・教職員全員が過保護でなく、学生の主体性を伸ばすことが重要であるとの認識を持つこと ・学生と時間をかけて話し合う雰囲気と体制 ・学生が適切な主体性を持って活動することを尊重すること ・研究・教育において、学生が主体性を持って活動しうるよう指導 ・大学全体が京都大学の全ての学生に対して開かれたものであること。(50代)

■成功体験が主体性を育てる。一方的に教えるのではなく、演習等を通して具体的に何かを成し遂げる経験をさせることが重要。(50代)

■大学院の桂移転の件は、(従前は非意図的に行われていて)学部生と大学院生との日常的交流の機会が減少する。学部生・院生間の交流の教育効果を吟味し、学部生が桂を訪問する機会を意図的に準備するべきではないか？(50代)

■教育・研究の理念・目的については包括的に同意いたします。「主体性」は教育の現場に積極的に「価値観」の議論を持ち込み、学生に「価値」について考えさせることが重要と考えます。一つの事象について異なる価値観を示し、学生の判断を問う教育を試みています。(50代)

■すばらしい理念だと思います。(50代)

■工学部・工学研究科の教育・研究の理念・目的に賛同する。学生の「主体性」を伸ばすためには、教員、D3～B4といった広い世代にわたる人間によって構成される研究室の運営を公明正大に行い、学生の積極的な運営参加を促すことが必要であると考えます。(60代)

## 建築学専攻

■研究の進め方を教えずして(又、模範を示さずして)主体性はありません。まずは、主体的に動ける様な教育が重要。(40代)

■大変良い理念と思います。学生の主体性を伸ばすには、自分で結論を出させることだと思います。(50代)

■教科書、参考書を読むだけでなく、演習問題を解かせたりして具体的に手を動かす機会を多く与える。(50代)

■優れた先人との出会い。(50代)

■研究の初期におけるミーティングで、学部生又は院生の1人1人に意見を述べさせる。又、ミーティングの議事録作成を行わせる。(60代)

## 機械理工学専攻

■研究の理念としては、応用研究においてもあくまで学問の真理の追究が基礎となる。教育の理念としては、学生の主体性を伸ばすための教育を、学生の変化に対応して行う必要がある。高校までの受験教育が極端になっている今日、記憶型から探求型への発想の転換を促す教育を、できるだけ早く実施する必要がある。然るに、物理工学科では、1回生は分属前で、余りにもベースの異なる専攻が集まっているため\*、共通の理念の教育が行いにくい。2回生も総人\*\*

との関係で、カリキュラムに制限が多く、障害が多い。(40代)

＊物理工学科は、平成16年度まで2回生の最後に機械・航空・材料・原子核・エネルギーの5コースへの分属を行った。平成17年度からは1回生の最後に、機械システム学コース・材料科学コース・エネルギー応用工学サブコースと原子核工学サブコースの4コースへ分属を行っている。

＊＊総人：総合人間学部、教養教育を担当。

■学生の自治・自主活動を支援する。研究室の選択、研究テーマの選択に自由度を増す。学部と院の研究室を違うものにする。(50代)

■主体性は学生個人の資質によるところが多く、受験校で偏差値教育を受けてきた学生に学部教育時代に求めることは容易ではない。主体性は卒業研究や大学院時代の研究で教員より基礎研究の面白さを習ったときに生まれてくるものと思われる。(50代)

■「基礎研究の重視」は良いが、工学部の性格上、もう少し応用的な面も重視しても良い。他大学の経験から、京大の学生は頭でっかちすぎる。もう少し、工学の実学的な面の素養も身に付けてほしい。(50代)

■基本理念については適当だと思います。学生と教員がゆとりを持って話し合える機会を増やす。そのためには教員の雑用を減らして自由に使える時間を増やすことが必要である。(50代)

■自由な学風は、教員達の主体性によって維持できるもので、受験勉強に専心して入学してきた学生に主体性を期待するのには問題があるのではないか。学生の「主体性」を伸ばすためには、基礎教育のみでなく、企業が取り組んでいる課題などに取り組ませて、現実の問題が理論通りに解けないことや、主体的に問題解決を計る喜びを学ばせる必要があるように思われる。大事な青春時代にお金を得るだけの単純労働や遊びに費やされる愚を一日も早くなくすべきである。(60代)

■正当な意見だと思うが、理学部と工学部の役割分担を大学の存在意味の点から今少し明確にしたほうが良い。大学における「人づくり」の重要性が「研究」の陰に隠れているのはどうかと思う。(60代)

## 航空宇宙工学専攻

■学生の興味の持てる研究テーマをいかに引き出せるか。そのためには教員の側の広い受け皿が必須。(40代)

■工学研究科・工学部の理念であるにもかかわらず、「真理の探究」、「基礎研究を重視」などがうたわれているのは、京都大学の見識を示すものとして高く評価できる。学生は、十分な基礎学力を身に付けてはじめて主体性を持つことができる。そのためには、大学初年度のB群科目\*、専門における基礎科目において、学生の学力を十分に鍛えておく必要がある。(50代)

＊B群科目：自然科学系科目。数学、物理学、化学、生物学、地球科学、情報科学等を主な内容とした科目群や、これらにまたがる応用的な科目。基礎科目においては、標準履修年限を指定しクラス単位の履修を原則としている科目がある（講義、実験等）。

■簡単なものから徐々に高度の問題まで独力で解決する経験を蓄積していくこと、数週間から数ヶ月かかる問題が望ましい。さらにその過程から問題発見、提起する目を養い、自身で解決するよう心がけること。(50代)

■魅力ある教育の提供。(50代)

■工学研究科・工学部の「基本理念」に賛成します。学生の「主体性」を伸ばすためには、単に好

き勝手に自由にやらせるだけではうわべだけの知識の取得に奔走するだけなので、学部教育でみっちり基礎学力を鍛える必要があると考えます。その基礎学力を土台として問題解決能力を身に付けさせることが重要だと考えます。逆は真ならずで、社会に出てから基礎学力を身に付けることは不可能です。学生時代に下半身を鍛えておけば、社会に出てから問題にぶつかった時にその力を発揮すると考えます。独創的な仕事には、基礎学力が必要です。(50代)

■教育・研究の理念・目的：教育・研究を通して大学が育成すべき人材は、専門能力、倫理、教養、個性、とともに、第2番目の質問にもある“主体性（自主性）”が挙げられる。最近の学生を見ていて、以前と比べて、このような学生の主体性が最も少なくなっているように感じ、将来に危機感を持っている。このような学生の主体性、自立性を向上させていくことが、直近での教育の最重要課題／目的、とも感じる。

学生の「主体性」を伸ばすために：研究室に配属された学生（4年以上、修士、博士）に対して、研究テーマ、研究の進め方、まとめ方など、全てにわたって、最初から具体的な指示を与えず、まず大枠の指針のみ与えて、自分で考えさせ、ある時間を経過して、各自の考えたことなどを個別に議論し指導している。このように、少し手間をかけてでも、自分で考える、方針を構築する、実行する、アピールする、というような主体的行動（自己責任）の感覚を養っていくことが肝要と考える。(50代)

■1. 工学部・工学研究科の教育・研究の理念を高く評価しています。今後、工学部・工学研究科の教育・研究を考えていくとき、この理念を常に基準にすべきだと思います。2. 自由の学風について。今後とも尊重し、維持すべきことと考えます。ただし、大学の大衆化によってそれを維持するためには努力が必要になってきたことを認識する必要があります。基礎学力の確保と共に、よい意味でのエリートとしての自覚の形成が必要です。(60代)

### マイクロエンジニアリング専攻

■多くの人が語っていることではあるが、提示した課題に対して、すぐに答えを示すのではなく、学生の考えを問い、学生の答えを基に議論を進めていくことによって、学生のモチベーションが高まり、自主性が涵養されると信じて実践している。(40代)

■チームでプロジェクトを体験させる。(40代)

■理念は結構だ。学生に限らず個々の人間の主体性を伸ばす社会教育が幼年期から必要。(50代)

■主体性を持って物事に取り組むためには、そのことへの興味やこだわりが必要である。講義では、知的好奇心を刺激するような講義を心がけているつもりであるが、実際にはかなり難しい。(50代)

### 原子核工学専攻

■理念・目的：理想的な内容であろう。

学生の主体性：主体性を培うに必要な最も重要な要素は、学生自身に「学問をすることの喜び」を抱かせることであると思うので、教師は常にそのことを自覚しかつ実践すべきである。有効な方法は case by case で様々あると思うが、基本的には教師自らがそのような態度を現すことであろう。講義、実験、研究指導、など様々な局面で学生を引きつける態度で臨むべきであろう。(50代)



■現在の工学研究科・工学部の基本理念にあるように、基礎研究の重視、自然環境との調和、倫理性、自主性と人権の尊重が重要だと考えます。学生の自主性を伸ばすためには、逆説的ではあるが、あまりそのための工夫を考えないほうが良いのかもしれない。大学に入ってくる学生の学力が低下していて、そのための補習授業をやっているようなところが世間にはあるが、そんなことは京大ではやるべきではない。(50代)

■「自由の学風」については、既成の概念にとらわれないことを意味すると思いますが、学生に対しては、結局のところ（言葉ではなく）模範を示していくしかないのではないかと思います。なかなか難しいことですが・・・。(50代)

■よくまとまった理念ではあるが、やや盛りだくさんではある。基礎研究重視を掲げている点は評価する。学生の「主体性」は基礎学力・考え方を身に付けさせた後は、教員があまり口や手を出さないことによって、育つと考えている。(50代)

■科学や技術と現代社会との係わりを、教員を交えて学生自身で学ばせることは（例えば、少人数セミナーのように）、有効かと思われる。学生の主体性を伸ばすことに寄与するだけではなく、勉学の動機付けにもなり得るのではないか。(60代)

### 材料工学専攻

■・研究科長の理念・目的には大賛成・あまり教員が手をかけないことが学生の「主体性」を伸ばすと思う。(40代)

■学部、研究科、専攻などあらゆるレベルでの垣根を越えた連携が学生レベルでも容易に行えるような体制作りと各専攻の主体性を尊重した教育研究体制作り。(50代)

■学問の本質は真理の探究であると基本理念の冒頭に述べられています。工学の基本理念の中にこのようなことが述べられていることは、大変すばらしいことであると思います。工学が学問であることを忘れがちな昨今の風潮の中で、基本理念に掲げてある事柄は、ある意味で当然のことですが、このことを守ってゆけるのは京都大学しかないのではないか、そのような危機感を持っております。大学は、学問をするところであり、学問を実践してそれを支える専門家とそれを学ぶ学生が集まっているところであるという、この基本的なことを学生にしっかりと認識させ、次世代に継承させることが何よりも大切であると考えます。(60代)

■大学初学年でのポケットゼミのような機会を全学生に持たせる。(60代)

### 電気工学専攻

■妥当な理念と考えます。主体性に関しては、単位認定のさらなる厳格化や、半期当りの登録単位数の制限など（これは自由な学風に矛盾するようでもあります）を進めていかなければ、維持が難しい状況になりつつあると考えます。(40代)

■機会のあるときに「自己決定、自己責任」の重要性を強調している。卒業研究指導にあたってはすべてを教えるのではなく自ら考えさせるように努力している。(60代)

■逆説のようではあるが、最低限の規律を厳しく要求することが重要と考える。その最低線が確保される確信があれば、それを前提として学生の自由な活動を大幅に容認することが可能となる。学生に自主的に取り組ませる授業などは、教育評価のときの得点源となるので、一定程度維持しておく必要があろうが、それによって一般学生の主体性が育まれるとは思えない。(60代)

## 電子工学専攻

■現在の理念・目的のままで良いと思います。主体性を伸ばすために有功と特に考えられる方法はないが、一般的には責任を与える事と口を出しすぎないようにするように教員が気を付ける事が大切ではないかと思います。(40代)

■「自由の学風」、すなわち「学生の主体性」は、京都大学としてぜひあるべき姿、守るべき姿だと思っています。そのためには、大学に入学して1～1.5年程度は、充電期間としてできるだけ広い分野の知識を吸収させ自主性を育てるべきであり、専門教育をその期間にあまり多く下ろすことは避けるべきと考えています。この期間がたとえ無駄のように思えても、長い人生の中では、自主性を育てる重要な期間だと思います。(50代)

■理念そのものは結構かと思う。ただし、教職員や学生各自が具体的にどのように認識し、実践しているかが問題である。学生の主体性についても、昨今の風潮ではごく一部(10%未満)にしか期待できないのではないかと感じる。

定員の1.5倍程度の学生を入学させ何もしない学生は退学にするしくみを作る。(50代)

■京都大学の基本理念として掲げられている、地球社会との共生を目指し、自学自習を基本として対話を通して教育研究を行うスタンスが、工学部・工学研究科の基本理念の中に、より具体的な文言で表現されていると思います。この理念を達成する必要条件としては、勿論、学生の主体性は極めて重要と考えられます。「言うは易く、行うは難し」ですが、学生の主体性はそれぞれの学問的興味(関心)が基本と考えられるので、教育研究を通して、学生に対して研究の必要性や学問的価値を教えることが大切と考えています。(50代)

■初等中等教育において、自主的に行動する(手足を動かす)機会が少ない現状を踏まえて、大学初年度における少人数ゼミナールやそれに類するカリキュラムを充実させ、主体的に動く体験をさせる。(50代)

## 材料化学専攻

■自ら研究課題を探り、その解決あるいは課題追求のための方法を考慮する作業を課す。他人の真似ではなく、オリジナルのものを提案することが出来るよう、現時点でのわれわれの学問における最先端を知るのみならず、現在ならびに将来の学問の方向付けを理解・予測し、他人より先んじてその課題に取り組むことが出来るように教育している。(50代)

## 物質エネルギー化学専攻

■学生の主体性を伸ばすためには、教員が関与しないのが一番であろうが、1割の主体的に考える学生のために9割の何もできない学生を社会に送り出すことはできないと考える。(50代)

■概ね妥当である。「主体性」は本来、放任によって涵養されるはずであるが、核となるものを持たない現代にあっては、工夫が要るところである。(50代)

■1. 主体性を有する学生の教育には、まず動機付けが大切と考えている。動機付けのためには、自我の確立が重要であり、1回生の時点でその重要性を理解させる。私は工業化学概論で安全教育を担当しているが、少なからず時間を割いてそのための講義をしている。

2. 主体性を有しようとする学生には基礎の重要性を理解させる。基礎学力があって初めて主体性を活かせることを理解させる。

3. 教員が学生を手足と考えず、主体性を伸ばすという目的意識を失わないことが重要。(60代)

### 分子工学専攻

■教育、研究の理念・目的に賛成する。主体性を伸ばすためには本人に出来るだけその意味を体験させることが重要である。(40代)

■研究費をとるためだけのくだらない研究に貴重な学生に従事させない。手足としてしか使えない学生をDコースに安易に誘わない。(40代)

■現在の学生さんは確固たる信念にもとづく主体性があるとは思えない。そこで必要なことは、学生さんが勉学にいそしむことにより、自分に自信を持つことが、主体性を確立することに繋がると考える。(50代)

■主体性は基礎学力の裏打ちがなければありえない。まず基礎学力をつけようとする「気持ちの主体性」をもたせることが肝心。(50代)

### 高分子化学専攻

■理念・目的に対しては賛成で付加することは特にない。問題はこれらを実行するための具体的な方法である。特に独法化後の競争的資金獲得をめぐる研究戦略の転換等、上記理念に反する風潮が強くなってきた昨今、京都大学の学風を維持継承する実践的な具体策を検討すべきである。学生の主体性を伸ばすためには学問の重要さと面白さを教員みずから身をもって示す他はない。(50代)

■研究活動、就職活動の適当な時期に、自分自身で判断する機会を作る。ただし、かなりの精神的緊張を強いるので相手をよく見て、相手にあった程度で。(50代)

■設問の意味が不明。「自由な学風」を維持する第一条件が「学生の主体性」とは考えられない。教員に教育と研究に専念する時間を十分に与えることが第一の課題である。(50代)

■研究を通じての教育が必要。(50代)

### 合成・生物化学専攻

■4年生だと、研究室の運営の可能な部分にできるだけ関与させる。(30代)

■基本理念はこれでよいと思います。主体性の育成を妨げるものは、試験の点数を底上げして、なんとか卒業させ、就職の面倒もみねばならないと思っている教員の“親心”でしょう。(50代)

■1. 理念は結構なことです。2. 学生の主体性。海外の国際学会にひとりで行き発表する機会を与える。短期間海外で滞在して研究する機会。(50代)

### 化学工学専攻

■就職活動では、学生は非常に主体的に動き、その能力も十分持っていることがわかる。よって、学生に明確な目標・目的をもたせることがポイントである。その方策の一例として、(1)グループで問題解決形式の課題を与えるような講義を増やしていく。(2)大学院学生に関しては積極的に海外での国際会議発表をさせる環境を作る。これによって、研究に関して自らの目標ができ、主体性が大きく伸びる。などが考えられる。(40代)

■日本人で博士課程に残る人が増えるような環境（助成、飛び級システム）を整えることにより、研究の発展を促進させて学風が受け継がれる。今のように特許がどうだとか産学連携しろだとか、予算をとるためにしなければならないような研究が蔓延しては自由な学風などなくなる。（40代）

■工学は必ずしも「真理」を求めるものではない。真理ではなくとも「適切」な手法を開発することで、複雑系を対象とする工学・技術に貢献できる（ただし、真理と「どのように異なる手法なのか」を常に明確にせねばならない）。このような意義を簡潔に盛り込めないものであろうか。また、ある程度の放任（概略のマイルストーン（内容と制限）は与えた上で）。（40代）

■現在の教育システムでは学生の主体性の涵養は卒業論文研究に負うところが大きい。さらに主体性を伸ばすには、各学科で卒業研究以外に創生型科目（デザイン科目）を設定する必要がある。（50代）

■「基礎研究を重視して」という表現があるが、「理学」でなく「工学」としての基礎研究とは何か、議論されているのであろうか。この理念に基づき研究・教育方針を決めていくのであれば、より深い議論が必要であろう。個人的には、基礎研究のみを重視する必要はないと考えている。学会参加は学生が主体性を持って研究を進める際の大きなきっかけとなる。細かいことではあるが、参加させるのに、わざわざ理由書が必要な理由がわからない。形式的な理由書の提出を不要にして頂きたい。（50代）

■卒業を難しくすることです。本当に実力のあるものだけに。（60代）

## エネルギー科学研究科

■全体的に見て、教えるべきとされる内容が多すぎる。学生は消化不良に陥っていると思う。主体性を発揮する余裕を失っていると思う。（50代）

■特別研究の段階になって初めて主体性が大きく伸びる。したがって、教員の研究の手足として働かせるばかりではなく、少々我慢して学生の主体性が伸びるのを待ってやる必要がある。（年齢不明）

## 情報学研究科

■ゼミなどにおける討論で、できるだけ自分自身で考えるような質問に努めている。（40代）

■主体性は初めから身につけているものではなく、卒論の経験を通じてようやく確固としたものになる。したがって遠回りなようでも卒論の指導に手間をかけることしかないと考えている。（40代）

■教育・研究の理念・目的に対して意見はありません。学生の「主体性」が失われつつあるとの認識と思いますが、その傾向は確かに感じられます。原因として、なんでも手にはいる生活環境（工夫の必要がない）、すぐに手に入る表面的な情報（わかった気にさせられる）、などが考えられます。教育面から是非を考えるなら、教えすぎをしないこと、自分が情報発信源になるとしたらどうするかを考えさせることなどでしょうか。（40代）

■理念・目的はもっともな内容だと思う。工学系学生にとっては基礎学力があって初めて主体性が出てくると感じているので、基礎学力の習得が最も重要だと思う。（50代）

■基本理念には賛成。ただし、理念に沿った研究・教育には根気が必要であると思う。自然環境との調和は“言うに易し、行うに難し”であるが、今後の工学の発展には避けては通れない。



学生の「主体性」を伸ばすためには、早い段階で考える癖をつけさせる必要がある。また、早い段階で小さなことでも良いから発見の楽しみを経験させる。(50代)

■理念は非常に立派です。(50代)

■自然環境との調和に加えて、人間社会の理解・文化等との調和が重要であると考えます。大学の授業を英語化し、国際社会に門戸を開くことが学生の主体性に繋がると思います。すでにドイツ、中国等で英語化が始まっています。何らかの対策が必要でしょう。(50代)

■学生(2~3回生でも)が、グループで勉強会などをする時、会場が学内に借りやすい仕組みを作る。(50代)

■学生のレベルに合わせた教育。(50代)

■「地球社会」という京都大学の理念にある言葉はなかなか含蓄のある言葉だと思います。単純に一般に言われているような持続可能性以上のものを示唆しているように思われます。我々の価値観を再検討してゆくことが求められているのではないのでしょうか？学生自体も何が意味があり、何を目指すべきかを自己に問いかけるような生き方が求められているように思います。(50代)

■「主体性」を伸ばすには、自分の頭で考えることが必要である。一方的な講義より、少人数のセミナー形式を増やしたほうがいい。しかし、「主体性」を伸ばす教育は、入るまでの小学校から高校までの間に素地が作られていないと、大学に入っても有効な教育はできない。大学だけでなく、早い時期での教育から考える必要があるだろう。(50代)

## 地球環境学堂

■教育、研究の理念・目的について特段の異論はない。「主体性」の意味として「自分自身で決断し、行動する能力」とありますが、それに加えて自己の行動に責任を持つことが必要です。教育の中では対話型講義を可能な限り取り入れる努力をしており、自らテーマを設定して研究に取り組む姿勢を大事に考えている。(50代)

■文字通り主体性を第一義に考えるが、学業の内容をよく理解しているか、一方通行にならないようにレポート、小テストを繰り返し、チェックする。(50代)

■学部→国内インターン研修、大学院→海外インターン研修に積極的に参加させる。地域と国際連携を経験させる。(60代)

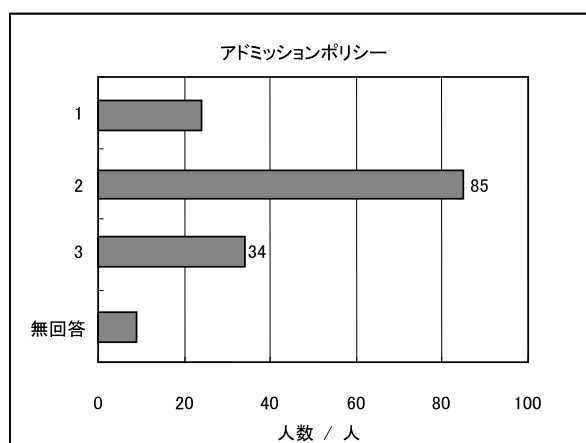
## 学術情報メディアセンター

■「工学は人類の生活に直接・間接に関与する学問分野」と述べているにもかかわらず、それ以後は理学部や文学部の理念としても通じる一般的な議論になっている。工学部の独自性を生かしたものに变更するほうが良いと考える。学生に意見を言う機会を多く与えることが重要。(40代)



・アドミッションポリシーについて、お尋ねします。現在、工学部・工学研究科が掲げる教育目的および目標をクリアするのに十分な能力をもち、明確な目的意識や適性をもった学生が確保できていると感じておられるでしょうか。

- 1 能力の高い学生を確保している。
- 2 おおむね確保している。
- 3 満足に確保できていない。



#### ・アドミッションポリシーについての意見

資料2は平成16年度入学者選抜要項に記載された工学部と各学科のアドミッション・ポリシーに相当する記述部分のコピーである。アンケート調査の段階では具体的なアドミッションポリシーには特に言及せず「アドミッションポリシーについて、お尋ねします。現在、工学部・工学研究科が掲げる教育目的および目標をクリアするのに十分な能力をもち、明確な目的意識や適性をもった学生が確保できていると感じておられるでしょうか。」とだけ質問した。アンケートの結果から、「アドミッションポリシー」という言葉が十分にこなれた言葉ではなかったことがわかる。目的のはっきりしない学生の入学の弊害、定員を削ってでも優秀な学生のみを入学させる、学外からの大学院受験生を積極的に受け入れる、考える力を持った学生、アドミッションポリシーを受験生に知らせる最も重要な手段は大学入試問題、二次試験に国語を入れる、精神的に強い学生、アドミッションポリシーに囚われるべきではない、高専編入など異なるバックグラウンドをもつ集団からの入学、高校の学習指導要領にこだわらない入試出題、などの意見が目立つ。

#### 資料2 京都大学入学者選抜項 (抜粋)

| 工 学 部         |                                          |
|---------------|------------------------------------------|
| 地 球 工 学 科     | 土木工学コース、環境工学コース、資源工学コース                  |
| 建 築 学 科       |                                          |
| 物 理 工 学 科     | 機械システム学コース、材料科学コース、エネルギー理工学コース、宇宙基礎工学コース |
| 電 気 電 子 工 学 科 |                                          |
| 情 報 学 科       | 計算機科学コース、数理工学コース                         |
| 工 業 化 学 科     | 創成化学コース、工業基礎化学コース、化学プロセス工学コース            |

## 工 学 部

### 工学部の理念と歴史

学問の本質は真理の探究です。その中で工学は人類の生活に直接・間接に関与するテーマを扱っています。そのため、地球社会の永続的な発展や文化の創造などの問題についても責任を持って対応しなければならない立場にあります。京都大学工学部では、このような考え方に立って教育・研究を行います。教育にあたっては、しっかりと基礎学力と高度の専門能力、高い倫理性、ならびに豊かな個性を兼ね備えた人材の育成を目標としています。

また、研究においても基礎を重視するという姿勢でのぞんでいます。自然環境と調和のとれた科学技術の発展ということにもつねに注意をはらっています。

ここで京都大学工学部の歴史を少し紹介しておきましょう。京都大学工学部は明治30年（1897）に京都帝国大学理工科大学として土木工学科、機械工学科で出発しました。その翌年には電気工学科、製造化学科および採鉱冶金学科が、また大正9年（1920）には建築学科が開設されました。以来様々な整備拡充が行われ、平成8年（1996）に現在の6学科、すなわち、地球工学科、建築学科、物理工学科、電気電子工学科、情報学科、及び工業化学科に再編されました。

### 教育方針

京都大学工学部の教育の特徴は、京都大学の伝統である「自由の学風」の下で、先に述べたように「学問の基礎を重視する」ところにあります。「自由の学風」とは、既成概念にとらわれず、物事の本質を自分の目でしっかりと科学的に見るということです。そこでは、学問に対する厳しさが要求され、それが、「学問の基礎を重視する」ことにつながります。一般的には「工学部は応用を中心とする学部である」と考えられているので、上のように「基礎重視」といいますと、やや異質な印象をもたれるかもしれません。しかし、京都大学工学部では、基礎となる学理をしっかりと学んでおくことが、将来の幅広い応用を可能とするための必須条件であるという信念の下に、この教育方針を貫いています。

教育内容をもう少し詳しく説明しておきます。京都大学工学部へ入学すると、1～2回生で、一般的な教養教育、英語他の外国語教育、理系全般に共通の基礎教育をうけます。また、それぞれの学科・コース特有の専門教育も1回生から始まり、しだいにその重みを増していきます。4回生になると、特別研究という科目で学生1人1人が特定のテーマに取り組みます。特別研究では、学生は希望の研究室に配属され、研究の最先端に接しながら、指導教員・大学院生と一緒に研究が出来るようになっています。学部卒業後、大学院へ進学すれば、より高度な専門教育と研究指導をうけられます。これまで、京都大学工学部は、上のような教育を通して、幅広い応用能力、まったく新しい未知なる課題へ敢然と取り組む自主性・創造性、および豊かな教養と厳しい倫理観を備えた卒業生を輩出してきました。

### 望ましい学生像

このような教育を受けていただくために、次のような入学者を求めています。

- (1) 高等学校での学習内容をよく理解して、工学部での基礎学理の教育を受けるのに十分な能力を有している人。
- (2) 既成概念にとらわれず、自分自身の目でしっかりと物事を確かめ、それを理解しようとする人。
- (3) 創造的に新しい世界を開拓しようとする意欲とバイタリティーに満ちた人。

以下、各学科の内容を、詳しく紹介します。



## ◎ 地球工学科

20世紀には、科学技術が急速に発達し、先進諸国において豊かな社会が実現する一方、資源の大量消費や環境汚染問題が顕在化してきました。また、開発途上国における人口の急増と貧困問題も残されたままになっています。地球工学は、このような現状のもとで21世紀における地球規模での人類の持続可能な発展を目的とする学問分野です。このため、地球工学科では、地球空間における生活と産業のための社会基盤整備、地下資源の探査と開発、人の健康の保護と生活や環境、資源の保全などについての基礎理論とその工学的応用について総合的な視点から教育と研究を行います。

地球工学科は、日本で最も充実した大学院の教育研究組織で構成されています。すなわち工学研究科の社会基盤工学専攻、都市社会工学専攻及び都市環境工学専攻と連携するとともに、工学研究科附属流域圏総合環境質研究センター、エネルギー科学研究科のエネルギー応用科学専攻及びエネルギー社会・環境科学専攻、地球環境学舎環境マネジメント専攻、情報学研究科社会情報学専攻や経営管理大学院とも連携しています。また、防災研究所、原子炉実験所、環境保全センターなどの協力の下に、教育・研究を進める体制となっています。

地球工学科が対象とする科学技術の領域はきわめて多岐にわたります。具体的には、①全地球・地域現象の観測・解析とその情報分析、②文明の基盤となる都市・地域施設の構築、③新資源・エネルギー創出と資源循環システム、④人間の健康・安全・衛生と生活環境改善及び環境リスク軽減、⑤地球環境構造と保全、⑥生活基盤の防災・安全・信頼性、⑦風土・文化を考慮した美しく快適な都市や国土の創出、⑧交通・運輸・通信システム、⑨総合計画・管理・情報処理・人工知能、⑩新材料応用・新技術開発、⑪研究教育促進と広報活動などがあります。

これらの広い領域にわたる総合的な理解なくして、地球空間の健全な開発と保全はありません。そこで地球工学科では、まず基礎的な共通科目を学習した後、それぞれが興味深い分野へとコースを選択し、志望に応じた多様な選択が行えるようカリキュラムを用意しています。これによって地球工学科に関連する科学技術分野を総合的に理解し得る基礎学力を養うとともに、それぞれの興味ある特定テーマを深く学習することを可能にし、広範囲の分野を取り扱うことの出来る多様な研究者・技術者を生み出すことができます。具体的には、1、2回生において数学、物理、化学、地球科学、生態学、語学及び人文社会等の広範な基礎科目の他に、地球工学総論、基礎環境工学Ⅰ、一般力学及び資源エネルギー論などを学習し、基礎学力を養います。3回生では土木工学コース、資源工学コース及び環境工学コースのいずれかに進み、各自の志望に応じた科目を自由に選択学習します。さらに、4回生で選択科目に加えて特定のテーマについて特別研究を行った後、大多数が大学院修士課程に進学して専門的な能力を高めることになります。

## ◎ 建築学科

人間の生活環境を構成し、安全で健康にして快適な生活を発展させるよりどころとなる建築は、複雑な技術の総合の上に行われる創造的な努力によってつくりだされます。他の工学分野と同様に、人間生活に必要なものを生産する技術ではありますが、つくりだされるもの―すなわち建築―は他と比較にならないほど人間生活のあらゆる面に密接かつ深く係わっており、最もヒューマンな技術といえます。このような建築の特色から、教科課程も自然科学、人文科学、社会科学の広い分野にまたがっており、卒業後の進路も建築・構造・環境の設計及び施工に従事する建築家及び技術者、行政的な指導・監督に当たる建築行政担当者、各種開発事業に携わるプランナーなど実に多様です。したがって建築学科では、「単に自然科学の面に才能をもつ学生だけでなく、人文科学、社会科学、さらには芸術にも深い関心をもつ学生をもひとしく歓迎します。」

建築学科の教科課程・研究は対象領域や研究手法の観点から、計画系、構造系、環境系及びこれらの系と横断的に関係する人間生活環境や建築保全再生を扱う系に大別されます。

計画系では、豊かな人間生活の基礎となる住宅から種々の建築物及びそれらの集合体である地域・都市空間までを対象とし、空間の形成原理を解明し、空間構成計画、設計、都市計画、建築生産などの方法や、美的観点からも優れた建築物を設計する方法について教育研究を行っています。これにより、歴史的考究に基づく洞察力、現状認識のための調査分析能力、空間を構成するための造形能力などが養われます。

構造系では、建築物を地震や台風などの自然の力から守り、その建物としての寿命を全うするための構造工学



・構造技術を教育研究しています。構造技術の発達は従来経験しなかった超高層建築や全天候野球場などの大規模構造の建設を可能にしてきました。さらに、合理的な設計理論、構造法、施工法の展開が望まれていますので、入学者は自然科学を基礎とした広範な能力を発揮することができます。

環境系では、熱・空気・光・音などの物理的環境要素と人間への生理・心理的影響を総合的に評価した環境計画、それを安全で最適に実現する設備計画について教育・研究しています。

人間生活環境や建築保全再生を扱う系では、前記3つの系と協力して生活環境システムを最適に設計する方法や技術を教育し、さらに、IT技術や保全再生技術などを駆使して新しい時代の建築設計及びその人間生活との関連性について教育・研究を行います。

建築家・建築技術者となるには、これらの諸領域について技術とその基礎となる原理を深く修得していくことが求められるため、比較的基礎的な科目から次第に専門分野に至るように、また、各自の特性を活かした選択が可能ないように履修課程が構成されています。さらに高度に専門的な学術知識を修得し研究能力を養うために、建築学科では大多数の学生が大学院修士課程に進学します。

## ◎ 物理工学科

科学の世紀と呼ばれた20世紀から新しい世紀を迎え、これまでの科学・技術を更に発展させ、同時に地球環境・資源・エネルギーなどについての困難な課題を克服して人びとに明るい未来をもたらすために、科学・技術に寄せられた期待は大きなものがあります。物理工学科では、次世代の科学・技術に対するこのような期待に応えることのできる人材を育成することを目指して、工学の広い分野とその科学的基礎について教育を行います。

この物理工学科の教育は大学院の組織によって支えられています。関連する大学院専攻は、工学研究科の機械理工学専攻、マイクロエンジニアリング専攻、航空宇宙工学専攻、原子核工学専攻、材料工学専攻、及びエネルギー科学研究科と情報学研究科に属するいくつかの専攻です。これらの専攻は、学内のエネルギー理工学研究所、原子炉実験所、再生医科学研究所、国際融合創造センター、及び工学研究科附属量子理工学研究実験センターなどと協力して、物理工学に関連するそれぞれの分野で、基礎から応用にいたる最先端の研究と、それに基づく大学院での教育を行っています。

大学における教育は、それによって学生が専門知識を得るばかりでなく、より広く、人間、社会、歴史を深く理解し、創造的な思考方法を身につけることをも目的とします。物理工学科に入学した学生は、高度一般教育として、広い範囲にわたる人文・社会科学系科目、外国語科目などを学び、同時に数学、物理学などの基礎科目を学びます。1回生における専門科目としては、「物理工学総論」が用意されています。ここでは「物理工学」の全体像と個別の学科目の位置づけがなされます。2回生以降では、一般教育科目、基礎科目の学修を進めるとともに、基礎的な専門科目として、固体、流体の力学や物性、熱力学、電磁気学、原子物理学の初歩を学びます。学生は機械システム学、材料科学、エネルギー理工学のエネルギー応用工学と原子核工学、宇宙基礎工学の5つのコース・サブコースに分かれ、将来の専攻分野に応じた教育を受けます。

機械システム学コースでは、材料、熱、流体の力学や物性、その基礎となる量子・統計物理、並びに機械システムの解析と設計・製造・制御について、材料科学コースでは、材料の物性と機能、材料設計、更に材料プロセッシングについて、エネルギー応用工学サブコースでは、種々のエネルギーの変換・利用技術、ミクロな立場からの物質の性質・変換・創製などについて、原子核工学サブコースでは、ミクロな世界の物理学をもとに核エネルギー・量子ビームなどについて、また、宇宙基礎工学コースでは航空宇宙工学に関連する基礎学問分野について、それぞれ系統的な基礎教育を行い、工学のあらゆる分野で活躍できる人材を育成することを目指します。いずれのコース・サブコースにおいても、学部卒業のために必要な特別研究は、上記の大学院を構成する専攻の講座の研究室において行います。

卒業後は、多くの学生が大学院に進学します。上記大学院の修士課程学生の定員は物理工学科の学生定員の約8割です。大学院の各専攻は上記の各コース・サブコースと一対一に対応するのではなく、学生はいずれの専攻にも進学できます。

物理工学科卒業生と上記の大学院専攻修了者には、物理工学のあらゆる関連分野で指導的な研究者・技術者として活躍する道が開かれています。

上のような教育を受けていただくために、物理工学科ではつぎのような入学者を求めています。すなわち、社会生活における工学の役割は加速的に重要となるとともに、人類の将来に対して大きな責任を持ちつつあり、したがって工学技術者、研究者は専門領域における高度な知識と能力を持つだけでなく、幅広い素養ならびに人類社会に対する高い責任感と倫理感を持つことが望まれます。先に述べたように、物理工学科では、物理学関連分野においてこのような能力を持つ技術者、研究者を育成するために、様々な教育プログラムを用意しています。したがって、そのような能力を持つ技術者、研究者になりたいという強い意欲と、提供される教育プログラムを理解し、自分のものとしてゆくのに十分な資質を持っていることを、入学してくる学生諸君に求めます。

## ◎ 電気電子工学科

電気・電子工学は現代のあらゆる産業や社会生活の基盤として欠くことのできない科学技術となっています。例えば、大規模集積回路（超LSI）や光・半導体デバイスを用いた各種の電子・情報・通信システム、ホームエレクトロニクス機器、ロボット・自動車・通信衛星・医療福祉機器等に搭載されている人工知能や制御システムなどはその代表としてあげられます。また、現代社会の主要なエネルギー源である電力の高効率で安定な供給に関する技術とともに、あらゆる電気・電子応用機器の高効率化や人間社会・地球環境との調和のための技術がますます重要になってきています。

電気電子工学科では、（1）半導体や誘電体、磁性体、超伝導体などの電子材料に関する基礎科学や、ナノテクを応用した新しい光・電子デバイスの創製や集積技術、（2）それらを応用した計測・制御や情報・通信・メディア・ネットワークに関するハードウェアとソフトウェアの技術、（3）電気エネルギーの生成と伝送、利用にかかわる個々の要素やシステムに関する理論と実用技術、という3つの幅広い学術分野にわたって、基礎から応用までの総合的な教育を行っています。実際には、工学研究科の電気工学専攻・電子工学専攻、情報学研究科の通信情報システム専攻ほかの3専攻、エネルギー科学研究科のいくつかの専攻、ならびに関連する研究所やセンターなどに所属する教員が、相互に協力しながらそれぞれの専門に応じて教育を担当しています。

科学技術としての電気電子工学はきわめて広範にかつ学際的に発展し続けており、研究者や技術者としては広い領域にわたる総合的な知識や理解とともに、高度な専門性や独創性も求められています。そこで、電気電子工学科では、まず基礎的な共通科目を学習した後、学生個人がその志望に応じた多様な選択が行えるようにカリキュラムが作られています。これによって、電気電子工学に関連する科学技術分野を総合的に理解しうる基礎学力を養うとともに、興味のあるテーマについて深く学習することを可能とし、広い視野と創造的な専門能力を兼ね備えた人材を生み出すことを意図しています。

具体的には、1、2回生の時に、数学、物理学などの全学共通の基礎科目のほかに、電気電子回路、電磁気学、情報通信や計算機工学の基礎、プログラミング技術、物性物理・電子材料・デバイスの基礎などを学習し、また初歩的な電気電子工学実験を行って基礎学力を養います。3回生ではより進んだ電気電子工学実験を行うとともに、各自の志望に応じた科目を自由に選択学習します。4回生では選択科目に加えて特別研究を行い、専門的・総合的な能力を高めます。さらに、全学年を通して外国語や人文・社会科学等の教養科目を履修し、知識と思考の幅を広げます。

本学科では、自然現象や科学技術、その人間生活との関わりなどに対して広い関心と旺盛な探究心をもつとともに、電気電子工学関連の学術分野へ強い興味を有し、専門教育を受けるのに十分な基礎学力と論理的思考力を備えた創造性豊かな入学者を求めています。

卒業後は大多数の学生が大学院に進学しますが、工学研究科、情報学研究科、エネルギー科学研究科のいずれにも進学できます。また、電気電子工学科の卒業生と大学院の修了者に対する社会のニーズはきわめて大きく、エネルギー・情報化社会を支えるあらゆる分野で、指導的な研究者・技術者として活躍することが期待されています。



## ◎ 情報学科

現在の高度情報化社会を支える様々なシステムは、大規模かつ複雑化し、工学の各専門分野が融合した形態をとることが普通になっています。このような情勢に対処するために、現代科学技術の基盤をなしている“情報”とは何かを究明し、その役割を明らかにする必要があります。また、対象となるシステム全体を横断的にとらえ、問題解決のための手法を探究する“数理的思考”が不可欠なものとなっています。

そこで、情報学科では、グローバル化や科学技術の進展など社会の激しい変化に対応し得る幅広い知識をもった人材の育成を目指した総合的な教育と研究を行っています。特に、情報学の理論と実践とを有機的に結合し、数学と物理学を基礎として未知の問題のもつ数理的構造を解明し実際問題に応用できる能力、先端的な技術を用いた高度情報システムを設計・活用できる能力を養うことを目標に据えています。

そのため、本学科では、工学部の基礎学理の教育を十分に理解できる能力を備えることはもちろん、既成概念にとらわれず、自分自身の目でしっかり物事を確かめ理解する力を備え、新しい世界を切り拓く意欲に満ちた創造性に富む人を求めています。

そして、そのようなバイタリティーをもつ人材が、情報学に関する幅広く深い教養と総合的な判断力を身に付けることができるように、基礎から応用に至るカリキュラム体系を編成し、大学院情報学研究科（知能情報学専攻、社会情報学専攻、複雑系科学専攻、数理工学専攻、システム科学専攻、通信情報システム専攻）の教員が教育・研究を担当しています。なお、計算機科学および数理工学はその性格上、すべての学問領域とつながりを持つものですから、諸分野についての広い視野の育成を重視した講義・実験・演習・セミナーなどを提供しています。また、本学科の学生は、原則として1回生修了時点で、計算機科学コース（定員50名）と数理工学コース（定員40名）に分かれ、専門教育を受けることになります。

数理工学コースでは、数理科学の根幹としての数学と物理学、システム工学の基本的分野である制御理論、数理的手法の応用をはかるオペレーションズリサーチなどを中心に、システム理論、最適化理論、離散数学などの諸分野の話題も加えて修得します。もちろん、これらの成果を具体的に適用するために必要となる計算機・情報・通信の授業科目も含まれています。数理工学は、工学における基礎と柔軟な発想を重視しつつ、総合的工学としての役割を担う学問ですから、その目的を達成するために必要な学力を涵養することを目指しています。

計算機科学コースでは、情報とは何かを究明することを目標に、その処理・伝達・蓄積に関し教育・研究を行います。すなわち、情報と通信の理論、計算の理論、論理回路設計、計算アルゴリズムの設計と解析、コンピュータハードウェア・ソフトウェアの構成原理と各種技法、コンピュータによる言語・音声・画像の情報処理、人工知能・知識工学、コンピュータネットワーク、情報システムとその構築法、メディア処理と各種応用など広範囲にわたる先端技術について学修させ、情報化社会の中核となる技術者・研究者を養成します。

## ◎ 工業化学科

社会の発展に伴い、産業の基盤や先端科学を支える多種多様な新しい物質や材料の開発への要請が強くなっています。また、人類が将来にわたって豊かな生活を送るためには、地球環境、資源、エネルギーなどの問題を解決しなければなりません。これには、単に物質を作る技術から、それを構成する分子の生い立ちや性質を調べ、それに基づいて物質の機能を探ることが必要です。このように、新しい化学への期待が極めて大きくなっています。また、人類がおかれている環境を考慮したうえで、いかに有用な性質・機能を持った物質や材料を生産するかという事も重要な課題です。

これらは、互いに有機的に関連しており、狭い専門分野の知識、技術のみでは対処できません。このような課題を解決できる人材を養成するために、学部では化学の基礎理論のみならず物理学、生物学などとの境界領域にある化学及びそれと関連する工学の基礎知識を広い範囲で修得させることを目指しています。教育・研究は大学院（材料化学専攻、物質エネルギー化学専攻、分子工学専攻、高分子化学専攻、合成・生物化学専攻、化学工学専攻）の教員が担当しています。また、学内の化学研究所、原子炉実験所、再生医科学研究所、エネルギー科学研究科、地球環境学堂、国際融合創造センターなどとも連携しています。

工業化学科では、上記の目的を達成するため、十分な基礎学力を有し、物事を論理的に考察でき、さらに自ら問題を考えて解決する能力をもつ、意欲に満ちた学生を求めています。入学した学生には、化学に関連した広い

分野にわたる基礎学力の養成を重視した授業科目を用意しており、工業化学科の全教員が協力して教育に当たっています。第1学年では化学・物理学・数学等に関する基礎的な能力を養うとともに、語学や人文・社会系の科目を履修し京都大学の学生として必要な基礎的素養を身につけます。なお基礎物理化学と基礎有機化学については工業化学科の教員が教育に当たります。第2学年から工業化学科としての専門課程が始まり、物理化学・有機化学・無機化学・化学プロセス工学等について、工業化学科の教員による基礎的かつ高レベルの教育を受けます。

1年半の共通のカリキュラムに続いて、第2年次の後期からおよそ2:3:1の定員比率で創成化学コース、工業基礎化学コース、化学プロセス工学コースに分かれ、将来の専門分野に応じた教育を受けます。創成化学コースでは、物質の合成、構造、機能、性質を支配する基礎原理を学び、化学的な探求手法を修得します。これらを通して将来、人間社会に貢献する新しい機能や性質をもつ材料創成のための化学を専門分野にすることを目指します。工業基礎化学コースでは物質の反応や化学的性質を支配する基礎原理と実験手法を習得することによって、将来、分子レベルでの反応・物性の理解、新規化合物の合成、エネルギー関連化学、生物化学など多様な化学の専門分野に展開することを目指します。化学プロセス工学コースでは、化学の基礎科目に加えて、物理、数学、コンピューターサイエンスなどの工学基礎を修得し、将来は、分子レベルから、化学プロセス、さらには地球環境にいたるまでのあらゆるシステムにおけるエネルギーと物質の変換・移動過程を定量的に取り扱う工学の分野を専門とすることを目指しています。なお、教育効果を高めるため、すべてのコースにわたって共通のカリキュラムも準備されていて、幅広い専門知識を修得できるようになっています。第4年次で学生は研究室に所属して専門分野の卒業研究を行い、研究者・技術者としての高度な知識を修得するとともに基礎的訓練を受けます。

卒業後は、大多数が大学院へ進学して、さらに専門的能力を高めていきます。大学院の専攻は上記の学部コースと直結するものではなく、いずれの専攻も受験することができるようになっています。工業化学科の卒業生と大学院の修了者は、化学工業はもとより、電気、電子、情報、食品、医薬、機械など、ほとんどあらゆる分野で必要とされており、社会の期待には極めて大きいものがあります。

### 社会基盤工学専攻

■系\*で入学させているために、目的のはっきりしない学生がいる。くさび形教育と系としての入学に少しギャップがある。全体としては学生が確保できている。(50代)

\*系：地球工学科・建築学科・物理工学科・電気電子工学科・情報学科・工業化学科の5学科を地球系・建築系・物理系・電気系・情報系・化学系と簡略化して呼び習わしているため、「系で入学」と記述されている。

■少子化時代を迎えても、一定レベルを保つべきである。(50代)

■日本全体の学生レベルは低下しており、これを考慮すれば、京都大学の学生の入学レベルはおおむね良好と思われる。まだ、過去の遺産はあるように思われる。未来永劫は不安だが・・・。(50代)

■ここ数年、レベルの低い学生が混じっている。彼らの負の影響は大きい。定員を削ってでも優秀な（京大に相応しい）学生のみを入学させるべきである。(不詳)

### 都市社会工学専攻

■「アドミッションポリシー」というカタカナでない日本語を用いてほしい。大学が率先して曖昧な表現を用いることは実に嘆かわしい。(50代)

■開かれた競争率が必要です。大学院の競争率の低下が問題です。(50代)

■大学院大学なので他大学からの応募者を増やしたい。(60代)

■やはり学力試験、論文試験しかないように思う。(60代)

### 都市環境工学専攻

■学外からの受験生をもっと積極的に受け入れるべきである。特に大学院については、現在の



教務事務組織だけでなく、もっとアドミッションオフィスのなもの（入学者の受け入れを目的とする組織）を組織すべきと考えます。（40代）

■現代のように専門が分化する中では、工学部・工学研究科のアドミッションポリシーだけでなく、専攻やグループ単位でのアドミッションポリシーを検討する必要があるのではないかと。（50代）

■金をかけ、受験技術のすぐれた学生のみが入学できる現在の日本の教育システムそのものに問題がある。京大でできる対策としては、入試のみに専念できるプロ集団をつくり、主体性ある高い能力を持った学生かどうかを見抜く入試方法、入試体制にする。（50代）

### **建築学専攻**

■本学は、従前から考える力を持った学生を入学させることに力点をおいてきたし、今後同様であるべきだと思う。そのためには、それに相応しい入学試験問題を作るために一層努力をすべきである。（50代）

■表向きはもっともであるが、採用実態は貧しいものである。（50代）

■大学独自の入試制度の重要性を感じる。（60代）

### **機械理工学専攻**

■現在の高校までの教育体制で創造性を発揮する教育を期待するのは非常に困難である。入学試験をいくら変えてもほぼ不可能である。相対的に見て我々の理念に近い学生を確保しているとは思いますが、絶対的に見ると、多感な高校生時代に入学試験のみを目標とするひずんだ社会構造を生んでいる。定員の倍入学させて、落第生を出し、これがまた社会で普通に受け入れられる体制を作ることが、学問に対して明確な意思を持つ学生を確保できる一つの方法と考えられる。（40代）

■抽象的すぎて、学生の例にどこまで理解されているか疑問。（40代）

■工学部の「基本理念」は素晴らしい。しかし、教員がそれを実行しようとしているかどうかは疑問である。（50代）

■現在の高校教育の中で明確な目的意識や適性を持つ学生が入学してくれるかは疑問である。センター入試使用の廃止などでじっくり物事を考える力を有する学生を確保するなど入試の工夫、改革も必要であろう。後は、入学後に学生をこちらの教育目的および目標をクリアできるよう教育する以外に方法はない。（50代）

■現在、学生の質は急速に低下している。京大は普通の学生が来る所と言い切っている学生も急増している。質を維持すべきで、悪貨は良貨を駆逐すると言われるように質の悪い学生が多いと質の良い学生も彼らに影響されてしまう。入学定員を削減すべきである。（60代）

### **マイクロエンジニアリング専攻**

■前任校に比べると、入学試験で評価された数学運用能力などは、平均的に優れているが、勉学へのモチベーションや自主性が優れているとは言い難い。（40代）

### **航空宇宙工学専攻**

■トータルとしてバランスのよい学生を養成するため、5教科に偏りのない知識を備えた上で

理数系に特に興味を持つ学生を確保すること。(50代)

■最近の学生の国語力(文章力)の低下を感じています。入試(2次)に国語がないことが影響していると思われます。2次試験に国語を入れることを検討していただきたい。(50代)

■特に変わった意見はないが、以下に、3年前に、下名が専攻長のときに作成した、専攻のアドミッションポリシーの大枠を紹介しておく。

十分な基礎学力とそれらを自在に使いこなす豊かな思考力と応用力・創造力をベースに、先端工学の分野の進歩発展に積極的に貢献してその発展をリードし、人類社会の進歩発展に大きく貢献していくことのできる前途有為な人材の育成を教育目標としています。すなわち、自らの進むべき方向について明確な展望と未知の分野に果敢に挑むフロンティア・スピリットを有し、工学基礎全般にわたる広く深い専門知識に裏打ちされた強い意志と実行力をベースに、社会の多様な局面に柔軟に対応して創造性とリーダーシップを発揮することのできる主体性あふれる人材の輩出をめざしています。そこで、これまで以上に先端的・学際的な基礎研究を国際的な枠組みの中で推し進めるとともに、社会人、留学生、他研究科・専攻、他学科、他大学学生など多様な学生の方々を受け入れます。(50代)

■アドミッションポリシーを受験生に知らせる最も重要な手段は、大学入試問題であると思います。そのため、今後とも質の高い問題の作成、採点に努力していくことが大切と考えます。(60代)

### 原子核工学専攻

■今は、ほぼ100%卒業させているが、ある程度の割合のドロップアウトを容認して、学部の入学者数を増やすことを考えても良いのではないだろうか。ただし、学習内容を今より難しくしてふるい落とす必要はない。たくさん受け入れて、きちんと学問を習得した結果、たくさん卒業してもそれはそれでよい。(50代)

### 電気工学専攻

■入学試験を何とか通過しても、精神的な弱さを持つ学生が増える可能性も感じられ、将来は面接を必要とするかもしれない。(60代)

■確固たる受験産業が存在する状況では、ポリシーなんのと言ってみても仕方がない。AO入試を考えたり、大学院で外部から優れた学生を集める方策(別途専攻)を工夫したり、という具体的手段が重要である。アドミッションポリシーは表札程度のものと理解している。(60代)

### 電子工学専攻

■受験勉強に秀でた学生は多いが創造性の面であまり優れているとは必ずしも言えない。数学コンクールなどで実績のある学生を推薦制で入学させるなどしても良いと思う。よい学生を取る施策ほど、そのためのコストが高くなるとされます。研究と教育が分業化していない現在、そこを追及しすぎると労力的に破綻するのではないかと心配されます。それだけでなくこれまでの入試は大変だったように思われます。(50代)

■従来実施していた多様選抜は各教員が自分の学科を志望する学生と直接的に対峙できるよい機会であった。後期日程廃止後もこのようなメリットを生かせるシステムを模索すべきだと思う。(50代)

■あまりアドミッションポリシーに囚われるべきではないと思っています。京都大学の卒業生は、アドミッションポリシーに囚われない分野においても活躍してもらいたいものです。(50代)

■アドミッションポリシーそのものが工学部のホームページに掲載されていない。理念から推測せよということでしょうか。募集要項には、学科ごとのそれらしき記述はされているが、工学部として公表すべきだと思います。残念ながら、最近では目的意識の明確な入学者の割合が減ってきているように感じる。(不詳)

### 材料化学専攻

■とくになし。これは結果をもとに次第に改変されてゆくものです(歴史とともに)。固定的に考えなくても良い。現時点では充分受け入れられるものであると思う。(50代)

### 物質エネルギー化学専攻

■高専編入など、異なるバックグラウンドをもつ集団からの入学を増やすのがよい。(50代)

■京都大学が魅力的であることを高校生が理解できればよい学生が集まってくる。正確な広報活動は重要。(60代)

### 分子工学専攻

■理念目的に同意する。学生の主体性を伸ばすには、「何かすればよい」というような即応的な対応策はない。(50代)

■よい意味でのエリート教育が出来るように入学定員を減らし、入学試験を工夫すべきである。このままでは、平均的な人物ばかりが出来てしまう。(50代)

■本学部で出題範囲を明記した募集要項を発表し、必ずしも高校教育の教育内容にこだわらなくてもよいかと思う。(例：初等的な微分方程式を出題すると発表する)。(不詳)

### 高分子化学専攻

■総体的な学力をみるには現在の前期日程入試でよい。これに加えて、たとえば(スポーツや芸能ではない学問の)一分野の特異才能を発掘するための一科目高度内容特別入学試験を行う、などの試みがあっても良いのではないか。(50代)

■昨今の受験産業の様子を見るに大学のみがアドミッションポリシーを言っても意味がないのではないか？(50代)

■特に学部において大学科制\*をとっていることの害が大きい。マスが大きいがゆえに目的意識が明確でなく、進路を判断できない学生(自主的主体的でない学生)が多く入学する結果を招いている。小学科に戻し入学時に自己責任で学生が判断するシステムにするべきである。(50代)

\*大学科制：地球工学科・建築学科・物理工学科・電気電子工学科・情報学科・工業化学科の5学科。

■入学定員をむやみに増やさないようにする。(50代)

### 合成・生物化学専攻

■カタカナ(官僚言葉)でなく、わかりやすい日本語で表記できないか？(30代)



■学内といえども、自覚の低い学生が増えてきた。学外の学生を受け入れるに当り、特に博士課程では見極めがむづかしい。入学試験をこれ以上改善できないので、退学勧告制度の充実。(50代)

### **化学工学専攻**

■たしかに優秀な学生は存在するが、総体としての質の低下は著しい。トレーニングによって合格できるような入試は改善すべきであり、今後は特に、学習指導要領の内容にこだわらない入試問題を作成すべきである (cf. 2006 年問題)。(40代)

■特にないが、あまり多くを期待できないと思う。(60代)

### **エネルギー科学研究科**

■上記質問の意味がわからない。「工学部・工学研究科が掲げる教育目的及び目標をクリアするのに十分な能力を持ち、明確な目的意識や適正を持った学生」というのは、本学での教育によって育てられるものである。このような学生に育つのに必要な基礎学力を持った学生を確保しているかどうかという質問にすべき。(40代)

■アドミッションポリシーは日本語でどう解釈するのかわからない。(50代)

### **情報学研究科**

■しっかりした志や目的意識を持ち、物事を深く問い詰めてゆくような思考力と広い視野を有するような学生があまりいないように思われます。人間性豊かな人格が形成されるような土壌が失われてきているのではないのでしょうか。(50代)

■情報学の学生について言えば、入学以前にどれほどの能力を身に付けているかで入学後の成績が大いに左右される。一方、現状では情報関係の能力のばらつきが大きい。(50代)

■来年度より、理科の選択が工学部の一部でなされたように、工学部全体で一つの方式の入試は不可能である。学科の特殊性を入れるべきと考える。来年から高校で教科情報を履修した学生が大学に入ってくる。センター試験では当面情報の試験はないので、情報学科では情報に関する入試をどうするか検討する必要がある。情報学科では、何らかの形で学部入試に情報を取り入れたいと考えている。(50代)

■国語力の重視が必要です。現在、国語の強い学生は東大へ、弱い学生は京大へ受験させる傾向があります。(50代)

### **地球環境学堂**

■学生の個人能力に差が大きく、明確な目的意識を持った学生や学部教育の過程で意識を向上させうる者もいる反面、極めて不十分なまま卒業していく学生及び単位取得すらできない学生も見られている。(50代)

■多様な分野の学生を同じ学部で入学させているので、本人の適正と好みをよく理解させる教育プログラムが必要である。(50代)

■現在の受験制度で能力の高い学生を受け入れているが、将来このままで推移できる保証はない。教育の特徴を打ち出す。特徴とは、国際競争力を持つ人材育成。(60代)

## 学術情報メディアセンター

■ミスをしていない学生を入学させるセンター試験は不安である。積極的な学生を取るために一発試験、もしくは多くの学生を入学させてから選択するなど工夫したらよいと思う。(40代)

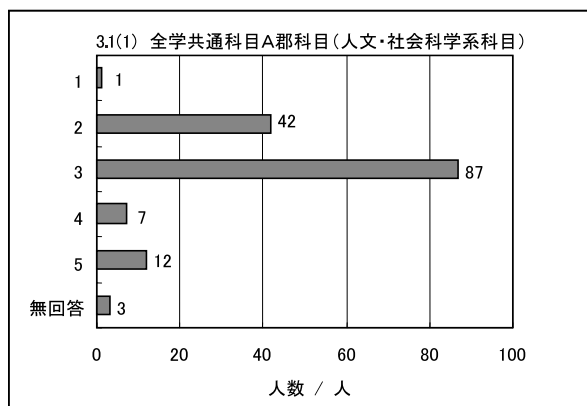
### 3. 全学共通科目\*について

\*全学共通科目：京都大学の教養教育は主として「全学共通科目」によって担われている。学部を超えて全学部の学生を対象として開講される授業科目のこと。

#### 3.1 全学共通科目A群科目（人文・社会科学系科目）

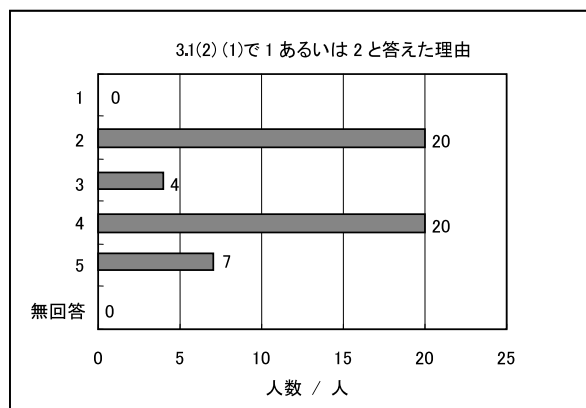
(1) 現在のA群科目は教養教育に役立っているとお考えですか。

- 1 全く役に立っていない。
- 2 あまり役立っていない。
- 3 役立っている。
- 4 非常に役立っている。
- 5 その他



(2) 設問（1）で、1あるいは2と答えられた先生にお尋ね致します。現在のA群科目が教養教育に役立ってはいないと判断された理由はどのようなことによるでしょうか。

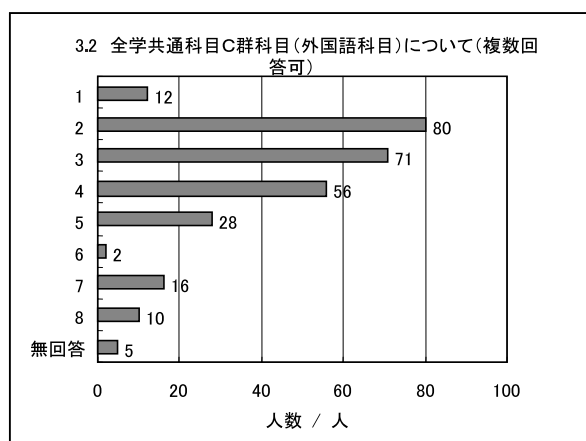
- 1 工学分野の技術者の育成に教養教育は必要ない。
- 2 学生の履修状況から判断して、現状では役に立っていない。
- 3 教養教育にとって、大学の講義より相応しい方法がある。
- 4 本学の教養教育システムが有効に機能していない。
- 5 その他



### 3.2 全学共通科目C群科目（外国語科目）について

全学共通科目での英語教育のあり方についてどのようにしたらよいとお考えでしょうか。

- 1 今のままでよい。
- 2 会話やヒヤリングなどの実用英語を充実する。
- 3 TOEFL や TOEIC などの検定試験を単位に認める。
- 4 テキストに科学・技術関連の教材を利用する。
- 5 LL や Video その他の情報機器を活用する。
- 6 必修単位数を現在から増やす。
- 7 従来型の教育をより充実する方策がよい。
- 8 その他の英語教育についての意見。



#### ・英語教育についての意見

会話などの実用英語を大学でやる必要はない、読み書きに力を入れるべきであるという意見と、会話やヒヤリングに力を入れるべきであるという意見との相反する2つに大きく分かれる結果となった。第二外国語についても、必要という意見と不要という意見に分かれた。

#### 社会基盤工学専攻

■ライティングの授業も重要。(50代)

■英語は専門での道具であり、必須である。様々の経験をさせてその重要性を知らしめる。(50代)

### 都市社会工学専攻

- 実践的な機会をとにかく拡充する必要がある。(50代)
- 2、3、4をすでに実施している。(60代)
- 短期留学を促進する。(60代)

### 都市環境工学専攻

- 卒業認定単位数を少し2～4単位増やして欲しい。(40代)

### 機械理工学専攻

- 高専からの編入者については、英語の基礎教育を行うべきと考える。(50代)
- 現在の英語教育の実態を知らないので、答えようがない。(50代)
- 英語は working language となっているのに対し、京大の学生の英語力は極めて低い。授業の半分くらいは、英語のテキストで行うことが望まれる。(60代)

### マイクロエンジニアリング専攻

- 現在の教育法がわかっていないので意見を言えません。しかし、総人のLL室を見る限り環境は素晴らしいと思う。(40代)

### 航空宇宙工学専攻

- 実用英語に関し、分量のある文章を短時間に読みこなして、大意をつかむ、というような速読のトレーニングも不可欠と考える。(50代)
  - 従来型の英語教育を教養科目として位置づけることを前提に、第2案\*を実施する。(60代)
- \*会話やヒヤリングなどの実用英語を充実する。

### 原子核工学専攻

- 会話などの実用英語を大学でやる必要はない。しっかりと文章の読み書きをさせて、論理性を養うべきである。(50代)

### 材料工学専攻

- eラーニング等を充実させては？(40代)
- 従来の読解力に加えて、近年は契約書や国際標準規格書の草案など、工学部の出身者には強い英語力が要求されていることを全学共通教員は認識しているのであるだろうか？(40代)
- 第二外国語は不必要であり実用英語を徹底させることが大事であるという意見を他大学の工学部で聞いたことがあるが、第二外国語を学ぶことは他の文化を学ぶことであり、若い間に英語以外の言葉に接することは長い目で見たとき非常に意義がある。(60代)

### 電気工学専攻

- 現在、中高校では会話型教育が中心となっており、言語としての論理性を軽視する傾向があります。時代に合わせて、学生にかけた能力を補うという考え方も必要と思います。(40代)
- 英語の勉学の密度は高くない。学生の英語の語彙は一般に大変貧弱である。一般の学生では



Times がなかなか読めないのが現状であろう。Paperback が一晩で読めるほどの読解力があれば望ましい。作文力も実用レベルからは遠い。Native speaker の教員と日本人教員とでペアを組んだ授業がよいかもしれない。(60 代)

■教員の質に見合った内容を考えざるを得ないのがつらいところである。科学・技術関連の教材を使っても特に効果はなかろう。きっちりとした Reading、それも文学ではない、例えば新聞などを使うこと。および Writing の練習が重要と思う。ヒヤリングの練習に効果を求めるには時間が少なすぎるし、スピーキングは Writing に比べてはるかに容易である。この 2 つを重視する実用英語というのは、京大で重視すべきレベルではないと思う。上記ができないのなら、「忘れない程度」の単位数でよい。(60 代)

### 電子工学専攻

■よい英文を教えること（つまりよい英語文章を書けるようになること）。(50 代)

■C 群\*での語学教育を過度に実用的なものにする必要はなく、教養としての語学でよいと考える。素材は文芸的なものに限らず、科学的なものを含めてもよい。(50 代)

\*C 郡科目（外国語科目）：ドイツ語、フランス語、中国語、ロシア語、イタリア語、スペイン語、朝鮮語、アラビア語、日本語（留学生用）。それぞれ 1 回生用のクラスと 2 回生（以上）のクラスに区分されており、1 回生用のクラスによっては学部ごとにクラスが編成されている。

### 材料化学専攻

■英語ができない、きらいと公言する学生が多すぎます。書けない学生が多すぎます。(50 代)

### 物質エネルギー化学専攻

■TOEIC、TOEFL には賛成できない\*。「豊かな教養と個性」とは、かけ離れている。(50 代)

\*TOEIC・TOEFL：一部の大学院入試に取り入れていることに対して。

■英語教育より英文学教育が重要であるとする外国語科目担当者を英語教育の担当から外すようにすること。(50 代)

### 分子工学専攻

■泥臭くてもいいから「きっちり」した読み書きができる人が重要だ。リスニング、スピーキングは必要があればできるようになる。(40 代)

■TOEFL、TOEIC の単位を認める方向性により京大の特徴を出す方向性を模索する方向性を持つべきと考える。(50 代)

■語学教育を外注する（NOVA などに）ことへの議論が出てこよう。(50 代)

### 高分子化学専攻

■英字新聞の速読、手紙文の作文能力等、到達目標を明確にし、達成度を確認する。(50 代)

## 化学工学専攻

■英語は学生が将来グローバルに活躍していくためのツール。これを意識した教育が必要で、単に語学だけでなく、文化や人間性、習慣なども理解できる教育も必要と思われる。(40代)

■大学院入試の英語の試験をすべて TOEFL にすればよい。(40代)

■せっかく来ている留学生との接触の機会を増やす工夫をする。たとえば、寮を共同にする。(60代)

## エネルギー科学研究科

■英語教育もさることながら、日本語の能力を向上させる必要がある。日本語教育の講義をせよとは言わないが、レポートのチェック等を通じて、講義や演習の中で指導すべきと考える。(40代)

■若い人にとって英文学を経験することも重要であろう。実用英語を勉強したければ、外へ習いにいけばよい。その成果を単位として認めればよい。(50代)

## 情報学研究科

■文献を読むための英語力は大学受験の準備で十分である。大学での英語教育の課題は、英語を専門とする学生を除いては、コミュニケーションとしての英語力を高めることだと思う。そのためには、日本語も含めて人との会話ができるような教育が望まれると考える。(50代)

■言語は耳から学ばないと身につかないと思います。今の語学教育は目に頼りすぎているのではないでしょうか。(50代)

■実用英語の教育と米英文学の講義を分けるべきである。後者は A 群科目へ移す。第二外国語も必要ないのではないか。(50代)

■英語での教育を始めるべきでしょう。(50代)

## 地球環境学堂

■インターン研修の中に、英語を利用する機会を増やす。英語教育の目的は、国際競争力を持つ人材育成である。(60代)

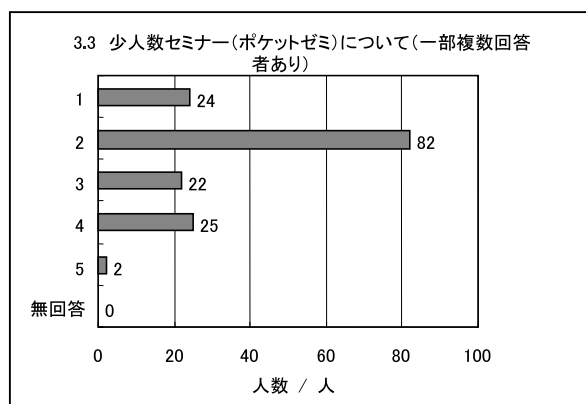
## 学術情報メディアセンター

■CALL \*など自学自習を進める。(40代)

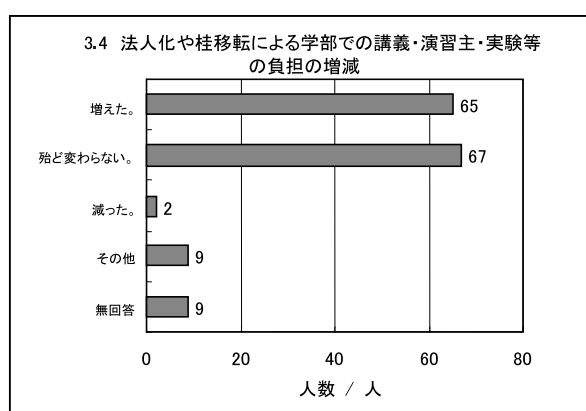
\* CD-ROM の英語自習システム。

3.3 少人数セミナー（ポケットゼミ）は、多くの教員、学生に好意的に捉えられているようですが、先生はこのような形式の授業に対してどのようにお考えですか。

- 1 大変結構であり、もっと多く開講するのがよい。
- 2 良い試みではあるが講義負担なども考慮して適切な数の講義を開講するのがよい。
- 3 費やす時間は多いが、得られる成果が今ひとつである。
- 4 担当していないのでわからない。
- 5 その他



### 3.4 法人化や桂移転により、学部での講義・演習・実験等の負担が増えたとお感じですか。



#### ・法人化や桂移転についてご意見あればお書きください。

桂へ移転した系（アンケート時点では、化学系・電気系）は桂移転のメリットを強調する傾向があり、未移転の学科はデメリットを強調する傾向があるようである。4回生以上が桂へ通学するため、他学部との交流や上下の構成員の交流の希薄化（3回生以下と4回生以上大学院生や教員との断絶）に危機感を持つ意見が多い。法人化に対してもメリットとデメリット両面の指摘がある。

### 社会基盤工学専攻

■やむを得ぬこととはいえ、研究・教育のための時間が減じることにつながっている。（50代）

■学部教育を吉田で行うことによる、色々な損失（特に教室の移動時間のロス）は、非常に大きいと考えています。桂において、6年間（修士を含め）一貫教育も考えたらよいと思います。（50代）

■地球系は来年移転であり、学部の講義等がどうなるか立案している。しかし、学部の学生実験がどうなるか非常に不安である。特に、水理実験は大型装置が多いので、5号館地下に集約する計画があるが、その移転費用（1号館から5号館への）は不明で、研究科の桂キャンパスへの移転と連動して解決すべき緊急の課題と考えている。（50代）

■学生の京大への帰属度レベルが下がり、identityが希薄になる。学部学生とも桂へ移し、「工学」としての一体感を出すべきである。分離は不健全である。（50代）

■建物も新しく、ゆったりとしたキャンパスで吉田に比べ研究環境（建物という点で）はよい。しかし、大型施設の移転の問題や、他学科との研究交流という点では少し不便になる。（60代）

### 都市社会工学専攻

■法人化は一様にして言えば、教員の奴隷化と研究費の搾取だ。大学（事務）はよくなるが、研究は萎縮する。

- ・桂移転は新しく素晴らしい施設の実現だ。しかし、関係する労力は増大している。
- ・教員は超多忙となり、魅力ある職場でなくなりつつある。(60代)

■学部教育と大学院教育が分離されているのは問題。(60代)

### 都市環境工学専攻

■事務組織の効率的運用を進めるべき。(40代)

■法人化したことのメリットに、制度や会計面での適正な自由度の向上、事務の迅速化とスリム化・効率化があったと存じます。現在は全く逆行しているようで、事務の方も教員も過度な労働に苦しんでいるのではないのでしょうか。(50代)

■法人化、桂移転は結果的に、教育に使用しうる経費の大幅な削減をもたらしている。特に学生実験等、以前は研究用に購入した機器の使用により対応していたが、これらの機器の桂移転により、学部学生実験の内容の低下が中長期的に懸念される。何らかの制度的対応が求められる。(50代)

■学部生が教員、大学院生と接触する機会が減少し、教育上様々な問題が生まれている。学部生と教員、大学院生とのコミュニケーションの機会の増大への支援が必要であるとともに、バスの増便など交通の改善が望まれる。(50代)

### 建築学専攻

■学部教育についても、出来れば桂に移すべき。例えば、「特別研究」を3回生から始めるのがよい。現在は、4回生で研究室配属されても、実質的には大学院入試があり、十分な教育がしにくく、東大等への流出につながりやすい。(40代)

■桂移転：吉田キャンパスとの移動の時間に負担を感じる。学部教育、とくに学生のケアについて十分できてない。(50代)

■教員・学生の負担のみが増え、サービスが低下した。バブリーな建物のみ立派に見えるが内容は寂しいものである。(50代)

■移動時間が増えている。桂に学部専門教育をもってくるのがよい。(60代)

### 機械理工学専攻

■予算的に工学研究科が多大な負担を強いられているのは、間接的に教育面でマイナス面が多い。予算減>プロジェクト増>教育の低下という方向がどうしても出てしまう。(40代)

■移転を早く終わらせること。(50代)

■法人化に伴って事務部をもっと強化する必要がある。企業から優秀な人材を課長や係長に引き抜くなどの積極的な方策が必要。桂移転は、移転そのものに時間がかかりすぎているのが問題である。(50代)

■「日本を支える人々をつくる」という大学の存在意味にあうように法人が運営されているかに疑問がある。(60代)



### マイクロエンジニアリング専攻

■法人化されて、予算の使途に対する裁量権が増えたことは歓迎すべきことである。桂移転は、工学部と工学研究科の教育研究環境の分断を引き起こし、特に教育の質の低下を防ぐために必要とするマンパワーを費用換算すると膨大な額になると考えられ、何らかの対策が必要である。(40代)

■まだ移転していないが、これからの負担は相当ある。現在カリキュラム再編中である。(40代)

■まだ桂に移転していないが、後になるほど付帯設備や移転費用が厳しくなっているように聞いている。吉田にいたときよりも研究環境が低下するようなことにならないようお願いしたい。(50代)

### 航空宇宙工学専攻

■大学院教育と学部教育が別のキャンパスになるのは、いろいろな点で不便である。(50代)

■法人化によって、安全衛生管理などの新しい業務も増え、また、(運営費が減って)外部資金獲得のための提案をする回数も増えてきている。今後一層の事務方のサポートを期待する。現在所属の専攻はまだ桂に移転していないが、共通の分析機器使用や会議のため桂に出向くことも増えている。下名は、実験室が宇治、居室が吉田、という状況のため、吉田一字治、吉田一桂、宇治一桂、と3ヶ所を動くこともあり、移動時間だけで一週間で1日分の勤務時間を超す週もある。物理系も早く桂に移転すれば、少しは移動時間が少なくなるかとも考える。(50代)

### 原子核工学専攻

■法人化・桂移転：大学はどのような時代・状況の中でも「学問の自由が保障される」環境の中で「人材（学生）育成」を行う場であり、企業論理とは所詮なじまない側面を持つ。法人化に伴って工学研究科では産学連携が重視されているが、企業論理に取り込まれず、あくまで大学が主体の形態を保つよう努力すべきであろう。

学生は吉田、教師は桂という状況は様々な点で好ましいことではない。日常的な触れ合いのなかでこそ「教育・研究の理念・目的」が達成されるのではなかろうか。(50代)

■将来、桂移転に伴って学部教育に伴う負担が増大するとともに、学生との接触機会が減少すると予測しており、対応が必要。(50代)

■法人化とキャンパスの分散化により、学部教育の重要さと実効性が求められている。全学共通教育と専門教育の全体をみて総合的に考えることが必要であろう。(60代)

### 材料工学専攻

■学部と研究科が一体で移転すべきである。(40代)

■法人化や桂移転によって基本的には何の変化もなかったことが問題である。本来は、このような変化をてこにして大きな改革ができたはずである。(40代)

### 電気工学専攻

■学部生との接点をどの様に確保するかが難しい。(40代)

■外部資金のとれる研究（金のかかる研究）や短期的に成果の出る研究のみが評価される傾向に拍車がかかっているという危惧を覚えます。（40代）

■桂に移転して通勤時間が増えるなどのマイナス面はあるものの、全体スペースが拡大したこと、建物が新しくなったこと、将来発展への期待が増大するなどの効果はあったと考えられる。法人化で運営交付金が年々減少することは基礎研究にとって大変なマイナスのように感じられる。（60代）

■桂移転は、大学が決めたことであり、工学研究科はある意味で犠牲になったというのがその経緯である。この事実を風化させないように、あらゆるレベルで常に訴えておくことが重要である。と同時に、その負荷を少しでもよい方向へ転化させる工夫も必要である。法人化については、上記の大学と工学研究科の関係が、政府と大学との関係に平行移動したようなものである。（60代）

## 電子工学専攻

■時間がなくなって、これまでの教育研究の水準を維持するのが困難かもしれない。少しずつ、教育と研究の分業が必要になってくると思う。（50代）

■教育と研究は、車の両輪のように、大学では何れも必要不可欠である。しかし、一人の研究者が両方やることには負担が大きくなってきており、「よい研究者であり、よい教育者である」ことが難しくなっている。法人化によって、運営については各大学に任されているので、京都大学としては、研究重視型教員と教育重視型教員の二つの型の教員養成を行うスタンスを明らかにしては如何でしょうか？すなわち、研究重視型では研究者に教育する負担を軽くし、教育重視型では自由な時間（例えば、学生と同じように夏休み、春休み）を認め、研究は敢えてしなくてよいことにする。（例えば、廃止前の教養部のような組織を設置し、そこでは教育重視型の教員を養成する）。すなわち、外部から見て研究も教育もすばらしい成果を挙げている大学であることが重要で、研究もでき教育も両方できる教員を養成する必要はないと考えている。研究者あるいは教育者として世界一流の教員を大学全体で養成することが、京都大学で学ぶ学生にとって利することと考えている。（50代）

■今後予算面での対応が厳しくなることが予想されるが、その過程で教育や基礎研究が犠牲にされないよう十分な配慮が必要である。（50代）

■桂移転によって、学部教育が吉田キャンパスに残ったことにより、かなり時間的な負担が増えました。将来的には、学部の専門教育を桂で行えるような方針はないのでしょうか。（50代）

■桂キャンパスで研究環境は大いに改善された。しかし、学部教育に対する意識や責任感が距離とともに薄れた感じがする。また、時間的な負担が大変大きくなった。（50代）

## 材料化学専攻

■法人化による雑務が増えているように思われるが、極限られた人に集中しており一般的には負担はあまり増えていない。桂移転についても少しの負担はあってもそれを理由にするほどではないと考えている。（50代）

■工学部の学部学生が誇りをもって吉田キャンパスで学べるよう環境整備をする必要がある。今のままでは教員との接触が全くできていないのが問題である。いろいろな機会に桂に来させ

るようにする必要がある。(50代)

### **物質エネルギー化学専攻**

■教員増を図るべき。事務職員の減削を原資として。(50代)

■桂移転によって十分なオフィスアワーを確保しがたくなった。(50代)

■法人化により事務部の力はかえって増強されてしまったのではないか？(50代)

■若い教員への負担の公平化、減少化を計るべきである。質のよい教員が京大から流出する原因になりかねない(60代)

### **分子工学専攻**

■法人化は、今まで自己独善的であった大学人の考え方を根本的にかえ、社会の一員であることを自覚させる効果があった。しかし、あまりに効率と財政重視であると、本来の大学の使命を見失うであろう。(50代)

■法人化と桂移転が似た時期に起こっているのどちらが原因となっているのかよくわからない事例が多い。従って原因等を考察するには注意が必要(50代)

### **高分子化学専攻**

■法人化を機会に、大学は「何を売る」ところかをもう一度考え、個々人のレベルで講義の質を向上させる必要がある(50代)

■桂移転に伴い学部教育のための実働時間は倍増している。(50代)

■学部も桂移転すべきである(50代)

### **合成・生物化学専攻**

■学部教育もぜひ、桂でできるようお願いしたい。(50代)

■できるだけ教員の負担を軽減して欲しい。事務員の能力アップと事務の効率化を推進して欲しい。(60代)

### **化学工学専攻**

■法人化に伴い、安全・衛生に関する法律も通常企業と同様に厳しく課せられる。これに対して、講義室、実験室の安全・衛生管理が不十分でそれに対する人的投入が貧弱なのは、大学独立法人の使命を果たせていない。事務組織を再編成して、これらにあたる職員、技術職員の充実を図り、学生の教育安全環境を確保することが、大学独立法人として実施すべき最優先項目である(各研究室の安全衛生よりも、不特定多数が関与する共通の施設の安全・衛生が優先されるべきである)。また、これに関連して、現在の専攻付帯の技術職員という既得権に基づく旧来の体制から、上記環境を整える上で最適の組織への変更を実施すべきである。(40代)

■学生の主体的態度は帰属意識によって高められることが多い。学部学生と教員・院生を解離してしまう「大学院のみの移転」は愚の骨頂である。(40代)

■学部教育と大学院教育を別けて(場所を異にして)学生間の交流を欠く状態での教育は効率面でも教育面でもよくない。法人化に伴い予算(運営交付金)が大幅に減ったこと、そのために予算申請などの仕事が増えた。(40代)

■桂移転は学部教育にとって大きなマイナスである。研究現場と教育現場の乖離は大学教育にとって由々しき問題である。(50代)

■キャンパス間の往復で失う時間が多すぎる。週2回の講義が限界である。学生とのコミュニケーションがなくなった。学科事務室との交信も減った。(50代)

■忙しくなったが研究環境は良くなった。研究費の面で、もう少し余裕が欲しい。(60代)

### **エネルギー科学研究科**

■最近赴任してきたばかりなのでよくわからない。(40代)

### **情報学研究科**

■桂移転を機に研究教育の高コスト体質化が進行する。このため、移転はリストラを促進する効果があるといえる。無理のないリストラの手続きを今から考えていかねばならない。(40代)

■現在でも授業以外で、教員と学生の接触は多くはないが、桂へ移転が完了するとますます学生との接触が少なくなる。学生の悩みを聞くカウンセラー体制が必要になると思う。(50代)

■総合大学であることはきわめて大事なことであり、単科大学に向かうような方向性は望ましくないと思われる。(50代)

■学部と大学院のキャンパスが離れているのはどう考えても望ましいことではない。(50代)

■経費削減について、電気料金の無駄を省く方策がある。(50代)

### **地球環境学堂**

■法人化が学部教育に与える影響は皆無といえるであろう。しかしながら、地球工学科も来秋に桂移転を控え、概論等の低学年配当科目の講義形式などには更なる工夫が必要であろう。また、JABEE対応による作業量の増大の負担は大きい。(50代)

■経験していないので回答できない。(60代)

### **学術情報メディアセンター**

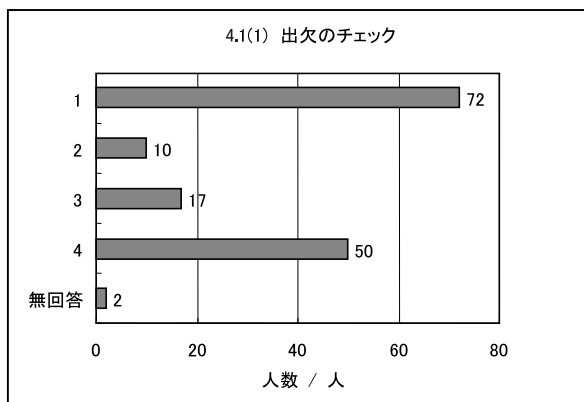
■教育負担より運営に関連する会議が増えた。(40代)

## **4 学部授業**

### **4.1 担当する代表的な学部講義科目1科目について、授業の進め方およびスタイルについて教えてください。**

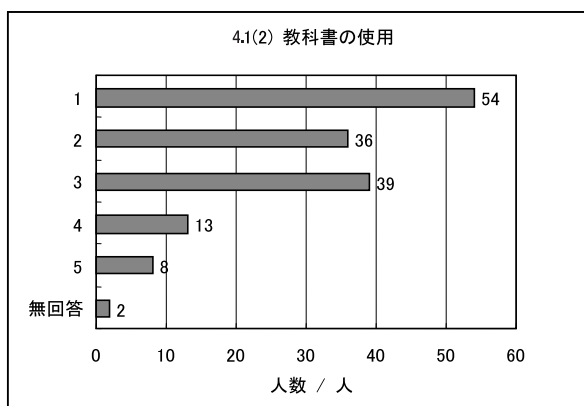
#### **(1) 出欠のチェック**

- 1 毎回出欠をチェックする。
- 2 出来るだけチェックする。
- 3 時々チェックする。
- 4 ほとんどチェックしない。



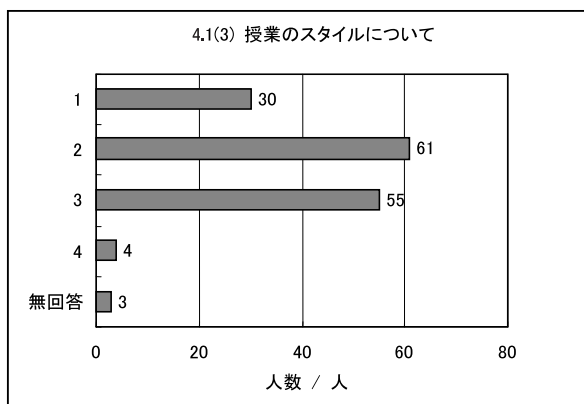
## (2) 教科書の使用

- 1 教科書を中心に講義している。
- 2 教科書を指定しているが、講義は必ずしもそれに沿っていない。
- 3 教科書は指定していないが、参考書は指定している。
- 4 教科書や参考書を指定していない。
- 5 その他



## (3) 授業のスタイルについて

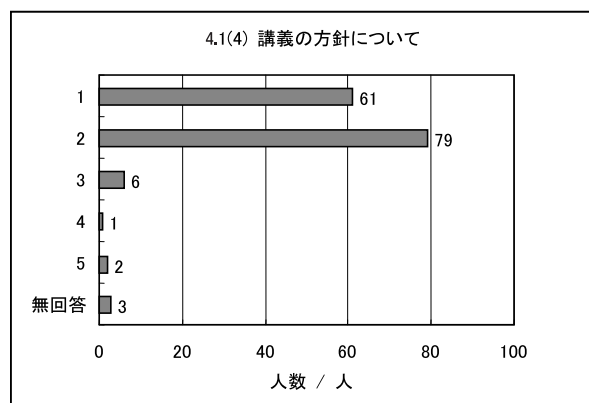
- 1 AV 機器やコンピュータの presentation システムを大いに活用している。
- 2 必要に応じて上記の機材を活用している。
- 3 板書を主体とし、上記の機材は殆ど使用しない。
- 4 その他





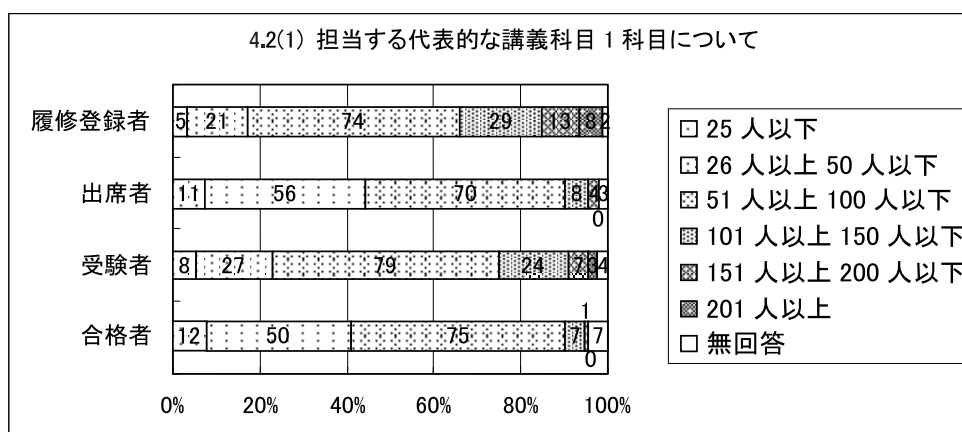
#### (4) 講義の方針について

- 1 基礎的な事項を理解させることを主眼にしている。
- 2 基礎的な事項の教授を主とするが、適宜応用ないしは専門的な内容も含めている。
- 3 専門的な内容を中心に講義を行っている。
- 4 当該科目に関する最新のトピックスを中心に講義を進めている。
- 5 その他



#### 4.2 担当する代表的な講義科目 1 科目について、学生の受講態度について教えてください。

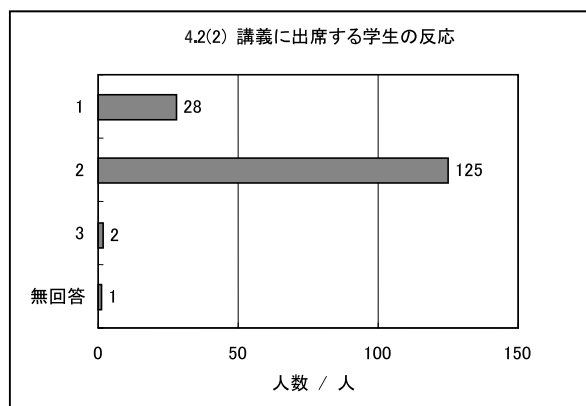
##### (1) 履修登録者数、出席者数、受験者数、合格者数



グラフの読み方：代表的な講義で、出席者数 25 人以下の講義を持っている教授が 11 名、26 ～ 50 人の講義を持つ教授 56 名、51 ～ 100 人の講義を持つ教授 70 名、など。

##### (2) 講義に出席する学生の反応

- 1 受講態度が積極的な学生が多く質疑や意見も多く出る。
- 2 受講態度は概ね良いが、講義に対する反応はそれほど良くない。
- 3 受講態度が消極的で講義中に私語を交わす学生が多い。



### ・講義に出席する学生の態度についての意見

講義に対する教授の工夫や熱意などが伝わるアンケート結果である。各教授がそれぞれに独自の教授法を持っている。教えがよい学生が多い、出席率が高い（高すぎる）、質問しないおとなしい学生が多い、1回生のほうが高学年より熱心であるが大学院生になるとまた意欲的な学生が増える、自習しない学生や単位取得のみが目的の学生が多いという指摘、などがあった。これらの意見は次項の「期待する学生像と現実の学生に対する意見」でも繰り返し指摘されている。

### 社会基盤工学専攻

■教員の側から問いかけると質問する学生が増えるので、問いかけを増やすことが有効。オフィスアワーを充実させるとよい。(50代)

### 都市社会工学専攻

■ピカピカの1年生を教えるのは楽しい。他学年生とは目の色が異なる。他学部、他学科からも受講生がある。(60代)

### 都市環境工学専攻

■教員と学生が接触する機会を増やすべき。(40代)

■大学をサービス産業と考えれば履修制限を設けるべきだ。学生の可能学習量から上限があるはず。まだ履修者全員が入る室を用意できない（こともある）現在の京大は、まともな教育産業になっていない。(40代)

■私の担当しているのは、専門科目でも120名前後が選択するので、学生に質問したり、答えさせたりするのは、全部座席にいる者に限られがちであるが、積極的に話しかけるようにしている。しかし、的確に自分の考えを述べられる学生が少ないように感ずる。(50代)

■質問、意見を求めても殆ど反応がない。大学だけでなく、それ以前の教育の仕方（受身的に聞いて試験で良い点を取りさえすればよいという風潮）に問題があるように思われる。(50代)

■教室にシールドを張って、携帯電話の密かな利用をとめる必要があるのではないか。(50代)

■熱心ではあるが、受動的な学生が多い。ただし、活動は個性的な学生もおり、個々人の能力を伸ばすことが重要と考えている。(50代)

### 建築学専攻

■講義の中でポイントの部分を説明する時には、できるだけ学生に質問を発し、問答を行うようにしながら進めていくようにしている。この方法は確かに効果をあげているようであるが、時間がかかるので、教えるべき内容が多い場合は実行が難しい。(50代)

### 機械理工学専攻

■板書のみでは質問は少ないが、講義中に演習を積極的に取り入れ、巡回すると結構質問が出るとともに、どこでつまづいているかもよく把握できる。また、特に毎週質問時間を設定しており、結構積極的に質問に来ている。(40代)

■講義後、熱心に質問する学生もいたが、概して講義中はおとなしく聴いているだけであった。(50代)

■月曜日と金曜日に担当しているが、一部の学生は、遊び疲れか、アルバイト疲れか、寝ている。一方、まじめな学生も多い。授業中に寝るなど外国では考えられない。(60代)

### 航空宇宙工学専攻

■授業後に質問に来る学生が多い。(50代)

■1時限のため朝の集まりが遅く、授業開始までのロス時間が蓄積する。(50代)

■以前の学生に比べて（下名は、博士課程終了後、企業に就職し、大学に戻ったのは6年前です。以前の学生とは、下名が学生の時の学生、25～30年前の学生ということになります）、講義中や前後の質問など、反応はきわめて少ない。もう一つ気になっていることは、今の学生は、参考書など、関連の書物を自分で購入して、自主的に、周辺を含めて広く深く勉強することがほとんど無いようである。この2つの危惧は互いに関連しているように感じている。結局、講義で全ての事柄を教えてもらえる、教えてもらえるべき、というような考えの学生が最近が多いのではなかろうか。(50代)

■京大の学生は基本的には、高い潜在能力をもっている。卒論や創成的な科目などでは、期待通りの学生であることが認識できることが多い。(60代)

### 原子核工学専攻

■学生との対話を行うことが有効かもしれない。(50代)

### 電気工学専攻

■上位レベルの学生に関しては問題はなく、教えていて大変気持ちがよい。学生間の学力の差が拡大する傾向にあるように思われ、これ以上学力差が拡大した場合には、教育システムとしての対策を準備する必要があるかもしれない。講義と演習とがペアになっている場合(2コマ)、個々の学生の学習のレベルの把握が容易であり、また学生との接触のレベルも深くなって、学生の教員に対する親近感もきわめて大きいように思われる。(60代)

■受講態度は良い。質問は（講義後の細かい質問を除いて）出ないし、また必要があるとも思わない。「質疑や意見が出るのが良い授業」とはまったく思っていない。(60代)

## 電子工学専攻

- 最後まで十分理解できる学生は10 %位しかいない。(50代)
- 全般的にみて授業への出席状況は良いと思われる。そのため、学年進捗とともに学力が向上してゆく様子が伺える。それは、1年、2年の授業担当教員の努力の成果であろう。(50代)
- 予習はおろか復習もほとんどしていない。その場で全て理解させるような講義もできなくはないが、内容的に限界がある。

## 材料化学専攻

- 1. 授業料を2ないしは3倍にする。2. 成績の良い学生には奨学金として授業料に相当する金額を与える。こうしてでも学生のやる気を引き出すことはいずれ必要であると思う。(50代)

## 物質エネルギー化学専攻

- 出席はしているが、内容を理解していない学生が年々増加しているように感じる。(50代)
- 教員が教えるべきことを持ち、学生のことを考えて熱い授業をやる必要がある。学生が自分にとって重要と自覚させることが成功といえる。この目標は今のところ75 %ぐらい達成している(60代)

## 分子工学専攻

- 1回生では何人かの学生が自分の興味を深めるためにどのような本を読めばいいか質問に来る。この傾向をより大きくしたいと考えている。3回生ではそのような質問はごく稀である。(50代)
- 最近の学生は90分授業に耐えられない。(50代)

## 高分子化学専攻

- 雄弁ではないが、地道に勉強を続けている学生が多い。理解能力は高いので難しい内容も(基本法則に限るが)教授法の工夫により大きな成果が期待できる。スライドやOA機器で画像を見せるだけの授業では成果が期待できない。(50代)
- 出席率が高すぎるような気がする。(50代)
- 学生の講義に対する関心が二極化している。まじめな学生とは受講態度もよく成績も優であるが当然のことながら、不真面目な集団は落第レベルに落ちる。その差が年々拡大している。(50代)
- 講義室が分散しすぎであり、教員学生ともに不便である。(50代)

## 合成・生物化学専攻

- 講義の最終日に試験をした年は全員が非常に高得点であった。一方、正規の期間内で試験をした場合は、多くの科目の勉強のため点数は余り良くなかった。これはシステムの問題であろう。(60代)

## 化学工学専攻

■学生たちから毎年聞かれることは、出席点はいくらですか？レポートは出した方が単位を取る上で有利ですか？という質問を受ける。本末転倒である。自分の学力を増進するためにすることであり、この意識を払拭しない限り、いくら講義システムを改善しても無駄である。これが、大学院生になると、かなりの学生が真剣に講義を受講する。すなわち、自分のために講義をとという意識が明確になっているのであろう。よって、学部教育においても、このあたりの意識改革を別途行うような講義も必要かと感じる。ポケットゼミはその位置づけと考えるが、やはり、現在の過度なケアシステムも良いが、ケアなしで学生が途方にくれて自分自身で考えざるを得ないような工夫も合わせて必要と考える。(40代)

■「まじめに出席し、ノートもよくとっているのに成績の悪い学生」が年々増加する傾向にある。(40代)

■A V機器と板書を併用したいケースが多いが、そのような講義形式に対応できない教室がある(スクリーンを下ろすと黒板が使えなくなる)。是非、改善して頂きたい。(50代)

## 情報学研究科

■レポートを4~5回課しているが、興味を持った問題に対しては自分なりに考えて発展させて考察した解答を時折見かける。これは他大学ではまずありえないことである。(40代)

■講義資料を事前に配布し、予習をしてくるよう学生に言い、それを期待して講義を行っていますが、実際に予習がどの程度なされているかについては不明です。(50代)

■講義後に質問する学生は多いが、講義中に質問する学生はいない。(50代)

## 地球環境学

■積極的な質問の提示が少ないので、適当な課題を毎回テストして提出させるとともに、質問をして理解度を把握するようにしている。(50代)

■授業態度が悪い学生が増えた。遅く入って来、しかも配布物をもらい、出席を取ったら途中で出て行く。(50代)

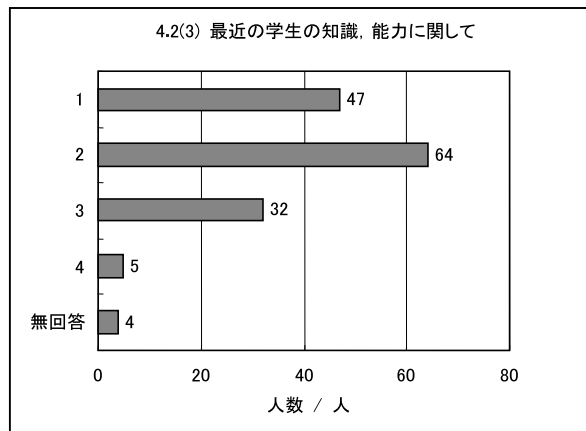
## 学術情報メディアセンター

■講義の最後15分間、質問タイムを設定し、強制的に感想や質問を言わせている。(40代)

(3) 最近の学生の知識、能力に関してどのように感じているか。

- 1 以前と大差ない。
- 2 以前と比べて知識は充分あるが、深く考える習慣や意欲に欠ける。
- 3 以前に比べて基礎的な知識すらおぼつかない。
- 4 その他





#### (4) 期待する学生像と現実の学生に対する意見

学生に対する厳しい意見が多い。本来優秀であるはずの学生に対する大きな期待、すなわち次世代のリーダーたるべきであるという期待の裏返しであると解釈することができる。優秀な学生と要領のよいだけの学生への2極化が進行していることを推測させる意見が多い。

#### 社会基盤工学専攻

- 広い分野へ関心を持つ学生が少なくなっている。
- 対人的積極性にかける。相当近づいていかないとレスポンスがない。
- 色々なことに興味を持って、新しい知識に感動して欲しいが、現実には少ない。課題は無難にこなす器用な学生が多い。
- 直接指導する研究室配属学生と、他の学生では期待像が若干異なる。後者は一般論での学生への期待であるが、前者は研究室としての人材育成・研究者育成であり、その期待は大きい。研究室学生への期待像と現実の配属学生のレベルには大きな差があり、毎年悩んでいる。数年に一人、優秀な学生が来ればいいかと願っている。小生から博士後期課程進学を勧めたい学生が来ることを願っている。現実にはなかなかいない。
- 京大生としての誇りがない。
- 積極性に欠け、学生の上に両親の姿が見える。
- 目的意識あるいは主体性が少し不足。

#### 都市社会工学専攻

- 学問世界に自ら漕ぎ出していこうという意欲的な学生になかなか出会えない。
- 授業中の私語、飲食、授業に出席せずレポートだけ提出に来る、数人で行動しないと単独では意思決定できないなどの潔さの欠如は、近年の全国的な傾向と考えられるが、益々顕著になってきている。多くの「先生」も「ケータイを持ったサル」の親の世代であり、責任の一端を担っており注意して矯正させる義務があると思われるが、結構しんどい仕事になっているのではないか。

学習意欲の低下に関しては客観的な評価は難しく、顕著に見られるとも昔とさほど変わっていないとも考えられる。しかし、楽観できない状況には変わりなく、また大学科制移行との関連

も指摘されるため、学生の意識調査、カリキュラムの適切な改変など学科全体での対応が求められているのが現状と思われる。

■もう少し積極的に質問をして欲しい。

■物を言わない。指導性を見せる学生は例外的。要領は極めてよい。教えていて面白い相手ではない。

■リーダーシップに欠ける。ベンチャーの気概がない。

■新入生は大いなる自信と期待をもって入学して来ている。

■学生の質のバラツキが大きい。優秀な学生も数%はいるので、エリート養成には心配していない。

### **都市環境工学専攻**

■1つのことに凝るような熱心な学生になってほしい。自分の未来は自分で切り開く意欲を持った学生であって欲しい。

■自ら興味をもつ事項を明確にできない。自ら積極的に調べようとしない。

■以前は積極的に自分の興味のある事柄について研究テーマや、研究の進め方について、学生の方から提案してくることが多く、こちらが1つアドバイスをするとさらに10に膨らませてまた相談に来る学生が多かった。最近は言われたことは忠実にそつなくこなすが、それ以上に自発的に何かを見つけてくる学生が少ない。この様な学生に関してはまた、指導方法を変えて行く必要があると感じている。

■・自分で判断することに弱い。・広く関連付けて、また独創的に考えることを余りしない。・ユニークな人材や学生の多様性が少ない。

■自由闊達で積極的な学生に出会いたい。現実には少数の学生を除いて、逆の立場が多い。ポテンシャルはあるのだから、それをどう引き出すかが問題。

■与えられた課題はそつなくこなすが、そこから派生した問題については自分で動こうとはしない。また、自分に直接関係のあることに関しては反応を見せるが、それ以外には興味を示さない。といった自己中心的な学生が増えているので、できるだけ他人を思いやり、一見無駄と思われることにでも労力を費やすような学生になってほしいと願う。

■自分が学生の頃と比べて今の学生が大きく劣るとは思えない。逆に知識は増えているし勉強もよくすると思われる。ただ、将来に夢をもった気概のある学生は非常に少なくなったと思われる。

■多様な学生がいることが望ましい。基礎学力は十分であり、教員の教育姿勢が問われていると感じている。

■結局は就職のための通過点であるという認識の学生が多い。学習や研究のプロセスを楽しみ、重視しようとする学生が少ないのが残念である。

### **建築学専攻**

■学生は自分で考える習慣が出来ておらず、すぐに教えてもらおうとする。

■知識欲に欠ける学生が少なからずいる。

■学問内容に感動したり、疑問を持ったりすることが少ないように思う。中には、そのような学生もいるが、やはり以前と比べて数が減っているように感じる。

■これまでもこのようなものだったように思います。

■自ら調べたり本を読んだりする学生が極めて少ない。大学院生になっても学部とほとんど変わらない。

■意欲を何に向ければよいか迷いが感じられる。能力的には十分と考えるが研鍛が必要である。

### **機械理工学専攻**

■積極性が低く、学問への取組みが理解、論理形でなく記憶型になっている学生が多い。コースの学生 100 名として上位 15、20 名くらいは「自由の学風」の中でも十分通用する学力を持っているが、多数層が危なくなってきたおりこれが全体を引きずっている。

■講義に関しては、学生とのコミュニケーションがかけていることを自覚しており、極力こちらからの質問を心がけている。研究室配属後の、研究に打ち込む姿は熱心になっているように見る。

■社会のリーダーとなる自覚が少ない。京大卒のレッテルだけで楽な人生を送れると思っている。

■気力・集中力に欠ける。授業に出るからには、真剣に考え集中して時間をすごしてほしい

■学問に対する憧れを持っていない。そのひとつの現れは、本をあまり買わなくなっていることである。一つの主題（例えば、量子力学）について複数の書物を買って、著者によるアプローチの仕方の違いを見つけてそれを楽しむといったことが、ほとんどなくなっている。

■学業に精を出しながら、一方社会勉強も充分行っていること。最近の学生は、チャレンジ精神がなく、答えのある問題しか解けず、新しい課題に対して具体的解決方向が見出せない。こちらから回答してもらうことを期待して、自らの答えが出せない。このような学生を指導するには、教員がヤル気をもつ必要があるが、どうも学生よりも教員側に問題が多いと思う。

■学生のポテンシャルは高いが、教員側ならびに教育の仕方がそれを十分に伸ばすような状況にない。

### **マイクロエンジニアリング専攻**

■前任校のマンモス私大から京大に着任し、学生の勉学への意欲と学力に関しては期待があった。しかしながら、授業中のレスポンスや授業後に質問に来る学生は少数の例外的な学生を除いて極めて少なく、その違いを強く実感するには至っていない。

■自ら求める姿が足りない。

■自ら考えるという姿勢が少ない。積極性にかける。実験をしない。

■覇気がない。

■学生の能力に関しては、計算能力がずいぶん低下している。以前なら説明する必要のない式の展開ができない学生が増えた。また、教科書を読む際には、式の展開をフォローして確かめる必要があるということを認識していない。

### **航空宇宙工学専攻**

■学生が大学から社会に出て求められる能力は、主体性（主体的に物事を考え、実行し、アピールする）、論理性（論理的思考、実行、アピール）、問題作成・設定能力（何をしたらよいか、

問題を作る、方向を決定する)、と考える。特に、問題作成・設定能力は重要であり、将来、組織のリーダとなっていくには不可欠である。このような観点からすると、最近の学生は物足らず、広く深く考える習慣や意欲にやや欠けるように感じている。研究室配属になった学生(4年、修士、博士)に関しては、できるだけマンツーマンで、上記のような能力向上を、それとなくはかっている。(講義だけでは、このようなマンツーマンの教育は難しい。)

■自分の知らないことを開拓していこうという努力に欠ける。言われた事、習ったことはおおむね理解にすぐれている。

■研究室に配属された学生から判断すると、勉学意欲もあり自主性、積極性のある学生に比較的恵まれ期待通りである。少数であるが2年以上留年した学生は、基礎知識不足など根本的な問題がある場合が多い。

■知識はあるが応用力に欠ける。深く考える習慣が少ない。授業にはまじめに出席するが、内容が理解できないままでも満足している。答えが与えられている問題を解く能力・速さはあるが、答えが分からない(あるいは無い)問題に対しては対応の仕方が分からない。

■学力など本来的能力は、基本的には変わっていないと考えています。ただ、哲学、社会科学等を勉強しようとする雰囲気はなくなっていると感じます。幅広い教養が、専門家としても本質的に重要であると考えますので、そのような雰囲気、空間を如何に実現していくかが、今後大切な課題となると思います。

## 原子核工学専攻

■百名以上の受講生がいる講義の中で、「身の回りの自然現象に関するごく簡単な質問 20 問」を行った結果は、受講生の数%がよくでき、90 %以上の学生は殆どできない、という 2 極分裂であった。このような例からも推察されるように、工学・理学の最も基本であるはずの自然に対する興味や知識が過去の学生と比較して激減しているのが現状である。これは大学だけの問題ではなく我が国の教育構造そのものが問われていると考えるべき事柄である。

■少子化により競争率が下がっているのも、十分な能力を持った学生の割合が少なくなっていると思う。今の学生が昔と比べてどうのこうのというより、統計的に見てある意味しかたがないのだろう。

■活発な学生は以前と同じく活発であるが、全体的にはおとなしい。もう少し活発であってほしい。

■講義への出席率も受講態度も良いが、かなり無気力で受け身なのが気になる。教員から質問を行い、レポート提出を求めて、学生の反応や理解度を確かめることが必要となっている。しかし、4年生になり特別研究を開始して、研究室での日常的な討論に加わることで、かなり改善しているのでそれほど問題ないように感じている。

## 材料工学専攻

■精神年齢が低い。

■全体的な学生像をうんぬんするより個人差のほうが大きいと思う。

■おおむね期待している通りである。これは前からだが、半分弱の良くできる学生は理解度もよく大変よく勉強しているが、それ以外はただ単位を取るだけの学生である。しかし、後半分にペースを合わせることは、全体のレベル低下につながる。

■学問に王道なしということをわきまえている学生が少なくなったという印象があります。目先の課題を要領よく片付けていかに自由時間（遊びの時間）を確保するかという学生が多くなったと思います。英語で講義をする日本人と留学生混在のクラスを持ったことがあります。レポートを見ると、留学生は良く調べ自ら考えたと思われる長いレポートを書いてきますが、日本人学生のものにはおどろきなものが多いという印象があります。幼少の頃からの学習習慣が大学院生になってもまだ抜けきっていないのでしょう。

### 電気工学専攻

■個々の講義での、あるいは、異なる講義間にまたがる断片的な知識から、それらをつなぐ考え方や共通の概念を見出し、より大きな全体像を自ら構成して理解を深めようという学習意欲、またその際に出てくる疑問点や学習不足の事柄について自ら解決しようとする姿勢に欠ける。

■興味、好奇心をもって主体的に学習しようとする姿勢が希薄に感じる。極端に言えば、単位さえ取ればそれでよい、という感じの学生が多くなってきているように思われる。

■単位をそろえることにのみ目が行きがちの学生が少なくない。

■特に期待はずれということはない。あえて言えば、「きっちり」勉強してくれる学生がもう少し多くなってくれるとよい。

### 電子工学専攻

■学問が目的ではなく、手段になっている。したがって理解していなくとも単位を取ればそれで良いと信じている。これは学生を取り巻く周囲（社会）の文化の貧困であって、一概に学生のみを責められない。

■主体性のある学生を期待しているが、特に最近の学生は、受け身的な学生が多い。学生には主体性を育てる環境と期間が必要だと思われるが、その意味では以前の教養課程は重要な意味を持っていたように思われる。ただ、その運営母体の教養部が十分その役を果たせなかったのは残念であるが、したがって、本来の旧教養課程に相当するような環境と期間が再度実現できるのが理想と考えています。

■知識や能力は大学における教育によってかなりの程度補充されていると思われるが、学問的興味あるいはもっと広い意味での知的世界への興味は希薄なままである。一方で評価には大変敏感になっており、授業への出席率の高さや過剰なまでの単位へのこだわりはその表れである。

■知的好奇心や食欲さが薄れ、表面的な知識で試験だけを乗り切ろうとしている学生が多くなっている。例えば、教科書あるいは参考書の価格が4000円を超えると非常に高いと感じて購入しない者もいるようだが、授業の1～2回をサボることと等価であるとは認識していない。

### 材料化学専攻

■“コンパクト”な感じがする。

■授業が理解できないのは自分のせいではなく教える側の教員の問題だとする学生が増えている。予備校式の覚え方中心の勉強方法になれているかと思われる。とにかく自分で理解しようという努力がない。

■基本的能力は昔とあまり変わっていない。その能力をいつ、どう発揮すべきか、機会が考え



られない。何よりも社会性にかけていることが問題。知識偏重教育（高校までのレベル）の問題あり（重大）。体で覚えることの意味が今の中等教育でおろそかにされていて、それが高等教育の足かせになっている。

### **物質エネルギー化学専攻**

- 人による。数は少ないが、深く考え、理解しようという人もいるのが期待である。
- トップ 10 ～ 20 % の学生は意欲があり期待通りですが、平均的に相当手をかけなければ知識の習得が困難な学生が増加しています。特に、高校の到達度が低く設定されているため、基礎の準備事項を講義で取り上げる必要があります。
- 意外によく勉強はしていると思う。ただし、知識が片断的となり、実際場面との関係がついていないように思われる。
- 今の学生に特に違和感はない。こちらの意図がうまく伝わるように努力することが必要で、学生の意欲を引き出せばよい。それは可能と考えている。
- 自分で考え、判断することを放棄しているように思える学生が多い。受け入れるだけの学生が多くなった。

### **分子工学専攻**

- 化学に興味を持っている学生に期待しているが、1/3 程度は興味がない学生がいる。
- よくできる学生の比率はそう変化しないが、どうしようもない学生数が増加した。責任感の欠如。
- 何かをつきつめていく傾向がやや少なくなった。応用的な研究例（新聞、TV などの報道によるものであろうか）についての知識は十分であるが基礎的な事項への興味は少ないように感じる。
- あまり予習・復習をしないように見える。

### **高分子化学専攻**

- 思考パターンが定式化されているので意外なアイデア、独創的考察が期待できない。学力が輪切りにされていて、その中のある層だけが抽出されている。センター試験の影響である。例えば、文理のバランスは欠いているが物理に図抜けた才能を持つ、というような特徴のある学生がいなくなった。パソコンおたくだけが増加しているようである。
- 誘惑の多い現代社会が問題であり、学生云々の問題ではないような気がする。
- 精神的に健康な学生、人とのコミュニケーションができる学生。これらがあれば基礎学力は身につけているので、専門課程でトレーニングすれば自然と実力は up する。
- 期待通りの学生も多いが、期待はずれの学生も増えている。

### **合成・生物化学専攻**

- スケールが小さい。夢がない。酒を飲まない。本（総合雑誌のようなもの）を読まない。
- “意欲の旺盛な学生”を期待する。

## 化学工学専攻

■現在の学生は Trainee である。すなわち、受身で無難に過ごすパターンが多く、自らが批判されても意思を貫いてある物事を積極的に行うというスタイルは見受けられない。さて、今後の日本の行く末を考えた場合、タフで機知に富んだ人材を育成することにつきる。これには、より総合的に物事を俯瞰できる視野が必要である。これに対して、学生～若手教員はあまりにも自分の専門以外のことに無知であり、考えることが少なすぎる。また、研究者、技術者としての資質としては、歩きながらでもご飯を食べながらでも抱える課題を考えるというような一つのことに馬鹿になるようなひたむきに欠けている。しかし、素直な点、プレゼン能力が長けている点などすばらしい部分もたくさんある。

■意欲の低さ、主体性のなさが顕著に見られるが、これは大学科制ゆえの帰属意識のなさに起因する部分も多い。低年次から小規模のコースに分属すべきと考える（極端には改組前に戻したい）。

■主体的に行動する学生を期待しているが、現実の学生は主体性がない。受身の教育によるものだろうが、是非この点を大学教育で改める必要がある。

■モチベーションさえ明確になれば、積極的に学習する。それを、自発的に見つけてほしいと思うのだが、期待しすぎであろう。現状で大きな不満はない。

■基礎的、本質的な問題への興味が低く、本質を見る目が乏しい気がする。最後までやらず、途中で投げ出す人が多い。

## エネルギー科学研究科

■期待する学生像は、やはり京大伝統の「自由の学風」を感じさせる人物である。現在の多くの学生はそうではないが、ごく少数ながら強烈な個性を感じさせる学生はいる。

■勉学を第一目的としてきていない。新しいことをわかりたいとか、わかろうと努力するとかいうことがない。講義出席は単位取得のためにしかすぎず、できれば何事もなく済ませたいと思っている。このような学生が増えてきていると思われる。

■少々元気がないように感じる。

■知る喜びを知らないように思う。

## 情報学研究科

■講義やゼミにおける質問がやや乏しい。

■期待通りの潜在的能力の高い学生に出会うことが多い。大事なはいかに動機づけるかである。

■式の展開ができない学生が多くなってきている。昔は板書したものを学生はノートに写すことが理解の助けになっていた。最近は、資料を作ることが多くなり、学生は手を動かさなくても、講義の内容がわかった気になっている。実際に手を動かして理解するということが少なくなっている。

■志を持っている学生が極めて少ないように思う。一般に記憶力に頼り、思考力の乏しい学生が多くなってきているように思う。

■積極性にかける。

■講義ではなく、中高校までと同様、知識の教授である授業を求めており、学習する主体であ

る自己の確立がなされていない。これは日本人全体の精神的縮退化によるものかもしれない。

■やはり、主体性に欠ける。

■興味のあるテーマに関する著名な本を自分で読むとか、学生同士で読み議論するといったいわゆる自主ゼミがあまり行われていないように思います。現在は各科目でレポートが多くなり、それに時間をとられ、学生が自主性を発揮する余地が少なくなっているためでしょうか？

■わからない部分が出てきた時に、先生に聞いたり本を読んだりしてわかるようになるとうする意欲が足りない。

■最近の学生は知っているはずのごく基本的な事柄を知らない。2年生の後期で簡単な微分方程式が解けない。少し電氣的な話をする、情報の学生は全くわからない。知らないことを当然と思っており、恥ずかしいと思わない。勉強しようとも思わない。

■反応が悪いです。講義がインタラクティブになかなかならないので、その点に工夫が必要と感じています。

■意欲が少ない。

■半分程度の学生は問題ない。

■意欲に乏しい。自主性に乏しい。小さくまとまろうとする。

■自ら考えることが少ないため、単に知識を記憶するのみの学生が多い。したがって、応用できない役に立たない知識となっている。

## 地球環境学堂

■基本原理や原則を理解し、社会の情勢やこれまでの背景と今後のあり方を考えてもらいたい。意欲的な学生はそれなりに取り組んでいるが、残念ながらそれほど多くはないのが現状である。

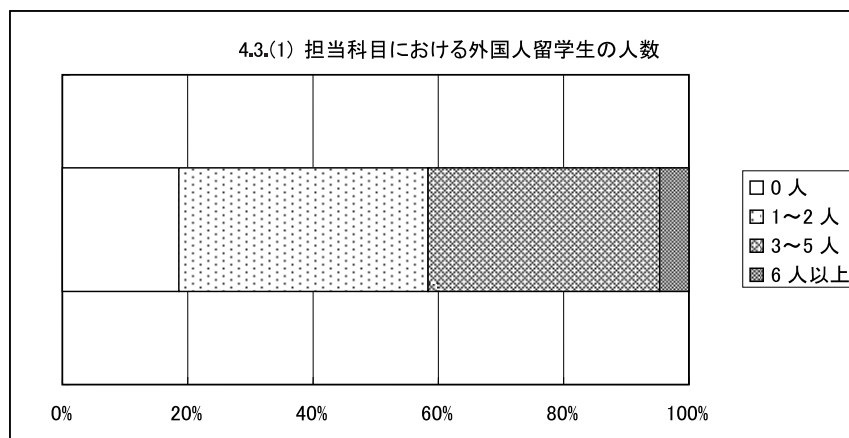
■何を目的に入学してきたのか理解に苦しむ学生がいる。

## 学術情報メディアセンター

■意欲・自主性にかけている。若いのだから、いろいろなことに興味を持って積極的に活動すればよいと思っているが、そういう学生が少ない。

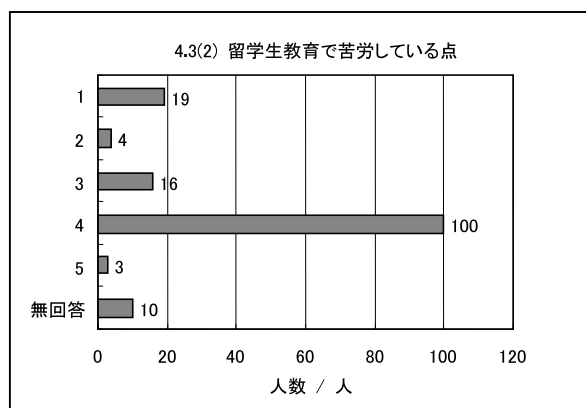
### 4.3 担当する代表的な講義科目 1 科目における外国人留学生について

#### (1) 担当科目を現在何人の外国人留学生が受講しているか。



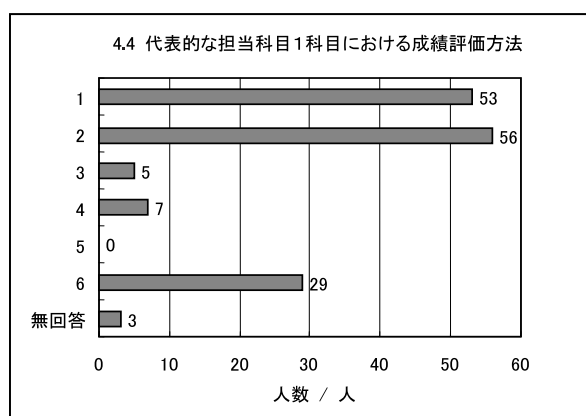
## (2) 留学生教育で苦労している点

- 1 コミュニケーション
- 2 生活習慣の違いから生じるトラブル
- 3 限られた期間で所定の教育を行うのが困難である。
- 4 特にない。
- 5 その他



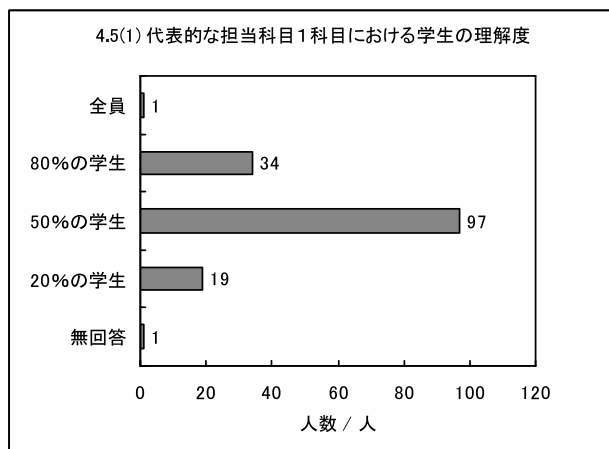
## 4.4 担当する代表的な講義科目 1 科目における成績評価方法

- 1 試験の成績のみで評価している。
- 2 試験の成績に出席状況を加味して評価している。
- 3 試験を行わず、レポートを提出させて評価している。
- 4 レポートと出席状況で評価している。
- 5 出席状況のみで評価している。
- 6 その他



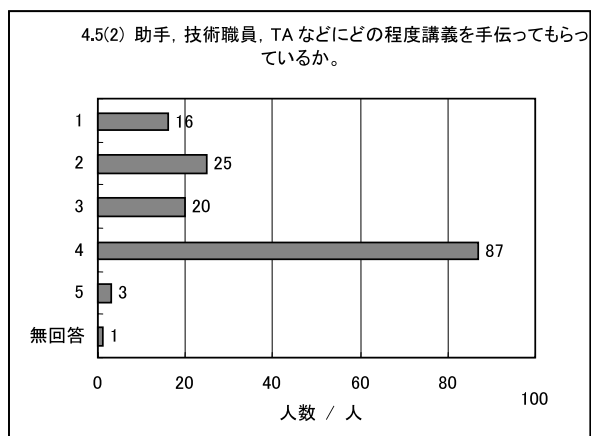
## 4.5 担当する代表的な講義科目 1 科目における、授業に関する教員自身の評価

- (1) 参加学生のうち何%程度が内容を充分理解したと考えるか。



(2) 助手、技術職員、TAなどにどの程度講義を手伝ってもらっているか。

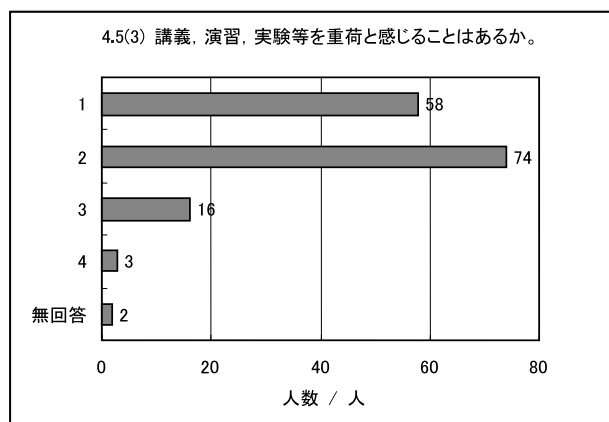
- 1 かなり頻繁に仕事を依頼している。
- 2 ときどき依頼する。
- 3 大量のレポートの採点などのときのみ、依頼している。
- 4 殆ど頼まない。
- 5 その他



(3) 講義、演習、実験等が重荷に感じられることはあるか。

- 1 感じることは殆どない。
- 2 時々感じる。
- 3 常を感じている。
- 4 その他





#### 4.6 先生ご担当の学部講義について、その具体的内容、成績評価などは完全に先生の裁量に任されていますか。もしそうでなければ、どのような拘束がありますか。

##### 社会基盤工学専攻

■同じ系の先生方と議論しながら進めている。(50代)

■拘束は感じていない。(50代)

■上記の科目は、地球工学科 185 名の重要科目で、3 名の教授が 3 班に分かれて並列講義している。このため、完全の裁量はない。講義内容や成績評価は、どうしても最大公約数的なものになってしまう。(50代)

■講義内容の粗筋は決められていても、講義の方法、スタイルは教員の個性を十分に出すべきである。過度な拘束をすれば、中、高と変わらなくなる。(50代)

##### 都市社会工学専攻

■完全に任されている(40代)(40代)；特に拘束はない(50代)(50代)(60代)。

■指定された成績評価分布にこだわらず、優を「どんどん」出している。(60代)

##### 都市環境工学専攻

■任されている(40代)(50代)(50代)；裁量に任されている(60代)。

■複数の教員で分担しているため、講義内容、試験問題作成、その評価等の調整が必要。(40代)

■特にⅠ、Ⅱと続く講義については、進行程度や内容の整合性をもたすために他の教員と相談することがあるが、その他の科目については具体的内容、成績評価は完全に自分の裁量に任されている。(50代)

■任されているというよりは、その責任があると認識して行っている。・無責任になる。(50代)

■拘束はない。ただし、JABEE 等の対応を意識して、出席確認、成績評価の客観化（記録の保存）等の圧力を感じている。(50代)

■（質問の趣旨が十分に理解できていないかもしれませんが）講義の内容、成績評価は当然担当教員の裁量に任されるべきです。ただし、各方面の意見は受け入れるべきで、また、判断の

説明責任もあると思います。(50代)

### **建築学専攻**

■基礎共通的色彩の強い学科目については、必須項目の整理と到達目標の設定がある程度必要であり、これに対して達成度が適切に評価できるような試験問題を作る必要がある。(50代)

■拘束はないが、複数教員で担当しているので、常に合議している。(60代)

### **機械理工学専攻**

■あまりに多くの学生を不可とすることには抵抗がある。次年度以降の学生の3年制を考えているためだと思う。(40代)

■完全に任されている(50代)；裁量に任されている(50代)。

■基礎的な考え方、技術を学習すること。(50代)

■講義科目がカバーすべき内容については、教えるべき内容として拘束があるが、特に拘束されているとは感じない。(60代)

### **マイクロエンジニアリング専攻**

■複数教員による担当なので、教員間の意見調整を行っている。(40代)

■任されている。(50代)

### **航空宇宙工学専攻**

■裁量に完全に任されている。(50代)

■大まかな打ち合わせや相談は必要なことがあるが、教育内容や評価は教員個人の裁量に任すべきで、詳細な拘束があると授業内容が生き生きとしたものにしにくくなる。(60代)

### **原子核工学専攻**

■成績評価は完全に自分の裁量のみで決定している。(50代)

■任されている。(50代)

### **材料工学専攻**

■任されている(40代)；拘束はない(40代)。

■1、2と連続した講義の2なので、1担当の先生と相談して内容は決めている。(40代)

### **電気工学専攻**

■内容の大枠は(たぶんカリキュラム委員会で?)決められている。成績評価についての拘束はない(と思う)。(50代)

■学科のカリキュラム体系の中に位置づけられているから、必ずしも明示的ではないが、当然拘束があると考えている。ただし、それを束縛と感じたこともないし、具体的に何等かの制約が生じたこともない。(60代)

### 電子工学専攻

■ そうでない場合とは具体的に何を示すのかが不明であり、どう返答してよいかわかりません。講義内容をシラバスに基づいて学科ごとに検討して調整することぐらいは可能と思いますが、成績評価を別の教員がチェックするようなことは実質不可能ですし、各教員の裁量にまかせるべきだと思います。(50代)

### 材料化学専攻

■ 任されている。(40代)

■ コース配属の際にその成績が利用されるので、ほかの先生と同じ試験問題でテストを行うことが義務付けられているが、大きな拘束とは考えていない。(50代)

### 物質エネルギー化学専攻

■ 4名の教員の提出した問題の評点（各25点）の合計であり、平均点操作などを用いる場合もあるが、その場合も4名の合議であり、個人的な裁量の入る余地はない。(50代)

■ 3クラス並行して開講されているので、3名の教員が同じ評価をする。(50代)

■ 4クラスを4名の教員が分担し、並行で講義を行っているため、成績評価の客観性を確保する方策としてガイドラインを設けています。(50代)

■ 同じ科目で2つのクラスが並行して行われているので相互の採点基準の打ち合わせが必要。(60代)

### 分子工学専攻

■ 4クラス同時進行の内容なので教科書で教える内容は指定されている。また試験も共通である。(40代)

■ 拘束ではないが、同一科目を複数のクラスで複数の教員が担当しているため、相談し出題、採点方針などを決めそれにしたがって行っている。(50代)

■ 4つのクラス授業を並行開講しているのでその担当教員全員の合議に基づいて成績判定を行う。(50代)

### 高分子化学専攻

■ 他クラスとの共通内容、共同出題、採点であるため拘束がある。(50代)

■ 2クラス並列講義で試験が共通のため教える内容と範囲は制約される。(60代)

### 合成・生物化学専攻

■ 4クラス並行して行っているため、試験問題作成、授業の進行、出席のとり方など平等になるように教員団で協議して決めている。(30代)

■ 工業化学科の4クラスで行っている授業なので、テキスト、授業内容、成績評価法を全体で共通化する必要があり、授業に大きな拘束が生じている。特定の教科書を（外国で使用されているからという理由で）強制的に指定するのは学生にとって迷惑ではないかと思う。(50代)

## 化学工学専攻

■基本的に、客観テストでの成績で決めているので、本人の裁量とはいえ、他の人が評価しても同じ結果になると思う。試験問題が適切か否かは講義を実施している先生にしか正確な判断ができないと思う。また、講義の具体的な内容は、これまででも教室の教科小委員会で当コースの全体の教育ロードマップから見て適切な内容か否かの検討（シラバスの内容まで立ち入って検討）しており、すでに同じ化学工学の第三者の事前評価を受ける体制になっている。（40代）

■1つの科目を複数のクラスでそれぞれ別の教員が担当として行う場合、平均点ならびに単位不可者となる人数をおおよそ同じにする。（40代）

■内容は確かに裁量に任されているが、専攻の委員会に開示しているので不適切な内容とはならない。J A B E Eなどで成績評価基準を明確にする必要がある場合には、拘束が働く。学習時間を保証する必要があるので、成績評価に出席を考慮できない。（50代）

■小生の裁量に任されている。（60代）

## エネルギー科学研究科

■拘束はない（40代）；任されている（40代）。

■拘束というものではないが、内容等については担当する教員で話し合っている。（50代）

## 情報学研究科

■任されている（50代3名）；完全に任されている（50代）；わかりません（50代）；特になし（50代）。

■2年次で履修する特定の全学共通科目の内容を理解しているとの前提で講義内容を決めますが、実際には履修していなかったり、単位を取得していない学生も受講するためこれを考慮には入れています。（50代）

■任されている。しかし70~80%の学生が合格できるよう、工夫している。また、他大学の講義と内容が大きく異ならないよう注意している。（50代）

## 地球環境学堂

■個人での担当講義は完全に自己裁量。グループで担当している講義は担当者と協議して内容の打ち合わせを行うとともに、試験の内容や採点基準などのすり合わせをしている。（50代）

■任されている。（50代）

## 学術情報メディアセンター

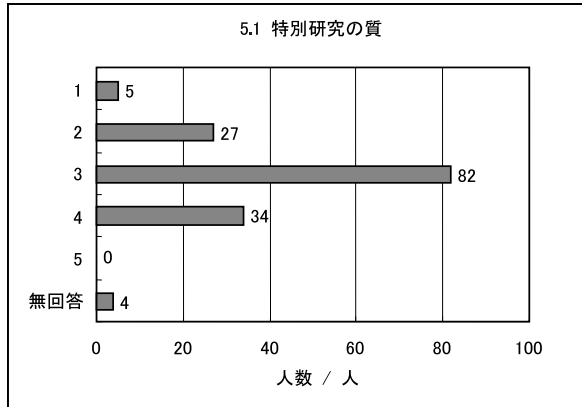
■最初の講義のときに学生がどう評価してほしいかを聞いて評価方法を決めている。（40代）

## 5 特別研究（卒業研究）

### 5.1 特別研究の質

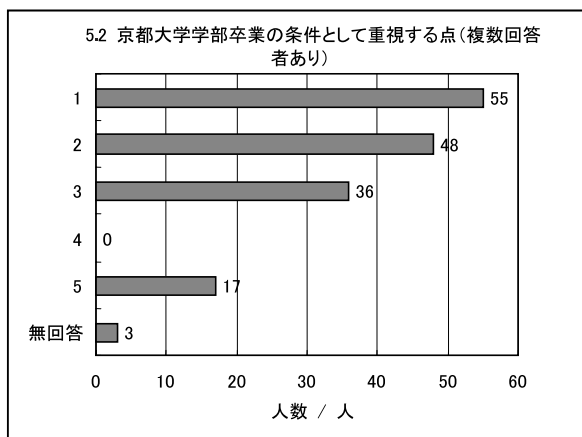
#### 1 以前に比べて著しく向上した。

- 2 以前に比べてやや向上した。
- 3 以前と変わらない。
- 4 以前に比べてやや低下した。
- 5 以前に比べて著しく低下した。



## 5.2 京都大学学部卒業の条件として以下のうちどの点を重視されますか。

- 1 専門の知識、技能を確実に身につけさせること。
- 2 物事の原理が理解できれば、確かな知識は不要。
- 3 学び方を身につけていればそれでいい。
- 4 学業以外で十分な活動をしていれば、学力は重要ではない。
- 5 その他



### ・その他の京都大学学部卒業の条件

#### 社会基盤工学専攻

- 学ぶことの姿勢、方法論を身につければよい。(50代)
- 卒論で学生は最も成長すると見られる。不可欠な卒業条件であろう。(50代)

#### 都市社会工学専攻

- 学部は教育するところだ。(60代)



■原理を理解する能力が身につけていれば、社会に出ても応用可能である。(60代)

### 都市環境工学専攻

■京都大学学部卒業の条件1～3はどのように判断するのか？重視するとはどういうことか？私が重視しようがしまいが条件が揃えば卒業できるので。(40代)

■物事の原理の重要性が理解できており、また学び方を身につけていること。(50代)

■専門の知識・技能は急速に更新される。大学で修得した知識や技能の限界を理解すること。それらを更新する方法と、その姿勢を育成することが大切である。(50代)

■専門の基礎知識、技能を身につけるとともに、専門領域に関わる諸問題に対し、個人の立場で判断ができる能力と倫理観を備えていること。(50代)

### 機械理工学専攻

■各専攻の教育目標である技術者としての知識・技能については、大学で何を学んできたのかわからないような根無し草を作らないよう座学（講義）にて徹底的に教育すべきである。卒業研究ではものを見る力、問題を解決する力、人的交流など技術者、研究者入門の第一歩となるような生きた教育をすべきと考える。(50代)

■探求の方法について身につけるのを主とし、専門的知識を従としている。(60代)

### マイクロエンジニアリング専攻

■物を探求し考える能力とそれを支える学力。(40代)

■京都大学学部卒業の条件1、2、3全てであると思う。社会から期待される京大像は高い。(40代)

### 原子核工学専攻

■上記1、3は両方必要と考える。専門の知識のみならず、それらの学び方も重要である。大学で教育した内容だけで、何年間も社会活動を行ってはいけず、その都度必要な専門知識を習得し続けていく必要がある。そのためには、何か新しい課題に直面したとき、どのようにその課題に向かっていくか、という観点から、具体的“学び方”は重要と考える。(50代)

■一概には言えないが、専門分野の基本的な知識と学び方を身に付けていること。(50代)

### 電気工学専攻

■専門の基礎を身につけていることと、学び方を身につけることが必要不可欠。知識をもつなら確かなものでないと困る。学業以外での活動をもって工学部卒業を認めるなどということは問題外である。(60代)

### 電子工学専攻

■理解や知識はその表現力（コミュニケーション能力）がともなわなければ客観的に評価できない。最近では、英語以前に日本語での文章や会話における表現力がおぼつかない学生が増えてきており、その対応も考えるべきである。(年齢不詳)

### 材料化学専攻

■自分で考える能力を身につけることを第一に要求している。(50代)

### 物質エネルギー化学専攻

■自分で考える習慣をつけているか否か。(50代)

■問題点を設定しておけば、それを解決する力が必要と考えている。(50代)

■専門の知識は重要なので、確かに身につけさせる。実験について理解できる。(60代)

### 分子工学専攻

■専門の知識・技術とともに研究の進め方、取り組み方の習得も必要。(50代)

■今後学部はかなり「学校化」せざるを得ないと思うが、高校卒業時の学力はともかくとして、学部卒業のためのバリエーションは従前と比べて低くしてはならないと考えている。(50代)

### 高分子化学専攻

■①講義を通じて各分野の基本的な思考法と法則を理解する。②実験を通じて合成、測定、計算等の技術を修得する。③演習を通じて思考力を養成する。を3つの目標にあげています。(50代)

■研究に対する姿勢。(50代)

### 合成・生物化学専攻

■1と2の間でいいと思う。4年生までですべての知識、技能を身につけるのは不可能だが、まったくなくては話にならない。足りない部分は大学院で習得することを前提に教育している。(30代)

■基礎が十分であること。(50代)

### 化学工学専攻

■物事の原理も理解した上で、専門の知識、技能を確実に身につけさせることに留まらず、新しいことを創造していくアプローチを習熟させること。(40代)

■問題解決を経験すること。(40代)

■1を通して3を身につける。すべてのことは出来ないのだから。しかし習ったことは知識としても身につけていること。(60代)

### エネルギー科学研究科

■原理と、それが実際に応用される筋道の理解を第一に、最小限な知識と技術を身に付けることが重要である。(40代)

■物事を深く考え、本質が理解できる能力。(40代)

■専門の知識、物事の歴史、学び方いずれも必要。しかし、全ての分野にわたって平均的に考えるのはおかしい。ある分野については専門の知識、またある分野については原理、残りの分野は学び方、さらに残りは興味というような教育が必要。(50代)

## 情報学研究科

■物事の原理を理解し、確かな知識を必要に応じて得るための学び方を身に付けていればそれでよい。(40代)

■物事の原理を理解し、原理に基づいて調べると必ず理解できるという信念を持たせること。(50代)

## 学術情報メディアセンター

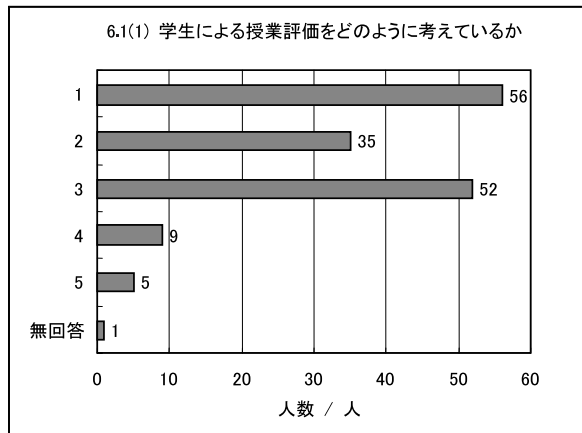
■自分で問題を見つけて、自分で解いてみるのが経験できれば良い。(40代)

## 6. 教育改善システム

### 6.1 学生による授業評価

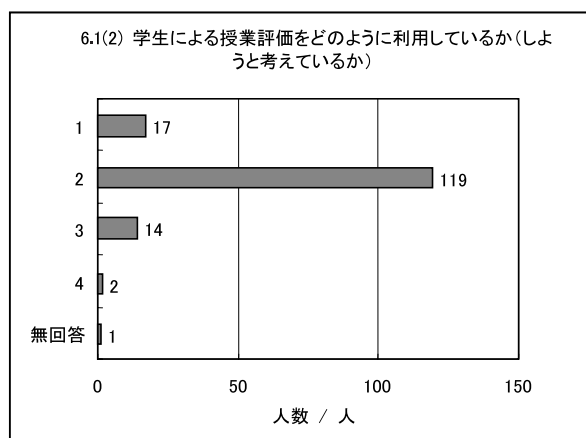
(1) 学生による授業評価をどのように考えていますか。

- 1 大変貴重な情報を与えてくれる。
- 2 多少偏見があるように思われる。
- 3 慎重に検討する必要がある。
- 4 役に立たない。
- 5 その他



(2) 学生による授業評価をどのように利用していますか（しようと考えていますか）

- 1 全面的に授業の改善に役立てる。
- 2 一部については、授業に取り入れる。
- 3 殆ど関係ない。
- 4 その他



## 6.2 先生がご自身の授業を評価する場合、第一の評価尺度としてどのようなものをお考えですか。

### 社会基盤工学専攻

- 学生の理解度。(50代)
- 学生が授業に対して、どの程度興味を感じてくれるか。(50代)
- 学生が理解できているか。(50代)
- 小生の班は、毎回、小テストを行い、学生の理解度を把握するようにしている。定期試験で、不合格者が少ないことを自分の評価尺度としている。試験問題が他の班と共通ゆえ、若干の競争原理が生まれる。(50代)
- わかりやすさ。(50代)
- 学生の知的好奇心を高めることができたかどうか。(50代)
- 学生の習熟度。(60代)
- 基本的な考え方や論理が理解できたか。(60代)

### 都市社会工学専攻

- 学生に知的興奮を与えられたか。(40代)
- 定期試験の結果をみて、どの程度授業を理解し、専門の知識を身につけたかを尺度とする。アンケートを授業方法改善の参考にしている。(40代)
- 授業がわかりやすいということと、最先端の研究にどう結びつくのか。(50代)
- 学生が興味を持っているかどうか。(50代)
- 新しい視点を学生が取得することができたかどうかを気にしています。(50代)
- 学生の興味とやる気を起こされるかどうか？(60代)
- ・学生の知的好奇心を満足させることができたか。・学生が理解できたか。・学生がさらに深く学びたいという気になったか。(60代)

### 都市環境工学専攻

- どれくらい準備して授業に臨んだか、学生の反応を見て説明を工夫できる教育技術。(40代)

■学生の知識獲得。(40代)

■学生の理解度。(40代)

■自分の講義は工学部を志望した学生には高校時代からほとんど学習してこなかった環境と健康に関する問題が多いので、これから工学を学んでいく上で理解しておいて欲しい知識、考え方を学生にわかりやすく伝えること、また学生がその意味を理解することを第一の評価尺度としている。(50代)

■物事の原理の重要性が理解できており、また学び方を身につけていること。(50代)

■学生の反応、理解度。(50代)

■学生の知的興味を満足させたかどうか。(授業評価である程度分かるし、講義の後での質問や雑談から判断できる)。(50代)

■学生による学理の理解、学理の意義を認める態度。(50代)

■工学的な原理をなぜ必要なのかを含めて教えてくれているか。(50代)

■講義内容への学生の興味と理解度。(50代)

■まずは学生が興味を持つかどうか。(50代)

■学生の参画意識(教員－学生間の双方向コミュニケーション)。(50代)

■授業内容に興味をもち、さらに自習によって深めようとする意欲が学生に湧くような授業が望ましいと考える。(60代)

■授業内容に心から関心興味を持つ学生がどれくらい出てくるか。(60代)

## 建築学専攻

■出席率。(40代)

■学生が興味を持ってくれたか。講義内容を理解したか。(50代)

■必要項目の理解度が重要であり、評価尺度としては試験の成績。(50代)

■わかりやすさ。(50代)

■学生の理解度。(50代)

■知的興味が沸くような刺激を受けたか否か。(50代)

■学生が理論の本質を理解できるかどうか。(60代)

## 機械理工学専攻

■学生とのコミュニケーションの手段として有用。講義をわかりやすくする努力は重要。ただし、どのレベルの学生に合わせるかは難しい。(40代)

■現実の問題とのリンク。面白さ。(40代)

■内容が偏っていないか。理解しやすい講義か。(50代)

■専門の基礎をできるだけわかりやすく教え、エンジニアとしての最小限の知識を与えること。しかし、居眠りなどをさせない迫力を持ってかつ、教える専門に基づく研究経験を生かして興味深く教えること。(50代)

■質問の趣旨がよく分かりませんが、学生の理解度を測る尺度としては、演習、レポート、試験の3つがあると思います。(50代)

■学生が科目に興味を持ってくれたか、理解したか。(50代)

■多くの知識を与えるのではなく、基本的な考え方をいかにわかりやすく伝えているかが最も



重要である。講義内容が論理的で筋道に飛びがないことも大切である。(50代)

■当学科を卒業した学生として最低限知っておくべき内容をカバーしていること。唯、単に知識の詰め込みではなく企業で問題となっている具体的な課題を解かせることによって、考える力をつけさせること。学生が社会に出た時に、こういった役割が期待されているか、そのためには、どのように勉強しておく必要があるかを、理解させること。(60代)

■学生が眠らずに最後まで受講しているか。十分な数の受講生が集まるか。(60代)

### **マイクロエンジニアリング専攻**

■授業の評価尺度は第一に平均的な学生における理解度である。全ての学生に対して100%の理解を求めることは困難であるが、7割の学生が授業内容の80～90%を理解することが目安であろう。(40代)

■学生の理解度。(40代)

■基礎的な考え方。(40代)

■万古不変の真理を教授する。(50代)

■知的好奇心を刺激したか。(50代)

### **航空宇宙工学専攻**

■その授業によって、受講学生がどの程度、①専門知識を習得したか、②学び方(勉強の仕方)を感じ取ったか。いずれも、授業途中に何回か提出してもらったレポートなどを見ていると、習得度がある程度判断できる。(50代)

■基礎的な事項、事象の原理の理解と応用など、授業で教える内容が適切なものかを吟味すること。(50代)

■専門分野の基礎知識が理解されやすい形で提供されていること。(50代)

■原理あるいは考え方が理解できたかどうか。(50代)

■講義で注意していることは、内容が独りよがりでないか、学生の目線にある程度立った説明になっているか、内容が面白いのか、「為になる」と学生が感じるか、等。(60代)

■物事の原理を平易に説明し、その基本を理解させること。併せて、学生への質問や小テストにより理解の程度を確認すること。(60代)

### **原子核工学専攻**

■コミュニケーションの有無。(50代)

■講義内容を、バランスよく時間内で説明し、少々の余談を含めること。(50代)

■原理・原則をしっかり教えているか、実際問題との関連を説明しているか、授業を補足するための適切な宿題を課しているか、基本的な事項を問う試験問題であるか。(50代)

■授業対象となる学問の体系と基本概念を明確に伝えること。(60代)

■授業内容が明快で理解が容易であること。また学生の考える能力を養うこと。(60代)

### **材料工学専攻**

■意欲ある学生の期待を裏切らず、意欲ない学生に動機付けをする。(40代)

■どれだけ準備に時間を費やしたか。毎年改善されているか。(40代)

- 学生の理解度と興味の持ち方（50代）；学生の習熟度（40代）。
- 授業時間内でどれだけ的事を理解してくれるか。授業を通じて専門分野への興味を持ってくれるか。（60代）
- 明解で、他の項目との関連を理解させようと考えている。（60代）

### 電気工学専攻

- 授業における知識の伝達能力。（40代）
- 授業内容に興味をもて、分かり易いこと。（40代）
- 熱意（授業内容に対する教員自身の興味・情熱など）。（50代）
- 知的好奇心を満足させる内容があり、講義内容の本質が明快に説明され、わかりやすいこと。授業に出席してよかったと学生から言われる講義。（60代）
- 個々の授業を評価しようとは思わないが、万一強制されるなら授業内容のレベルが第一の尺度となろう。（60代）

### 電子工学専攻

- 授業出席者数。（50代）
- 授業内容が、他の授業を受けるために必要な基礎的科目でないこともあるので、授業の内容を学生に全て細かく理解させたかどうかを評価基準にはしていない。重要視しているのは、物理的意味の理解であり、社会に出て再度この分野を勉強する必要があるとき、容易に取り組めるような知識を身に付けさせ得たかどうかを尺度としている。（50代）
- 知的な刺激を十分与えられたか。（50代）
- 学生の理解度を重要視している。但し、実際、学力差があるので、どの学生に標準を合わせるかで、理解度は変わることが問題と考えている。次に、学生が講義を通して得る知識以外に、講義の雰囲気から得る学問に対する興味が重要と考えているので、出席率を評価している。（50代）
- 学生による評価は、参考になる部分もあるが一概に外見的なもの（板書の見やすさ、話し言葉の明瞭さなど）に終始したものが多い。講義全体を通した内容や示唆するところまで踏み込んだ評価を期待したいが、する側もされる側でも、そのような評価法が定着するまでには時間がかかると思われる。（年齢不詳）

### 材料化学専攻

- 学生個々の習熟度（40代）；学生の理解度（40代）。
- 理解できるスピードで話しているか。板書が速すぎないか。基本概念をきちんと理解しているか。最近の学生は表面的に事象を丸暗記（コピー）するのが勉強と思い込んでいて、裏にある基本原理の理解にまで到っていないものの数が増えていることを心配する。研究室に来てからその学習方法を教えているのが現状です。（50代）
- 学生の理解度。7割の学生が内容を理解してくれるように努力している。（50代）

### 物質エネルギー化学専攻

- 学生の理解に結びつく講義の内容であるか。また技法が適切であるかを評価尺度にしていま

す。(50代)

■学生の理解度(60代); 30%の学生の理解度(50代); 理解しやすさ、明瞭性(50代)。

■学生の中に何人、講義内容に本当に興味を持ち、考えようとしているか。(60代)

### 分子工学専攻

■学生にとってのわかりやすさ。また学生自身がその授業に関係した問題を解析する能力。  
(40代)

■正確さ、わかりやすさ(一般ではなく京大を基準としたもの)。(40代)

■受講者が内容を理解できたか、面白く講義を聞いたか、将来に役立つか。(50代)

■学生に勉強する気を起こさせるものであること。(50代)

■学生に理解する能力を身につけさせたか、理解のための基礎知識を与えることができたか。  
(60代)

### 高分子化学専攻

■その科目の授業内容(基本法則)を正しく、かつ完全に理解してもらえたかどうかを第一尺度としています。(50代)

■分かりやすさ(50代); 内容のわかりやすい講義を目指す(60代); 学生の理解度(50代); わかりやすさ、興味が持てること(50代)。

### 合成・生物化学専攻

■自らが学生の立場に立って、理解しやすい講義であったかを自省するしかないと思われる。板書の方法、話題を取り上げる順序、説明の仕方など。(30代)

■受講者数が講義を重ねるごとに減ってきていないか。試験の平均点が予想(想定)平均点よりも著しく低くはないか。(50代)

■関連の話題を用意しているか(興味を与えるヒント)。(50代)

■まじめに聞いている学生が充分理解しているかどうか重要。真剣に聞いていない学生については評価する対象ではない。(60代)

### 化学工学専攻

■まず、毎回提出させるレポートを詳細に採点し、どの程度、教えたことが理解できるかをチェックし、自分の講義の良し悪しを教えている項目単位で評価し、次の講義で補足していくシステムを実施している。また、10年前から学生に講義アンケート、講義の採点を実施しており、これによって、講義で判りにくかった項目、講義の中で実施して欲しいと学生が考えていることを積極的に取り上げるベースにしている。一方、講義の魅力なども含めて小生のその講義の教員としての点数と自由意見を学生に書かせ、その平均点だけでなく点数が悪い場合の理由なども評価尺度としている。(40代)

■授業の中で1つでも面白いと思ってくれた学問的事項が参加者全員にあったほうがよい。  
(40代)

■学生が眠らないこと(40代); 眠らせずに書かせられたか。基礎的本質を理解させえたか  
(60代)。

■「生徒は教師の背中を見て育つ」という格言がありますが、学生に理解させようと熱心に授業をしていることが第一の評価尺度と考える。(50代)

### **エネルギー科学研究科**

■学生が努力した上で、授業内容をどれほど理解できているか。(40代)

■学部学生はまだ十分な専門性を身に付けていない。そのような学生に対しても理解できるような授業内容になっているかどうかを尺度と考えている。(40代)

■わかりやすさ(年齢不詳)；学生の理解(50代)。

### **情報学研究科**

■内容の深さ(40代)；Stimulation(50代)；学生の興味関心をどれだけ呼び起こせているか(40代)。

■学生が、授業を受けてよかった、新しいことを学んだという気持ちを持ってもらえるような授業をしたい。知識は、深い思考の結果として得られたものであるという認識を感じ取らせたい。(50代)

■基本的なものの考え方や問題の捉え方のパラダイムが理解されているか否か。(50代)

■原理、基本的考え方が上手く表現され、学生に伝えられているか。(50代)

■基本概念を学生にしっかりと理解させる。(50代)

■各回の講義の目標が何で、重要なポイントは何かが学生に伝わり、それが理解されているかどうかという点です。(50代)

■わかりやすいこと。学生に興味を持たせること(50代)；授業のわかりやすさ(50代)；わかりやすさ(50代)；明解かどうか(50代)。

■最先端の話題をいかに体系的にわかりやすく講義を行うのか、が重要と思える。基礎的な事柄は各自勉強すればよく、京大のこの先生でないと聞けない講義が重要である。各教員は教科書を必ず出版すべきである。教科書を出版するとなると、教員自身がいかにあいまいにしか理解していないのか自身でよくわかり、大変勉強になる。教科書を執筆している教員を高く評価する。(50代)

■試験・レポートの結果が重要です(50代)；学生の成績(50代)；出席率(50代)。

### **地球環境学堂**

■基本的な考え方を学生に理解させることができるかに重点を置いており、詳細の技術を余り教授されていないので学生には自分で学ばねばならないと思わせる教育。(50代)

■時代の変化につれ、ぜひともこれだけは知っておいてほしいと思うことを資料等を配布して理解を深める。(50代)

■学生の理解度。(60代)

### **学術情報メディアセンター**

■学生が理解できたかどうか。(40代)

## 7. 学科におけるカリキュラムと教育システム

### 7.1 現在、講義に比べて演習、実験など実技科目へのコマ当たり割り当て単位数が軽くなっています。これについてはどのように感じておられるでしょうか。

講義は授業と予習と復習からなるため単位数が演習や実験に比較して多く割り当てられているが、1学期間に取得できる講義数を制限するキャップ制の導入など、単位の実質化に対する教員の意識調査を行う目的がこの質問の背景としてあった。この質問ではこの点が隠されていたので、率直な意見が多く出された。

#### 社会基盤工学専攻

- 今後実験は拡充する必要がある。(50代)
- 実技科目への単位は、もっと重くすべきと考える。(50代)
- レポート等では演習が必要であり、特に問題はない(50代)；特になし(しかたない)(50代)；軽すぎる(50代)。
- もう少し、実験の単位数を増やして、京都大学でしかできない実験を習得させた方がよい。経費がかかり、難しい問題ですが……。現在は、卒論にこの点を置いています。学生実験では無理なので。(50代)
- 現状で良いように思う。やはり工学基礎をちゃんと理解させるような講義が中心でよい。(60代)
- 履修の苦勞に比べ、単位数が少ないため、履修しない学生が見受けられ、問題である。(60代)

#### 都市社会工学専攻

- 特に問題は感じていない(40代)；このままでいい(60代)；現在のままでいい(40代)
- 単位数を増加させるべきである(60代)；演習・実験の時間を増やすべきである(50代)
- 変更することで、教育がよくなるとは思えない。(50代)
- 米国では小学生の段階からプロジェクトを企画し、集金し、新しいことをはじめるという試みをさせている。それがベンチャーの育成に繋がっている。Ready-modeな演習実験ではだめで、自主性を持たせる努力が必要だと思います。(50代)

#### 都市環境工学専攻

- 我々の学科では演習の時間は以前より充実している。(40代)
- 教員の手抜き、学生の安直。(40代)
- 負担としては軽いのでよいが、学生の実習としては経験不足にならないが心配な面がある。(40代)
- 適切である(50代)；講義と演習はセットになっており、これでよい(50代)。
- 単位制の再評価(点検と見直し)と諸外国との大学教育内容との整合性チェックは必要であろう。(50代)
- 妥当である(50代)；問題はない(50代)；適切である(50代)。
- 通常の講義よりも演習・実験の方が学生はより興味を持って理解しようとする傾向が強い。その意味でも単位数は上げた方がよいと思う。ただし、内容をもっと充実させなければならな



い演習・実験もあると思う。(50代)

■専門分野によって異なる。一律に多少を議論する必要はない。(50代)

■演習・実験などをより重視し、手を動かす訓練が必要であると考え。そのためにも技術職員、TAの充実が望まれる。(60代)

■特に新しい分野については、実技科目のツケが取れない。そこで講義に実技を組み込む工夫をしているが、学生には評価されているようだ。(60代)

### **建築学専攻**

■単位数と費やす時間、エネルギーが比例していない。演習、実験は工学部では必要科目であるにもかかわらず。(50代)

■同等にすべきである。(50代)

■建築設計演習で充分演習を行っている。(50代)

### **機械理工学専攻**

■記憶型から探求型に変えるには、演習や実験を通した教育が重要で、学生の意識を変えるためにも演習等の単位数を軽くすべきでない。(40代)

■学生・教員ともに講義に比べて負荷は小さくはない。同等に扱っても良いのではないか。(40代)

■講義は(1h授業+2h予習と復習)から成立している。よって講義にそれに見合う宿題と小テストを取り入れる。そうすれば演習・実験とのアンバランスはなくなる。(50代)

■講義科目と演習は1セットになって実行するのが良いが、現状では、演習が減ってきているので演習を宿題として出して、講義時間に丁寧に解釈するように工夫している。皆さん、このような工夫でしのいでいるのが現状でしょう。(50代)

■演習・実験は増やすのが良い。(50代)

■演習や実験は大切な科目なので、単位数は講義並みに増やすほうが良い。(50代)

■講義科目が多く、また多くの学生は、アルバイトや遊びに忙しいためか、充分勉強していない。試験も期間を限って行われるので、一夜漬けに近く、未消化に終わってしまうキライがある。もっと科目数を減らし、演習を増やし、じっくりと勉強したと自信をもって言える形で卒業させる必要がある。(60代)

■教育上よろしくないを考える。(60代)

### **マイクロエンジニアリング専攻**

■演習・実験などにおける学生ロードは、レポート作成を含めると講義科目より多くなることもあり、コマ当たりの単位数が少ないことはバランスを欠いている面がある。しかし、だからといって演習・実験のコマ当たりの単位数を増やすのではなく、講義における予習・復習が必要となるようなシラバスとすることを検討する、あるいは講義科目と演習・実験をリンクしたカリキュラムに移行すべきと考える。(40代)

■演習が多くて講義時間が減ることも困る。(40代)

■良くない。演習・実験で体験してこそ記憶して残る。記憶は感情と連動している。右脳がなければ、ただの言葉でしか覚えない。(40代)

■学生の予習復習レポート作成などのロードを勘案すれば、演習・実験のコマ数あたりの単位数は講義と同程度にすべき。(50代)

### **航空宇宙工学専攻**

■演習、実験は講義と相補的なものであり、講義の内容の本質を理解する上においても不可欠である。理想的には、1つの講義科目について、少なくとも1つの演習や実験科目があるのが理想と考える。割り当て単位数の違いについては特に気にならない(現状で特に支障はない)。(50代)

■軽くすべきではない。(50代)

■少し重くしても良い気がするが、数値的根拠は無い。(50代)

■演習・実験は今後より一層重視していくことが必要と考えます。そのための人的・予算的措置を考えなければならないと思います(TAの充実等)。(60代)

■同等の比重にすべきである。(60代)

### **原子核工学専攻**

■実技科目は工学系では非常に重要な科目であり、単位数を増やす、必修にする等、現状よりもっと重視すべきである。(50代)

■実技科目のコマ当たりの単位数は講義科目と同じにすべきである。(50代)

■実技科目の単位数を増やして、積極的にとることができるようにしたほうが良い。現在は半必修として捉えられている。(50代)

■演習や実験などの具体的な実施内容を見ると(予備解析、レポート作成、結果発表など)、講義の単位数と同等に考えるのが妥当である(現状は軽すぎる)。(60代)

### **材料工学専攻**

■講義と演習を独立させる必然性はないと思う。したがって、「演習」は廃止するか「講義」と同じ単位数としてよい。実験は従来どおりでよい。(40代)

■演習、実験に比べて講義単位数が重い理由は、予習、復習が必要だからで、実験、演習の単位数を重くすることよりも、講義の予復習をしっかりとするような講義を行うべきである。(40代)

■実技科目の単位数はより重くすべき。(40代)

■これは実際に実験系の研究が主体である我々にとってはマイナスである。実験・演習の拡充を考えたい。(50代)

■良いことではない。学部のカリキュラム編成が大学科になったことで、本質的でないことで大変ゆがめられている。(60代)

### **電気工学専攻**

■適当である。これ以上多くすべきではない(40代);現状でよいと思う(50代)。

■実技科目の単位が少ないのはやむを得ないと考えており、出来るだけ必須化することが望ましい。(60代)

■逆にすべき(60代);可能な範囲で増したほうが良い(40代)。

### 電子工学専攻

■講義は実験実習と異なり、1時間について2倍の時間の予習復習が必要であるので単位数が多いと教えられました。むしろ、予習復習が出来ない位履修させている所が問題でしょう。(50代)

■演習・実験などは必修科目なので、単位数が軽いことに対して特に問題ないと考えている。(50代)

■一律に決めるのではなく、レポートの作成に要する自習時間などを考慮して単位数を決定するべきである。(50代)

■単位数の問題ではないと感じる。現に本学科では、実験・実習のみが必修で、その単位を増やすと選択科目の必要単位数が減ってしまい、教育水準の低下を招く恐れがある。(年齢不詳)

### 材料化学専攻

■桂一吉田と離れていればある程度はやむをえないと思う。(40代)

■最低レベルとして現状を維持すべき。(50代)

■桂キャンパスへ移転して実験に対する教員の負担増により実験の日数を増やすなど、少し手抜きになっていると思います。少しの負担増は各教員がしんぼうしてこれまでどおりの実験を学生にやらせたいと個人的には考えていますがおおくの教員の方はこれとは反対の意見を持っておられます。(50代)

■演習をやらなくことのつけは卒業研究にまわってきていて、研究室のスタッフの負担は大きくなっています。演習は不可欠です。やる気のない学生がいつでもやめられる制度は必要です。(50代)

### 物質エネルギー化学専攻

■単位数の割に内容は密度、量ともに増しており、学生の負担から言うともっと重視して単位数を重くしても良いと思う。(40代)

■軽くなったほうがよい。工業化学科では実験の単位を数年前に倍増したが、賛成できない(50代)

■講義と同等にすべき。(50代)

■実際には演習実験の方の単位数が多くても不思議ではない。(50代)

■今のままでよい。(60代)

### 分子工学専攻

■実状に合わせて単位数を増やしたほうがよい。(40代)

■実習にはもっと時間を割きたい。(40代)

■学生の負担の実際から考えるともう少し重くてもよい。(50代)

■内容を正しく評価した上で、単位数の変更も考慮すべきであろうと思います。(50代)

■工学部においては演習、実験などをもっと重く見てもよいと思う。(50代)

■講義について学生の予習・復習が足りない。(60代)

## 高分子化学専攻

- 軽くなったとは思っていません。(50代)
- 必修だから単位数は関係ない。(50代)
- 単位数に大きな意味はない。むしろ講義の2単位が過大なのかもしれない。(50代)
- むしろ単位数を増やすべきである。(50代)
- かかる時間を考えるとやむをえないのでは。(60代)

## 合成・生物化学専攻

- 同じ単位数としていいかわからないが、もう少し割り当てを増やしてもいいのではないか。(30代)
- 研究室に配属されてから“一からやり直す”ことも可能なので、ある程度はいたしかたないだろう。(50代)
- 困ったことである。(50代)

## 化学工学専攻

- 演習、実験の時間が少なくなっているのは、非常にゆゆしき問題の一つである。知識を論理的に使えるようにする、知識をもとに全く新しいことを創造する(直観力を養う)には、これらの皮膚感覚の学習が必須である。しかし、桂移転などもあり、実験を充実させるには、教員に過度の負担をもたらすのも事実である。よって、実験指導を専門とする教員、非常勤職員を学科単位で確保し、少ない時間内でも濃度の濃い実験ができるシステムを考えていくべきであろう。小生の場合、講義時に具体的な社会性のある例題をもとに随時演習を導入し、講義内容を理解させるよう努めている。(40代)
- 由々しき問題。(40代)
- 演習は講義に組み込んでも良い。実験は減らすべきではない。(40代)
- 特に問題ではない。現在の実技科目はデザイン科目とはいえないので、講義でカバー可能である。単位数よりも内容を吟味する必要がある。(50代)
- ある程度は仕方ない。現状で良いとおもいます。(60代)

## エネルギー科学研究科

- 特に問題はない(40代)；当然(年齢不詳)。
- 演習、実験などをもっと増やしたほうが良いと思う。一方でそれだけ負担が増え、十分な実験ができず逆効果になるとの不安もある。(40代)
- これは昔からの問題で、実情に活力がないことは明らか。(50代)

## 情報学研究科

- 現状のままでよい(40代)；それでよい(50代)。
- 計算根拠が形骸化しているので実態に合わせて同じ比重にすべきである。(40代)
- 時間との関係で簡単ではないが、一般的に言えば、演習や実験を増やしたほうが良いと思う。(50代)
- できれば演習などもう少し拡充できればと思う。(50代)

- 余裕があればもっと多いほうが良い。(50代)
- 講義が想定している自習がなされていない現状では演習、実験のほうがより単位を多くするのが妥当な気がする。(50代)
- 絶対時間が限られている現状ではやむをえない。(50代)
- 実質的な内容がトータルとして確保されていれば、割り当て単位が少なくても問題はないと思います。(50代)
- 実状からかけ離れている。もっと単位数を大きくするべき。(50代)
- 実験は非常に重要な科目であり、講義で理解できなかったことも理解できることがよくある。学生の主体性を高めるためにも良い。実際には実験の延長などが頻繁に行われており、単位数をもう少し上げるべきだと思う。また、実験では丁寧な指導が必要ではあるが、若手教員は時間的な余裕もなく、十分な指導ができていない。TAなどの待遇改善も必要と思われる。(1時間1000円程度の謝金ではだめである。)(50代)
- 問題があります。講義にホームワークをつける方向を一般化すべきだと思います。(50代)
- 増やすべきと考える。(50代)
- 演習、実験への学生の取り組みは熱心であり、問題視する必要はない。(50代)

#### **地球環境学**

- 実技科目の不足分は特別研究などで配慮するしかないと考えている。(50代)
- ありがたいことと思っている。(50代)
- 実験は環境系で重要。軽くなる(桂移転)のは問題である。(60代)

#### **学術情報メディアセンター**

- 不合理だと思う。演習、実験を増やすべきである。(40代)

**京都大学の学部教育の現状と改善すべき点について、感じておられることがありましたらお書きください。**

#### **社会基盤工学専攻**

- 桂移転のため授業(同じ科目の)が一日に集中しているが、学生も飽きやすい。(50代)
- 必要単位数を減じても、科目ごとの学習を増やすべき。(50代)
- 学部教育では、基本的に教科書を指定し、かつある程度統一することが大事と考える。また指定教科書を公表することで、学生の悩んで来た内容を知ることができ、専門教育のときに学生の持っているべき知識が明らかになるので便利である。またできればグローバル化を考えると英語の教科書の方がよい。(50代)
- 大学科制となったので、1学科の定員が多すぎるように思われる。学科コース制で、以前の小学科の伝統は残っているが、必ずしもうまくいっていない。定員削減を検討する時期に来たのかなと思う。少子化で、優秀な学生が集まらないことが懸念されるため。(50代)
- 他大学(外国も含めて)、他学部等での単位修得(卒業単位として)を奨励すべきである。(50代)



### 都市社会工学専攻

- 大学科制に移行したことの長所が生かされず、逆に学習意欲の低い学生が増加したなどの弊害が生じている。教員側の旧体制にこだわらないような意識改革が必要であり、斬新なカリキュラムの改変が求められる。(40代)
- 教員の負担は限度が来ている。(60代)
- もっと英語教育に力を入れるべきである。(50代)
- 学ぶことへの興味を引き出せるプログラムが必要だろう。(50代)
- 講義、単位の取り方にメリハリが必要。JABEE が適切かどうかは別にして、講義に緊張感が欲しい。(50代)

### 都市環境工学専攻

- 桂移転で学部教育への力の入れ方を以前よりも多くすべき。(40代)
- ・一般教養等の統合、・負担の均等化、・コスト概念の導入 (40代)
- カリキュラム全体の見直しが必要。(40代)
- 多数のパソコンを利用してデータ解析手法を教えることのできる設備がない。講義内容によっては実際にやって見ることが必須のものがあるが、このような設備がないため概念的な説明で終わらざるを得ない。(50代)
- 普通の学生 (20 %) には問題なし。放置すると脱落する 10 %、脱落予備郡の 20 % を対象にする Care が必要。(50代)
- カリキュラムについては現状でよい。(50代)
- 講義時間数を削減し、演習・実験時間数を充実させる。(60代)

### 建築学専攻

- 4年間で専門教育に費やす時間は実質2年半くらいです。これでは他のアジア諸国に比べて十分な専門教育ができない。京都大学だけで解決できる問題ではないが。(50代)
- 学生間で助け合えることがらと、自分自身で解決しなければならないことがらを理解させる必要がある。(60代)

### 機械理工学専攻

- 1回生からコース分属を行い、大学としての教育の意識改革を早期にできるようにするとともに、カリキュラム構成に無理のない教育を行うのが必要と感じる。(40代)
- 期末テストだけでは不十分である。数回の小テストや演習と組み合わせる。(50代)
- 各学科、コースでどのような技術者、あるいは研究者を育てたいのかをよく考え、それに沿ったカリキュラムを作ることが大切と考える。(50代)
- 専門科目を2回生におろしすぎている。1、2回生はもっと数学、物理、化学に集中すべきである。数学の基礎がない学生に専門科目を教えるのはほとんど不可能である。(50代)
- 科目が多すぎて教えすぎている。演習が足りない。勉強していない学生をもっと落第させて真剣に勉強させないといけな。何のための大学生活かと疑問に思う。外国との交換留学で、京大との提携校が年々減っている。これは、外国からの留学生が京大の講義科目、内容、指導について失望させられることが多いためと考えられる。(60代)

■自分の手で物を体験し、失敗できる実技科目の充実が必要。(60代)

### マイクロエンジニアリング専攻

■「自由の学風」は尊ぶべき理念であると思うが、放任主義と混同されやすく、取りやすい科目を選んで受講した結果、系統的な学習ができていない学生も見受けられる。4回生の夏に院試で4年間の講義内容を復習する学生が多いが、それ以前に、学部として期待する学習レベルへの到達度を学生自身が評価できるチャンスを与えるのは有効である。例えば、2回生、3回生、それぞれの夏休み後半、後期セメスター開始前に到達度検証試験を実施すると有効である。成績優秀者には奨学金などを授与し、学生の勉学モチベーションアップに繋げるのも卑近ではあるが、有効であろう。(40代)

■全学共通と専門とに壁がある。期間的にも内容にも学科間の相互乗り入れもすべき。米国ならEE(電気工学)とME(機械工学)なんかは共通の科目も多い。(40代)

■基礎科目が充実していない。(50代)

■多くの学生は、講義に出るだけで内容を理解して身に付けることができると誤解しているため、非常に多くの科目を登録している。また、一般に単位の認定が甘いこともそのような誤解のもとになっている。普通の学生が3回生で卒業に必要な単位が取れてしまうのは異常である。単位の認定をもう少しきちんとして、登録できる講義の数を制限すべき。(50代)

### 航空宇宙工学専攻

■上に述べたこととも関連するが、演習や実験(特に演習)をもっと増やす必要を感じている。講義の中、あるいは講義後のレポート課題を充実することも、演習の充実につながる。また、特に学部の授業で、英語で書かれたテキストを使用することが、ほとんどない。以前(下名が学生の25~30年前)は、学部の授業で英語のテキストを使用することも多かった。最近では、日本語で書かれた優れたテキストも多いので、全て英語のテキストにすることもないが、学部のおかげから、英語で書かれたテキストなどを通して、工学・科学英語になれ親しんでいくことは必要と考える。(50代)

■カリキュラム、成績評価、試験問題作成に関し、Peer reviewが必要。(50代)

■1回生での単位取得状況の確認と、取得単位不足学生への対応。(50代)

■全体的には現状で可と考えます。(50代)

■京都大学の伝統である「自由の学風」を今後如何に守り育てていくかが、一番重要なことだと思います。そのためには、若干逆説的ですが、基礎学力の徹底的なトレーニング、自由な発想・行動の生まれる空間の形成など、きめ細かな配慮を必要とするように感じます。(60代)

### 原子核工学専攻

■1・2年次の一般教養科目が十分に身に付いていない、特に数学力が乏しい、英語も大部分は弱い。そのため、3年次では復習もかねてレベルを落としているのが現状。3・4年次の専門科目も習得レベルは低い。要するに、「大学における単位取得が楽過ぎる」ことが主要因と思われる。外国のようにもっと厳しくすべきであろう。定期的に宿題を課す、甘い試験評価はしない、等。修士課程では評価は更に甘くなっていると思われる。(50代)

■大学科となって自由度が増加したことは評価されるが、その一方で基礎となる科目を履修し

ないで、専門科目を受講するケースがあり、講義が進めにくいこともあります。(50代)

■大学科制にして幅広い専門教育を目指した試みは、あまり達成していないように感じている。学生から見れば、専門性が見えず、勉学の目標と動機を得にくいようである(特に昨今の学生に主体的に学ぶことを期待するのは無理のようである)。専門性が明確な学科のなかで、共通的な専門基礎教育も課すのが良いように思われる。(60代)

### 材料工学専攻

■クラス担任、チューター制などを通じて、学生個々へのメンタルケア、学習管理を行うことは大事ではあるが、現在の体制のままでこれを行うことは確実に負担増となり、反対である。(40代)

■講義科目が細分化しすぎていること。(40代)

■全体と指定化に教育レベルを底上げし、実際の工学分野への興味を育成していくかに腐心している。(50代)

■学科教育科目のエッセンシャルミニマムが何かを策定し、各科目の相互関係を明確に規定するシステムがまだ充分にできていないと思います。(60代)

### 電気工学専攻

■試験期間が長く、講義回数が圧迫されているように感じられる。(60代)

■全学共通科目の更なる改善が重要である。特に、全学共通科目担当者の意識改革をさらに進める必要がある。それと共に、専門科目担当者も反省すべき点があるように思う。(60代)

### 電子工学専攻

■いくら京大生が優秀でも、理解が定着するには時間がかかります。専門の講義をただ早く勉強したいという一般的な希望だけを取り上げて早くするのは考えものと思います。(50代)

■履修登録時に単位数の制限を行うべきである。また、登録した科目を受験しなかった場合や、不合格になった場合にはそれを何らかの形で評価に反映させるべきである。(50代)

■他大学では、入学時でのリメディアル教育のみならず、学年が進行して取りこぼした科目などについてもリメディアル教育を考えているところもあるようです。2重登録や再受験の許諾などによる小手先の方法ではなく、複数の科目を束ねた総合的な視点からのリメディアル教育を考える必要があるかもしれない。(年齢不詳)

### 材料化学専攻

■教養部の解体は大失敗だと考えます。いまさら取り返しがつかないと思いますが、60歳以上の教員は学部教育の負担を増やすなどの対策を講じるべきと考えます。(50代)

### 物質エネルギー化学専攻

■少人数教育を充実すべきである。(40代)

■教育面での努力に対する評価が必要。教員数の増加によるより決めの細かい教育の実施。教員間の負担の平準化。教育に熱心な教員の採用。(50代)

■学生の進路設計を支援し、適切な受講メニューを作成してやることが重要課題であると考え

ています。(50代)

■学部・講義については特に問題とすべき点は見当たらない。(50代)

■コースわけ後は、実験、授業とも吉田でなく桂で行うよう方策を考える。(60代)

■考え、自ら判断することの必要性を認識させ、それができる知識を身につけさせる。(60代)

### 分子工学専攻

■教員が profess する授業を行う。もともと難解なものを教えているのに「気楽でわかりやすい」は期待できない。受講する側の意欲を高めるべき。(40代)

■よい意味でのエリート教育が出来るように学内のコンセンサスを得て、授業単位認定など厳しくすべきである。このままでは、卒業資格の無い人物がどんどん増す。(50代)

■例えば10年前と比べてFD活動などが行き届いてかなり「現代風」になったと考えられる。全学共通教育と学部専門教育のミスマッチを改善しある程度の効率化を図ることが必要と思える。(50代)

### 高分子化学専攻

■適切なサイズの設備の整った教室を増やすべきである。1クラスは1人の教員が責任をもって担当する。コアカリキュラム（進学する専攻によらないで共通に必要な科目の選定）を確立させる。(50代)

■システムが悪いとは思わない。講義義務を軽視する傾向が問題。(50代)

■学部教育のための設備が貧弱である。教育用予算も不足している。(50代)

■キャンパスが離れているのは異常。非効率。(50代)

### 合成・生物化学専攻

■古きよき時代の京都大学に理想を求めすぎではないだろうか。もちろん「自由」というのはもっとも大事な点であり守るべきであるが、なんでも学生にまかせきりは今の時代、やや無責任に感じる。(30代)

■学部教育は“基礎”に徹するべきである。妙に先端的なことを教えるのは却って危険。(50代)

### 化学工学専攻

■帰属意識の醸成の為、低年次からの小規模コースへの分属（あるいは小学科制）を進めるべき。大学科制への改組移行の全体としての質の低下は著しい。(40代)

■工学部の場合は、今後、全教員が桂へ移り、学部学生を吉田に残していくことに伴う諸問題を如何に解決していくかにつきる。桂移転は全学の問題であり、大学独立法人の中で最大の学生数を保有する工学部の教育は大学経営の中で重点的に考えざる得ない項目であり、人的、資金的投入も全学レベルで投資することが必要であろう。具体的には、1) 研究施設よりも学部教育施設の充実を図る。2) 学部教育の教務職員の充実を図る。3) 全学共通科目との協力関係をより推進する。(40代)

■昔は、教育を考えなくても学生は自分で主体性を涵養してきたが、現在では主体性を身につ



けさせる科目が必要である。したがって、創生型科目（デザイン科目）を設けることが大切である。（50代）

■一般教育科目を含め、シラバスをもう少し詳細化し、その科目を履修するのに必要な知識（どの科目の履修が必須か）を明確にすべきであろう。例えば、微分方程式は多くの講義で用いるが、現状では2回生後期まで系統立てて学習する機会がない。（50代）

■部屋は十分な大きさとすること。黒板の照明をよくすること。（60代）

## **エネルギー科学研究科**

■専門を1、2回生に落としたことが間違い。1、2回生は昔の教養部のように専門と関係なく教育を行い、自分を見つめなおす時間を与えるべき。納得して専門に来ることによって学習意欲が高まる。さらに専門以外の知識も専門を学んでいく上で重要である。（50代）

## **情報学研究科**

■特になし。（40代）

■専門科目を1回生から引き上げて、語学、A群、専門基礎科目など将来のベースとなる科目を中心としたゆったりしたカリキュラムを組むべきである。4回生の桂行きは後期からでよい。一方で修士は教育課程として現在の学部科目の一部を修士に上げて良い。（40代）

■どこの大学でもそうだと思うが、講義数の割合や数が演習や実験に比べて多い。このような状況になったのは科学技術が進んで教えることが多くなったためである。授業で教える内容を基本的なところに絞って、応用的なところは演習でやれば良いと思っている。そのために、工学部の中でも各学科でカリキュラムの見直しをする必要があるのではないかとと思っている。（50代）

■大学をもう少し外部と連携した開放型の教育も今後考えてゆく必要があるのではないかとと思われる。そのようなことを通じて人格を磨いたり、価値観や目標意識を形成してゆけるのではないだろうか。（50代）

■単位認定を厳密にすべき。（50代）

■専門の講義でも自由にTAが使えるようになるとレポートなどもより頻繁に出せるようになり、講義の質が上がると考える。（50代）

■代行措置なしの休講が多すぎる。（50代）

■カリキュラム策定に関して真剣な議論がされていないのではないかと。新学科の発足時には検討がなされるが、定期的には行われていない。何を教えるのか、担当者全員で議論すべきであるし、また、授業の相互視察なども必要と思われる。学生の授業評価の前になすべきことがたくさんあるように思われる。（50代）

■会議等で時間をとられすぎて講義がおろそかになる傾向がある。（50代）

■長い人生の中で大学教育はごく一部の期間に過ぎない。自ら学び、自らを成長させる意志と方法を身に付けさせることが重要である。現状は受身の学生が多い。あまりにも多くのカリキュラムや機会を与えすぎているのかもしれない。（50代）

## **地球環境学堂**

■地球工学科では公共政策論のような科目を導入するなど時代の変化に対応した新しい科目を



積極的に導入すべきであろう。(50代)

■工学部8号館の第2講義室のプロジェクターが古く、色が鮮明でない。新しくしてほしい。TAをつけてほしい。(50代)

■京大生の卒業後、社会での役割は日本と国際社会でリーダーになれること。国際競争力を持ったリーダー養成である。(60代)

### 学術情報メディアセンター

■講義内容をオープンにして生徒と先生の密室状態を解消すべきである。そのためにICT技術を積極的に活用してゆくべきである。(40代)

## 7.2 セメスター制\*への移行についてどのような影響がありましたか。

\* 2002年度からセメスター制（一年を前期と後期に分ける2学期制）への移行に伴って、工学部での大きな変化は、前期試験が9月から7月になった点である。4月初めと7-8月に行事が集中する点などの問題が指摘されているが、特に悪い影響はなく、むしろ改善された点が多いことがアンケート調査からわかった。8月末からの院入試の時期の変化による試験勉強時期の変化については賛否両論あり、専攻によって大学院入試時期が分裂した。

### 社会基盤工学専攻

■3月と4月の学年移行期が繁忙で、新学期の準備が十分にできなくなった。(50代)

■特に変化はないと思う(60代)；特に感じない(50代)；大きな影響はない(60代)。

### 都市社会工学専攻

■前期において、試験までの日程が継続できるので教育上好都合となった。(40代)

■気がつかなかった。(50代)

■休講した場合の補講が難しくなった。夏休みがまとめて使い易くなった。(60代)

### 都市環境工学専攻

■特になし(50代)；以前の状況が分からないので回答できない(40代)。

■夏も冬もスケジュールが非常にタイトになり、やり難い。(50代)

■学部教育という面ではスムーズに行われたと考えている。(大学院入試の準備等に若干の影響があった。)(50代)

■8月中旬の混雑、各種入試、オープンキャンパスなど、この時期に集中しすぎ。(50代)

### 建築学専攻

■夏休みにまとまった研究や教育が出来ない。(50代)

### 機械理工学専攻

■8月の日程が厳しすぎる。大学院入試と重なり、採点の負荷が多大。もっと余裕のある日程が望ましい。(40代)

■試験期間に余裕がなくなった。(50代)

### マイクロエンジニアリング専攻

■講義自身には特に影響はなかったが、夏季休暇の時期が欧米とずれたため、6~7月に集中する国際会議へ出席しにくい状況である。(50代)

### 航空宇宙工学専攻

■大きな影響はないように感じる。後期については特に何も影響はない。ただ前期については、セメスター移行前では、夏休みに足りないところ／理解できていないところを、学生が自主的に勉強／復習して前期試験に臨めたので、やや学生の理解度は高かったのではなかろうか。(現在は、夏休み中、多くの学生はほとんど勉強していないであろう。)(50代)

■特に影響なし。セメスター制になって良くなったと思います。(50代)

### 原子核工学専攻

■セメスター制は避けられない制度であろうから教員の意識改革が先ずは重要であろう。(細切れる的な)科目数の増加、重複、半期完結になっていない講義内容、等、全般的にカリキュラムを見直して再編すべきである。(50代)

### 電気工学専攻

■日本の4月入学の形態でセメスター制をとることは、時間的に余裕がなく、教育的に効果が低いという面がある。(40代)

■セメスター制が実質的に機能していると感じられる側面がほとんどない反面、とくに前期科目において、学生が講義全体を復習する時間を持てることなく定期試験にすぐに突入する状況になったことは、少なからぬ影響を与えていると思います。(40代)

■夏休み前に前期試験があって良くなったと思う。(50代)

■講義が終了するとすぐ試験となるため、夏休みに復習をして試験を受けることができなくなっており、課外活動にはかえってマイナスになっているかもしれない。(60代)

■専門科目に関する限り、ない。(60代)

### 電子工学専攻

■前期試験が7月に早まり、院入試が早まったことで、四回生前期は院入試の勉強期間となり、四回生前期の科目は実質ないのも同然となっております。(50代)

■セメスター制では、最も暑い時期に講義及び試験を実施しなければならないため、違和感がある。何のためのセメスター制なのか、セメスター制により得たものと失ったものを比較し、再考すべきではないか。(50代)

■学生の夏休みの過ごし方が気になる。(50代)

■通年科目を担当してこなかったもので、特に影響は感じない。前期の夏休み前の定期試験については休暇中での復習の時間的余裕がなくなったデメリットもあるが、後期科目とのバランスからも致し方がない。(年齢不詳)

### 材料化学専攻

■夏休みに勉強する時間がなくなったため、理解不十分のまま受験するものが多く、不合格者数が増えているようである。1年生なら復帰が容易なので、意識を強く持たせるにはよい機会であるとも考えている。(50代)

### 物質エネルギー化学専攻

■夏休みの課題が出せなくなり、また夏休み期間中全く勉強しないため、明らかに学力の低下を招いた。(50代)

■8月前半が多忙である。(50代)

■講義科目については特に大きな影響を受けていないように思います。(50代)

■国際的なルールと同じになってよい。(60代)

### 分子工学専攻

■夏が忙しい。(40代)

■8月のほとんどと9月が夏休みとなるので、個人的には研究活動が行いやすくなった。(50代)

### 高分子化学専攻

■前期終了と院入試が連続することになり、貴重な研究時間であった8、9月期間が実質的に教育のための時間と化してしまった。(50代)

■入学試験等の雑用が多く配置されることから時間の余力自由度が極端に少ない。(50代)

### 合成・生物化学専攻

■休み前に試験を行うことは学生にとってはよかったのではないか。教員にとってもやりやすくはなった。ただ、これが本質的な改善となったのかはあやしい。(30代)

■7、8月が忙しい。(50代)

### 化学工学専攻

■特に影響なし(50代)；セメスター制の移行は、基本的には影響なし(40代)。

■以前の「夏休み後に試験」よりは良いが、夏に全く余裕がなくなった。(40代)

■講義や試験が8月上旬まで延びたことにより、クラブ活動の大会と重なるケースが出てきた。7大戦など7月中は避け、8、9月に集中するよう提案できないか。(50代)

■4月から始まる日本の場合には無理があるように思う。(60代)

### エネルギー科学研究科

■特に影響はない(40代)；影響は特にない(60代)。

■夏休みにレポート課題を出すなど、時間をかけてゆっくり考えさせることができなくなった。(40代)

■後期は冬休みがあるが前期は全くない。教授方にとっても習う側にとってもマイナスが多い。(50代)

## 情報学研究科

■通年科目だと前期の失敗で後期を捨ててしまう学生が見られた。この点は改善されている。(40代)

■特に影響は感じていない(50代)；あまり無い(50代)；特になし(50代)(50代)(40代)(50代)(50代)；何も変わっていない(50代)。

■学期末が多忙になったが、休学のあり方が明確になるなど改善された面が多い。(50代)

■講義回数が少なくなった。(50代)

■試験成績については特に影響は無い。9月にまとまって研究がしやすくなった。メリハリがついてよい。(50代)

■成績評価の締め切りにせかされ、忙しくなった。(50代)

## 地球環境学

■特になし。(50代)(60代)

■採点を完了させるなどの時間が少し足りない。(50代)

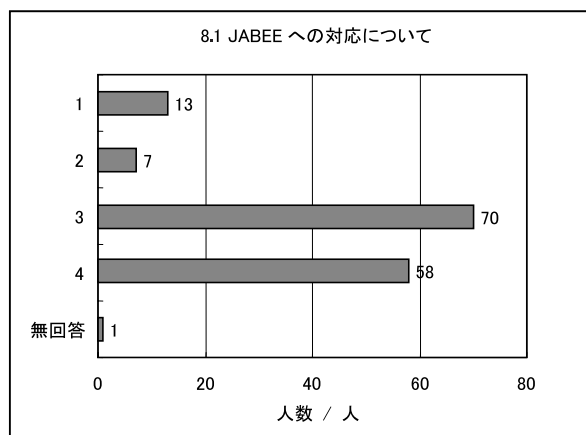
## 学術情報メディアセンター

■学生にとっては良かったのではないかとと思っている。教員にとっては夏休みがほとんどなくなってしまった。8月は採点、院入試など。9月は学会。(40代)

## 8. JABEE への対応

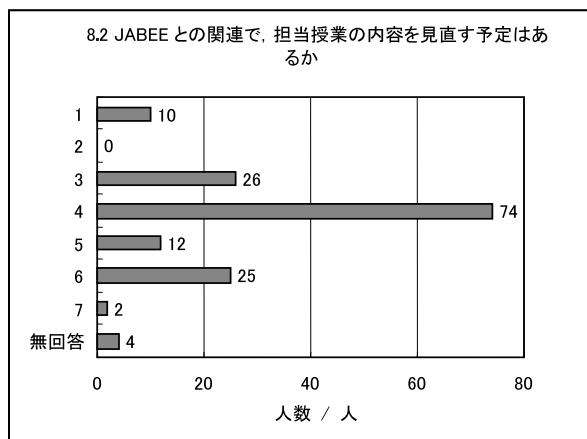
8.1 JABEE にどのように対応するべきと考えているか。JABEE への対応についてはどのようにすべきとお考えですか。JABEE とは日本技術者教育認定機構 (Japan Accreditation Board for Engineering Education) による教育プログラムの認定制度のことです。

- 1 JABEE について分からない (知らない)。
- 2 結構なことなので、積極的に取り組むべきである。
- 3 従来のシステムとの整合性をはかりながら、進めるべきである。
- 4 従来のシステムの方が良いので、参加しない方が良い。



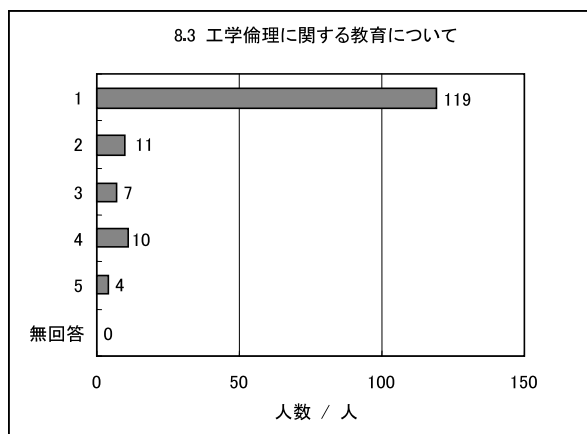
## 8.2 JABEE との関連で、先生の授業の内容を見直す予定はありますか。

- 1 既に見直している。
- 2 大いにある。
- 3 一部、考慮して変更を加える。
- 4 基本的に、これまでの授業内容に変更を加えることはない。
- 5 授業に対する JABEE の要求は知らない。
- 6 JABEE への対応を進めていない学科の講義である。
- 7 その他



## 8.3 工学倫理に関する教育についてどのようにお考えですか。

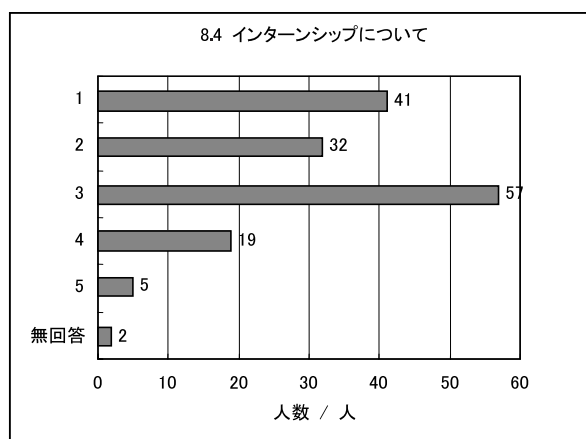
- 1 JABEE とは関係なく、当然教えるべき科目である。
- 2 工学倫理は必要なことであるが、大学教育の一環として教える必要はない。
- 3 JABEE に対応するために教えてもよい。
- 4 分からない。
- 5 その他





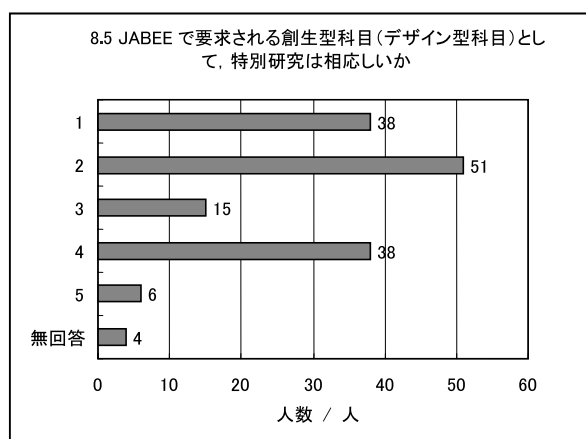
#### 8.4 インターンシップについて、どのようにお考えですか。

- 1 学部教育の一環として積極的に推進すべきである。
- 2 大学院において推進すべきである。
- 3 学生の自主的判断にまかせればよい。
- 4 あまり意味がないので、推進する必要はない。
- 5 その他



#### 8.5 JABEE で要求される創生型科目（デザイン型科目\*）として、特別研究は相応しいと思われませんか。

- 1 相応しい。
- 2 創生型科目と見なせないことはない。
- 3 創生型科目と見なすのは難しい。
- 4 創生型科目とはどういうものかそもそも知らない。
- 5 その他



\*「経済・環境・社会・政治・倫理・健康・安全・生産性・持続性といった視野を採り入れながら、システム・構成要素またはプロセスをデザインする能力の育成」（化学工学、Vol.70, No.9, p.443）

## 9. キャンパスの分散化（桂移転）と学部教育のあり方

桂移転に伴い学部教育のあり方も大きく変化すると予想されますが、先生にとって一番大きな変化はどのようなことと考えられますか。

3.4 項の質問「法人化や桂移転により、学部の講義・演習・実験等の負担が増えたと感じですか」の項目と質問に重複があった。

### 社会基盤工学専攻

- 同じ科目の授業が一日に集中すると学生の緊張が授業中続かない。(50代)
- 往來のための時間ロスが大きい。(50代)
- まだ移転はしていませんが、桂と吉田の移動は本当にばかばかしい。桂での一貫教育を期待しています。(50代)
- 未移転ゆえ不明です。(50代)
- 時間的ロス。(50代)
- 吉田デイで学部教育を週のある特定の曜日に集中させるのは効果からやむをえないが、連続の講義では教員が疲れ、教育サービスの低下を生じるのではと危惧する。(60代)
- 学生との接触の機会が少なくなることが心配。(60代)

### 都市社会工学専攻

- 移動時間がかかる。普段は配属前の学生との接触は教室（classroom）外ではまずないので、余り影響はないだろう。(50代)
- 今は不明(60代)；まだ移転していない(50代)；まだ未経験(60代)；移転前なので分からない(40代)。

### 都市環境工学専攻

- 教員の負担増、学生への目配りの減少。(40代)
- 時間的ロスが大(50代)；移動時間の増大によるロスが増えたこと(40代)。
- 学部生との日常的接触時間がなくなることが心配である。(50代)
- まだ移転しておらず、変化はない(50代)；移転前でイメージがつかめない(40代)。
- 学部生と大学院生との日常的な（有形、無形の）交流機会の減少。(50代)
- 学部学生と教員（特に若手教員）、大学院生との接触機会やコミュニケーションの減少。(50代)
- 移動にかかる時間のロス。学生との接触の機会が減少、来年はさらに激減。(50代)

### 建築学専攻

- 教員の時間ロスと教育負担の増大（学生ケアの必要性）の増大による。工学研究科ばなれの進行。大学院進学時に東大へ進学する学生の増大による、優秀な学生の流出。(40代)
- 学部生と接触する機会が、講義以外にほとんどなくなった。研究の時間が十分取れなくなった。(50代)
- キャンパス間の移動と、講義資料の準備、運搬などが従来より困難になっている。(50代)

■学部学生とのコンタクトが事実上行えなくなっている（オープンオフィスでは対応しきれない）。(50代)

■往復に伴う資料運搬の煩雑さ。(50代)

■両者の移動のため時間と労力が多大である。学部と大学院を分離することは実際現場（教育・研究）に携わらない人間の考えた極めて無責任なシステムである。こんな事が長続きするはずがない。気がついた時には、教育の質、研究の遅れ、教室の低下など手遅れであろう。(50代)

■吉田にかよわなければならなくなった点。(50代)

■学部学生とのコンタクト（キャンパスで会うだけでもよい）が減少した。(60代)

### **機械理工学専攻**

■移動等の教員の負担が大きくなるため、どうしても実質教育に割ける時間が減る。(40代)

■まだ吉田のため実感としてはない。(40代)

■教授層よりも、若い助手の方が演習、実習のために桂と吉田を行き来するための研究時間の減少が心配である。(50代)

### **マイクロエンジニアリング専攻**

■時間的ロスが大きく、また学生も質問に来づらい。(40代)

■まだ移転していないのでわからないが、カリキュラムを大幅に変えること。(40代)

### **航空宇宙工学専攻**

■現在所属の専攻はまだ桂に移転していない。しかし下名は、現在、居室が吉田（講義・会議）、実験室が宇治（学部学生実験、4年・大学院生の研究指導）、という状況にあるため、多少、桂（研究、大学院教育）、吉田（学部教育）、と似通っている。これまでの吉田、宇治の二重生活の経験からすると、一週間に何度も、桂－吉田（宇治－吉田）を往復するのは、疲れる（時間のロスが大きい）。これまでもよく言われているが、いかに吉田での仕事（学部教育）を、特定の曜日に集約するかが、重要であろう。(50代)

■学部講義と大学院講義が別の場所で行われることが、最大の変化と思います。それに伴う移動・待機時間の効率化が最大の検討課題です。(50代)

■具体的な経験はまだないが、既に移転した方々から大変な不便と非効率さを感じることをしばしば聞いている。(年齢不詳)

### **原子核工学専攻**

■物理系所属につき正確な実態は把握していないが、先生方の「移動時間の大幅増」、あるいはそれに伴う研究時間の縮減、学部生にとっては「先生との触れあう機会の減少」など、マイナス面のみが感じられる。(50代)

■無意味な移動時間が増えること。(50代)

■学生にとっての不便さが気になります。(50代)

■学部専門教育が実質的には3年までになり、段階を追った教育を進めるうえではかなり過密になっている。そこで、修士課程までを含めた6年一貫教育として再構築する必要を感じてい

る。(60代)

### 材料工学専攻

■移転が大変。学部、研究科で一体移転を実現すべき。(40代)

■現在は過渡期で授業、研究が桂と吉田の二手に分かれてせねばならないこと(60代)

### 電気工学専攻

■学部生との接点が講義以外で無くなった。他の教員と会う機会が減り、教育に関する議論が出来なくなった。同時に他の教員の講義の室を把握できなくなった。(40代)

■講義時間以外での学生とのコミュニケーションがとりにくくなった。(40代)

■意識するしないに関わらず、学部学生との距離感の増大が引き起こす何らかの変化。(40代)

■移動に要する時間ロス(教育のあり方自体は余り大きく変わっていないと思う)。(50代)

■資料、情報が分散して不便を感じることがある。吉田には学生図書は配置されているが、研究用の図書がなく、教員にとって不便であることがあるだけでなく、学生が大学に関し研究的な雰囲気を図書室で感じられなくなっているように見える。講義以外のときに学生と道ですれ違ったりすることを含め会う機会が少なくなっており、学生の顔を覚える機会が減っている。(60代)

■時間的ロス、および学生との接触の機会が減ったこと。(60代)

### 電子工学専攻

■時間がたくさんとられること(あるいは多くの時間が無駄になること)、体力的に疲れること。(50代)

■学部教育のために、吉田キャンパスに通うことは、時間のロスもあるが、学部学生と接する機会や時間が非常に少なくなったのは、残念なことである。(50代)

■学生に対する有形無形のサポートが弱くなったことは否めないと思う。施設の維持管理も手薄になっている。事務の人員配置や予算面での特段の配慮が望まれる。(50代)

■時間的負担の増大である。(年齢不詳)

### 材料化学専攻

■吉田キャンパスで講義を行う際の時間的拘束が非常に大きい。(40代)

■移動時間の増大。(40代)

■私自身はあまり変わってないと思うが、学生にとっては教員への相談が出来なくなった点が問題だと思います。(50代)

■常時学生と接触できなくなった。大学院の講義と重なってしまうはめになった。移動のため学部・大学院と連続講義ができなくなった。(50代)

■大学のキャンパスらしくなった。研究室の汚いイメージがなくなった。学生が自立するようになった。(年代不明)

### 物質エネルギー化学専攻

■通勤の負担と学生からの質問を十分に受けられる時間が取れない。(40代)

- 学部との距離がやはり大きな損失となっている。(40代)
- オフィスアワーの確保が困難になりました。(50代)
- 時間的制約の増加。学部学生が自室まで気軽に質問に来られなくなった。(50代)
- 桂－吉田間の移動は負担が大きい。(60代)
- 1時間の授業に往復でその倍。合計3倍の時間がかかる。(60代)

### 分子工学専攻

- 学生との交流。(40代)
- 学生が質問しにくくなった。Eメールによる質問もあるが今の学生は表現力が著しくないので対面して誘導してやらないと質問自体が不明確である。(40代)
- 講義に対する負担増。(50代)
- 桂は研究の場であり、吉田は教育の場であると分離されている。この観点から、教育方法を再検討する必要。(50代)
- 移動に時間を取りすぎること。学部学生とのふれあいが少なくなったこと。(50代)

### 高分子化学専攻

- 通勤のために浪費する時間が多くなったこと。学生との物理的、心理的な距離が遠くなってしまったこと。(50代)
- キャンパス内移動の負担。(50代)
- 実働時間の大幅増加。(50代)
- 非効率。無駄な時間が多すぎる。学生の顔が見える教育ができない。(50代)
- やむを得ないことではあるが、移動時間を要する。(60代)

### 合成・生物化学専攻

- 授業や実験にいくのが大げさなことになってしまった点が最も大きく変化したところである。時間も労力も大きい。これによって学生に対して余裕のある対応がとりにくくなってしまった。バスの時間に合わせて帰るために、付き合ってやれないことが多い。(30代)
- 質的に変化はないが、やはりキャンパス間の移動が大変である。(50代)
- 学部学生とのふれ合いが減った。研究室の院生との discussion がめっきり減った。時間がない。(50代)
- 学生が教員の部屋を訪問する機会が少なくなりコミュニケーションがあまりできなくなった。(50代)
- 往復時間が無駄で負担が大きくなったと感じられる。(60代)

### 化学工学専攻

- 1. 学生との接触機会が少なくなった点。これに伴い、レポートを丁寧に採点したものを返却する、E-mailで質問を受け付けるなどの手段に変化が生じている。このように学生とのコミュニケーション手段は変わったが、これまで以上に効果が出ている部分もある。
- 2. 講義の準備などに時間的な制約がある点。講義用プリントなどの準備に時間的、空間的制約がある。



3. 学生にとって精神的に距離がある感覚をもたらしている点。(40代)

■講義時間外の質問やレポート提出等の自由度が全くなり、学部学生との交流時間が激減した。(40代)

■学部生徒の接触時間の減少。授業外での会話の時間が激減。(40代)

■研究室と教育現場が遠いことは学部学生の教育効果を低下させる。(50代)

■個人的には往復の時間の損失であるが、研究室の教員やTA学生がばらばらに吉田キャンパスでの講義や演習・実験に時間をとられる。その結果、研究室でのゼミ等、研究室運営という観点で、非常に困難をきたしている。(50代)

■分散化は余りよいことではない。(60代)

■吉田の教室の確保が難しい。学生が安心して居れる場所を作るべき。(60代)

### **エネルギー科学研究科**

■教育の場所が、教育のあり方に影響しているとすればこれは本来望ましくない。(40代)

■学部教育の予算が減った。(50代)

### **情報学研究科**

■情報学科はまだ移転していないが、移転後は学生との接触の機会が少なくなるために、精神的な問題を抱えるのではないかと考えている。(50代)

■まだ移転していない (50代)；未移転 (50代)。

■予想ですが…他研究科と離れるのは総合大学の面白さを減じることになると心配しています。(50代)

■キャンパス往復の時間的ロス。(50代)

■桂に移転した先生とのコミュニケーションが希薄になったこと。(50代)

### **地球環境学堂**

■地球工学科は来秋に移転を控えている。これに対応した講義時間割の変更を実施した結果、類似科目が同じ曜日に集中している。学生への教育効果について、注意深く検討する必要があると考えている。(50代)

■学生とのコンタクトが希薄になった。どこの学生かわからないまま終わってしまう。(50代)

### **学術情報メディアセンター**

■まだ移転していないので変化は無い。(40代)

## **10. 社会の動向と授業内容**

環境問題、ハイテク、IT、情報社会、少子高齢化、グローバル化、バイオテクノロジーなど、大学を取り巻く社会の動向と授業内容との関連において、先生が常に心がけておられることをお教え下さい。

## 社会基盤工学専攻

- 社会動向と関連づけるようにしている。(50代)
- 社会環境が変わっても、学生に対する教育のあり方は、そう大きくは変わらない。基本的姿勢は変えない。(50代)
- 21世紀に地球規模で最も大きな国家間（民族間）での問題は、資源の争奪であると思っているので、関連する授業において学生に述べている。(50代)
- 学部の講義では、基礎科目故、目先の社会情勢とか政治動向には関連づけずに、学問の学理を講義している。余談では、最近の科学技術の動向を述べることもあります。あまり短絡的な情報は講義しないことにしている。(50代)
- 少子高齢化と科学技術の継承。(50代)
- 学生の人間としての成長。(50代)
- 社会に向けての自分達の分野の重要性を常に発信することが重要。(60代)
- 新聞等の記事を話題にする。(60代)

## 都市社会工学専攻

- 当該分野をとりまく動向を授業の中の話題として取り上げ、その分野に関心を抱けるよう心がけている。(40代)
- できるだけ社会の動向と関連のあるトピックスを題材として取り入れるように努めている。(40代)
- テロに対する対策、道路公団の民営化など社会の動向について授業の中で関連のある事柄を取り上げるようにしている。(50代)
- 時代に流されないこと。(50代)
- 常に時代の流れで講義内容が一致しているかどうか最大の関心を払っている。(50代)
- アセットマネジメント、アカウンタビリティ、グローバル化などを常識として取り入れている。(60代)
- ・関連する社会動向は常に授業内容に取り入れている。・レポートの題材にしている。(60代)

## 都市環境工学専攻

- 基本的なことはしっかり教えること。(40代)
- 授業内容の最新化（講義ノートのチェック）(40代)
- 社会の要請の変化を常に新聞、雑誌、政府役人からの情報としてとらえ、必要な情報を分かりやすく学生に関連する分野での事例として伝える。この利点、欠点を討議する。(40代)
- 私の専門の環境保健学は、基礎的な学問であると同時に、常に新しくおこる環境問題に対処していかなければならないので、環境問題におけるトピックスについて授業にすぐに取り入れるように心がけている。(50代)
- 講義内容の基本と社会動向は必ずしも関係はないが、トピックや重要な現象と関連づけての内容や発展性のことがらは触れている。(50代)
- 必要があれば、上記のトピックを講義に取り入れている。(50代)
- そのときの社会的トピックスを取り上げ、講義内容との関連で紹介する程度で、講義内容を

大きく変化させることはない。(50代)

■環境問題の先端について、授業で説明している。(50代)

■社会変化の多面的理解を教育に反映させる。(50代)

■周りがどのように変動しようとも、押さえておかなければならないことは、きっちりと授業内容に盛り込む。(50代)

■現在学習していることが、将来研究者、技術者等などとして何に繋がっていくのかを考え、理解させるよう留意している。(50代)

■時代の風潮に流されないように注意しながら、現在行っている授業内容との関連、位置付けを示すようにしている。(60代)

■学生に身近な問題との関連を意識させるために、常に関係付けるようにと心がけている。(60代)

### **建築学専攻**

■社会のニーズに対応した知識（技術の最新動向）を出来る限り授業で身に付けられるように取り入れている。(40代)

■これらの社会動向を授業に取り入れようとしている。(50代)

■現在の課題：新技術を基本原理に基づき理解し、対応することの重要性を示すこと。(50代)

■これらのトピックを事例として加える。(50代)

■社会の安全性。(50代)

■住に関する価値観の変化、すなわち、数式表現型の従来の工学に新たな考えを付与すべく努力している。(60代)

### **機械理工学専攻**

■基礎を大切にして、かつこれによって日本が世界 No.1 を取れる分野を増やすべく、情報を学生には与えるようにしている。(40代)

■講義内容に関連付けて、これらのテーマを言及している。(40代)

■原理は同じであり授業内容は変わらない。しかし、社会の動向に目を向け、長期的な視野を持つように、研究や技術の動向を話している。(50代)

■学問分野によって異なると思われるが、社会が必要とする学問であれば、単なる流行に惑わされることなく基礎事項を教えるべきである。タダシ、卒業研究は別である。(50代)

■機械材料学などで、環境調和型材料など、機会があれば触れるように心がけている。(50代)

■授業内容が社会の動向に影響されない普遍的なものであるよう努めている。(50代)

■今の学生は社会の短期的な動向に影響を受けやすい様に思われる。出来るだけ長期的見方が出来るような指導を心がけている。(60代)

■工業全体のバランスの中での研究と広い視野を持ちうるための教育。(60代)

### **マイクロエンジニアリング専攻**

■特にはグローバル化、電子材や自動車・・・様々な開発と生産技術を積み上げてきた勝利の方

程式が通用しづらくなっているが、原理原則と現地現物を大事にする戦略はローバストである。原理と実際社会のつながりを中心に教える。(40代)

■最新のトピックスとの関連についても多少は触れるが、学部レベルの講義は基本的な内容を伝えることに重点を置いている。(50代)

### **航空宇宙工学専攻**

■学部や大学院修士の授業は、基礎教育、と考えるため、時流に即したテーマを取り入れることはほとんどない。しかし、授業の途中に、関連する例などを紹介するときには、できるだけ、最近の社会情勢に即した話題も取り入れるようにしている。(50代)

■本質を見極めることが重要、外部の攪乱に惑わされないことが重要。(50代)

■授業内容と関連のあるニュース、新聞記事などがあれば触れるようにしている。(50代)

■特に学部教育では、上記のような流行のキーワードに振り回されない基礎学力の習得が必須と考えています。従って、流行より基礎学力の大切さを教えるように心がけています。(50代)

■大学としての独立は保ちながらも、社会の要求に応えるべき改革は必要である。(60代)

### **原子核工学専攻**

■現代は特に社会における工学研究者の倫理感や責任感が問われている時代でもあるため、単に専門知識・技術のみの習得に止まらず広い視野から自らを常に省みることができる人材の育成に心がけるべきであろう。講義としても、社会との関連や位置付けを意識した内容を入れるべきである。(50代)

■事象の原理を理解させ、その応用技術を紹介する。(50代)

■授業内容に関係する社会動向については、授業においても言及するように努めています。(50代)

■話題として取り上げる場合もあるが、学部教育は基礎的普遍的であるほうがよい。(50代)

■学部専門教育では基礎的事項の理解に重点をおいているが、併せて、関連する最近の話題や動向も積極的に紹介している。(60代)

### **材料工学専攻**

■学生の学習への動機付け。(40代)

■基礎に重きをおきながら、トピックスとして時に取り上げる。(40代)

■講義で取り上げた材料が、例えば社会の中でどのように使われているか、気づいたことは話すようにしている。(40代)

■インターネットなどを用いて、学生たちは容易に情報を入手できるようになっている。したがって、それらの多様な情報をいかに処理し、自らの考え方として処理していくかについて、教授するように努めている。(50代)

■環境問題、グローバル化等はすでに学部授業に取り入れ、学生に常に心がけるように努力している。(60代)

■学部の授業内容と上記の社会の動向とは関係ない。むしろ、学生の精神構造へ及ぼす影響が大である。(60代)

## 電気工学専攻

- 多くの話題との関連を講義の中で示すこと。(40代)
- 社会の動向に応じて授業内容の見直しを心がけている。(40代)
- 環境問題は意識するようになった。(50代)
- 学習の意義付けに講義内容が如何に最近のことと関連があるかなど機会を見て触れるようにしている。(60代)
- 社会の動向は、ある面で我々が作り出しているもの、もしくは作り出すべきものである、という意識をもっている。従って、社会の動向にあわせて研究方向を選ぶことはしないが、自分が研究していることが、将来社会とどう関わるであろうかという点には注意を払いたいと思っている(が、あまり出来ていない)。(60代)

## 電子工学専攻

- 言葉が踊る、あるいは先行する例が多いので、本質をよく見極めることが重要である。その為には基礎的な思考力、理解力が大切である。(50代)
- 授業内容に関連する社会とのかかわりについては、最初の講義(1回程度)においてパワーポイントなどを用いて説明をするように心がけている。(50代)
- 社会が直面している諸問題の解決に際して、科学的なものの見方や判断の果たす重要性を強調している。また、当該分野の歴史に必ず触れるようにして、時代性、社会性を認識してもらうよう努力している。(50代)
- トピックスとしては、それらとの関わりを取り上げる必要があると思うが、まずは基礎学力を重視すべきと思う。(年齢不詳)

## 材料化学専攻

- 社会に対してどのように貢献できるか。(40代)
- 講義の中で環境をはじめ大学を取り巻く動向について関連ある内容に応じて課題にしようと心がけている。(50代)
- 環境問題、ハイテク、ITについては化学の授業の中で教えている。(50代)
- 自分の置かれている位置づけを常に理解しておくこと。(年齢不詳)

## 物質エネルギー化学専攻

- 環境問題等は我々が責任を持って解決すべき課題と考え、常にその問題の本質を正しく伝えるとともに科学がそれに対して答えるべき道筋を盛り込むことを心がけている。(40代)
- 講義内容に関連することを簡単に紹介する。(40代)
- 授業科目による。社会の動向をそのまま反映せざるを得ない科目も担当している。(50代)
- 基礎的な事項を学習する上で、現在の社会的意義・意味を教えるように努力している。(50代)
- 課題にすることはあるが、特に講義へ反映させていません。(50代)
- 過度の情報に惑わされずに基礎を教える。トピックスとして適宜取り入れる(60代)
- ジャーナリズムの無責任な扇動にのせられることなく、着実に社会動向を捉え、それらに関連することを講義の中で説明するように心がけている。(60代)



## 分子工学専攻

- できるだけ実例を挙げて理論を説明すること。A priori な理論の与え方をしない。(40 代)
- 基礎的内容の重視。これからの社会の動向が必要とする科学技術の内容と基礎との関連性を学生に指摘すること。(50 代)
- 社会の変化は非常に早く、我々がそれについて行くべきである。学生の能力を最大限に引き出してやるように努力しているが、学生本人に勉学習慣が無いため先生が空振りしている。(50 代)
- 現代の社会動向に対してそれなりに鋭敏たるべく学生の注意を喚起することと、同時にそのようなことに振り回されないように確固とした基礎学力を身につけることの両面が必要であると教えること。(50 代)

## 高分子化学専攻

- 具体例や講義の肉付け部分に取り入れるが、授業の骨格は今後 100 年以上経過しても不変(普遍)であるような基本法則の理解と修得であると心がけている。(50 代)
- これらの Keywords は 10 年もすれば移り変わる。浮草のような流行に左右されない基礎を身につけさすよう心がけている。(50 代)
- 世界の最先端の研究内容に触れる教育。(50 代)
- 学校教育では基礎をしっかり教える。(60 代)

## 合成・生物化学専攻

- 学生の将来における進路決定の参考になるような社会的動向とはなるべく関連付けるように授業を進めるべきと思うが、1、2 年生相手の基礎的科目ではなかなか余裕がなくて難しい。(30 代)
- 各学生が出来れば複数の「専門分野」をもてるように仕向けるのがよい。例えば化学と電気／電子とか、化学と機械とか。(50 代)
- 学問は社会で生かすことが重要である。その生かし方は多様であってよい。環境問題・ハイテクの 2 点を頭において、さらに具体例を示して講述する。(50 代)

## 化学工学専攻

- まず、どの講義においても最初の時間に、今後の世界、日本が抱える問題、解決すべき方向性、工学が果たすべき役割を 1 コマかけて講演し、学生たちに自らの将来を自分自身で考える機会を与えている。また、環境問題などの社会の動向に関して、講義の合間に雑談も交えてフランクに話しして、工学に留まらず社会学、経済学、民族、政治などが工学以上に強く作用すること、これらの社会イデオロギーの中で工学が正当化され技術が変化すること、一方、工学の立場からは如何に人類が営むために健全な社会を誘導できるかなどの新しい技術イデオロギーが必要など、大きな視野から物事を考える大切さを教えている。講義の中で実施している演習には、環境問題に係わる具体的な例をもとに講義している。(40 代)
- うわつつらの流行に気をとられる前に基礎をしっかり身につける事の大切さを伝えたい。(40 代)
- 人類社会に有用な機能を持つ物質および材料を化学的変換によって創出し、工業規模で生産

するための方法論を学生に教授することを心がけているので、トピックスで授業内容を左右すべきでないと考える。(50代)

■システムバウンダリーを大きくとり物事を考える姿勢、および論理的に考える姿勢を学生に植え付けること。(50代)

■研究結果の社会への貢献と後世への影響。(60代)

■関連する社会状況を余談として入れること。歴史と最近の状況。(60代)

## エネルギー科学研究科

■現在の社会環境と授業内容との関連を学生に伝えることを常に心がけている。学生にとっては、大学で学ぶ基礎工学がなんに役に立つかは最大の関心事であり、これが明らかでないと学習の動機を失う。(40代)

■社会動向や最新技術に授業が振り回されることがあってはならないが、一方でできるだけそういったことを授業で紹介するようにはしている。(40代)

■世の流れに影響されず、まず、原理・原則を教えること。根無し草では社会に出た時に独自性を発揮できるであろうか。人まねでは世界との競争に勝てない。(50代)

## 情報学研究科

■最先端の内容を専門的な視点で理解できるよう、日常生活など身の回りの具体的な例を挙げて説明する。(40代)

■なるべく学生の関心のあるトピックに関連付けて説明するようにしている。(40代)

■科学技術がより高度化するにつれ、ますます、感性と科学技術の溝は深まっていつている。そのために、環境問題を始め、困難な問題にはどうしようもないという気持ちを抱きたくなる。しかし、これからの科学技術を担う優秀な若い人材の多くがそのような気持ちを持てば解決できることもできなくなってしまう。これからの世界は自分たちの努力でいい方向に変えられるという強い気持ちを持たせるような教え方をしたいと思っている。(50代)

■人格を磨くことに繋がるような深く問題を問い詰めたり、新しい問題や課題を自らで見出したり、自らの価値観が形成されることに資するようにはできたらと期待しています。(50代)

■最新のIT情報と講義内容を関連付けるように努力している。(50代)

■もっとも大きな社会問題は精神的縮退減少であるように思う。(50代)

■必要と感じる動向については授業の中で触れるようにしている。(50代)

■基礎的科目においては伝統的な内容を確実に習得させる必要があり、その基盤に立ってはじめて様々な問題への応用が可能となるという立場です。ただ、できるかぎり、社会で関心をもたれている事項についても講義内容に取り入れています。(50代)

■情報という専門分野の発展が非常に早いので、最先端情報を取り込んだ授業をするように心がけている。しかし、情報社会など従来の専門的な視点ではとても捉えられないことも多く、より広い視点からの柔軟な発想ができるよう、講演会などに積極的に出席し、勉強に心がけている。(50代)

■大学院において、授業内容に反映しています。(50代)

■やはり、グローバル化は無視できない。(50代)

■特になし。(50代)

■グローバル化。(50代)

■社会の動向を授業内容に盛り込み、授業内容と関連を持たせること。(50代)

### 地球環境学堂

■講義の中で社会の動向とのかかわりを講述している。(50代)

■環境問題の専門的知識を地球系で教育していない。他の物理、電気系でも教育が必要。(60代)

### 学術情報メディアセンター

■現代の社会問題を授業の中で取り上げるようにしている。(40代)

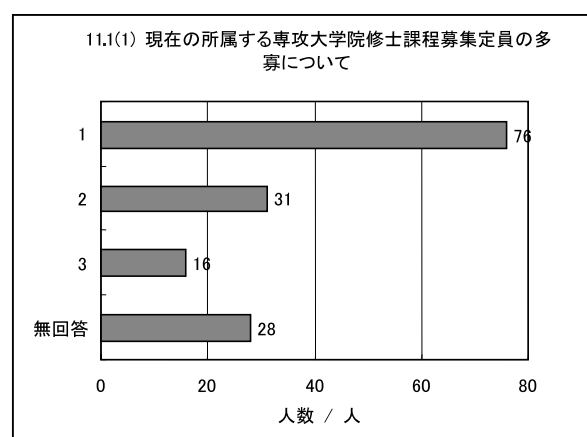
## 11. 大学院入試と講義、研究指導について

第11、12項目は、工学研究科に対する自己点検・自己評価を目的としてとしているが、大学院入試の時期・定員・奨学金・RA・COE制度など、工学部教育と切り離せない点についてのアンケート項目もある。

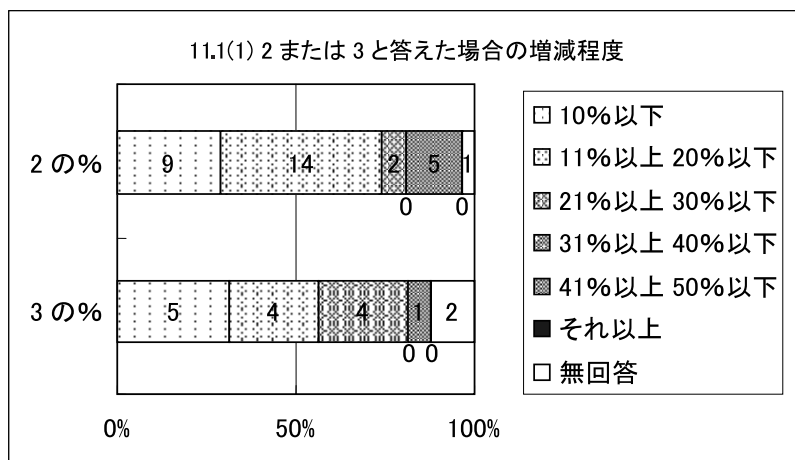
### 11.1 修士課程入学について

(1) 現在の貴専攻大学院修士課程募集定員の多寡について、どのようにお考えですか。

- 1 そのままでよい。
- 2 増やした方がよい。
- 3 減らした方がよい。

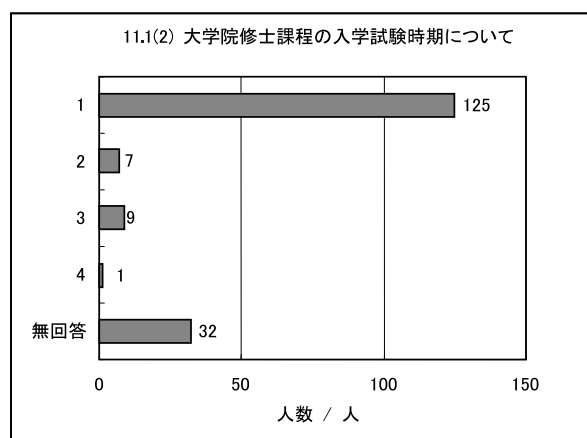


2 または3と答えた場合の、その増減の程度。



(2) 大学院修士課程の入学試験の時期について、どのようにお考えですか。

- 1 現行の時期でよい。
- 2 もっと早い時期にした方がよい。
- 3 もっと遅い時期にした方がよい。
- 4 その他



(3) 修士課程の入学試験に関して、改善した方がよいと思うことがあれば、それについてお書きください。

### 社会基盤工学専攻

- 学部入試と比較して問題作成など時間と費用をもっとかけるべきである。印刷によるフォントミスなど他人に任せているので質を維持するのが難しい。(50代)
- 特になし。(50代)(50代)；現状でよいと思う(60代)。
- 改組してから日も浅いので、しばらく現状を見極めたい。(50代)
- 大学院重点化により定員が増えたが、レベルが低下した。レベルを保つ方法は入試で競争原理が機能することである。ある程度の倍率が必要である。(50代)
- 学外者の受け入れ枠の拡大。(60代)

### 都市社会工学専攻

- ずいぶん良くなっている。(50代)
- 競争性がなくなり、入学試験の意味がなくなっている。より開かれた入試方法を検討すべきである。(50代)
- 博士同様、第2回の入学試験は出来るだろうか？そうすればもっと多様な人材を他大学、他分野からも集められるのでは？(60代)
- 他分野からの受験のし易さ、合格し易さを工夫する必要がある。(60代)

### 都市環境工学専攻

- 面接での担当者が全員としている点を数人に絞り込む方がよい。(環境コース系)(40代)
- 専攻の独自性が強すぎてシステムが複雑すぎる。抜本的にルール、内規などを簡素化すべきである。合理化により入試の負担を軽減すべきである。(50代)
- 工学研究科、あるいは関連する専攻や系の一元的募集（たとえば地球系、建築系の一元的入試）(50代)
- 他専門分野を学習してきた学生にも門戸が開かれるように、試験科目、口頭試問などで工夫した方がよい。(60代)
- 推薦のワクを7～8割にする。(60代)

### 建築学専攻

- 大学の教員の専門に偏った問題を減らす。研究室の教員による特別推薦枠を若干名設ける。(40代)
- とくにないが、外部からの入学者を増やす努力をした方がよい。(50代)
- 他大学からの優秀な学生をもっと多く受け入れられるような工夫をした方がよい。特に、入試の科目と出題項目の見直し。(50代)
- いたずらに入試問題のミス防止に時間を費やさない方策を考えるべき。例えば、ミスを発見した学生には点数を与えるなど、もう少し大らかに。(50代)
- 夏休みに勉強する機会と時間がないほど試験時期が早い。学生の都合より大学の都合でものごとを決めている。(50代)
- 他大学の枠を設けたほうがよい。(50代)
- 関連専攻間での修士入学試験と合格システムの相互乗り入れを行う必要がある。(60代)

### 機械理工学専攻

- 優秀でかつ探究心の優れた学生に対しては、4月頭に推薦入学を決めすぐに研究に取り掛かれるようにシステムを変えるべき。4年生の前半が3回生以下の復習の時間になっているのは、教育システムとして無駄である。(40代)
- 資格試験ということで、入学者の資質を考えながら採点をさせられるのは疑問を感じる。大学入試同様の上位成績者の定員数の選抜方式でなぜいけないのか。(40代)
- 推薦制度の積極的導入が必要？(50代)
- 学部成績の優秀な学生は推薦入学を認めてよい。入学試験以外の多様な方法を取り入れる。(50代)



- 基礎学力を問う問題を重視（50代）
- 学部での成績優秀者は無試験で入れるなどの方策をとるのも一案である。（50代）
- ほとんどが暗記科目なので、もっと考える問題を多くしたほうがいいと思われる。（60代）

### マイクロエンジニアリング専攻

- すでに改善したのでその結果を分析する。（40代）
- 受け入れ教授の裁量に任せる推薦枠を多数確保すべきだ。（50代）
- 学力だけでなく学生の意欲ややる気を評価できるように。（50代）

### 航空宇宙工学専攻

- 学外の学生の受験者を増やし、学外者の入学増につなげるため、修士課程の入学試験科目について、基礎科目（数学、物理など）を増やしていくことが必要であろう。これは、異分野の学生の入学の機会増にもつながる。所属の専攻では、近年、このような努力を積み重ねつつある。（50代）
- 4回生の配属研究室と修士課程の配属先の連続性をなるべく保てるようにしたほうがよい。（50代）
- 大学入試がそうであるように、工学研究科のアドミッションポリシーを、受験生に具体的に伝えることができるような質が高く個性的な入試問題の作成に、今後とも努力することが大切だと思います。（60代）

### 原子核工学専攻

- 夏と冬の2回選抜制を取り入れ、充足率を上げる。自己推薦制度を取り入れる。（50代）
- 他大学や他分野からの学生の受け入れは、学生と教員の双方にとって有益なことが多い。そのため、入試の時期を冬にも設けるなどして（修士外国人留学生の募集例）、専攻独自試験を実施できることが望まれる。（60代）

### 材料工学専攻

- 工学部共通の基礎科目の試験を行うべきである。（40代）

### 電気工学専攻

- 修士課程でも入学試験はどうか通過したが、勉学意欲、精神的な面で問題を抱えている学生が入学するケースが稀にあり、面接試験を取り入れることが考えられる。（60代）
- 別途選考を積極的に考えて、他大学からも一定割合の優れた入学者を迎えられるようにする。（60代）

### 電子工学専攻

- 博士進学を考えている学生を無試験推薦にする。（50代）
- 同じパターンの筆記試験を繰り返し行っていると、受験技術に追い付かれる。たとえば非常に重要な科目にも拘らず、必要な勉強量が多いという理由で選択しないなどの弊害が出ている。たとえば、学部の多様選抜のように、問題解決型の総合問題などを出すなどの工夫をする必要

がある。(50代)

■推薦入試を検討すべきと思う。加えて、修士ー博士（後期）過程の一貫性について前向きに検討すべきである。(年齢不詳)

### 材料化学専攻

■出題委員の負担を軽減したい。英語は TOEIC、TOEFL の点数で代用するのも可。(50代)

### 物質エネルギー化学専攻

■おそらく世界一難しい入試である。(50代)

■できれば9月後半に試験を行った方が良いと考える。(50代)

### 分子工学専攻

■試験問題の種類が多すぎる。不必要（場合によってはこれから specific な学問をするものにとっては邪魔）なものが要求されている(40代)

■卒業研究に着手した状態で入学試験に臨ませるため、試験勉強のための十分な時間を与えるべきであり、闇雲に試験期間を早めることは、必ずしも良くないことである。(40代)

■よい意味でのエリート教育が出来るように入学定員を減らし、入学試験を工夫すべきである。このままでは、平均的な人物ばかりが出来てしまう。(50代)

### 高分子化学専攻

■工業化学科では新コースが発足しているので、平成19年入学者よりコース別に入学試験を行うべきである。外部からも受験し易いように、出題に際しては基本的な内容を重視し、学内者のみしか理解できないような特殊な問題は出題しないようにする。試験科目を基幹科目に絞り、科目数を少なくする。(50代)

■他大学からの入学者が増加するよう、一般性、基礎重視の出題を行いまた、面接による加点を考えるべき。(50代)

■面接を重視する(50代)

■選択科目を多くする(60代)

### 合成・生物化学専攻

■京大としてあるいは工学部（研究科）として外部から積極的に学生を集めるという方針を強く打ち出して欲しい。専攻、教員単位で売り込むと、近隣の大学からの反発が強い。(30代)

■専攻ごとの試験に戻すべきである。(50代)

■修士の募集定員を増やす。(50代)

### 化学工学専攻

■英語の試験を TOEFL、TOEIC にしたほうが、英語については複数受験が許され、かつヒアリングもあるため英語能力が向上する。(40代)

■企業の採用活動時期を秋に戻すべき（学部卒業生にとってもこれは重要）。京大として（あるいは国大協などから）経済界に申し入れできないか？(40代)

■学部教育についてもそうであるが、宿題や練習問題をしっかり見て、学生が相談に乗りやすいアシスタント制度を充実すべき。(60代)

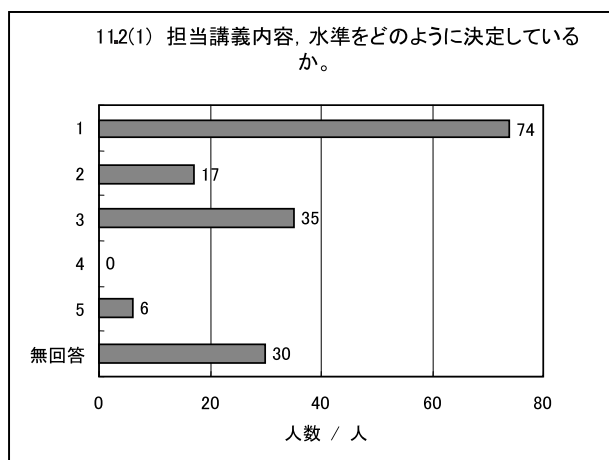
### 情報学研究科

■推薦制度を広く取り入れ、多様な大学からの進学を可能にする。出口は難しくし、修士博士のクオリティを高く保つ必要がある。(50代)

## 11.2 講義について

(1) 各担当講義内容、水準に関しては、どのように決定されますか。

- 1 基礎を重視。
- 2 応用を重視。
- 3 現在の産業等の状況を踏まえて、最新内容の講義を行う。
- 4 上記を全く考慮せず、自分の興味で講義する。
- 5 その他



### ・その他の意見

### 社会基盤工学専攻

■場合によっては実践のサイトを見学させたり、あるいは実社会の先端にいる方に講演をお願いしたりしている。(50代)

### 都市社会工学専攻

■大学院では最新の内容を教えるべきである。(60代)

### 都市環境工学専攻

■教員の考えや議論を提示して（学問的評価の確定していない）事柄について、学生との議論を試みる講義を半期に1～2回準備している。(50代)

■基礎と応用のバランスを重視。(50代)

■基本的参考図書を2冊要約させ、グループでその内容を報告させ討議させてもいる。受身型と能動型の講義を半々にしている。(60代)

### **建築学専攻**

■1と3の両方を考慮している。(60代)

### **機械理工学専攻**

■学部で時間的制約により教育できなかった内容で重要な基礎事項および学生にやる気を起こさせるトピックスを含む研究紹介等も重要と考える。(50代)

### **マイクロエンジニアリング専攻**

■基礎・応用ともに重視。(40代)(40代)

### **航空宇宙工学専攻**

■基本的には、基礎を重視している。しかし、講義の途中途中で、できるだけ、関連する応用分野、産業分野の事例も紹介して、学生の現実に対する意識向上もはかっている。(50代)

### **電気工学専攻**

■学問としての体系を講義する。(60代)

### **物質エネルギー化学専攻**

■基礎を重視し、最新内容も加える。(60代)

### **化学工学専攻**

■学生に覚えておいてほしい内容を重視する。(基礎と応用の定義がわからない。例えば、最適化手法は数学から見れば応用であるし、最適化事例から見れば基礎である。基礎を重視するか応用を重視するかを聞いて、何を判断したのだろうか?) (50代)

(2) 学生の理解度を、どのように判断され、その結果を講義にどのように反映されますか。

### **社会基盤工学専攻**

■教員側からの問いかけを増やす。(50代)

■時々質問をして、理解が不十分と思えるときは、さらに説明を加える。(50代)

■レポート、試験等で判断。毎年少しずつ内容を修復している。(50代)

■学生に国際ジャーナルの論文をレビューさせ、その理解度を判断し、講義にもそれをフィードバックしている。(50代)

■・講義中の反応、練習問題の出来具合。・必要に応じて何度も繰り返し説明する。(50代)

■ある程度理解はしていると判断している。(60代)

■授業への出席率は良いが、試験などの結果は理解度は今1つのところである。もう少し学生

に考えさせるようにすべきと考えている。(60代)

### 都市社会工学専攻

- 試験とレポートの内容で測定し、次年度の講義内容に反映させる。(40代)
- レポートや試験により判断し、講義内容に反映させるよう努めている。(40代)
- 講義中にできるだけ学生を指名してどの程度理解しているか聞くようにしている。(50代)
- 理解しなくていい。様々な物の見方、考え方があることを実感し、それらの1つを自分の考えとして表現できればいいと思う。(50代)
- 演習、レポートなどで、理解度を見ている。(60代)
- 授業態度や小テスト等により判断し、理解度が低いと思われる場合には、事例を増やしたり、演習を行う。(60代)

### 都市環境工学専攻

- 演習の充実。(40代)
- 各授業終了時に小テストを行い、その回答を見て、理解度を評価し、次回の講義に生かすようにしている。(50代)
- 講義での応答、試験成績、質問により、解っているか、学生の興味や内容の発展性などの観点から講義内容に反映させている。(50代)
- 講義に関連する演習を並行して行うことで、理解度を高めるようにしている。(50代)
- 各回ごとにマイクロレポートや授業内容についての意見を書かし、希望に沿えるところがあれば、講義に反映する。(50代)
- 講義時間内に質問タイムを設ける等、学生の発言機会を確保している。指名して発言をうながすこともあるが、学生の応答は不活発である。(50代)
- 宿題を出して発表させている。(50代)
- 一方的な講義だけでなく、学生に発表の機会を与え、その報告内容によって追加情報などの提供を行う。(50代)
- 10数回の講義の中で何回か演習を課し、その結果を反映させる。(50代)
- 授業中レポート、期末レポート、討議を通して個々の問題意識、理解度を評価すると共に、毎回それを反映するようトピックを準備している。(50代)
- 授業における学生の表情や試験の結果によって判断し、理解が難しそうな点があれば説明に工夫を行う。(60代)
- どれだけ熱心に取り組んだ学生がいるかで講義を評価している。(60代)

### 建築学専攻

- 講義の内容や進め方は毎年見直している。パワーポイント等を利用、学生への宿題や発表・議論等を組み合わせている。(40代)
- 学生に理解度を質問しながら、時には繰り返して重要事項を説明している。(50代)
- 授業の時の問答と試験の解答を参考に、重点の置き方や説明の方法に反映させている。(50代)
- あまり理解度がよくないので、分かりやすい講義をするように心がけている。(50代)
- できるだけ対話を多くする。(50代)



- 本来学部で理解していなければならないことを授業で追加的に行っている。(50代)
- レポートによる。(50代)
- 授業中の質問・会話・レポート等による、理解させるための方法を考える。(60代)

### 機械理工学専攻

- 人数も少ないので、講義中に積極的に学生と対話して理解度を知り、内容に反映させている。(40代)
- 期末に講義を評価させている。それを次年度に反映。(40代)
- 小テストなどで理解度をチェックしている。(50代)
- 現在、私自身が担当している科目は基礎科目であり、百人程度の多人数教育となっている。したがってレポートの提出、演習などのきめの細かい指導はできないし、これをやろうとするとTAの配置が必要。したがって学生の理解度は期末試験によって判断している。(50代)
- 時々、小テストをする。(50代)
- 試験やレポートで判断し、考えていたよりも理解度が低いところは次年度に説明のしかたを改善する。(50代)
- 理論と実践の両方がうまくわかるように講義している。(60代)
- 学生が何に興味を持っているかをまずこちらが理解し、その上に立って講義内容・方法を学生が理解しやすいようにする。(60代)

### マイクロエンジニアリング専攻

- 授業の最後に感想を書く欄を設けた出席表（一般にはコミュニケーションペーパーと呼ばれている。）を配布し、今日の授業の感想あるいは疑問点、要望などを記入させ、必要に応じて次の授業で質問や要望に対応するよう努めている。氏名のみを記入した場合は出席としてカウントしない旨告げることによって、半数以上の学生から率直な反応を聞くことができ、有効である。(40代)
- レポート(40代)；レポートで判断。だめなときは基礎に戻る、もしくは例題を変える(40代)；レポートの充実や質問への対応(50代)。
- 適宜、レポート、小テストを課して理解度をチェックして、講義にフィードバックしている。(50代)

### 航空宇宙工学専攻

- 学生の理解度は、講義の途中に何回かレポート課題を出して、判断している。理解度が足りないと感じたときには、講義のどの時点かで、関連する内容の講義(説明)を行っている。(全く同じ内容ではなく、視点を変えた内容を取り上げる。)(50代)
- 定期試験のできのみで判断している。改善すべき点を次年度に取り入れる。(50代)
- レポートの出来具合により、どのような部分が理解されにくいと考えて以後の講義に反映する。(50代)
- 受講生の50%が理解できる講義を目標としています。(50代)
- 適宜レポートを提出させて、学生の理解度を判断して、講義にフィードバックさせている。(60代)

■講義中の学生の反応、試験やレポートでの出来具合で判断して、講義のやり方の改善に生かしている。(60代)

### 原子核工学専攻

■修士講義では受講生が20名程度であり目が届く範囲にあり把握し易い。講義中での質疑応答や発表内容で各人の理解度はかなり正確に解る。理解できていないと判断した内容については繰り返し講義している。(50代)

■期末試験の答案内容を見ることによって学生の理解度がある程度判断できる。誤解しやすいところがあれば、次年度の講義でわかってもらえるよう工夫する。(50代)

■学生への質問を行うことによって、学生の理解の程度を確認し、必要に応じて再度説明するよう努めています。(50代)

■他研究分野の学生にはわかりにくい面があるので、なるべく基礎に戻って説明するようにしている。(50代)

■学生への質問や最近の話題に関する討論などにより理解度や関心を把握するように努めている。(60代)

### 材料工学専攻

■毎回のレポート、終了時のアンケート(40代)；毎日のレポートから判断している(50代)；レポートの内容から理解度を判断(40代)；レポート提出により判断し、次回の講義に反映(60代)；レポートによる宿題を出している(60代)。

### 電気工学専攻

■試験の結果により判断する。(40代)

■講義中に学生に質問することやレポート課題の提出内容により判断し、理解度が低い場合にはより分かり易い内容になるよう心がけている。(40代)

■試験結果に基づき判断する。(40代)

■その年度の受講生の知識によって内容を変える(基礎知識のない学生が多い時は、基礎を教えるから応用に移るなど)。(50代)

■少人数であれば、学生の理解度はある程度表情から確認できるので次週に余分に解説を加えている。(60代)

■時々演習を行って、必要なら解説する。(60代)

### 電子工学専攻

■レポートで判断して、説明の量と質を合わせる。(50代)

■試験の解答の内容を検討することにより判断していることが多い。場合によっては、講義に対するアンケートを書かせ、それにより理解度などを判断することもある。(50代)

■講義中の反応や質問、レポートなどから理解度を判断する。理解が不十分と判断した場合は、補足説明をしたり、レポート課題を新たに工夫することで対応している。(50代)

■その場での理解度で逐一フィードバックをかけていては進行できない。興味をもった学生の自学自習にまかせている(あまり期待できないが)。(年齢不詳)

### 材料化学専攻

■最近の学生の理解は少し低くなっているように思われるので少し内容をやさしくしている。(50代)

■試みとして学生自身に講義させ、私解説をつけ加えることがあった。学生によって成果はバラツキがあり、難しいと実感している。うまくやった学生にとってたいへん勉強になっていると思う。(50代)

### 物質エネルギー化学専攻

■産業の状況を踏まえてはいるが、産業からすると基礎事項であり、学生の理解度によらず講義せざるを得ない。(50代)

■講義中に問題を投げかけ、対話形式で理解度を測るようにしています。講義の改善への反映は次年度になります。(50代)

■毎回小テストを行っている。その結果を次の授業にいかす。(60代)

■学部で基礎的な知識を習得していないことを前提にして講義をしているが、途中で学生にどの程度わかっていないかを聞いて理解していない場合には要点とその項目に関する本などを説明している(60代)

### 分子工学専攻

■講義で行っていることは本当に最先端なので理解するのは大変だろうが、自主的に勉強して欲しい。必要な資料は配布している。(40代)

■時に応じて小テストをして理解度をチェックする。その結果を見て講義内容のレベルを再考する。(50代)

■演習問題を解かせて、どれほど本当に「手が動く」かということによって判断する。またそうなるように講義に反映する。(50代)

### 高分子化学専攻

■毎対話型の授業を行い、学生の応答から理解度を判定する。授業内容の選定、講義レベルの調節等で講義に反映させる。(50代)

■授業中にチェックを入れ必要ならば全体計画を変更して、その部分の説明を拡大する。(50代)

■講義中の学生の反応。(50代)

■学生の専門分野により理解度には大きな分布がある。従ってわかりやすい講義を心がけている。(60代)

### 合成・生物化学専攻

■何回かの講義を終えたところで中間レポートを書かせるのがよいと思うが、現在は行っていない。(30代)

■毎回、講義の最後に学生に意見を書かせて提出させている。質問があれば次回に説明している。(60代)

## 化学工学専攻

- レポートと試験により判断。期末には無記名アンケートによって講義への感想と希望を受ける。(40代)
- 定期的にレポートを課し、理解度を細かくチェック。これを、残りの講義で理解を深めていくようにフィードバックしている。講義中に対話形式を取り入れ、その場での理解を促している。(40代)
- レポートあるいは中間試験結果から判断し内容の高度さを調整する。(40代)
- 試験とレポートで判断していて、理解度不足なら学部の内容の復習も行う。(50代)
- 宿題に対する応答により理解度を判断する。そして、その結果を見て学部で教育済みの内容についての復習等を講義に取り入れる。(50代)
- 宿題と中間テスト。(60代)
- 途中で質問し、理解度に応じて、より基礎も教える。(60代)

## エネルギー科学研究科

- 質問や演習を行って、学生の理解度を確認、どの程度基礎的な内容を教えるか判断する。(60代)

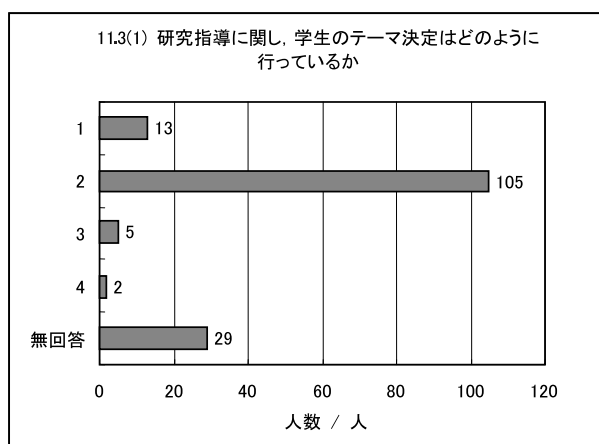
## 情報学研究科

- 学生に質問をして、理解度を把握し、よりわかりやすいパワーポイントの資料を作製し、理解困難な点を補っている。講義資料はすべてホームページに載せており、学生が利用できるようになっている。学部、大学院用の教科書をすでに出版している。(50代)

### 11.3 研究指導について

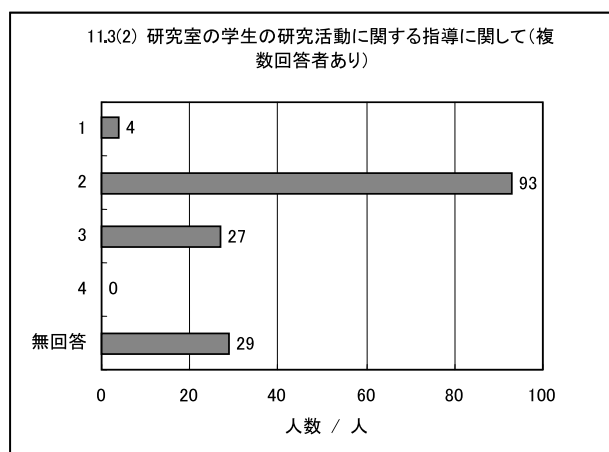
(1) 研究指導に関し、学生のテーマ決定はどうされますか。

- 1 教員の方から、一方的にテーマを与える。
- 2 教員の方から与えつつ、学生の意見も取り入れて修正する。
- 3 学生の自由に任せる。
- 4 その他



## (2) 研究室の学生の研究活動に関する指導に関して

- 1 一日一回学生とミーティングを行う。
- 2 一週間に 1、2 回程度ミーティングを行う。
- 3 一ヶ月に 1、2 回程度ミーティングを行う。
- 4 ほとんどなし。



## 12. 大学院学生に対する奨学金、RA、COE 制度について

博士課程学生に対する奨学金について拡充すべきであるという意見があります。その方策その他について御意見があれば、記載してください。

### 社会基盤工学専攻

- 支給制度を作る必要がある。免除制度を復活させる必要がある。研究費から出すことができるようにする。(50 代)
- 各教員が競争的資金等の外的資金を得るよう努力するしかないと思う。(50 代)
- 研究者として残したい学生については初任給程度の奨学金を給与する。(50 代)
- 大変難しい問題で、方策について具体的な案は今の所思い浮かばない。しかし、博士課程の学生にはできる限り多くの学生に奨学金を支給すべきである。(60 代)
- RA の充実をお願いしたい。(60 代)

### 都市社会工学専攻

- 博士課程学生にアルバイト謝金を出す場合、現在は 2 ヶ月間支払うと 1 ヶ月休まなければならない。これを毎月連続して支払えるようにすれば、少し改善になると思われます。(50 代)
- 特に博士課程の学生への援助は重要。(50 代)
- 成果と奨学金が連動するメカニズムが必要。(50 代)
- 日本人にも外国人なみの奨学金を出すべきだ。研究の原動力は博士課程学生にある。(60 代)
- 奨学金を拡充すべきであり、一般財源から投入すべきである。(60 代)



## 都市環境工学専攻

■博士課程後の就職について検討すべき。(40代)

■大学全体としてその為の独自の基金を準備すべきである。より本質的には国の制度を変更し、少なくとも院生の授業料は実質的に無料となるようにすべきである。(40代)

■大学内の運営交付金、寄付金等の資金を Revolving Fund とすることはできないか。(40代)

■京都大学独自のものの充実も一つの方法である。(50代)

■・官庁や諸団体の学外委員の謝金は教員が個人的に収入となる以外に、大学として一時間当たり2万円程度の費用を取るようルール化し外部資金導入に役立てる。(ルールがあれば請求できると思われる。)

・委託研究では、教員の指導、ノウハウ提供料を請求できるような規則を作る。(現状では、研究的なノウハウ提供を費用として請求できないため、資金導入しても物を買うか謝金で利用するしかなく研究室としてのメリットが少ない。これが原因で、謝金を違法で流用するようなことが起こり易い。)

・上記で蓄積した資金を、利益を出した研究室の学生、特に博士の学生への資金援助として利用する。(日本の学生が博士に行かないのは、資金的困窮の面も大きい。欧米ではしっかり博士の学生はサポートされている。現状では、裕福な留学生と比較して逆差別になっていると思われる。)

・学生の国際学会発表を大学として積極的・資金的に援助するシステムを作る。たとえば、表彰(賞金も含む)などしてインセンティブを高める。修士の間にこうしたインセンティブを与えて博士に進学するようにする。

・国外の大学との連携を深めるため、単位互換などを積極的に進める。現在は制約が多すぎるので、これらを抜本的に簡素化する。

・サバティカル制度を早急に導入し国際交流を深める。

・教員の給与を、研究、教育に分けて考える。教育の負担に応じて給与を増減し、研究センターの場合は自己の研究費から給与を補填するようなシステムを導入する。もちろん、委託研究に担当教員の給与補填経費が請求できるような制度の整備が前提となる。(50代)

■金額は少なくとも、一定の条件を満足する大学院生には確実に奨学金を支給できるようにする。(50代)

■奨学金も結構だが、学生にとっては Dr. 取得後の将来の道筋が見えるかどうかの方が大きい問題ではないかと思う。少ないパイを奪い合う現状は何ともならないものか。その方策は・・・？(50代)

■博士課程学生は将来の日本の科学技術を担う人材であるという認識を文部科学省がもつことがスタート点であると考ええる。現在のように授業料を徴収し学費を自ら調達しなければならない状況は、個人的資格を個人の責任で取得するという概念に基づいたものであると考えられ、その考えから脱却しない限り解決の方策は見つからないように思える。(60代)

## 建築学専攻

■学生の中でも経済状態に十分に配慮して欲しい。(40代)

■まだまだ不十分で拡充する必要がある。(50代)

■優れた人材の育成は国家、産業発展の基礎であるから、国策として官民学協力の下に支援拡

充策を講じる。(50代)

■やはり、我々教員がお金を稼いでくるしか方策は無いのでしょうか。(50代)

■RAが極めて少ない。今のTA並に拡充すべきである。特にドクターは7～8割RAに採用すべきである。(50代)

### **機械理工学専攻**

■博士課程に関しては学費を全学免除あるいは大幅に低減する等の処置が必要。(40代)

■大学の中だけの施策では無理。企業からの研究費の桁を一桁上げられればそこから奨学金に充当する方策が最も良い。(40代)

■アメリカのようにRAを増やす。外部資金、科研費、寄付金をそれに使う。(50代)

■博士課程学生を学振の特別研究員と同等の給与で雇用できるよう、アルバイトの雇用時間制約などを撤廃すべきである。(50代)

■ドクターコースの学生の奨学金は基本的に給与であるべきである。そのために、RA、COEの活用と学振特別研究員の拡充が必要。また、大学独自の奨学金制度の創設も考えられる。(50代)

■少なくとも入学金、学費は社会的な負担によってまかなってほしい(50代)

■学振の特別研究員よりはもっと少額でよいから、大学でなんらかの競争的スカラシップを用意するのが良い。(50代)

■産業界と一緒に研究テーマを設定し、それらのテーマの下で博士課程学生を集める。企業側から、学生を時間をかけて企業側にとって役立つのかチェック出来る等のメリットを強調し、奨学金を産業界からつもの。既に、ドイツ等ではこのことが行われている。(60代)

### **マイクロエンジニアリング専攻**

■特に博士後期課程学生に対する奨学金を充実させ、実質的な授業料と年間の最低限の生活費、すなわち年間200万円から250万円を貸与でなく、給付できるシステムを早急に構築すべきである。RAあるいはTAとしてのロードを課してもよく、任期制助手の称号を与えてもよいと考える。(40代)

■奨学金やプロジェクト予算からの補助。(40代)

■科研費をはじめとする競争的資金から、博士課程学生への奨学金(給与)給付が可能になるように働きかける。手始めに、一般の委任経理金から博士課程学生への奨学金の給付が可能になるようにすることは学内での決定できるのでは。(50代)

### **航空宇宙工学専攻**

■博士課程学生に対する奨学金は拡充すべきであり、また、授業料も免除すべきである、と考える。特に後者の授業料免除に関しては、大学内での検討で、今でも可能なのではないだろうか。奨学金については、まず、育成会の奨学金を全員当たるようにすることと、できたら、貸与→給与にすることが望ましい。それ以外の奨学金となると、たとえば工学研究科全体、あるいは系・専攻で、外部資金(COE、企業の寄附など)で財源を作っていくべきであろう。(50代)

■COEにより外国大学への武者修行を多いに盛んにすべし。後輩の博士課程進学希望をうな

がすことにつながる。(50代)

■最低限授業料の負担はなくなるようにしたい。また、就職を前提とする企業の奨学金拡大を図るべきである。(50代)

■奨学金などは比較的満たされているが、最も問題な点は、博士課程終了後の就職が不安定で、産業界や社会での博士号取得の認知度が低いことにある。(60代)

### 原子核工学専攻

■経済的理由のために博士課程進学を断念している学生も毎年何人か存在している。博士研究では学部や修士の研究指導補助に当たる場合が多いと思われるので授業料を超える奨学資金を全員に支給すべきである。充足率の向上につながると思う。大学に博士学生支援のための組織を作り、全学的な予算措置を行うべきであろう。(50代)

■寄付金などの財源があることが望ましいが、総合大学であるので、全学的な観点からも検討する必要があります。(50代)

■博士課程の授業料を大幅に引き下げるべきである。少額の奨学金をばら撒いてもインパクトは小さく、少数の学生に集中させるには判断基準の設定が困難である。(50代)

■奨学金は貸与ではなく、給付にすべきである。併せて、授業料も（一部でも）免除することが望まれる。(60代)

### 材料工学専攻

■拡充すべきである。しかし、研究科全体で一律に（あるいは順番に）奨学金を与えるというような不平等は避けなければならない。(40代)

■工学研究科全体で統一的に博士学生に給与的なものを支給すべき。(40代)

■拡充すべきだと考える。受託研究や大型研究費の間接経費の相当部分を専攻や研究室へ戻してもらいたい。(40代)

■すでに学振などで充分にあり、特にはない。(50代)

### 電気工学専攻

■奨学金は有っても悪いものではないが、社会人としての自覚をうながすことも同時に必要である。(40代)

■RAとして給与を与えるシステムを考える。(40代)

■日本育英会の奨学金で、従来大学などの教育、研究機関に就職し15年在籍すれば返還免除となる制度があった。現在、返還免除になる奨学生数が極めて限定されるようになったという新聞記事があり、博士課程に進学することを検討している学生、保護者の意欲に水をかけているようであり、早急な対策が望まれる。(60代)

■拡充すべきだが、永続的に有効と思われる手段がほとんどない。(60代)

### 電子工学専攻

■学生が就職した企業から1人について50万円くらい奨学寄附金を集め、それを博士課程学生の奨学金にする。(50代)

■博士課程の学生は、日本の将来に強く関わる人材育成であるので、本来は国が全面的に支援

すべきだと考えている。博士課程の学生のための奨学金を企業から集めるとよいという意見もあるが、日本では企業からの博士課程学生の需要が少ないため、その実現は難しいと考えられる。(50代)

■奨学金についてはその申請、審査、さらにはその返還免除に関する諸手続きなどに、膨大な人的資源を消費していることを認識すべきである。しかも一人一人の学生にとっては、いずれも確率事象であり、生活基盤をこれらに委ねよというのは無茶である。博士課程については授業料を無条件に低く設定することが最良の方策であると思う。(50代)

■奨学金もそうであるが、授業料は免除すべきである(指導教員の評価に基づいて)。予算的には、学部及び修士の授業料を増額する、あるいは外部資金(科研費は除外)の一定割合を徴収する、または企業からの寄付を募ってプールすることなどが考えられる。(年齢不詳)

### 材料化学専攻

■学振研究員枠の拡大。(40代)

■大学で対応。(50代)

■研究を熱心におこない、議論も充分にできるほどに実力をつけた学生にはRA、COEなどJSPSの特別研究費制度と同等の奨学金を与えてやりたい。しかもこの決定には教授の裁量に任せられるものであるのが理想である。(50代)

■工学研究科でお金をプールして(企業からの助成金などを)博士課程の学生の奨学金にあてることを考えてはどうか。(50代)

■当然拡充すべきである。(年齢不詳)

### 物質エネルギー化学専攻

■博士課程の充足率に見合った予算配分をし、そこから博士課程学生の奨学金をあてるべきである。また事務組織の合理化により生じる人件費を修士・博士一貫性コースの学生の奨学金に当てることも一策と思われる。(40代)

■給与とすべきである。現在のように免除、半額免除の数を限定して「競争させた」という奨学制度の考えはとんでもない間違いであり可及的速やかに改善すべきである。(50代)

■工学研究科独自の基金を募る努力が必要だと考えています。(50代)

■給与にするのが国際的ルール。日本は教育大国ではない。博士課程を修了してその時点で借金600万円というのは正常ではない。国際的にも批判される。返却しなくてもよいという人もいるが数が少なすぎる。(60代)

■委任経理金から自由に支出できるようにすべき。(60代)

### 分子工学専攻

■博士課程学生には程度の差はあるにせよ、金銭的な補助をするべきである(40代)

■incentiveな奨学金制度を作ってもよいのではないのでしょうか。(40代)

■COE制度の持続。数年でとめるのはおかしい。制度を見直し欠点を直して進めるべきである。(50代)

■京都大学がローン制度を設けて進学しやすいようにする。京大に残れば50%、他大学でPDや職員になれば100%返済不要とするのもよい制度である。(50代)



■ COE による RA としての給与は一律バラまきのところがあり、あまり感心しない。また COE をとっていない専攻の大学院学生がどのように考えているかも気になる。奨学金を在学中にもらっていても D 卒業後職が得られない場合の返還は少し酷であろう (50 代)

### 高分子化学専攻

■奨学金の拡充も大切であるが、その前に博士課程修了後の進路の確保を検討すべきである。(50 代)

■拡張して欲しいと思うが、方策は思い当たらない。(50 代)

■授業料は徴収すべきではない。でなければ給与（奨学金のような貸与ではなく）を支払うべきである。(50 代)

■基本的に上位の学生は変わらない。10～20 年前と同様優秀な院生が多い。一方、下位の学生の質は定員増加とともにかなり低下している。定員を減らして質を確保すべきである。(50 代)

■京大内での奨学金を設ける。(50 代)

■拡充しつつあまり大きな不平等とならないようにする。(60 代)

### 合成・生物化学専攻

■現状では COE で年間 50～60 万円払っている。この水準を維持すべきと思われる。特許関連の支出を減らして工学研究科から手当できないか？研究室と折半でもいい。(30 代)

■大学には膨大な予算がきているはずだが、その殆どの行方は一般教員には把握できない。COE が終了した後も RA 予算は大学として確保すべきである。全予算からすれば微々たるものであり、どうしてこれくらいがでないのか。理解に苦しむ。(50 代)

■教員の競争的資金 Overhead 1 %を原資。別途独立の委員会（外部も可）をつくって判断。(50 代)

■博士課程学生については授業料以上の奨学金を支給できるようにしたい。(50 代)

■奨学金を貸与ではなく給与にする。(60 代)

### 化学工学専攻

■博士学生に対する経済的支援は重要な課題である。基本的に「貸与」でなく「給与」すべきであり、教員に準ずる研究者として認め、国立大学法人の裁量として基礎的金額を支給すべきである（それ以上の部分は教授の裁量で加えねばならないが）。(40 代)

■ 1. 博士課程学生に対する奨学金拡充手段として、外部資金の管理費や間接経費として大学当局が徴収している資金を外部資金獲得額に応じて各部局に比例配分し奨学金として供与する。応募形式で競争的資金としても良い。

2. 博士課程の学生に限らず、学生教育支援（海外渡航援助など）を各専攻単位に交付（その専攻の外部資金獲得額に比例）。

3. 博士課程修了のポスドクを工学研究科横断型の研究施設にて任期雇用（3～5 年）し、ここで IIC と連携しながら、各企業の基盤研究を推進する。これによって獲得した資金や特許収入から博士課程学生への援助を行う。この機関での研究活動を通じて、京大博士課程修了者のベンチャー、教育者、企業研究者、外国へのポスドク展開など各人にあった多様な人材の育成



を同時に推進する。(40代)

■企業からスポンサー付きの奨学金の積極的導入(40代)

■国費留学生への過分すぎる援助を削減して、博士課程学生の奨学金として政府は各大学に支給すべきである。(50代)

■奨学金の充実も重要であるが、大学としての取り組みとしては、まず学費免除枠の範囲の拡大(Dr学生は原則学費免除)を望む。上記の取り組みが進むまで、奨学金については、教員の努力により外部資金獲得に励むしかない。(50代)

■文科省は、博士課程の充実を求めるが、留学生が18万円程度貰って、日本人はアルバイトで必死に働いている。文科省の考え方を聞きたい。28歳まで無給は無理である。良い人材を次世代を担う技術者として期待するなら、当然、返還しなくて良い、給料を出すべし。ただし、RAやTAをやって頂いて、社会人としての自覚もつけさせる。(60代)

### 13. 社会と大学院教育

**急激に変化する社会に対応するために、大学・大学院教育のあり方について必要と考えられることをお教えてください。**

#### 社会基盤工学専攻

■社会人学生が研究室にいと他の学生へのよい刺激になる。(50代)

■社会の変化に対する認識を持たせることは重要であるが、だからといって教育のあり方は大きく変えるべきでない。(50代)

■海外等では、リストラされた社会人が大学の研究室に出入りし、新しい発想、技術、人脈等を得て、再び社会へ戻っていく。日本の大学、特に大学院は、年も同じで、社会を知らない若者が多すぎると思います。もっと開かれた大学を作らないと、社会の変化には対応が難しいと思われまう。(50代)

■余り考える必要はない。昨今の動きは本質的でない。本来の研究は左右されてはならない。(50代)

■必要を考えるが、社会状況から社会人学生として大学へ派遣するのが企業側にとってかなり難しくなっているようだ。(60代)

■特別講義の充実とその単位認定。(60代)

#### 都市社会工学専攻

■急激に変化する社会において、専門分野の技術者として、これまでとこれからも必要と考えられる科学・技術の基本事項を正確に習得させ、自己発展させることができる能力を身につけさせることが第一の使命であることに変わりはない。これに加えて、土木工学のような成熟していると考えられる分野においては、分子ミクロ科学やライフ・サイエンスなどのいわゆる先端科学の動向を注視し、自ら積極的に教育カリキュラムや研究に取り入れることにより変革を図り、先端科学と乖離しないような努力が必要とされる。(40代)

■「考える力＝即戦力」ということを理解することが重要。(50代)

■大学は知識を教える場所でない。原理を教えるべきである。(60代)

■適当な期間、実社会でのインターンシップを義務づける。(60代)

### 都市環境工学専攻

■社会人ドクターを積極的に受け入れるべき。(40代)

■より積極的に社会貢献を評価するシステムが必要である。(40代)

■京都大学の特性は「真理の探究の場」であることを忘れないことも重要である。(50代)

■長期的な方針を明確にした上で、変化に対応するべきである。目先の変化に追従する変更は厳に慎むべきである。(50代)

■・社会人を学生として導入する。・企業との協同研究を推進する。(50代)

■社会人の受け入れのほか、子育て期の支援や留学生の住居の確保など、多様な課題に対応する必要がある。(50代)

■教師が現実問題との接点を見失わないようにすれば特に問題はない。(60代)

### 建築学専攻

■本学の卒業生は、学識を基に社会で活躍している実績があり、これまでの方針を継承しつつ、常に改善の努力を続けていけば良い。(50代)

■大学での基礎的な教育・研究が企業にとっても役に立つということを理解してもらうこと。(50代)

■外部の講師としてもっと自由に雇えるようにすべきである。(50代)

■担当講義に、外部からの現場技術者や研究者を迎え、数回の講義をさせ、学生や院生との間で会話をさせる。(60代)

### 機械理工学専攻

■変化し続けていくのであるから基礎を重視し、どのように変化しても対応できるように応用力をつけるべきである。そのためには狭いテーマをひとつだけ長期間続けるよりはサブテーマや他研究室との交流が必要である。(50代)

■数年で過ぎ去るブームのようなものに左右されるのではなく社会が真に要求しているものを正しく見分けて学部・大学院教育を考えるべき。特に学生が社会に出るとき20年程度は役立つ教育を行うべきと考える。(50代)

■京大工学研究科として社会人博士課程学生の積極的受け入れをしていく必要がある。今後、30歳代の若い技術者層にターゲットを絞った受け入れ態勢（スクーリングの仕方の工夫）の整備が必要と考える。(50代)

■急激な変化に惑わされることなくじっくりと考え、芯の通ったポリシーを持つ人間を育てる。(50代)

■社会の変化が急激であればあるほど基礎教育に力を入れるべきである。真の基礎学力を持つもののみが急激な変化にも対応できる。(50代)

■多くの企業が、採用する学生に、「大学で学んだことは、知識の一部で、社会ではほとんど役立たない」と言っていることを聞くにつけ、現在の大学、大学院教育に問題が多いように思う。博士課程への進学者が少ないが、それだけ企業にとっても、学生にとっても大学院教育が魅力のないものになっているのだと思う。ほとんどが教育側の問題と考える。(60代)

## マイクロエンジニアリング専攻

- DC の学生の充実と論博の廃止。(40 代)
- 社会人教育を積極的にすべき。ニーズは高い。(40 代)
- 時代に流されない学問の府であり続けることが必要。(50 代)
- 急激に変化する社会であるからこそ基礎を重視して自分で考え、自ら学ぶ方法を教える必要がある。(50 代)

## 航空宇宙工学専攻

- 教育はかなり普遍的なものであり、社会の激しい変化に対応して、時々刻々変える必要はないように考える。ただ、各学生が、時々刻々変化する社会に対応できる能力を身につけさせることが肝要である。そのためには、工学基礎の教育を充実するとともに、教育の中で、学生の、主体性（主体的に物事を考え、実行し、アピールする）、論理性（論理的思考、実行、アピール）、問題作成・設定能力（何をしたらよいか、問題を作る、方向を決定する）、を養っていくことが肝要である。このような能力を身につけた学生は、社会に出て、どのような変化にも柔軟に対応して、将来の日本・世界をリードする人材に成長していくものと信じている。(50 代)
- 高国際水準の維持のため、国際交流を深めることが社会の変化に対応できる一手段だと考える。(50 代)
- 大学教育における産学連携について：工学研究科における工学教育は、理念に述べられている意味での工学の体系的な基礎概念と方法論の伝承です。これは工学研究科教員が専門家として教育すべきことです。一方、工学は技術に転化して、社会的機能を実現すると共に社会的責任を生じます。工学から技術への転化は、工学とは質的に違う論理が働きますし、それは工学者が必ずしも専門家ではありません。その教育のためには、開かれた産学連携による教育の場が必要のように思います。又、工学の社会的役割について、工学者が必ずしも高い見識があるとは限りません。他研究科、産学連携による教育の場が必要ではないかと考えます。(60 代)
- 急激な変化に対応できるためには、基礎力が重要と思う。何か一つの確固とした基盤があれば、新しいことにも対応できる自信が持てるはずである。(50 代)
- 社会に出た人が容易に大学院に再入学して、社会人と大学構成員との交流が深まれば、これからのより良い社会の構築に役立つ研究が発展することが考えられる。(60 代)

## 原子核工学専攻

- 社会も技術も急速に変化するものであろうが、大学院生は今即戦力として役立つ知識・技術を習得するのではなく、その先 10—20 年後の新しい課題を発案できるような能力を身につけるべきである。そのための能力開発教育を大学は行うべきであろう。(50 代)
- 様々な変化に対応できるよう、きちんと論理を立てて問題に取り組める基礎学力や自主性を身に付けさせるべきである。自然環境との調和、社会性、倫理性を考えることができる感性を磨くような教育をしなければならない。(50 代)
- 社会の負託に応えるには、社会が本学に対して何を期待しているかを知る必要がありますが、これについてはやはり「自由の学風」による優秀な人材の育成が期待されているものと思われています。今後は国際化への対応がますます重要です。(50 代)

■旧来の系にとらわれない学際的な系・学科もあってよいのではないかと思う。その一方で急激な社会に左右されないロングレンジの研究も必要である。(50代)

■基礎・基本を重視した専門教育を行い、しっかりと専門性とそれに基づく広い視野を備えた人材を育てることを心掛けている。併せて、関連する話題や将来展望も紹介することで、社会の動きにも対応している。なお、研究室での日常的な議論が非常に有効であり大切である。(60代)

## 材料工学専攻

■専攻単位での活動でのフレキシビリティ。(40代)

■卒業したらできない学問、基礎的な事柄はなおさらしっかりと身に付けるようにすべき。(40代)

■社会のうわべの変化に惑わされることなく基礎的な知識の習得とその応用方法について教えることが必要である。(50代)

■現状では日本学術振興会特別研究員にD1から採用されることがベストであると思いますが、そのためにはM2の段階で競争に打ち勝つべく業績を上げなければならない。そのためには博士課程進学を早い段階で決め、対策を立てなければならないという難しい問題があります。いくら志が高く優秀な学生でも、学振研究員に採用されるのはなかなか難しいと思われます。アルバイトをしなくても生活が保障され研究に専念できる十分な奨学金を給付するために、RA、COE、企業の奨学金、できれば日本育英会からも給付金を募り、これらをかき集め大学の裁量で一本化して学振なみの十分な助成金を給付でき、厳しく公正な選考基準に基づいた京大特別研究員制度を作る。(60代)

■実際企業での経験者を積極的に教員に加えることにより、教員が社会の変動をもっと身近に迅速に実感すべき。(60代)

■社会の変化に早く対応すべきなのは時計台※と事務方の考え方だと思う！(60代)

※大学事務本部

## 電気工学専攻

■専攻という固定的枠組みで大学院を運用していくことの限界を議論すべきである。ダブルメジャー、教員の兼任など分野間の協調をうながす流れを作るべきである。(40代)

■カリキュラムの定期的見直しと適切な教員の確保。(40代)

■博士課程社会人入学を相談されることが時々あるが、最近企業によっては余裕が少ないようで、学生が奨学金、授業料免除を希望するケースが多い。外国のケースと比較するのもかもしれない。(60代)

■大学院教育が果たすべき役割について、急激な変化はない。ジャーナリズム他に踊らされるようでは困る。(60代)

## 電子工学専攻

■受身の教育にならないような仕組みを作る(入学定員を卒業者の1.5倍にするとか)。(50代)

■固定的な知識ではなく、方法論を身につけた学生を世に送り出すことが重要な責務である。

高度化、複雑化する社会のニーズに本当の意味で応えるには修士修了では必ずしも十分ではないことを外部に向けてアピールすることが必要である。(50代)

■「教育理念」の項目で述べたように、教員を研究重視型教員と教育重視型教員に分けて養成することが重要です。しかし、大学院教育では、研究者が教育することになるので、研究の最新内容を講義しては如何かと思います。あるいは、工学研究科では、産業界の一線で活躍されている研究者が非常勤講師として講義することも良いと考えています。従来のカリキュラムにしたがったマニュアル型の講義をするのではなくて、研究者が講義し易いような、自由なやり方に変えることが重要と考えています。ただし、講義を通して、講義を受ける学生が刺激を受け、優れた研究者に育つような講義が行われることが重要と考えています。(50代)

■社会のニーズを的確にとらえて反映すべきところもあるが、経済論理だけに左右された施策は100年の計を見誤る恐れがある。理念を重視した高等教育の将来像から対処すべきである。(年齢不詳)

### 材料化学専攻

■社会の変化にもあまり影響されない学問分野もあるのではないか。そのような基礎のことも充分考えたほうが良いと思う。(40代)

■そんなにあわてて対応する必要はない。要はしっかりとした教育をして自立した学生を社会に送り出せばよい。(50代)

■社会人を大学に受け入れ再教育し、修士あるいは博士号取得を目指させることは今後大学の生き残り策として重要課題となろう。論文博士をやめて、社会人入学制度一本に絞るべきである。(50代)

### 物質エネルギー化学専攻

■大学は不動点の役割を果たすべきである。(50代)

■分野横断型の新興分野に対応した教育も加える必要があると考えています。(50代)

■基礎を重視して社会にあまり振り回されないこと。(60代)

### 分子工学専攻

■よりきめ細かい指導が必要。しかし、最終的なレベルは変化ないからより労力を要するだろう。(40代)

■基礎的な教育の重要性を見失わないこと。(50代)

■よい意味でのエリート教育が出来るように工夫すべきである。(50代)

### 高分子化学専攻

■情報や環境などの技術面では変化に対応するように授業を変えて行く必要がある。しかし、それらはいくまでも技術的な面にとどめ、大学・大学院教育の本来の理念に基づいて、将来社会を切り開く独創性や思考力を有する次世代人材を養成することを第一目標とすべきである。(50代)

■産業界の非常勤講師による講義を増やす。(50代)

■右往左往する必要はない。(50代)



## 合成・生物化学専攻

■深く考え、自ら研究、プロジェクトを進められる人材を育てるため、修士―博士の一貫コースを新たに作るべきである。これはまた、修士学生の青田刈りを防ぐ妙案でもある。(30代)

■語学力も含めてだが、“交渉力”のようなものを身につけさせる必要があるように思う。主体性、ディベート、表現力、人となりなど、全てが絡む問題だが。(50代)

■ドロップアウトしそうな学生の再挑戦のチャンス。退学勧告、または転専攻・転研究科を容易に。(50代)

## 化学工学専攻

■博士課程が様々な意味で産業界とつながる事が重要。これは「社会人ドクター」のみに矮小化すべきでなく、例えば本学学生が企業と協同して研究を展開する機会がえやすいようなシステムが望まれる(大学だけでなく企業の考え方にも改善が必要)。(40代)

■・急激な社会変化に対応するには、対応すべき項目に対して、それぞれ研究科横断、専攻融合型の教育組織(バーチャルでもOK)を作る必要があろう。

・助教授、講師、博士の学位を取得している助手の先生も含め、新分野に係わる講義を数多く開講し、ゼミ形式できめ細かな講義を実施していく。

・企業への単なるインターンシップでは意味がなく、秘守契約を結び、企業研究所での開発研究のディスカッションに参画し、能動的に問題解決能力を養う。(40代)

■工学は基盤技術の学問であるので、急激な社会変化に惑わされる必要はない。(50代)

■きれいな事を言うより、まず各専攻で大学院教育をどのように充実させるかを、検討し実施することが先決である。(50代)

■今後は、世界を相手にする仕事が増えることは目に見えている。言葉の面でも技術の面でも、交渉術の面でも十分渡り合える人材を輩出すべき。海外の大学との実質的な学生の交流が必要。特に、欧米。(60代)

■考え方の基本を考える。(60代)

## エネルギー科学研究科

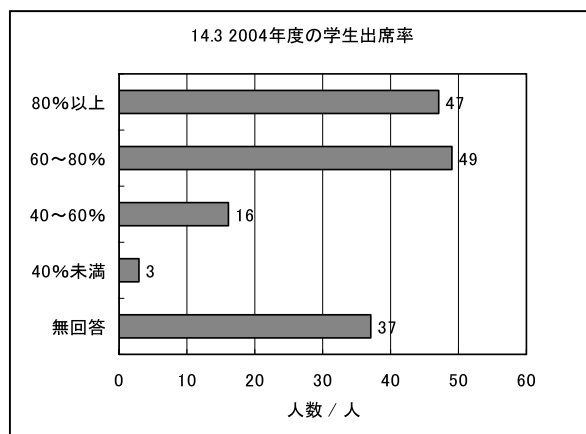
■学部や大学院を社会に出る前の単なる通り道のように考え、適当に単位をそろえることだけしか関心の無い学生が多く見受けられる。学生個人に将来を考えさせ、そのためにどんな知識が必要かもっとガイダンスを充実させることが重要。(60代)

## 情報学研究科

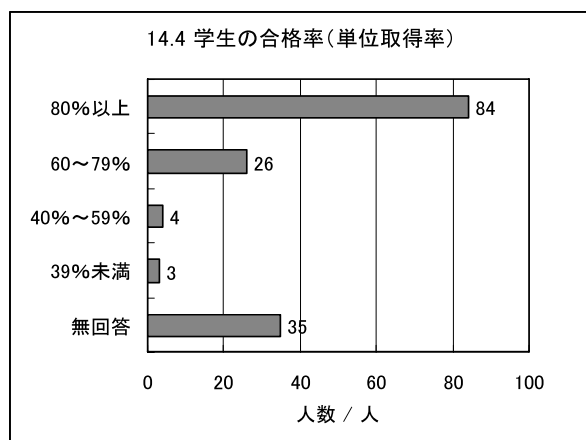
■大学院課程では、教育が各専攻の各分野に任された形になっており、極端に言えば、修士論文、博士論文作成指導が全てのようにになっているが、これでいいのか。もう少し、実践的な演習をしたり、他研究科との連携強化した授業科目の設定などが必要であろう。これからのエンジニアにとっては経営などのセンスや法律などのセンスを養うことが必要である。教員自身が経営や法律などに関して、再教育を受ける制度も必要かもしれない。(50代)

## 14. 学生の講義への出席率、出席率と成績との関係

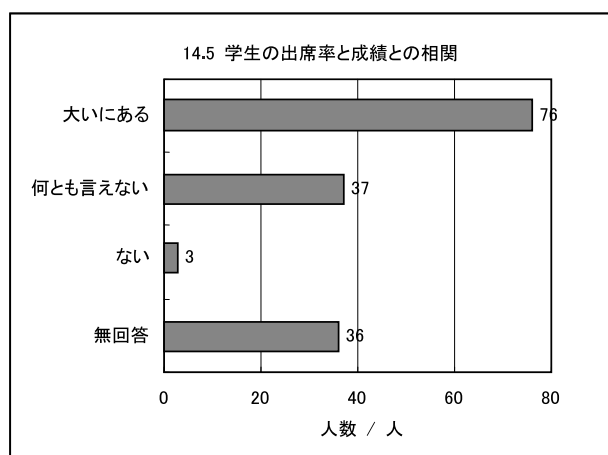
### 3. 2004 年度の学生の出席率



### 4. 学生の合格率（単位取得率）



### 5. この科目における出席率と成績との相関はあったか。



## 15. 学生像

現在の学生像を、どうとらえますか。彼らにどんな注文をつけたいですか。また、それは10～20年前とどのように変わりましたか。

### 社会基盤工学専攻

■周囲の研究に関心を持たない学生が増えた。(50代)

■京都大学の学生は現在の世の中の風潮よりはるかに自覚を持ち、しっかりしていると思う。彼らが夢を持てるような社会を実現できるよう取り組みたい。(50代)

■10年前は教師ではありませんでした。(50代)

■京都大学の学生は、日本の平均的な学生像よりましと言われている。それをよしとしたい。教育・研究の重要性は、以下の3つに大別されるようです。

- ① 社会に役立つ、やった方がよい研究。
- ② やってもやらなくてもよい研究。
- ③ やると社会にむしろ害になる研究。

学生には、ぜひ①をやれるような人材を育成したい。数ではなく、質が問われている。必要ならば、工学部は英才教育も今後検討する必要があると思われる。学科の定員削減や、新規学科の創設など、学生の動向も踏まえて検討が必要と思われる。(50代)

■・目的意識が低い。・京大生としての誇りにかける。・個々の学生の能力に大きな変化はないがレベルの極端に低い学生が混じっている。このような学生の影響は重大である。(50代)

■近年の学生は器用にこなす者が多いが、自分で考え、また基礎を理解しようとする積極性が明らかに減少している。計算機で求められた解が絶対的に正しいと考えがち。また、ソフトウェアが多く市販されており、それらを用いてある程度複雑な問題を解くことが多いが、その内容・中身をほとんど理解していない学生が多い。少数であるがシャープな学生がいるが、それを正しく指導する教育体制の確立が急務と考える。基礎力をつけ、創造性を育てる教育に重点を置くべきと思う。(60代)

■良い意味でのエリート（社会をリードしていくような人材）になりたくない学生が多くなった。京大卒業者としての社会的な責任も自覚してほしい。(60代)

### 都市社会工学専攻

■基本的に本学の学生については、まじめさ、自助努力によって自己表現してゆこうとする態度等の点で、以前と比較して大きく変化したとは思われず、彼らを信頼すればよいものと考え。ただ、研究活動への参画という観点では、積極的に学問の世界に飛び込んでいこうとする意欲的な学生が非常に少なく、教育上の課題でもあると考えている。(40代)

■社会の変化に対応するための修士課程カリキュラムの改変において、以前よりも多様な内容を勉強する機会やレポートなどの問題数も増え、インターンシップのような自主企画・プレゼンテーション型科目に時間を多く費やすようになった。このためか、平均すると要領よくカリキュラム（修論を含む）をこなせばよいとする学生が増え、研究に没頭するタイプの学生が減少してきたように感じられるが、必ずしも質が悪くなってきたというわけではない。(ただし、卒論生も含めて平均的には研究指導に難を感じる学生が増加しているように感じられる。)

修士課程においても、社会で必要とされる広範な内容について、カリキュラムを活用して広

く勉強することは必要と思われる。これと、専門分野において新たな課題を深く研究できることの両方の面白さを在学中に充分体感することにより、修了後社会に出て多様な選択肢に直面したときに、柔軟で適切な対応ができるようになれば良いと思う。成果については修了生の追跡が必要とされる。(40代)

■大部分の学生は研究意欲もあり、特に問題はないと思います。一部の学生に気力のないものが見られます。そのような学生に対しては何か具体的な目標を持つように指導すればよいのではないかと思います。外国人の学生に比べて英語で議論できる能力が劣るように思われますので、もう少しこの点を訓練する必要があると思います。(50代)

■自己主張がない。よく言われるように偏差値で輪切りになった学生の集まりで、おまけに物を言わないから、一体何を相手にしているのか見当がつかない。今の学生に講義という教育形態は有効でないと思う。(50代)

■・基本的能力は向上している。・平均値は高いが、分散は少ない。・野心を持つ学生が少ない。・留学も意欲ももう1つだ。・エリートとしての意識も低い。・夢の少ないのが残念だ。・身の回りのことは、それなりによくできる。・研究室で大きく成長するのが判る。(60代)

■青年に大志がなくなった。(60代)

### 都市環境工学専攻

■自分の人生は自分で切り開いていくという気概を持った学生に多く集まって欲しい。また世界の研究の最先端をリードする研究をしたいというような希望を持って研究室に来て欲しい。(40代)

■アンケート全体に対して、回答選択肢が不十分で答えられないものが多い。アンケートはする側も大変であるが、答える側の手間を考えれば、もう少しは吟味すべきである。これではまともな結果は得にくいと思われる。(40代)

■基本的にまじめでおとなしい。京都大学の伝統的な野生的・個性的・広い視野を持てるようなカリキュラムが必要なのかもしれない。昔の教養は効率は悪い面はあったが、様々な先生、分野の授業を受け、基礎的知識、考え方を議論できる Chance があった。現在、専門分化が入試後にあるため、いい成績が取れる狭い範囲の授業を取らせすぎているかもしれない。(40代)

■もっと自由に自分で幅広くかつ具体的論理でもって発想することが望まれる。(50代)

■よく言われることだが、今の学生は大勢に同調的で目立つことや流れに逆らうことを避ける傾向がある。例えば講義中に質問を求めても殆ど出たことがない。これは小中高の教育、および社会の風潮を反映したもので、簡単に変えることは難しい。遅まきながらセミナー等での発表や司会の経験、演習や卒論での成功経験をさせることで、積極性を育てたい。(50代)

■自己中心的な学生が増えてきている。他人のことはあまりかまわない。講義や卒論でも、まじめだが、人物的おもしろさは減少した。20年ほど前は、もっとスケールの大きい学生が多くいたように思う。いわゆる自学自習ができる学生の存在があった。今はほとんど望めない。自己の権利意識は高まっているが。(50代)

■特に大きな変化はない。(50代)

■未来に対する夢を持ち続けること。自らの価値観を大切にするとともに、異なる価値観の存

在を認め、それらの共存の取り方を積極的に探る努力をすること。(50代)

■現在の学生には実生活体験に乏しく、知識を詰め込まれた上で受験に成功したという者が多いように思える。簡単にいえば、「一人で生きていける（孤立してという意味ではない）」ように育てられているふうに思えない。教育とは、幼稚園から大学にいたるまで、内容は当然異なるが「一人で生きていけるように」育てることではないだろうか。大学における教育も、それ以下の段階におけると同様に、知識の総量を増やしてやるだけの機能に終始していないか、と自省される。主体的な人格形成がもっとも重要であると考えられるが、それを大学教育の中でどのようにしていくのか、解決策は見つからない。(60代)

### 建築学専攻

■自分だけの事を考えずに周囲の人に配慮できる人間になって欲しい。又、自分で考える姿勢を身につけて欲しい。(40代)

■10～20年前の学生については知識がないので比較できません。大学院生でもとりあえず単位を取って卒業したいということを中心に考えている学生がかなりいる。十分専門知識を身に付けていないと京都大学出身というだけでは将来は何も確保されていないということを理解できていない。新しいことを学ぶことに意欲をもっている学生は少なからず多い。(50代)

■昔と大きな違いはない。豊かな社会になったことに伴う上昇志向の低下位でしょうか。但し、多分すべきときには、それなりのことを、昔よりはるかに自由な発想でするようにも思います。楽観的にみえています。(50代)

■学生は大差ないが、大学や社会の要求するものがレベルが高くなっており、学生は卒業、修了要件のみをクリアすることにエネルギーを使い過ぎている。もっと創造性を涵養する時間が必要。(50代)

■世間で言われているほど悪くない。目的意識をもった学生が多く、残されている点は倫理感をいかに植えつけるかにある。(60代)

### 機械理工学専攻

■修士を出て10年あまり大学を離れ、10年ほど前に大学に戻り学生の研究指導をするようになってから、常に自分の学生時代と比較して「何かおかしい」という意識がつきまどってきた。もちろん、全員に当てはまるのではないが、一般的に学生が「受身的」になっている点と「知識と教養との乖離」である。第1の点について、端的には目的意識を持たずに大学に来ている学生が多い。毎年研究室に配属された学生に「人生の目的は何か」と問いかけるようにしているが、一番多い返事は「楽しく暮らせれば良い」である。もちろん、これも重要なことではあるが、多大な公金が投入され、「知の創造と独創的な人材の創出」を通じて世界をリードすることが期待されている本学として、これからの世界を担っていける人材を送り出すことができるのか、自分の働く社会的意義はこれで良いのか、非常に不安を覚える毎日である。研究室の学生と話していても、どうも入学前に進路を深く悩んだ経験を持つ学生にあまり出会わない。入学以前の環境が、「大学進学」に比重が置かれすぎているという点で、ある意味では学生も被害者である。そのため、「人生の目的達成のため大学で何を学ぶか」といった観点からすると、積極的に大学に取り組む意識が薄くなってきているように思われる。これは、「自由の学府」である本学にとって危機である。「自由」の学風は、個々の学生が多様な考え方を基



に独創性を切磋琢磨して初めて「輝く」のであり、「受身」の意識が主流となると、かえってマイナスに作用する危険をはらんでいる。もちろん、単純な勉強ばかりが能ではないが、「目的」意識が薄いと、メリハリをつけた勉強ができない。個性と独創性の危機であると言わねばならない。この状況の中で、今何をすべきか、課題は大きい。第2の点について、「人生の目的」を考えるためには「人格の形成」も欠かせない。高校までの教育が「受験科目」に偏り、教養部のなくなった現在、学生の「表面的な知識レベル」と「人間的素養」の間の相関関係が明らかに薄くなってきている。もちろん、我々も旧制高校ご出身の先生方からはさんざんお叱りを受けた身ではあるが、最近よく企業の方から「博士は昔の修士、修士は昔の学部」と言われる。さしずめ学部4回生は「高校7年生」であろうか。とにかく、講義に関連した本も読まないが、それ以外の読書量も全般的には非常に減っているように思われる。本は知の凝縮であり、これを読まないと、知的な成熟は遅れる。情報化が進展し、媒体としての本の位置付けが低くなるのは当然である。しかし、一方では情報をいかに捨てるかが大切な時代になってきている。しっかりした本に基づいてきちっと体系化された知識を持った者だけが、あふれんばかりの情報の中から、将来を見据えた情報を選択できる目を持つのではないだろうか。(40代)

■決して悪くはないと思います。熱心でまじめです。教員に研究テーマの進め方でたてつくような気概を持った学生が少ないことは不安を感じる。“これだけ勉強した”というアピール能力に欠けるためこちらから聞き出すのに時間がかかる。就職活動以外で競争心を表に出さないのが物足りないところ。(40代)

■基本的には昔と同じである。保守的安定志向である。好奇心とチャレンジ精神を持ってほしい。そのためには普段から多くの人と話し、多くの体験を積んでほしい。(50代)

■情報の発達により流行に惑わされる学生が多く、研究を行う面において何か1つのことに集中的に取り組める覇気のある、また、独創性に富んだ学生数が減っているようである。(50代)

■時代が変わろうともどの時代にも一定割合で非常に優秀な学生はいるはずである。京大工学部・工学研究科にもかならずこのような学生がいる。われわれはこのような学生にさらに磨きをかけて社会に送り出していく責務を負っていることを自覚しながら教育に当たっていく必要がある(学生に対する注文からは外れた記述ですが)。(50代)

■少子化の影響もあって大学生から昔の高校生ようになってきたと思われる。いい意味のエリート意識を持ち、京大で学び身に付けた知見や考え方を一段と磨き、個性ある人間に成長してほしい。(50代)

■学問に対する憧れを持ってほしい。読む、読まないは別にしてもっと書物を買ってほしい。人に頼らず自分で努力して本を読んでいくとおのずと学問が面白くなってくる。大学生の間にそのような経験をしてほしい。(50代)

■学力の著しい低下。特に国語が低下。試験の成績を気にする。そのくせ余り勉強していない。フランス、イタリア、東南アジアの大学を訪問して感じることは、多くの学生が英語を話せるのに対して、京大の学生の英語力のなさにつくづくあきれかえる。(60代)

■まじめすぎる。羽目をはずす。冒険をする。活力がほしい。(60代)

## **マイクロエンジニアリング専攻**

■創造力がなくなった。サラリーマン的な学生が多い。(40代)

■変わらない点 ①基礎的なことを重視する点、②自分で考えること。

変わった点 ③ロジックを組み立てる力（説明力、文脈力）④他人の心を動かす力（まじめさでも何でも良い）⑤実際の現象を見る力。（40代）

■覇気がない。学問への探究心を自ら育め。（50代）

■全てがそうではないが、易きに流れて志の低い学生が増えている。また、精神的にひ弱になっている。（50代）

## 航空宇宙工学専攻

■現在の学生は、与えられた問題（解のある問題）を素早く解答する能力には優れている。しかし、解くべき問題／課題を設定する場面、解があるかないかわからない混沌とした問題に直面すると、手も足も出ない（出せない）学生が多いように感じる。これまでも述べたが、学生が大学から社会に出て求められる能力は、主体性（主体的に物事を考え、実行し、アピールする）、論理性（論理的思考、実行、アピール）、問題作成・設定能力（何をしたらよいか、問題を作る、進む方向を決める）、と考える。特に、問題作成・設定能力は重要であり、将来、組織のリーダとなっていくには不可欠である。また、社会に出てから直面する問題／課題には、解があるかないか不明なものがほとんどである。現在の学生には、もっと（自主的に）勉強せよ、物事を広く深く考えよ、また、大学は社会に出てからほどは厳しくないの、何事にももっと怖がらずにチャレンジせよ（何かに向かって踏み出さないと成にも展望が開けない）、といたい。

以前の学生と比べると（これまでも述べたが、下名は、博士課程修了後企業にいて、大学に戻って6年余りであり、以前の学生は、20～30年前の学生である）、上で述べたような、主体性、論理性、問題作成能力についてやや劣る学生が多いように感じている。これは、現在は、小学、中学、高校と、与えられた教材で（自分で教材を探すことはせず）受験勉強に注力した学生が多いことによるのでは、と感じている。（50代）

■指示されたことはきちんとこなすが発展性・独創性に欠ける学生が多い。自分で計算結果を消化せず、コンピュータ Out put のみを信じ込む。10～20年前と CPU が数オーダー速くなっているため、データ（結果）を大量生産するプログラムを作り、走らせ、帰宅し、翌日解析せずにコンピュータで図をプロットする。以前は計算バッチの合間に「考える」という作業が必然的に存在し、ものごとを深く考え、発展させることが可能だった。（50代）

■勉学意欲があり、与えられた課題をこなし、概ね期待通りである。しかし、授業に出席し、受講態度もよいが成績が平均をかなり下回る学生が一部にある。成績が優秀でも、案外自分の評価が謙虚な学生が多く、博士課程への進学を断念してしまうケースが多い。何らかの自信をつけて卒業して行って欲しい。（50代）

■知識はあるが、応用力に欠ける。深く考える習慣が少ない。授業にはまじめに出席するが、内容が理解できないままでも満足している。答えが与えられている問題を解く能力・速さはあるが、答えが分からない（あるいは無い）問題に対しては対応の仕方がわからない。流行のキーワードに敏感であるが、細かな論理の組み立てが必要な課題にはあまり興味を示さない。すなわち、導出過程より最終的な答えだけを求める傾向がある。（50代）

■大学は、狭い専門分野の単なるエキスパートの育成に陥りがちであるが、専門と広い視野の両面を持ち、勉学や研究へのモチベーションを高める必要がある。（60代）

## 原子核工学専攻

■基本的には学生の質は昔と大差はないと思うが、取り巻く社会環境の変化が大きく影響しているように思う。例えば、大学卒という経歴が当たり前になったこと、研究者あるいは教師として社会的な処遇がさほど高くはないこと、不況等による雇用条件の悪化と希望する職種への就職が簡単ではないこと、等々。京大生の場合平均的にはニートまでは至っていないが毎年数%の学生が該当するようであり、この傾向は増加すると推察される。はっきりした目的意識を持たせる学生教育が重要となる。(50代)

■少子化により競争率が下がっている所以で十分な能力を持った学生の割合が少なくなっていると思う。また、社会が成熟（閉塞？）してきているので今の学生が何かに取り組むはっきりとした意欲が低下してきているのかもしれない。今の学生が昔と比べてどうのこうのいうより社会の流れとして今はある意味仕方がない面もある。(50代)

■与えられたことはこなすが、自ら求めて動く学生は少なくなっているのではないかと思います。(50代)

■勉学の目的や動機が希薄であり、無気力さと受け身の姿勢が目立つが、学生個人の資質が劣っているとは思えない。うまくやる気を起こすことができれば、かなりの研究成果を挙げることを経験している。やはり、しっかりした教育と研究を教員自身が行うことが大切であろう。学生はたとえ内容を十分に理解できなくても、本質を感じることは出来る。(60代)

## 材料工学専攻

■多様な価値観を有している。その裏返しとして自分の人生の目的を絞りきれず、それを解決しようとする努力を怠るために宙ぶらりんになっている。こういう学生の比率が従来より増したように思う。(40代)

■精神年齢が低く、自主性に欠ける学生がかなり増加した。(40代)

■京大の学生は自分でイニシアチブをとろうとする意思が他の大学より強いと考えています。(40代)

■各専攻の研究教育分野と実際の企業との関係が最近の社会情勢の中でややもすると見えにくくなっている。特に学生はそれを見失い気味である。このことを教員が意識して実際にその関係が伝達できるような教育を行うことに 学生自身も自らが所属する専攻の社会における役割、立場を積極的にインターンシップや研究を通して吸収し、将来該当する分野を支える人材になれるように努力してもらいたい。(50代)

■工学研究科の場合には修士課程終了後、社会に出て活躍しようという学生と、博士課程に進学し、研究者になろうという学生には修士課程の段階からまったく異なる指導、明確な区別が必要であると思います。現状の渾然一体とした制度では学生が求めるものと指導者が期待するものとの間に少なからずミスマッチがあり、そのことが双方のフラストレーションの原因となり研究の活性化の障害、ひいては研究レベルの低下につながりかねないと思います。工学研究科の修士課程には学部プラス2年間の余暇 悪く言えばよりよい生活へのパスポートと考える学生と、あらたな5年間さらにその先の研究生活への第1歩と考える学生が混在しており、あまりよい状況であるとはいえません。これまでも議論されてきたと思いますが本気になって教育制度を見直す必要があると思います。その場合、後継者育成ということが教育目標の大きな柱であるエリート教育であるべきであると思います。(60代)

■学生のみならず教員も日本の製造業、加工業などに危機感を持って教育に真剣に取り組むべきだと思う。(60代)

### 電気工学専攻

■昔とそれほど大きな変化はないように思います。(40代)

■電気電子工学に興味をもって、主体的に勉強しようという熱意が全般的に感じられず、単位さえ取ればよいというような感じの学生が多くなっているように思われる。偏差値ではなく興味によって入学してきてほしいと思う。(50代)

■海外に出たときに博士号を持っていることの大切さをはじめて知るケースが多いようである。(60代)

■平均値としてみれば、初等・中等教育の有り様、社会一般の価値観を反映しているかもわからないが、個人をみる限り10～20年前と本質的に変わっていないと思う。自分の生き方について意識を持ちつつ、勉学その他に努力することで、方向性を定めて行ってもらえばよい。(60代)

### 電子工学専攻

■専門性を追求するというよりは、ジェネラリストの位置に留まろうとする傾向が強いようである。これは現在の社会を覆う不確実性に敏感に反応した結果と捉えることもできる。しかし、具体的問題を深く追求した体験に裏打ちされない、表面的な柔軟性や適応性はすぐに行き詰ることを十分認識して欲しい。(50代)

■一般的に、勉学意欲の低下がうかがわれる。4年あるいは6年が終了したとき、自分は何を会得し、何ができる人間かを棚上げにして、学部あるいは修士の学生のどちらにしても、就職では特定の利益率の高い大会社や、最新の技術開発で優位な会社に集中する傾向が強く感じられる。自分が何をしたいのか、そこでなにができるかでなく、目の前に見えることだけで価値や希望を決めている風潮がますます強くなっている。その結果、修士課程や博士課程に進学して、もう少し自分の能力を伸ばしたい、独創的なことがやりたい、というような発想や選択に至らないのではないかと思う（修士課程へは皆が行くから自分も、あるいは就職がよいからという理由が主である）。そのようになってしまった原因の根底には、何かにわくわくするような好奇心をたぎらせたり、その対象を追求して論理的に考察したりする創造的な体験が減っていることにあるような気がする。ただし、我々教育する側でも、彼らに自由に新しいことをトライさせ、時間をかけてその結果を見守るような余裕がなくなってきていることも事実である。(年齢不詳)

### 材料化学専攻

■昔の学生に比べて子供である。20歳は越えているが精神年齢は10代の学生が多い。自立心が乏しく教員への依存度が高いように思う。これが全体的な感想で、上位3割は昔の通りしっかりした学生である。従来は京大の卒業生の7割は社会に出しても大丈夫だったが、今は3割しか保証できないと思っています。4回生、修士の3年間で自分自身の研究のやり方を見つけしっかりと身につけて欲しい。(50代)

■1～2年生：専門以外に社会人として必要な経験を幅広くしておくこと。失敗もよい経験に



なる。教養科目の意義は大きい。京都で学ぶことの意義、すなわち 1200 年の文化の凝縮をこの間に学んでほしい。技術・芸術・考え方など。3～4 年生：専門科目の修得を徹底的に。修士：専門科目の修得をより徹底的に。問題解決能力の修得。博士：問題設定能力の修得。— 20 代こそおおいに体で覚えるべき時期である。この間に学び体得したことが 40 代、50 代の実力に反映されてくる。京大の卒業生は 30 代ではあまり目立たないが、40 代、50 代になると俄然輝いてくるというのが企業での評価。これは教養教育、基礎重視教育の結果ともいえる。独学をしっかり教えるこれまでの方針を堅持し、よい人材を供給しつづけることがわれわれの課題です。(50 代)

### 物質エネルギー化学専攻

■社会全体にも目を向けてもらいたい。「少なくとも新聞ぐらいは目を通せ」と言いたい。(50 代)

■10～20 年前とさほど変わってはいないように思われる。30～40 年前とは大いに変わっている。・個人主義の深化。・プラグマティズムの浸透。・深く広く学ぶ態度の欠如。しかしすべては個々の学生によって大いに異なるので概ねの傾向としてはこういうことであろう。(50 代)

■・覚えようとする。・必要なときに聞けばよいと思っている。・自分で学ぼうとしない。教えられるものと考えている。・与えられるものであってそれを暗記するのが役割と考えている。・自分で判断しない。・周りの人たちが自分のためにお膳立てをしてくれる、また、それが当然と思っている。・自分中心。・思いやり、察しがない。・「もったいない」がない。(50 代)

■トップ 10～20 %の学生像はそれほど変化はなく、むしろよくなった面も認められます。しかしながら、平均レベルでは、意欲や執着心などが乏しくなっており、著しい場合には、研究者・技術者としての資質を疑問視せざるを得ません。(50 代)

■本質的な違いはない。自我の発露が大切であることを大学、大学院時代に経験させることが重要です。失敗も経験した上で成功経験ができるとよいですが、そのためには失敗しても立ち直る強さが必要。最初の失敗でくじけないように支援も必要。支援の必要度が多くなったかもしれない。(60 代)

### 分子工学専攻

■日本が豊かになったので、本当の意味で挑戦する学生が少なくなった。京都大学で研究するなら、自分の限界に挑戦して欲しい。(40 代)

■ノブレスオブレジ (Noblesse Oblige) を自覚して責任ある行動と自分の何が社会に貢献できるかを常に念頭において行動して欲しい。これがだんだん欠如してきている。(40 代)

■自分で学ぶ姿勢を持つこと。基本的、基礎的事項への興味を持ち続けること。(50 代)

■比率から言うと、現在の学生は地味な研究探求型であるとはいいがたくなっている。このことが今後わが国の将来にとって吉か凶かということは俄かには分かり難い。また、とりあえず研究結果だけを出力すればよいとする教員側の考え方の変換もあるとすればこれは構造的な問題であろう (50 代)



## 高分子化学専攻

■（研究分野の）ファッションを追うな。細部の詳細よりも、まず自然科学全体の輪郭を捉えよ。先生のまねをするな、先生の目指しているところを目標にせよ。以上、何年経っても不変な注文ばかりです。（50代）

■学生を作るのは社会である。社会に文句はあっても学生に対してはない。（50代）

■現在の学生は学ぶことが非常に多い。特に学ぶべきことは何かをよく考えて、将来プロとして活躍できるための素養をしっかりと身につけることが重要。（60代）

## 合成・生物化学専攻

■学力低下などが言われるが、依然として知的好奇心旺盛な学生も多い。このような学生は入学時にはもっと多かったはずである。いつ、どのようにこのような態度が失われるのかわからないが、われわれもそれが失われないような教育をする必要があるし、一方で、学生もここまでで燃え尽きてしまわないような余裕が必要であろう。勉強（紙の上での）ばかりできるより、実践力のある、好奇心旺盛な学生であって欲しい。（高いレベルの基礎力は重要）（30代）

■どん欲な人が減少。インターネットが文字離れを加速。（50代）

■しっかりと自分の判断も含めて研究を進めている。優秀である。（60代）

## 化学工学専攻

■トレーニング型思考、意欲の低さ、主体性のなさなどには目を覆いたくなるが、これらをもたらしたのは文科省及び大学である。学習指導要綱の軽産化により、入試範囲が狭まり、また「難問奇問」という的はずれの批判に大学が従った結果、「トレーニングすれば通る」入試ができあがってしまった。入学後はさらに、数百名からなる大学科の一員とされ、教員からは学生の顔が見えない講義を受けさせられ、自分が数年後にはどんな専門分野を学ぶかすら見えない環境で多種多様な科目単位をとらねばならないとすれば、私も意欲は失って「単位とり」に走るであろう。これに今後さらに、「質問しようにも先生は吉田にいない」となれば改善を期待すべくもない。彼らは被害者である。注文をつけるべくは京大と文科省だ。何の利も上がっていない法人化をせめてこの惨状の改善に活用すべきである。最低限、「入試の『学習指導要項』との決別」「入学時あるいは低年次からの小規模コース分属」さらには、「学部と院の地理的一体化」「博士学生への給与支給（学部学生の「あこがれ」とすべし）」を図ってゆくべきであろう。（40代）

■京大生にはやはり潜在的能力を持った子が多い。その能力を如何にして伸ばしてあげるかを考えることに全精力を注ぐべきである。彼らへの注文は高校時代のような何でもできる優等生ではなく数多く受ける授業の中から1つ興味を覚える科目内容を見つけ、その内容ではほかに負けないぐらい徹底して自分から勉強して自分のコアコンピテンス（中核能力）となるようにすればよい。（40代）

■京都大学の学生としてもっとも必要な「主体性の欠如」が最大の問題と考える。この点が10から20年前の学生ともっとも異なる点である。（50代）

■まず、考えなければいけないことは、学生の年齢層は社会世相の鏡であるということである。その社会世相を造ったのは我々大人である。例えば、携帯電話が若年層に広がったとき、最近の学生は・・・という批判を聞くことがあったが、もし大人が携帯電話を学生に売ることを考

えたビジネスを実施しなければ、そのようなことは生じない。このように、彼らに対する批判は我々に対する批判として受け止める必要がある。また、社会において、若者には若者の生きる規範がある。物質が溢れ、ある安定した社会体制で幼少～少年時代を歩んできた現在の学生にとっての一つの規範は、線路が引かれた中で盲目的に受験勉強し一流大学へ入って一流企業へ就職する。あまり無理をしない範囲で無難に賢くこなし、そこそこであればOK、努力と報酬のバランスに敏感というのが小生のみる現在の学生像である。しかし、これを望んできたのは両親で、この中で育てられてきた学生は被害者でもある。もし、中学・高校で、将来の日本は国際的に展開していかなければ生きる道はない。そのためにはテストが出来ることだけではなく、タフな交渉ができ、機知に富んで柔軟に対応できる能力、無から有を生み出す能力が不可欠と教えてくれば、もっと考え方が変わってきていると思う。

さて、本題に移るが、上記のスタンスの最近の学生に欠けているものはリスクを負う勇気である。優等生が多く、講義もまじめに出席して無難に単位を取得していく。しかし、これでは今後日本を支える人材としては不足である。失敗を恐れず、自分のアイデンティティをしっかりと持って能動的に行動していくことが望まれる。20年前の学生と比較すると、確かにこの点では劣っているが、色々な情報が溢れた中で育ってきた分、洗練されたセンスは持ち合わせている。ましてや、10～15年前のバブル期の学生（現在の30代半ばまでの教員層）よりはよほど主体性があり、自らのことをよく考えていると思われる。

よって、主体性を持たせるような確かなメニューを考えていくことで、タフで機知に富んだ国際的な人材として成長することは間違いないと感じている。(50代)

■小学生時代から物があふれた社会で育ち、かつ平成という産業の停滞した時代を過ごしてきたせいか、以前に比べ小さくまとまってチャレンジ精神が無いように見受けられる。楽に単位が取れる科目と努力が必要な科目があれば、迷わず楽な方を選ぶであろう。世界で通用する研究者・技術者になるためには、今何をすべきかを考えて行動してほしい。(50代)

■あまり変わったとは思っていないが、Ambitiousでは無くなったかなと思える。社会が豊か過ぎるのかも。(60代)

■基礎（知識も含めて）を身につけ、自分で考えること。(60代)

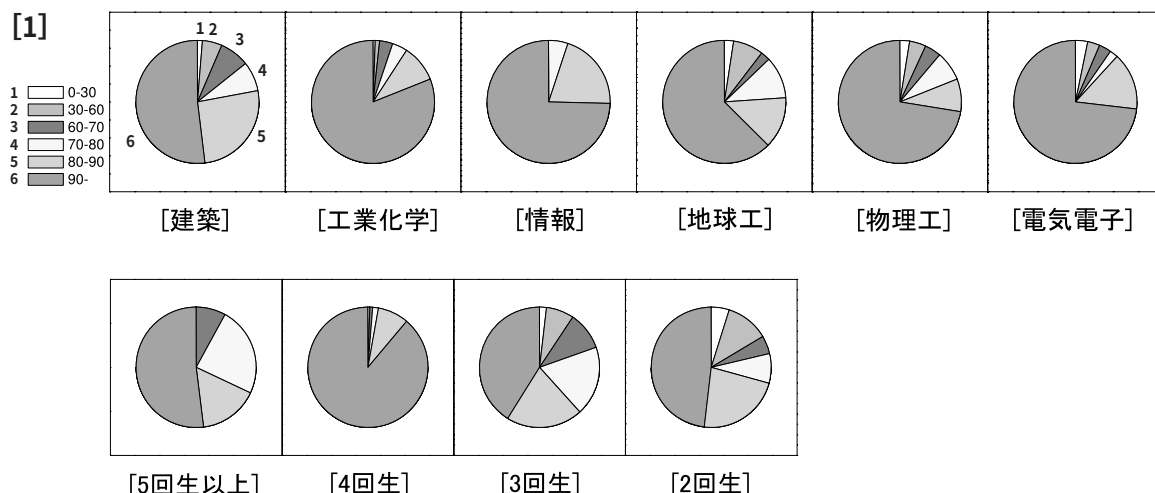
## 情報学研究科

■精神的に問題のある学生が多くなった。最近では修士に入ってから、引きこもる学生が多い。対応するのに非常に気を使うし、時間的にも大変である。授業中に一番前で聞いていても、道であっても知らん顔、トイレトペーパーの包装紙や筒はほうりっぱなし、自転車は反対車線を走ってくる、とにかく基本的なことができていない。多様な友達と付き合わないのではないかと思う。クラスでのコミュニケーションが非常に悪い。代返などをしていたころが懐かしい。授業中に質問しても、うんともすんとも答えない。イエスカノーかを問うと、首を縦に振ったり、横に振ったり。(50代)

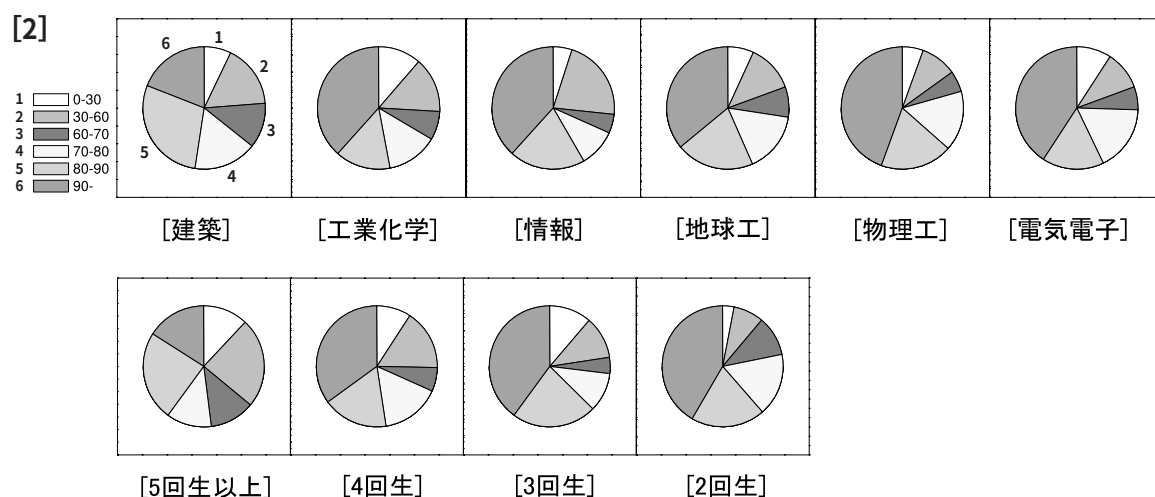
## (Ⅳ) 学部学生(2回生以上)へのアンケート集計結果

2回生以上の工学部在学学生全員に対してアンケートを行った。各学科の事務室で配布したため、配布数は不明、回収数は736であった。

【1】単位数取得率は貴方の学年の必要数に対してどの程度ですか？ \_\_\_\_\_ %



【2】平成16年度(昨年度)の講義出席率は何の程度でしたか？ \_\_\_\_\_ %

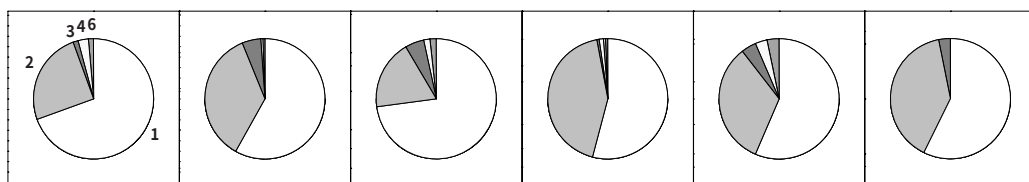


【3】昨年度の予習・復習にどの程度の勉強時間をかけていましたか？(それぞれもっとも時間をかけている講義を念頭において教えてください。)

1 コマ (90 分× 15 週) あたり 予 習 \_\_\_\_\_ 時間 復 習 \_\_\_\_\_ 時間  
レポート \_\_\_\_\_ 時間 関連読書 \_\_\_\_\_ 時間

[3]

1 0  
2 1-14  
3 15-29  
4 30-44  
5 45-59  
6 60-



[予習]

[建築]

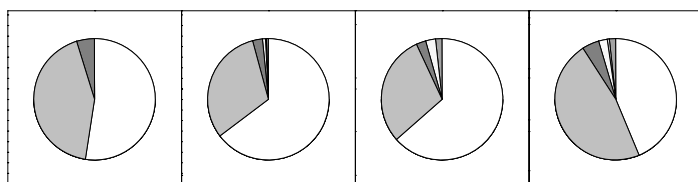
[工業化学]

[情報]

[地球工]

[物理工]

[電気電子]



[5回生以上]

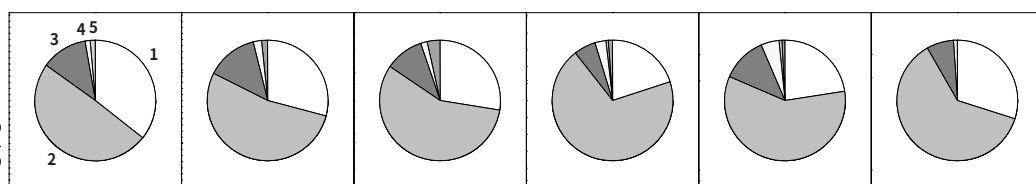
[4回生]

[3回生]

[2回生]

[3]

1 0  
2 1-14  
3 15-29  
4 30-44  
5 45-59  
6 60-



[復習]

[建築]

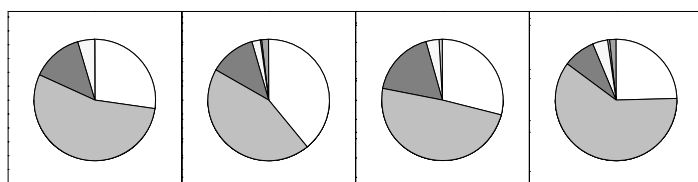
[工業化学]

[情報]

[地球工]

[物理工]

[電気電子]



[5回生以上]

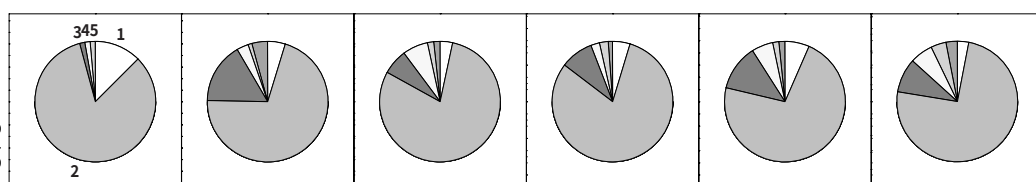
[4回生]

[3回生]

[2回生]

[3]

1 0  
2 1-14  
3 15-29  
4 30-44  
5 45-59  
6 60-



[レポート]

[建築]

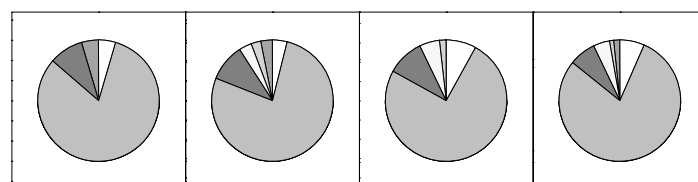
[工業化学]

[情報]

[地球工]

[物理工]

[電気電子]



[5回生以上]

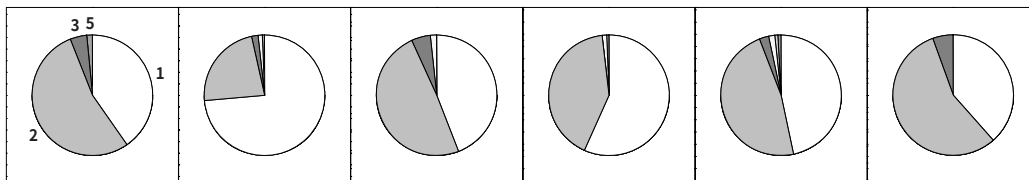
[4回生]

[3回生]

[2回生]

[3]

1 0  
2 1-14  
3 15-29  
4 30-44  
5 45-59  
6 60-



[関連読書]

[建築]

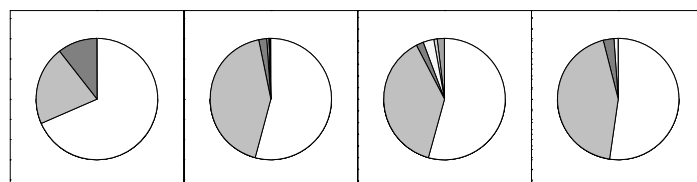
[工業化学]

[情報]

[地球工]

[物理工]

[電気電子]



[5回生以上]

[4回生]

[3回生]

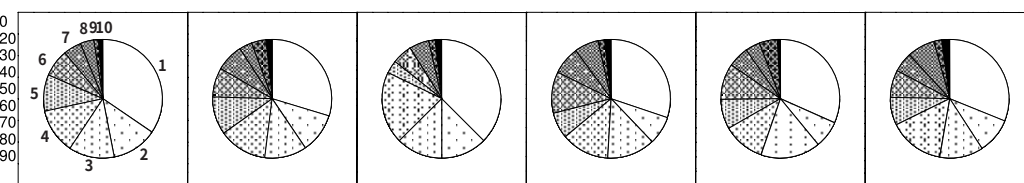
[2回生]

【4】昨年度の課外活動（クラブ、サークル）、アルバイト、勉学の大学生活に占める割合

クラブ・サークル\_\_\_\_% アルバイト\_\_\_\_% 勉学\_\_\_\_%、  
その他\_\_\_\_%（具体的に\_\_\_\_\_）。

[4]

1 0-10  
2 10-20  
3 20-30  
4 30-40  
5 40-50  
6 50-60  
7 60-70  
8 70-80  
9 80-90  
10 90-



[クラブ]

[建築]

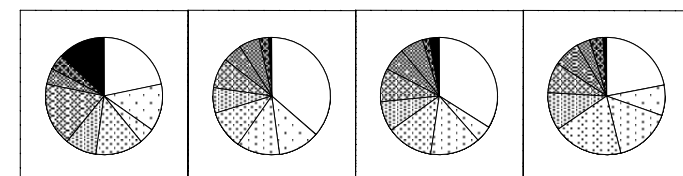
[工業化学]

[情報]

[地球工]

[物理工]

[電気電子]



[5回生以上]

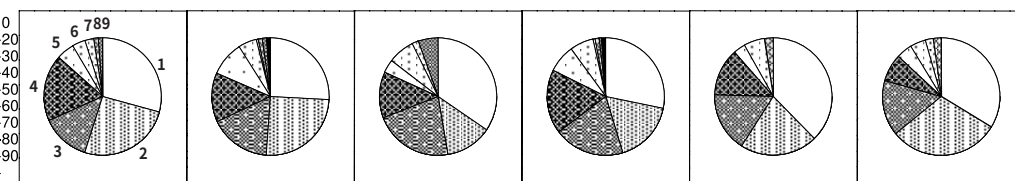
[4回生]

[3回生]

[2回生]

[4]

1 0-10  
2 10-20  
3 20-30  
4 30-40  
5 40-50  
6 50-60  
7 60-70  
8 70-80  
9 80-90  
10 90-



[バイト]

[建築]

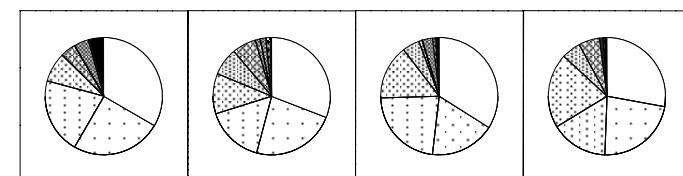
[工業化学]

[情報]

[地球工]

[物理工]

[電気電子]



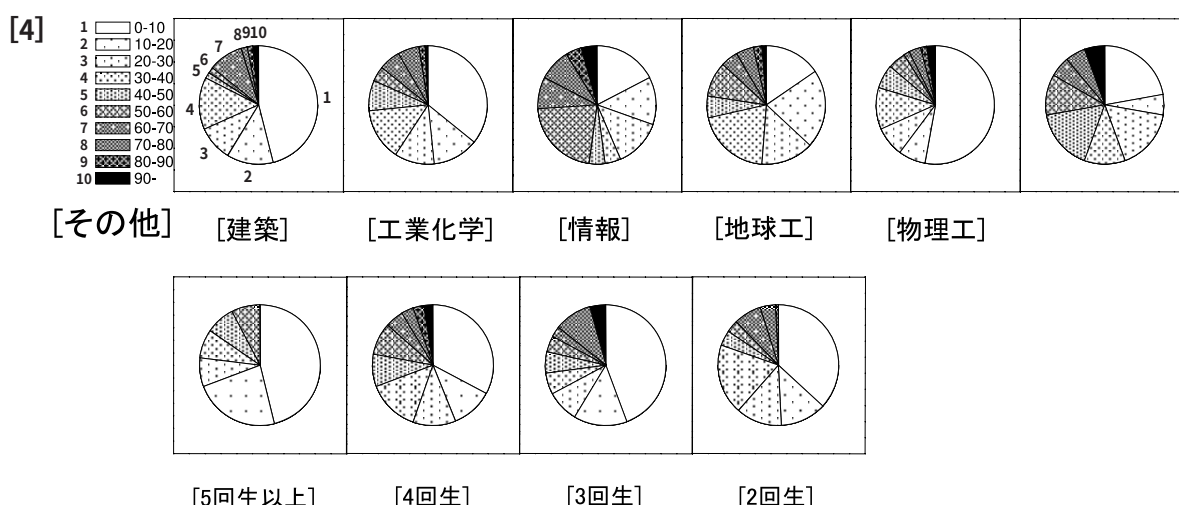
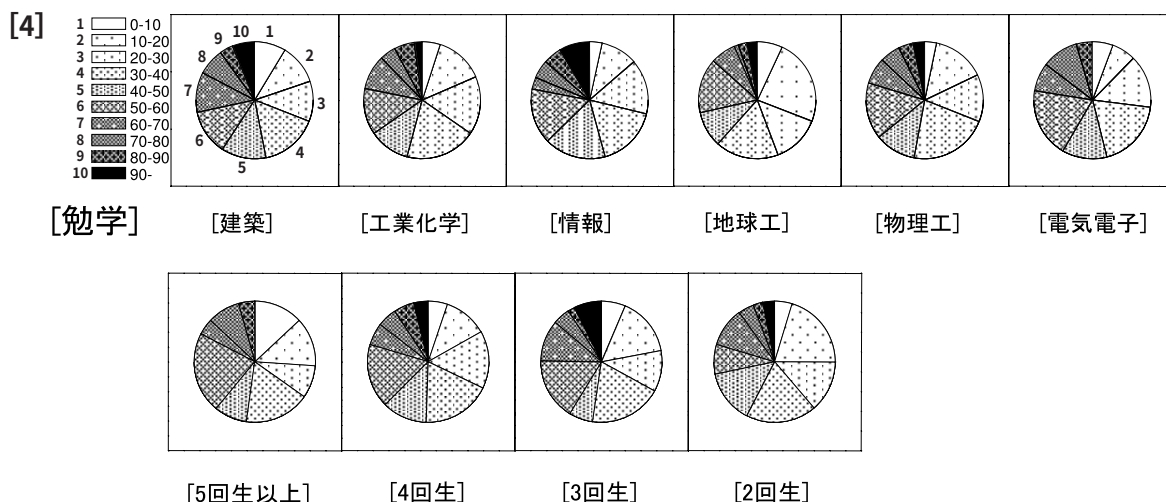
[5回生以上]

[4回生]

[3回生]

[2回生]





## その他の理由

### 2 回生

[地球工]：遊び。休養等。京大生協 E-COOP。自由。趣味。睡眠。休息。生活に必要なこと。通学等。読書。友達と遊ぶ。何もせず大学にいる。ボーイスカウト。ボランティア。

[建築]：インテリアコーディネーターのための勉強。製図など。読書。

[物理工]：インターネット。遊び。家でゆっくり。趣味。家でぼーとしてた。趣味。娯楽。

[工化]：外出。娯楽。趣味。旅行。遊び。趣味等。レクリエーション。友達と遊ぶ。遊び。

### 3 回生

[地球工]：TV 等。散策。読書。友達とあそぶ。リフレッシュ休暇。遊び。

[建築]：課題（設計）。趣味。ピアノ。読書。旅行。わからない。遊び。コンパ。趣味。設計。設計演習。読書。飲み会。引きこもり。ボランティア活動。名所めぐり。旅行など。

[物理工]：ボランティア。通学。家事。

[工化]：ギター。麻雀。思索にふける。読書等。遊ぶ。自己批判。

## 4 回生

[地球工]：PC。遊びに行く。オンラインゲーム。家事など。ぐだぐだ。自炊等。写真撮影。就活。趣味。趣味（建築めぐり。美術館に行くなど）。テレビ。友達との交際。習い事。日常生活→自炊など。パチスロ。旅行。ボランティアの介護活動。息抜き。教員採用試験の勉強。資格試験の勉強など

[建築]：コンパ。趣味。設計演習。読書。飲み会。引きこもり。ボランティア活動。名所めぐり。旅行。

[物理工]：就職活動。美術館巡り。趣味。睡眠。だらだらしていた。テレビ。読書。友人と遊ぶ。ボランティア。運動。外出。カラオケ

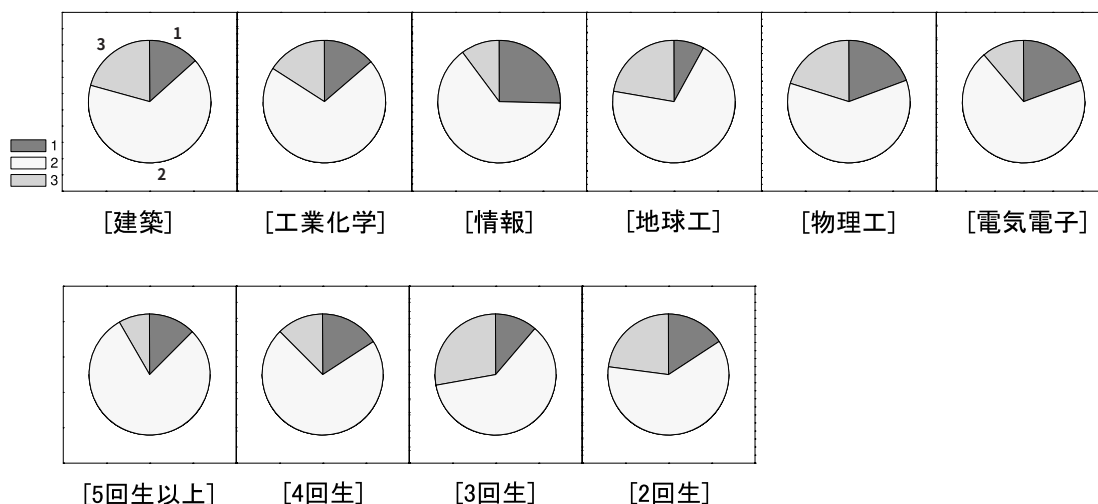
[工化]：遊び。休養。学校に行っていない時間。家にいる時間はほぼなかった。休養。筋トレ。交通事故に伴う傷の治療。娯楽。試験前の気合い！！。自分の趣味。睡眠。青少年活動。通学とか。遊び。ぼ～っとしていた。テレビ、インターネットなど。読書、テレビ等。習い事などなど。友達と遊ぶ。習い事（ピアノ）関係。人間関係。人付き合い。麻雀、テーブルゲーム。友人と遊ぶ。友人と学校での会話。友人と交流、読書。友人との交遊。旅行、遊び。趣味。生活。ネットゲーム。友人とスポーツ。ボーイスカウト。

### 【5】大学の講義は期待通りでしたか？

1. 満足    2. どちらでもない    3. 不満

理由 \_\_\_\_\_

【5】



理由

## 2 回生

[地球工]：

1. 優れた教授は何人かいた。それ以外は全然ダメ。
2. 意外に気の合う人が少ない。一部不満な科目あり。いらない授業も取らないといけないから。科目によって全く違います。教員によって講義の面白さが異なる。教授に差がありすぎる。講義によってマチマチ。公正さが足りない。最初からあまり期待していないから。自分

次第でかわると思うから。授業内容には満足であるが。時間が長すぎた。専攻に対する興味が薄れてきているから。想定範囲内だった。そんなに期待していたわけではないから。大変満足できる講義もあれば何も学ぶべきものを提供しないものもある。ただムズすぎて理解するには時間がかかりそう。特になし。初めから期待していない。まじめすぎる。まちまち。全く想像がつかなかったの。

3. 一方的である。おもしろくない。おもしろくない。概論が中心なため。教授が1人で納得しているだけで。わかりにくい。授業に工夫が足りない。自分で勉強しろというのは手抜き授業の言い逃れ。全体的にわかりづらい。束縛がない。自由すぎる。特におもしろみがない。なるほどと納得する瞬間がない。内容は良いが教員が面白くない場合が多かったから。毎回出席しないとついていけないのがきつい。やる気がない人が多い。わかりにくい。

[建築]：

1. 建築について勉強できるから。
2. 思ったとおりの感じ。先生よってまちまちで。熱心さが違いすぎる。レベルとしては予想より少し難しかった。わかりにくい人もいる。
3. 一時間半は長い。教え方があまりよくないと思う。教員の熱意がないと思う。それなりにすばらしいが眠い。丁寧でない。熱意のない先生がいる。わかりやすすくない。解りにくいことが多い。

[物理工]：

1. 高度な内容だったため。
2. 面白い教員が多くいた。勉強に対する意欲や態度が結果となって現れる。数学の講義がわかりにくい。講義によって差がある。先生によって差がある。理解させようとする気が感じられない。高校とあまり変わらなかった。先生によって差がある。
3. 演習の時間が少ない。演習の時間が少ないし解法の説明もすくない。学生の理解度を考慮しない講師が多い。授業がうまくない。一般教養がつまらない。解答解説を省略しがち。理解させようとする気が感じられない。

[電気電子]：

1. 「つまらないし役に立たない」と思うものもあるにはあるが少ない。学生に任せてくれるのが良い。興味のあるものを選べたため。
2. サポートの少ない授業が多い。なかなかついていけません。期待という期待をあまりしていなかった。教えるのが上手い先生と下手な先生の差が大きい。講義による差が大きい。漠然としたイメージしかなかったの。満足いくものもあったし、そうでないものもあった。満足のものと不満のものがあるから。面白くないものもあった。
3. 一学年140人ぐらいいるのに席が70席ぐらいしかない教室でやる授業がある。教員によっては何を言っているのかわからない。授業についていけない。

[情報]：

1. それなりに面白いものもあった。後期はより高度な内容を学習できたから。

## 2. 期待していない。予想通りつまらない。

[工化]：

1. 興味深い内容だったから。良い講義、悪い講義がある点も含めてまあ期待通り。工化概論が面白かった。もう少しA群を増やしてもよいが満足。
2. 面白い講義とそうではなかった（ものがある。）。大変役立つ講義もあれば出席してもぜんぜん意味のない講義もある。非常に興味深い講義もある一方で退屈なものもあった。面白い授業とそうでないものとの差が激しすぎる。思っていたとおり。学生の理解度を考慮しない講師が多い。基礎的なことが学べた。期待通りというより予想通り。おもっていた。教科書の内容そのまま。自習しなければいけない。指導法が悪い。先生によって差がある。取りたい授業はすくなかった。分かりにくい。
3. 演習が少ないので身につかない。進むのが早い。教科書をただ黒板に写しているだけだ。教授の自己満足の授業だから。説明がわかりにくい。先生の声が聞こえない。復習がないからついていけない。もっとはっきりしゃべってほしい。

## 3 回生

[地球工]：

2. 期待通りのとそうでないのがあるから。教員による差が大きい。授業によって集中できるものとできないものがあった。スライドの授業が多くて勉強しにくい。周りが暗くてメモをとりにくいし眠い。先生によってあまりに違う。満足いくのもあればそうでないものも多い。良い講義もあるが全く分からない講義もある。理解させようとする先生の講義はためになる。自分の興味にも依るし。理解度によっておもしろみも違う。
3. JABEEの影響で出席をとるようになったから。環境の授業が予想以上におもしろくなかった。将来がみえてこない。大半の授業が生徒の興味を削ぐ展開。テキストが高い。仕方ないのはわかるがなんとかならないでしょうか。目的や核心がはっきりしていない。レベルが高すぎる。どう勉強したらよいか分からない

[建築]：

2. わからないことが多い。
3. 自分しだい。だるい。単位取得への焦りから本当の意味で勉強していなかった。僕達同様に先生もやる気がない。

[物理工]：

1. 先生が親切。勉強になった。
2. 受講可能科目を増やしてほしい。科目選択の自由度がすくない。先生によって差がある。
3. 学生の理解度を考慮しない講師が多い。講義に出なくても単位が取れてしまう。

[電気電子]：

2. いい先生とだめな先生がいるから。わかりにくい授業は面白くない。去年のはまだ専門が少なく余り興味ない科目もあったから。最初から期待していない。思ったより科目数が多い。

想像してなかった。眠くなる講義が多い。面白い授業とそうでない授業の差が激しい。良い部分と悪い部分とある。

3. 教科書で十分。いい参考書がなければ仕方なく出る。難しい。OHP が読めない。

[情報]：

2. 担当講師によって授業の上手さが違いすぎる。

3. 学生全体を対象にするとどうしても面白くない授業になるのもっと相手を絞ったわからない人は来なくて良いという授業もほしかった。全くわからないか、わかりきったことしかない。理論ばかりでわからない。問題解かせてくれ。

[工化]：

2. 概ね期待通りであったが一部どうしようもなく授業が苦痛であるものもある。教科による。先生によると思う。いいものもあればよくないものもある。講義によって好き嫌いがあるから。選択できる講義が少ない。

3. できる学生とできない学生がいる。できない学生でも、最低限のレベルは押えられるような“教育的”な講義を行って欲しい（それを押えた上で発展的な講義を行って欲しい）。先生が陰湿だから。一方通行。自分で教科書を読んだほうが分かる。

## 4回生

[地球工]：

1. 3、4回生のは満足。専門的でよかった。総合的に考えると、良かったと思います。特に不満はないです。

2. 科目や教員により満足度に差があるため。基本的に教科書通りだから。教員によっては授業で何を言っているのか理解できない。興味深い講義がある反面、おもしろくない講義もある。具体的な期待はしてなかった。講義によって意欲の出るものとそうでないものの差がありすぎた。講義により良いものと悪いものがある。講義によりレベルがまちまちである。こんなものであるというあきらめから。実習計算が不足していた。少数ながら期待以上のものもあり。シラバス通りのもあれば、そうでないのもあった。積極的に学ぶ姿勢が必要。それぞれだったから。どうでもよし。とりあえずこなすことはできたが。自分の力がついたか良く分からない。入学当初は高校時代とのギャップに苦しんだが、4回生にもなると慣れてしまった。別に期待はしてなかったから。満足できる講義とできない講義の差が大きい。満足できるものも不満であるものもありました。良いと思うものと悪いと思うものがあったから。分かりやすい講義と、分かりにくい講義の差が大きい。

3. “期待通り”ではない。入学前に考えていた大学のシステムと異なっていたため単位を集めるためだけに受講した講義も多かった。1回生で多様な専門の科目が欲しかった。デザインの授業など。おもしろくない講義が多かった。講義が下手な先生が多い。ざつ。先生の教え方が分かりにくすぎる。難しくしゃべりすぎ。もっと理解させようという気持ちで話してほしい。今まででお金を払う・出席する価値があった先生は3人くらいでした。先生の中には黒板と下しか見ていない人もいる。研究の方が、授業より尊いものだと考える先生が大勢いる。研究者としては一流だが、教師としては三流。授業中は学生の眼を見るべきだと思い



ます。ただテキストを読んだり、スライドショーですませたり分かりにくかった。提供者側にサービス精神が感じられない。むずかしすぎる。もっと具体的な事例を交えながらやってほしい。もっと進んだ内容がほしかった。

[建築]：

1. 専門科目、特に設計演習。幅広く学べた。別になし。
2. 良いものもあればひどいものもあった。期待が大きすぎた。期待していないから。期待通りの授業もあれば、そうでもない授業もあったから。教授の熱意が伝わる授業とそうでない授業がある。講師によってまちまち。ちゃんと聞いていたとはいえないので、どちらでもない。評価法がはっきりしない。
3. 講義というより講演といった印象。やる気のない先生だった。

[物理工]：

1. 充実していた。専門科目では先生の熱意が伝わってきた。レベルが高い。興味が持てた。どの講義も興味深い。
2. 何も期待していなかった。発表やディスカッションを取り入れた授業がもっとあっていい。物事の見方を変えさせてくれる授業はよかった。面白くない。質問がしにくい。自分で勉強しないとわからない。無駄が多い。もっと工夫した授業を行ってほしい。理解させようとする気が感じられない。教科書を読んでいるだけの講義が多い。予想通りだった。先生によって差がある。先生の自己満足で終わる授業がある。満足はできない。役に立たない。
3. 先生によって差がある。理解させようとする気が感じられない。先生が一人でしゃべっている。レベルが適当でない。カリキュラムが悪すぎる。講義ごとにマニュアルをつくるべき。少人数制のものをもっと増やしてほしい。大体の授業内容は教科書を読めばわかるレベル。学ぶ目的がつかみにくい。身にならない。もっと厳しくすべき。

[電気電子]：

1. いろいろなことに興味を持てた。シラバスの通りの講義が行われたから。よく準備がしてあってわかりやすい講義が多かった。学びたい分野の中に必ず満足いく講義はいくつかあった。色々身についた。
2. 1回生・2回生の共通科目よりは3回生の専門科目のほうが興味持てた。いくつかの講義で教授の教え方が満足のいくものではなかった。よく理解できない部分があった。科目・先生によってばらつきがある。期待通りの講義もわずかだがあった。教員によって授業のレベルの差が激しい。興味ある授業とそうでないものとの差がある。興味のない講義もあったので。講義により差がありすぎるので一概には言えない。昨年以前の感覚と変わらなかったから。自学自習に期待している面がありそれに気づくのに少々時間がかかった。大体予想通りだがそんな過度の期待はしていない。特に何も思っていなかった。入学前にどんなものかわからなかった。満足できたのも多かったけど平均するとどちらでもない。面白い授業もあった。教授が授業にやる気を感じないものがあった。良い講義がある反面本当に大学の講義なのか疑いたくなるものもありました。
3. コース分け等がなく範囲が幅広すぎる。席が足りない。黒板が見えない。テスト前にノー

トをコピーしたやつが簡単に単位を取れる。出席をとるべき。

[情報]：

1. 3回生は専門講義が多く、楽しめた。ゼミが重かったが1・2回生に比べて実社会との関連が見えたから。先生方はわかりやすく教えてくれました、それにこれからの研究へ役に立つ講義はやられているとおもいます。
2. あまり出ていない。いい講義もあれば悪い講義もある。よかったものもあればそうでないものもある。教員による。教科書を読んだらわかる。千差万別いろんな授業もある。多くの講義があるので一概には決められない。熱心に指導していただいた講義とそうでないのとまちまちだった。勉強しようと意欲がわく講義が少ない。満足な点と不満な点、両方あったため。面白いものもありつまらないものもある。面白い授業と出ていても無駄な授業があるため。良いものもあるが、単位以外に何も得られなかったものもそれなりにある。
3. 講義だけでなく、もう少し実習を増やしてほしい。単位認定の基準が微妙な科目があった。

[工化]：

1. 教員の講義は為になりました。出席して課題さえこなせばある程度の実力がつくので。先生の教え方がよかった。たくさんのことを学ぶことができたから。多少難しく、易しすぎない。本当に単位は空から降ってきた。予想通りだった。分かり易かった。先生方の教え方が熱心で解りやすかった。大体想像していたとおりだから。平均的に見たら満足と思える。
2. A群はまさに大学の授業って感じでしたが、B群や専門は理系科目だからか高校と一緒に。科目によって面白さが違う。可もなく不可もなくという感じ。最低限の質はあるという印象。期待通りのものあれば、そうでないものもある。期待通りのものもあったし、期待外れのものもあった。教員により差が激しい。講義よりテキストを読むほうがわかりやすいし、効率がいい。講師によって面白さが違う。最初から期待していない。去年は勉強する意欲が少なかったもので、講義のせいではない。指導の仕方が下手や苦手な先生もいるので。自分で勉強する方が早いことが多い。授業（教授）によるが、声が小さかったり、板書が汚かったりで何をしているのか分からない時があった。教授によっては大変面白く、分かり易い授業をしてくれたため。授業に出なくても単位が取れるのが大半であった。推定できるものとできないものがあったから。先生によって個人差が大きいので一概に言えず。先生によって差がある。そこそこ、たまに面白かった。大学に入る前はもっと楽だと思っていた。専門科目の講義には満足。単位があまり取れなかったから……。担当教員により様々。特に期待は持っていなかった。長い。熱心な教員もいれば、そうでない人も……。まあ、このくらい（予想通り）だった。満足できる講義がある一方で、つまらない講義もあったから。役に立たない。良い授業、悪い授業様々ある。良くも悪くもなかった。予想通りの自由な校風だった。分かりにくい講義が多いが、教員側に問題があるとは考えにくく、改善が困難。講義はわかりにくい、自分も努力していないから文句が言えない。集中していない学生が多かった。出席していない。熱心な先生といい加減な先生がいるから。予備知識が少ない。
3. 教え方が下手（人が多い）。教科書+αがもう少し欲しい。教員が自己満足な人が多かった。教授に教える気がない。興味を持てない。出席を確認される。つまらない。熱心な教

員が少ない。難しく理解できない。面倒だ。もっと素晴らしいものだと思っていた。教え方を考えている方が少ないように感じられる。面白くない。学年によって難しさに差がありすぎる。生徒に教えようと思っていない教授が多い。

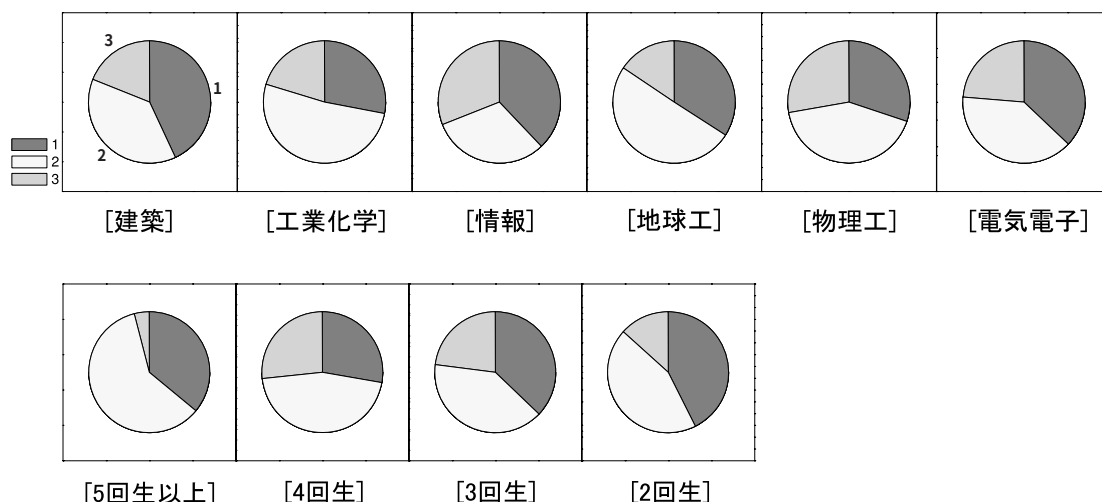
**【6】全学共通科目講義のA、B、C、D群\*別満足度、専門科目講義満足度を教えてください。**

**A群**    **1. 満足**    **2. どちらでもない**    **3. 不満**

理由\_\_\_\_\_

\*教養教育は主にA群からD群に分類されている。A群：人文科学、社会科学、B群：自然科学、C群：外国語、D群：保健体育。

**[6]**



**理由**

**2 回生**

[地球工]：

1. 科目によっては話がおもしろい。興味のある講義が取れたから。興味深いのが多かったから。現代の経営学B（上憩先生）がよかった。自由に選べて興味本位で選択できた。生態人類学基礎論（各論）が興味深かった。生徒の興味を引くような努力がされている。専攻したい科目とは違うことが勉強できるから。先生の興味深い話が聞けてよかった。そろった。大半が教員の趣味みたいな授業だけに単位はくれるから。内容が濃くておもしろく、課題などの負担も常識的。良い先生がいた。
2. 一部期待はずれの科目があった。受けてない。聞いていておもしろいものもあれば、無駄なものもある。当たり外れが大きい。教授に差がありすぎる。ふつうだったと思う。難しい内容。もう少し基礎的な内容を増やしてほしい。楽だとは思いますが楽しいとも・・・。レポートだと助かった。
3. おもしろくない。出席しなかった。楽勝科目がへっている。

[建築]：

1. 面白い講義が多かった。面白いものは面白い。自分の好きなものをとればいいから。ゼミ形式はすばらしい。幅広い知識が身につけられてよかった。
2. あまり社会科学に興味がない。出席が少ないから。人が多い。
3. 興味がわからない。

[物理工]：

1. 学びたいことを自由を選べる。興味深い内容が多い。好きだから。興味深い授業が多かった。
2. 授業によって差がある。先生によって差がある。クラス指定によって興味ある授業が取れなかった。単位をとるためだけだった。楽しい授業があった。
3. 面白くない。魅力がない。

[電気電子]：

1. ポケゼミが楽しかった。教員の話は基本的に興味深い。自分の興味のあるものが選択できるから。中身が面白い。負担も少なく楽しく学べた。面白かったから。面白く、興味の持てるものがあった。
2. とても興味深いものとそうでないものとのギャップが大きい。興味があったりなかったり。今はまだ判断できない。面白いものとそうでないものがあるってプラスマイナスゼロ。
3. シラバスどおりに進まない。適当すぎる。

[情報]：

1. それなりに面白いものもあった。やさしい。期待していたよりも面白かった。興味深い内容だった。
3. 内容に興味をもてない。

[工化]：

1. いろいろな講義が受けられてよかった。面白い講義だったから。教科書がないので面白い。興味のあるものを勉強できるし、理科の勉強の間のリラックスにもなる。楽しかった。単位が取れたから。
2. 面白い授業とそうでないものとの差が激しすぎる。退屈な講義もあったので。普通。勉強になった。より特色ある講義を受けてみたかった。
3. 面白い授業とそうでないものとの差が激しすぎる。面白くない。興味の持てる授業が少ない。専門と重なり、興味のあるものが取れなかった。

### 3 回生

[地球工]：

1. 選べるので。おそらく人生を歩む上で非常に為になるであろう講義があったから。教養になる。出席しなくていいから。先生方の専門分野がたいい授業内容でおもしろかった。大学っぽくて良い。楽しく勉強させてもらっている。幅広い分野に触れられたから。理系以外

の科目を知ることができて、楽しかったから。

2. 昨年はA群は履修していない。しっかり聞こうと思えば有意義なものもある。単位はそろった。まずまず面白い授業もあれば、全くくだらない授業もあった。
3. あまり興味がない。急に専門的な話をされてもわからない。人数が多すぎる

[建築]：

1. 単位がとりやすい。内容が面白かった。学びたい科目が受講できたから。
2. だるい。
3. 面白くない

[物理工]：

1. 今までになかった知識を得ることができた。気楽に学問ができた。よく寝れた。種類が豊富。自分の好きなものを選べる。
2. クラス指定と重なるものがある。
3. 成績のつけ方に統一性なし。もっと厳しくすべき。もう少し深いことを教えてほしかった。

[電気電子]：

1. 楽。人文系の知識が豊富になった。専門外でも面白いものが多かった。全般的に楽なものが多かった。文系の女の子がかわいい。
2. トピックは面白いけど、講義に出る価値があんまりない。科目により千差万別。授業は面白いがトリビアのようだ。内容は興味深い履修しても意味がないと思う。
3. よくわからない

[情報]：

3. 興味があって受けたもので面白かったのは一つ。取りたいものが取れない。

[工化]：

1. 授業に出なくてもいいから。好きな科目を自由に選べる。幸いにして熱意ある教員に教わることができ、楽しく授業を受けられた。楽に単位が取れるから。
2. 特別面白くない。もっと楽でも良い。ものによる。
3. 学生にも教師にもやる気がない。この学問の必要性が見えてこない。

## 4 回生

[地球工]：

1. 教科書では学べない、あるいは学びにくい内容が多いから（個性的）。教授が自分の世界をつっ走ってておもしろかった。興味を引くおもしろい講義も結構あった。自分で選択したものなので比較的積極的に取り組めた。自分の専門ではない分野についていろいろ学べた。楽しかった。特に不満はないです。幅広い自然科学の分野のエッセンスを学ぶことができた。



2. A・B・D群は受講していないので分かりません。あまりにも簡単に単位がとれるため、講義に出なかった。いまいちまとまりがなく、思考が整理されない。豆知識だけを覚える。科目による（有意義な科目もあった。例：社会学、歴史地理）。講義間の差が激しい。真剣に受けていません。卒業に必要なだから内容はどうでもよい。それほど興味を持てなかった。単位数の関係で選ぶ余地がなかった為、興味のあまりないものを受講してしまったから。目的が不明。
3. あまり興味がもてなかった。意味があるとは思えない。おもしろくなかった。学生・教員ともにヤル気がないものが多い。教科による差がひどい。教員の出版物を宣伝する場になってしまっている。積極的な教員がいない。退屈な場合が多い。単位だけをそろえた。でも、楽しかった科目もあった。担当教員の専門性が強くすぎて興味をもって受けられなかった。何もえられてない。人数が多すぎて集中できなかつたり難しすぎたりしたから。評価方法、難易度が講義、教員により違いすぎる。

[建築]：

1. 面白かったから。教養として非常に役立っている。「創造行為総論。」の向日谷教授、「精神病理学」の新宮教授、「民法第1部」の潮野教授の講義はよかった。講義内容が多岐にわたっており自分の興味に合わせて受講できたから。
2. あまり本気にやらなかったから、よくわからない。単位数ほど興味のある分野がなかった。楽だ。
3. あまり知的好奇心が満たされる講義がなかった。人数が多くて受ける気がしない。人が多すぎる授業があって、受けられないものがある。

[物理工]：

1. 興味ある科目を選べた。さまざまな知識が得られた。少人数制のものは面白かった。たまには文系の授業を聞くのも面白い。幅広い知識が得られる。専門とは違う内容について深く学べた。よい説明をしてくれている。
2. 希望する授業が取れないときがある。興味深いものもあった。先生によって差がある。わかりにくかった。授業に出ていない。
3. 教え方が適当。学習する価値がない。教員全員逝ってヨシ。受講者が多すぎる。趣旨がつかみにくい。先生が好きなことしゃべっているだけ。単位取得のみが目的となっていた。レポートが苦痛だった。講義に出る価値がない。単位がとり易すぎ。一般教養とは到底思えない。興味がもてない。専門的過ぎる。適当すぎる。

[電気電子]：

1. おもしろいから。興味のある講義、受けてよかったと思う講義が多かった。興味の向くものを選択し、新鮮な気持ちで受けた。興味深い話を交えて学びやすくしていた。見識を広げるといって十分。作文が得意だから。自分の好きな科目を選択できたから。自由度が良い。所属学部の専門外の興味のある講義を受けることができてよかった。専門以外で興味のある分野の話が聞けた。幅広く用意されているのでやりがいがある
2. 1回生の時なのであまり覚えていない。可でも不可でもない授業が多い。多人数相手だか

ら。科目によっては受講生の数が多すぎて教員の話聞くどころではなかった。興味がそもそもあまりなかった。興味のあるやつは面白い。講義によりばらつきがある。講義内容についてあまり考えたことがないので。専門とは違ったことが学べて面白かったが基礎と名のつくものなのに難しすぎるものもあった。達成感がない

3. シラバスどおりに進まない。適当すぎる。そもそも不要であると思う。他の活動の妨げになっていると感じた。つまらないから。よくわからなかった。意味がわからない。教授にやる気が感じられない。興味がわからないものが多かった。興味がわかenかった。講義内容が履修科目選択時に想像したのと違ったから。座席が空いてなくてノートを取れない講義があった。授業の難易度の差がありすぎる。後ろの席で話しているやつらがうるさい。人数制限で取りたい講義を取れなかった。専門科目のせいで取れる講義が少なかった。歴史系の講義が少なかった。単につまらない。興味の持てないものが多かった。役に立つものが少ない

[情報]：

1. 一部教科書を読むだけでいいのもあるが、地理は結構面白かった。興味のある話題が多かった。内容が幅広かった。好きなテーマにあわせて受講できた。面白いものが多かった。ただ時間が重なりすぎももっとばらけさせてほしい。教養科目としてよかったと思う。
2. 受講していない。途中から趣味に走ったが、他は単位をそろえるためのみ。理系生として理解しにくい授業もあります。先輩の意見を参考に選んでました。
3. 1回生に取ったが足りないところがたくさんあった。意味不明。一つを除いてどれも興味のないものだった。科目によって差がありすぎる。興味ある科目があまりなかったから。興味のある分野が少なかった。全体的に面白くなかった。単位を稼がせるのではなく、興味深く楽しい講義を増やして欲しい。必要ない。必要単位数が多い。受講人数が多すぎる。

[工化]：

1. イロイロな知識が増加できてよかった。面白かった。学際を感じさせる科目が設置されとてもよかった。興味のある科目を履修できた評価方法はレポートでなく試験だとじっくり勉強できる。興味深い話が聞けた。教養としてためになる。増やしてほしい。さまざまな分野に触れることができ、見識が広がったから。自分の興味を持ったものに気軽にいけることもできる。自分の好きな教科を選択できるから。全部がおもしろいわけではなかったが、ためになる授業もあった。ためになる講義があった。単位取得が容易である。内容が面白く、自分の世界観を広げることができた。全く異なる学問の魅力、内容、現在の研究の先端を知ることができた。理系ではあまり学べないことを学ぶことができたから。
2. B郡が忙しくてあまり真剣に取り組めなかった。あまり講義がよく分からなかった。受けた授業を必ずしも受けられるとは限らない（抽選）。期待はしていなかったから。教室に入れないときがあるのをなんとかして。興味がなかった。講義室に入り切らない登録人数は問題だと思う。昨年は受けていない。十分理解するための時間が設けられていなかった。授業出ていなくても、単位が取れる。専門外な分、楽しめる授業が多かったが、人気の高い講義をとれないこともしばしば。それほど真剣に授業に参加していなかった。というか、今になって受けてみたいと思ったがもう遅い。ほぼ出席していないため、判断できません。学ぶための講義、単位を揃えるためだけの講義がはっきり分かれている。全般的につまらな

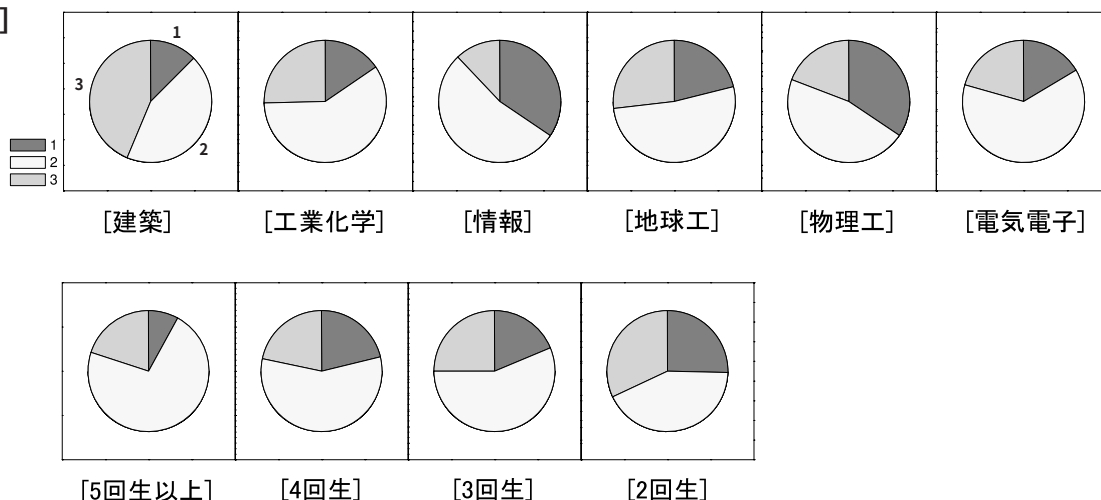
い。難しかった。役にたったか、わからない。よい授業もあった。

3. 科目が多いと面倒。科目によるが、講師の自己満足でとまっているように思われる。教科書が解りづらい。興味のある授業が取れなかった。興味のある内容でも、講義が今一つだった。工学系において不要。自分に合うやつがなかった。全体的にかたすぎて、興味のわくものがない。ただの教授の自慢話だから。内容が面白くない。何も残っていない。何を学んだか、あまり覚えていない。熱心さが感じられない教員もいた。必要ないと思う。文系の知識に乏しい理系の者にとっては最初から専門的過ぎる科目が多い。身についていない。もっと実用的なことを学びたい。レポートの採点基準が不明。

**B 群**    1. 満足    2. どちらでもない    3. 不満

理由 \_\_\_\_\_

[6B]



理由

**2 回生**

[地球工] :

1. 系統的な講義だったから。好きな分野なので。だいたい、そろった。たいていはよかった。大変面白かった。学ぶことがそれなりにあった。
2. いい講義もあるが悪いのもある。自分が学びたい科目がとれないから。生徒の理解度を大いに考えてくれる先生と、逆の先生がいた。先生によって異なる。単位はまあまあとれた。ぼちぼち。レポート出しても考慮してくれない。わかりやすい先生が結構いるが、わかりにくい先生にあたると単位が取れない。
3. A 群の全く逆。教える側に熱意が無い。高校時代が懐かしい。教員のやる気が感じられず、むしろルーチンワークぐらいとしか感じていない。くだらない講義ばかり。結局全部自分でやり直した。成績評価に日頃の努力が反映されない科目が多い。生徒が理解していようといまいとおかまいなしの、一方的な先生が多い。熱意の感じられない先生も多い。内容が難しかった。微積の先生が最悪でした。良い教授少ない、やる気ない。良い授業もあったが、全く理解できないものもあったから。わかりにくい。特に数学科目。

[建築]：

1. レベルが高くないと思う。
2. 興味がもてるものもあるが、大半はあまり興味がない。黒板が汚い。難しい。
3. 学生のレベルを無視している。教員が独走しすぎ。教授によって差があるのはいいのだけれど、それが単位の認定法に影響する。仕方ないかもしれないが、進むスピードが速すぎてついていけないことが多い。進度が不適切に速い。つまらないし解らない。微積など教え方がへた。学部から B 群と認められるものが少ない。難しすぎる。理解が不完全。解りにくい。やる気のない先生だった。クラス指定が多すぎて履修したいものが出来ない。先生ごとに教え方、内容がまるで違う。だるい。学びたい科目を受講できなかったから。

[物理工]：

1. 充実した科目が多い。専門のための基礎学習ができた。面白かった。興味があったから。
2. 要点がわかりにくい。物理や化学のレベルが高い。先生によって差がある。
3. 実験による負担が大きすぎる。選択の自由がない。演習の時間が少ない。理解させようとする気が感じられない。教え方が悪い。自由度が少ない。不親切。わからなかった。

[電気電子]：

1. 丁寧に教えてくれた。努力しないとついていけないレベルだったから。
2. まあこんなもんかなと思う。わからなかった。わかりにくくてテスト前の負担が大きかった。興味の持てるものもあったしそうでないものもあった。実験は面白かったが、他の授業がとても難しかった。天下りのことが多い。難しい。物理に数学がついていけないのでしんどい。
3. つまらないから。やってることがわからん。高校を思い出すから。授業についていけない。

[情報]：

1. それなりに面白いものもあった。必要知識が身につく。

[工化]：

1. おおむね興味深く授業を受けることができたので。基礎的なことが学べた。興味もてた。興味深い授業が多かった。自分に必要なことを学べたから。
2. 面白い授業とそうでないものとの差が激しすぎる。教科書の棒読みが多すぎ。内容を消化しきれていない。認定される科目が少ない。微積分は証明がやりすぎ、工学部なら応用に注目して欲しい。物理学実験が面白かった。役立つが少し分からない。
3. 演習の時間をもっとほしい。学生の理解度を考慮しない講師が多い。出席する意欲をそがれる。内容を消化しきれていない。解りにくい。

### 3 回生

[地球工]：

1. 新たな数学知識が身に付いたから。専門の予備知識になり役に立つ。履修していた B 群

が少なかったので集中できた。

2. 以後役にたつものもたくさんあった。先生によっては教え方がよかった。テストはできたけど理解はしていない。納得のいく範囲までついていくことができない。普通。理解させようとする先生の講義はためになる。自分の興味にも依るし、理解度によっておもしろみも違う。分かりやすく教えてくださる先生もいたが黒板に向かってずっと式をかいている先生もいた。
3. クラス指定以外の B 群でもいくらか単位になるようにしてほしかった。全般に分かりにくい。担当教員によって難易度のバラつきがありすぎます。努力がむくわれない。分かりにくい、退屈。

[建築]：

2. やる気のない先生だった。
3. クラス指定が多すぎて履修したいものが出来ない。先生ごとに教え方、内容がまるで違う。だるい。難解。学びたい科目を受講できなかったから。難しすぎる。

[物理工]：

1. とても内容が充実している。
2. 計算ばかりしていた。難しい。卒業単位に認められない科目が多い。学ぶ必要性がわかりにくかった。

[電気電子]：

1. 理解可能。
2. B 群は割りとしっかり教えていると思う。でも先生の自己満足で喋るだけの講義もある。よくわからない。科目により千差万別。教員によってムラがあった。数学が嫌い。満足度は教員による。
3. 教員によって難易。講義によってレベルがばらばら。面白そうな科目が他にたくさんあるのに。

[情報]：

2. 大学で知っておくべきことが何かという指針にはなるけれども、授業自体はいまいち。

[工化]：

1. 多少縛りがきつい。工化で生物の全学共通科目が卒業単位として認められないのはおかしい。授業自体は満足です。勉強になり、専門科目を勉強するのに必要と思うから。
2. 頑張れば単位が取れるのもあったから。教育熱心な先生が多かったことには満足です。興味による。
3. 教授が一人で自分の世界に入っている。先生の差が大きい。めんどくさい。むずかしいから。理解しづらい。



## 4 回生

[地球工]：

1. 大方、アウトラインを学べられるから。授業にはあまり出なかったけども必要やからね。ためになった。特に不満はないです。勉強した分が成績に反映していたから。難しかった。理学部系の教員の授業は工学部の視点と異なり興味深い。力学統論や振動・波動論は有意義であった。
2. 科目によりばらつきがある。興味はあったが、わかりにくい所も多かった。講義のペースが速いと思ったが、自分の力不足とも思える。重要な講義が多かったが難しすぎてついていけなかった。授業内容と定期テストが直結していない。授業によっては満足できるものもあった。進度が速い講義があった。大変。中途半端な感じがする。予備知識は得られた。理系科目なので機械的にこなしていた感がある。履修当時はその必要性、重要性が分からなかった。わかりにくいものが多かった。
3. 教科書で勉強した。授業中教わったことは何一つない。クラス指定で教員のオナニーにつきあわされた。工学部なのに理学部の教員に教えてもらい多少のズレがあった。高校の内容、また、大学での専門を無視した授業が多い。授業に参加している気がせず、分かりにくい。数学が難しい。初めから知らない単語を多用しすぎ。もっとちゃんと受ければよかった。やや理論部分に偏りな気がする。工学部生としては演習重視の方がありがたい。分かりにくかった。

[建築]：

1. 基礎から応用まで幅広くあった。単位認定が厳しいためよく理解した。難しい。
2. B群科目があまり好きではないから。面白くないけど、必要だ。全てを1,2回に担当するのは少々無理がある。「物理学実験」を1回で履修すると微積分の知識不足で臨むことになった。何を得られたのかよく分からない。授業に興味を持てない。レポート、出席などの重要度が高かったので、1番勉強させられた気がする。
3. 学生のレベルに合わせて講義をしてくれる教員は数えるほどだった。教員よってばらつきがある。取っても単位として認められるものが少ない。難しかった。評価法がはっきりしない。解りづらい。認められるものが少ない。

[物理工]：

1. 基礎的なことが学べてよかった。専門のための基礎学習ができた。役に立っている。
2. 講義によって差がある。演習の時間が少ない。微積2コマ連続は苦痛。物理系では数学の知識が追いついていない。難しすぎる科目があった。もう少し丁寧に教えてほしい。理解させようとする気が感じられない。自分で勉強できるので必要ない。先生によって差がある。
3. 自分が教えたほうがまし。専門内容との関係が薄い。専門に必要でないものもとらなくてはいけない。難しい。

[電気電子]：

1. レポートで理解が深められて良かった。演習に力を入れる講義が多く、理解の助けになった。元々興味があったので。身についた。重要な内容であるから。専門に繋がる内容が

多い。

2. こちらの取り組み方の悪さゆえに理解できないものが多かった。たまに意味不明な部分があった。演習が少ない。可でも不可でもない授業が多い。多人数相手だから？最低限ではあったけど満足できるものでもない。高校の授業のほうが良かったのも多い。ポケゼミはよかった。教授による。講義のあたりはずれが大きい。同じ講義でも差が激しい。使わない指定科目が多数あった。時間的に足りない科目が多くて常に忙しい感じ。数学が不得意だったから。数学系以外でも単位修得できるとうれしい。先生のあたりはずれが大きい。
3. めりはりがない。わからないから演習の時間が足りず習熟することがなかった。学科で制限されている。工学部で卒業単位に認められるB群が偏りすぎ。講師の自己満足っぽいところを感じられる。授業の難易度の差がありすぎる。後ろの席で話しているやつらがうるさい。単位を認められる講義はつまらないものばかりだったので。

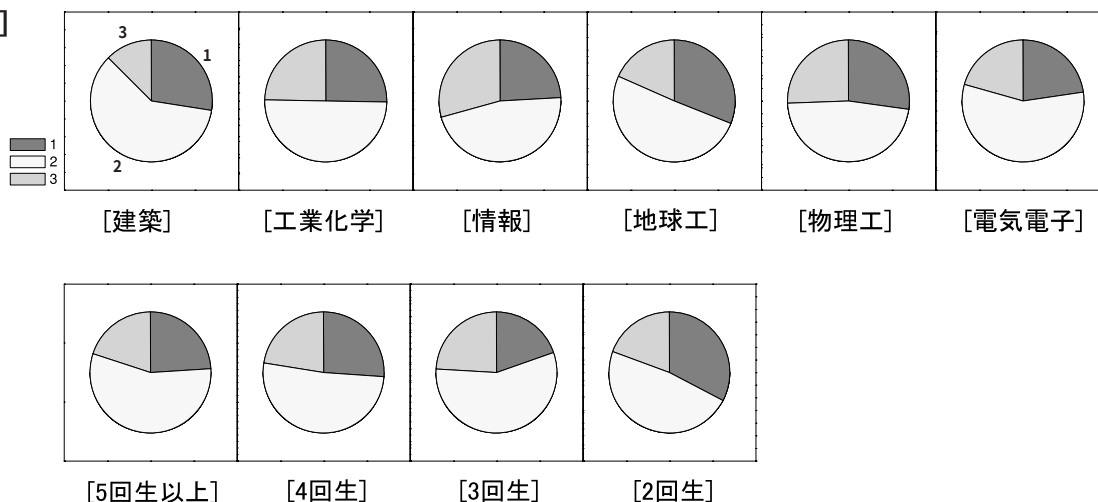
[工化]：

1. 演習等があったので。基礎知識を学習するには良かった。教員が熱心だった。将来必要であると思われる。全てとはいかないが、専門に必要な知識が得られた。専門科目への基礎が学べたから専門との違いが分からない。必要な知識を学ぶことができたから。役にたつ。
2. あんまり出た覚えがない。今の自分に必要であるのもあればないものもある。受けてない。教え方が良くない。科目によって面白さが違う。教員によっては授業がわかりにくく、テストでは出ない部分ばかり扱う人もいたので。教室中が男だらけでイヤ。興味がなかった。クラス指定科目において、教員による差異が大きい講義室に入りきらない登録人数は問題だと思う。講義を受けただけでは内容がよく分からないことが多かったため。高校と落差が大きい。高校の数学や物理の授業と同様でとっつき易くもあり、がっかりな感もあり……。講師の自己満足が多い。去年は受けていない。十分理解するための時間が設けられていなかった。授業のせいではないが、教室の都合上、人が多くて黒板が見えにくかったりした。少し難しかった。先生が自分の世界に入りすぎ。大学で学ぶべきことだと思う。普通だった。ほとんど出席していなかった。難しかった。もっと役に立つ内容を教えて欲しかった。役に立つのと立たないのがあった。よい授業もあった。分かり易い授業と分かりにくい授業があった。
3. 今の勉強に役立っているとは思えない。選べる科目数が少ない同じ科目でも、講師によって教えている内容がぜんぜん違ったりするように感じる。義務でしかなかった。講義はほとんど行かなかった。教員が適当な感じがした。興味のある授業が取れなかった。計画的な授業をしてほしい。数学、物理などの式の詰め込みのような感じがした。制限が大きく、興味・必要性のないものも取らなくてはいけないから。選択の自由がなさ過ぎる！選択の余地が無い。専門科目に比べて、重要とは思えない。専門と内容が重なり過ぎる。専門を習う前なので関連性がうまく把握できない。単位にならない教科が多すぎる。つまらない。登録できる科目が工学部で指定されているのはおおいに不満。後々役に立たないマニアックな内容を教える人がいる。でも、単位を揃えるためには合わせていく必要がある。身についていない。履修制限が厳しい。単位判定が専門科目以上に厳しい。論理が完結していない授業が多い。分かりにくい。

C 群    1. 満足    2. どちらでもない    3. 不満

理由 \_\_\_\_\_

[6C]



理由

## 2 回生

[地球工]：

1. Speaking の講義がよかった。おもしろかったです。高校とは違う視点から外国語を学べてよかった。又、苦手でも単位が取れるのも良い。この分野は自分からはなかなか勉強する機会がないから。楽しい。誰がやっても同じ。なかなか楽しかったりする。勉強できるかどうかのみが評価の対象ではなかった。やる気が出た。良かったと思う。予習は大変だが身につくことはつく。割とおもしろい。
2. 講義によってマチマチ。今年はいい師に出会えたためよかった。昨年の英語が不満。自分次第だと思うから。そこそこ勉強した。特に何事もなく普通だったから。ピンからキリまである。おもしろい授業と一方的な授業の差が大きい。学べた気がしない。
3. 英語力が確実に落ちた。外国語の習得など、くだらない。期間外試験になるとどうしても時間不足になる。出欠をとらない。努力を認めない講師がいる。単位は取得したが、上達しない。何も残るものが無い。勉強にならなかった（笑）。身につくものが見出せない。難しい、教師がイヤだった。

[建築]：

1. 簡単。教員がよい。興味ある。単位取得できた。優をもらった。解りやすい。
2. 当たり外れが大きい。あまり意味がない。変な外国人は何とかすべき。
3. 単位の取りやすさが大きく違うし、あまり力がついたという感じがしなかった。

[物理工]：

1. 面白かった。実用的なものと文学的なもののバランスがよかった。わかりやすかった。楽しかった。
2. 為にならない。先生によって差がある。
3. 身にならない。先生によって差がある。第二外国語の内容が難しすぎる。もっと実践的で

あってよい。2回生で終わってしまう。めんどくさい。教え方が悪い。つまらない。

[電気電子]：

1. テストなかった。ドイツ語の先生が良かった。楽しかった。期待していたとおりだから。教養がついた気がする。今まで学んだことのない言語（第2外国語）を学べてよかった。普通の授業だから。
2. 高校の延長っぽかった。進行が忙しすぎてじっくり消化できなかった。
3. 英語が実践的でない。第二外国語はしんどくて英語はぬるかった。履修の際の抽選の制度が不公平。

[情報]：

1. それなりに面白いものもあった。
3. レベルが低い。

[工化]：

1. 外国人の生の発音が聞ける。自分の知らない言語も学べたから。丁寧にしてくれている。独語が新鮮だった。特に第2外国語が面白かったです。熱心だった。易しかったから。ただ、易しすぎ。
2. 高校の内容と差がない。単位が取れたから。なんともいえない。もっと実践的な勉強をしたかった。予習が大変だった。レベルが低い。
3. 英語の教え方は問題が多い。英語力が下がった。会話を重視した授業を増やしてほしい。興味がわかなかった。授業の選択の自由がない。成績評価に疑問が残る。先生の性格に問題ありだったから。文系と理系が同じ授業で同じ評価を受けるのは不公平。

### 3 回生

[地球工]：

1. 授業の目的や内容が分かりやすかった。第2外国語がおもしろかったから。
2. CALL\*は素晴らしいと思うけど他はあまりよくない。語学力が果たして本当についているのか疑問。先生によって当りはずれが大きい。先生による。まだ受けてない。  
\* CD-ROM の英語自習システム。
3. 1回生のときに第2外国語をがんばったが、2、3回生で忘れてしまったから。英語は授業で実力がつくとは思えなかった。高校でリスニングを全くしてなかったのについて行けなかった。先生による厳しさの差が激しい。全く英語力がUPしていないから。レベル低い（英語）。

[建築]：

1. いろいろえらべる。面白い。
2. 出席が必要。

[物理工]：

1. 適度な勉強量だった。
2. 中途半端に終わってしまう。もっと自習用教材がほしい。時間が短すぎる。
3. 難易度や評価方法を統一してほしい。甘すぎる。

[電気電子]：

1. Call \*は自習できるから。ドイツ語はテストだけで OK だから。英語がすき。大学で一番面白い授業だった。
2. びみょ。もう忘れた。科目により千差万別。実用的ではない。
3. 英語の授業がつまらなかった。逆に英語力が落ちてしまうようなものだった。

[工化]：

1. 新しい言語を習うことで視野が広がる。プレゼンは面白かった。
2. 先生による。
3. 化学英語が難しすぎるから。授業自体にそれほど不満はないが、クラス指定で当てられる先生によって内容があまりに違いすぎる。学生に選択権がないなら内容をもっと統一すべきだと思う。先生の気分次第で単位が決まるから。むごい。むずいから。

## 4回生

[地球工]：

1. 会話中心で満足。工学部といえども、もう少し語学に力を入れても良い気がする。語学はおもしろかった。語学は大事だが、第二外国語をやる意味は全くない。個性的な先生でよかった。出席しただけです。第二外国語により、その国に興味を持てた。ためになった。単なる外国語修得のための技術だけでなく背景についても学ぶことができた。特に不満はないです。不必要に多くの単位を要求されなかったのがよかった。勉強のきっかけや入門としての授業がしっかりしていたから。まあ、おもしろかった。分かりやすかったから。わりに興味があり楽しかったと思う。
2. あまり身に付かない。科目の性質、講義の形態上、特に可も不可もなかった。語学能力が上がる講義とは思えない。語学は苦手なので苦勞した。リスニングに力を入れてほしい。語学力が付くとは思えなかった。第二外国語はなくしてもよい。英語は教えてもらうことなどない。第二外国語はがんばった。学んだことが現在あまり役に立っていない気がする。もう少し会話がしたかった。わかりやすかったが、第二外国語はほとんど忘れてしまっている。
3. (英語に関して) 話す機会を増やした方が良いと思う。CALL \*はやる気のない学生にとってはいいシステム。人件費削減しているのでしょうか。おもんない。語学の能力を高めるような講義ではなかった。語学力の向上にはつながらなかった。

[建築]：

1. 学生のためになるように講義をしてもらえた。

\*コンピュータ支援語学学習システム、Computer-Assisted Language Learning



2. 1年間に一種目なので。先生に不満。第二外国語はわすれてしまった。必要単位分しか履修する余裕がないのは残念だが、講義には満足している。田地野教授がよかった。まずまずの内容。
3. あまり身についていない。英語、第二外国語ともによく覚えていない。教員によってばらつきがある。語学力が身につくような授業ではなかった。1回生のときだけの第二外国語ならば良い。

[理工]：

1. 高齢の教授の古臭い授業は要らない。外国人講師の授業が面白い。語学が好きだから。実践的で役に立った。
2. すぐ忘れてしまう。身にならない。あまり勉強せずに単位が取れた。先生が適当。
3. 意味がない。英語は高校と変わり映えしなくておもしろくなかった。語学が嫌いだから。身にならない。教育システムが悪い。必要単位をもっと増やすべき。役に立たない。中途半端に終わってしまう。身にならない。

[電気電子]：

1. CALL \*は自分の好きな時にできたので良かった。やはり外国人教師だとやる気が出る。英語のほうが良かった。自分で好みの授業が取れるとやる気が出る。興味がわいた(中国語)。知らない世界を味わえたので。中国語がなんとなくわかったから。文献を読んだことが有益だった。
2. あまり力がついたとは思えない。こちらのやる気も問題だけど、教え方も雑な気がした。専門的な内容や役に立つものにしてほしい。つまらなかったけど、新しい外国語を勉強できた。なんとなくすぎてしまった。もう少し少人数でやりたい。英語は先生が選べず不満だった。外国人の先生はよかった。楽しく授業をしてくれる先生もいたが、ただ訳をして終わりの授業が多かった。教授による。講義によりばらつきがある。講義に不満はないが満足はしませんでした。自学自習して継続して学べるようにしたほうが自分のためになるから。受講する教員を自分で選びたかった。担当講師を選びにくいので失敗するとどうにもならない。特に感想はない。普通の講義であり特記することがない。
3. 1回生は選択の余地がなかったから。あまり役に立たない内容だった。英語に関しては全く無意味、その他はどちらでもない。外国人の教師を増やしてほしい。高校のほうがハイレベルだったと思う。自分で勉強したほうが良い。先生によって差がありすぎる。全然語学力がついた気がしない。入学時よりレベルが下がった気がします。役に立ちそうでない。履修したが全く使わず今ではほぼ忘れた。

[情報]：

1. 外国人の先生の授業はリスニングがとても役に立った。楽なので。語学が好きだから。
2. call \*のような演習を課すクラスを増やしてほしい。call はためになった。むづい。わかりやすい講義もあったが理解しにくい講義もあった。英語はともかく第二外国語はもう忘れ

\*コンピュータ支援語学学習システム、Computer-Assisted Language Learning

た。受講していない。第2外国語を1年だけやることに意味を感じられないから。用いられる教材によって興味が分かれてしまった。

3. 英語教育にもっと力を入れてほしい。甘すぎだと思います。優をもらっても実は得られるものが少ないです。語学力が向上するような講義ではなかった。実際に使える気がしない。実際に役に立たない。講師による偏りが大きい。選択肢が少ない。第二外国語が要らない。第二外国語が要らない。時間の無駄。第二多すぎです。抽選で落ちるとやる気を無くす。

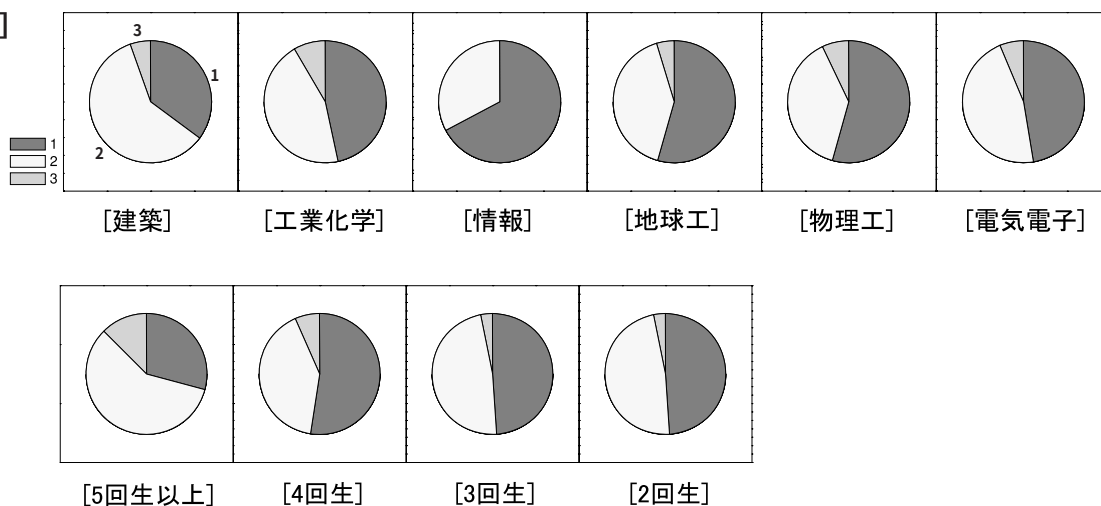
[工化]：

1. Listening と writing 両方勉強できた。英語とは違う語学を勉強することで違う視点から英語を見ることができた。英語の授業が楽しかった。英語は好き。面白い先生だったな。面白かった。外国人講師から学ぶことができたから。外国人の先生の講義はムチャクチャためになった。語学には興味を持てた。充分だ。出席が絶対であったため、ある意味やりがいがあった。スペイン語のようなマイナーな言語を学べたから。先生が良かった。第二外国語は自由に選択できる。第二外国語を少し学べたから。楽しかった。ドイツ語の基本は身についたから。特に不満はないです。他の言語に触れることができた。リスニング重視など、高校までとは違うスタイルで勉強できたから。分かり易かった。
2. あまり良い講義ではなかった。受けたい授業を必ずしも受けられるとは限らない（抽選）。受けてない。科目によって面白さが違う。科目による。興味がなかった。クラス指定科目において、教員による差異が大きい。語学力が身についたとは思えない。去年は受けていない。十分理解するための時間が設けられていなかった。出席していない。出席していないから。第2外国語は1年では後に役に立たない。少しだけ文化が分かる。単位は取り易いが、何とも言えない。とっていない。取りたい授業に当選するか分からないので。ネイティヴと行う会話の授業の意義がよく分からない。ほとんど辞書をひかされるばかりだった。まあまあ。難しかった。もっとしたかった。もっと実用的英語を学びたかった。もっと少人数がよい。もっと少人数のほうがよいと思う。
3. あまり英語の力が身につかなかった。あまり身につかなかった。一週間に受ける講義時間が短すぎる。第二外国語の習得が困難。いまだに英語に自信がない。英語力が上がらなかった。第二外国語は何も覚えていない。英語の授業が簡単すぎたり、やる気がない教員がいたため。興味のある内容の先生の講義が取れない。工学部だけど、英語の詩をやらされた。高校の授業の方が自分のためになると感じた。語学として良い授業ではなかった。語学力は高校のときの方が高い気がする。語学を習得した気になれない。時間がない。実用的でない。自分のせいかもしれないが、とりあえず語学が身についていないから。第二外国語はいらないと思う。高々週2日の講義では語学力はつかない（特に第二外国語）。中国語は使えるようにならない。つまらない。ドイツ語は難しいのに使えない。登録方法が分かりにくい。人気がかたよっている。何をやってたかほとんど覚えてない。身についていない。もっと語学で厳しくやってもいいのでは、と思うから。

D 群    1. 満足    2. どちらでもない    3. 不満

理由 \_\_\_\_\_

[6D]



理由

## 2 回生

[地球工]：

1. 息抜きに良い。運動は楽しい。体を動かせたから。ゲームが多い。サッカーおもしろかった。授業がおもしろく、先生の熱意も感じられる。スポーツ実習が楽しかったから。スポーツ好きなので。スポーツはたのしいから。楽しかった。楽しめた。ちょうどよい。とても良い運動になった。なかなか楽しめました。リフレッシュできました。
2. うけてない。面白かった。講義によってマチマチ。為になった。でてない。特になし。とらなかった。ほとんどとってない。
3. あまり選べず。受けず。

[建築]：

1. 面白い。健康になる。とってない。
2. いいストレス発散になる。受講していない。でていない。とってない。履修していない。

[物理工]：

1. 運動不足解消。為になった。スポーツが好きだから。楽しかった。非常に興味がもてた。
2. 1年間同じ種目なのがつらい。運動不足解消。取っていない。

[電気電子]：

1. スポーツ実習が楽しかった。スポ実が楽しかった。久々にスポ実で体を動かせた。健康に興味があったから。自分の興味のあるものが選択できるから。身体のことについてなので身近に感じられて面白かった。中身が面白い。面白かったから。良いストレス発散になった。
2. あまり出席せず。スポ実は取れたが D 群の記述テストでだめだった。とってない。受

けていない。

[情報]：

1. スポーツは楽しい。興味深い内容だった。唯一楽しい。
2. 取ってない。

[工化]：

1. 運動不足解消になる。面白い、友達もできた。体を動かす機会ができたから。
2. 未だ受講数0のため。興味深い講義があった。出席していない。スポ実はまだまあ楽しかった。とってない。取っていないから。

### 3 回生

[地球工]：

1. 運動科学が面白かった。面白かった。週に一度体を動かして楽しかったから。スポーツの実践や二軸動作という新知識がよかったから。ソフトボールはホント楽しかった。運動不足解消に毎学年で必須にして欲しい。ソフトボールやりたい。興味あり楽しかった
2. あまり受けてない。あんまとってない。受けてない。去年はD群は履修していない。

[建築]：

1. 気分転換になる。
2. 3回生でもスポーツを受けさせてほしい。サッカーが面白かった。

[物理工]：

1. 運動不足解消。

[電気電子]：

1. スポーツ万歳す。スポ実大好き。楽しかった。
2. 1回生のときは満足であったが2回生以上は配当されていないため。とってない。科目により千差万別。座学は面白かった。受けてない。忘れた。
3. もう2単位認めてくれてもいいと思う。

[情報]：

1. 適度に身体を動かしたかったのでちょうど良かった。

[工化]：

1. 面白かった。体が動かせるから。スポーツ実習は毎週楽しみでした。楽しい内容。楽しかった。
2. あまり出ていないので分からない。学位のための講義という感じがする。
3. IA、IIBだけでなくIICも単位として作ってほしい。足りない。

#### 4 回生

[地球工]：

1. 意欲をもって受けることができたから。運動は大事。体を動かすいい機会だったので。体を動かせるのが良かった。興味深い。このような科目も必要である。サークル活動などをしていないため。適度に体を使う良い機会となった。もっと取得可能単位数を増やしてもよいと思う。実践を交えた斬新な講義を受けることができた。ストレス発散ができた。スポーツ実習（サッカー）はとても楽しく、斉藤先生にはよく面倒をみてもらいました。スポーツなどには興味があったので楽しかった。それなりに充実していた。体育はおもしろかった。体力がつく。たのしい。とくになし。特に不満はないです。不必要に多くの単位を要求されなかったのがよかった。他とくらべてためになった。
2. あまり出席していないのでコメントできない。受けていない。運動不足を解消するには丁度良かった。講義に出てない。受講していないので分かりません。たまに運動するのはよいけど朝1限は嫌だった。特になし。途中で飽きた。
3. A群同様意味ない。モチベーションも上がらない。

[建築]：

1. あんなものでいいとおもう。体を動かすのはスポーツ実習くらいしかなく貴重な時間でした。スポーツ実習でさわやかな汗が流せ。気持ちよかった。スポーツは楽しい。
2. あまり出ていない。受けていない。実用的な授業を増やしてほしいので。とっていない。内容がマニアックな講義が多い。
3. トータル・フィットネスの時間が減った。

[物理工]：

1. 面白かった。気分転換。楽しかった。友人がふえた。運動不足解消。小田先生は最高です。楽しい。友達ができる。
2. もっと単位を増やしてほしい。
3. 体育会に入っているので運動は必要なかった。登録が面倒。もっと卒業認定単位を増やしてほしい。

[電気電子]：

1. いい汗かいた。ストレスを発散できたので。スポーツ、講義ともに役に立った。スポーツ実習はいい気分転換になった。スポーツ実習は息抜きのものになっていた。バレーボール好きだから。運動のほうは良いが保健のほうはA群でいいと思う。運動は大切。運動不足になりがちなのでスポーツの時間はよかった。楽しかった。気軽に楽しめた。興味が満たせて楽しかった。自由にやらせてくれた。十分体を動かせた。出席だけで単位になる。体を動かすのは楽しかった。体を動かせるから。大学に入って運動できたのは良かった。普段の生活にも役に立つものだったから良かった。毎日机に座っての授業だったのでたまには体を動かすことができてよかった。良い息抜きになった。
2. このような時間があっても良いと思う。そもそも履修していない。とっていない。運動するならサークルのできるの。運動する機会が少ないので取っただけであり、特記すること



がない。受講していない。必要性を感じないがあってもいい。普通。履修しない。

3. もう少し長い時間をとって運動したかった。やる気のない学生が多かった。体を動かせてよかった。

[情報]：

1. スポーツ実習はなまった身体を動かすにはちょうど良かった。それなりに有意義。テニスの先生は優しくかったです。運動は必要。運動不足が解消できた。楽しかった。楽なので。割と自由にやらせてくれたので。教員の教えかたが面白く内容も理解しやすかった。実習も講義も面白かった。面白い話が多く聞けた。スポーツ実習も楽しかった。
2. どちらともいえない。受けてません。受講した科目が少なかったので。受講していない。特になし。認定単位数をもう少し多くしても良い気がする。

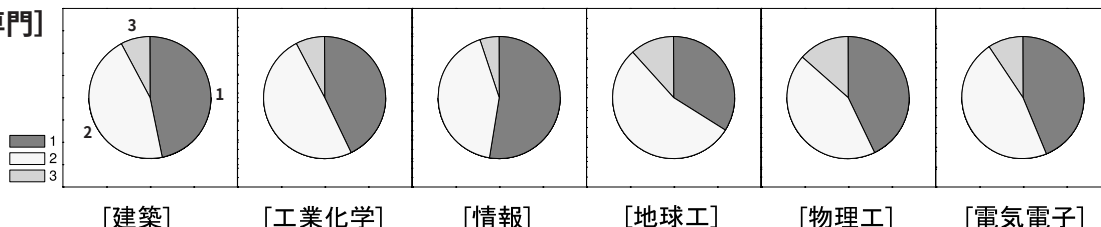
[工化]：

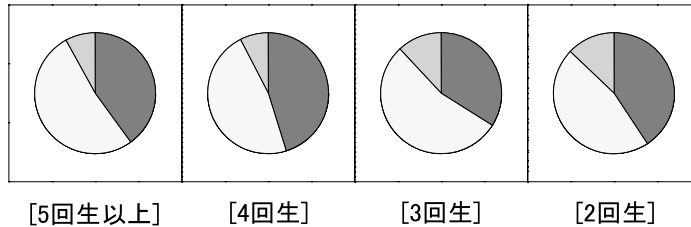
1. 「健康科学」がよかった。運動が出来た。運動する機会が増えた。運動するのは楽しかった。運動できてよかった。運動不足解消には十分。面白かった。体を動かすことが好きだから。体を動かせたことは良かった。健康科学がためになった。サッカーは楽しい。週一だがスポーツ実習は必要。好きなスポーツが出来たから。ストレス発散になった。スポーツ科学や実習など、どちらも楽しかった。スポーツが楽しかった。スポーツ実習が良かった。スポーツ実習は試合しかしないところがよい。スポーツ実習よかった。体育の授業が面白かった。楽しかった。楽しくスポーツができた。楽しんでスポーツに取り組めたから。たまには体を動かすことも必要だと思う。適度な運動が良かった。適度な運動が良かった。内容が面白いのが多かった。良い運動となった。
2. あまり覚えてない。受けてない。科目によって面白さが違う。科目による。体に関する必要な知識を深めることができたから。教員は面白いが・・・。興味がなかったの。去年は受けていない。サッカーは楽しかった。出席さえすれば OK だったから。出席していない。出席していないから。
3. 朝早くはつらい。一年間同じ種目はしんどい。選べる競技が少ない。覚えてない。種目を増加して欲しい。種目を増やして欲しい。上回生向けの科目を増やして欲しい。ただの遊びでしかなかった。つまらない。身についていない。

専門科目    1. 満足    2. どちらでもない    3. 不満

理由 \_\_\_\_\_

[6 専門]





## 理由

### 2 回生

[地球工]：

1. 興味深し。全体的に不満のない、満足のゆくものだった。そこそこおもしろかった。ためになった。特になし。良い先生が何人かいる。
2. power point を多用しすぎて分かりにくい授業があった。あまり出ていないのでわからない。基礎情報処理は難しすぎた。去年はそんなになかったから。講義によってマチマチ。コンピュータ・プログラミングばかりだった。情報処理系統がチンプンカンプンでした。まだ専門的なことはやってないのでなんとも言えない。まだはっきりわからないから。モノによる。やや難しかった。よく分からなかった。リレー形式の授業が試験なのはやりづらい。
3. Linux など全く知っても意味がない。B 群よりはましだが、それでも授業に工夫が足りない。受け身の授業。おもしろくない。概論が中心なため。授業の質を上げようとしているのかもしれないが微妙。総論みたいな話だけでなく、具体的な内容を充実してほしい。パソコン初心者にはムリ。難しすぎ。やや不親切だった。

[建築]：

1. 面白い。教員がよい。興味があるので。時間をかなりとられるが満足。単位取得できた。
2. これから。わからない。
3. 講義資料が多すぎて消化しきれない。設計は楽しいけど、そのせいで他の授業に出れない。眠い。

[物理工]：

1. 物工総論が役に立った。興味深い内容だった。将来役に立ちそう。難しいが、やりがいがある。参考になった
2. 少し難しかった。先生によって差がある。
3. 選択必修が多すぎる。速く進みすぎ。もっと専門的なことを学びたい。1,2 回生でやることが少なすぎる。教え方が悪い。

[電気電子]：

1. 楽しかったがテスト前の負担が大きかった。基本的に自分の興味ある分野で面白い。自分の興味のある分野の科目だから。専門という感じがしてつきつめている感がある。難しいけど面白かった。比較的フォローも多いし楽しめる。面白かったから。
2. あまりたくさん専門科目がないので評価しづらい。まあまあ。もうすこし「素人に教えている」という意識を持ってほしい。興味の持てるものもあったしそうでないものもあった。

理解できず。

**3.** 何で自分がこの学科に入ったのかまだ理解できていないから。

[情報]：

1. それなりに面白いものもあった。
2. 必要知識は身につく。

[工化]：

1. 面白い。面白い講義が多いと思います。教授陣の熱意が伝わってきた。興味をもてた。興味深いことが多く聞けた。工化概論が面白かった。工業化学概論で色々なことを学べた。自分の好きな分野だから。専門分野だから。単位が取れたから。難しすぎて理解できないことが多かった。より深い内容を学べるから。
2. 2回生前期の有機はただ1回生の学んだ知識の繰り返しで、意味がないと思う。無機と化学プロセスの授業はすごく役に立った。教科書の棒読みが多すぎ。実験は楽しい。熱意が伝わってこない。よい講義と悪い講義の差が激しい。
3. あまり関係ないことしかない。無機で化学プロセスの授業はひどすぎる。やる気がなくなる。解りにくい。

### 3 回生

[地球工]：

1. 先を意識すれば有意義。もっと要点をまとめてほしい。構力・土質などは良いと思う。ついていくのに必死だったが専門科目の内容はおもしろかった。
2. いいものもあれば悪いものもあり。B群に同じ（分かりやすく教えてくださる先生もいたが黒板に向かってずっと式をかいている先生もいた）。いまいち方向性が見出せない。教員の熱意度に差がある。興味ある分野・興味のない分野が存在するから。自分の興味の問題。先生による。測量は特に分からなかった。確率統計はクラスによって差が大きい。楽しいのとそうでない講義の差がはげしい。土質力学や水理学が2回生だけなので必要な科目なら3回生でもしてほしい。忘れてしまいました。やはりスライドが多用されていてやりにくい。理解させようとする先生の講義はためになる。自分の興味にも依るし、理解度によっておもしろみも違う。わかりにくい先生がいる。
3. 難しすぎる。

[建築]：

1. 将来に役立つ。だるい。
2. 充実していて大満足なものとそうでないものがある。

[物理工]：

1. 面白い。
2. B群で学んだものと変わらない授業もあった。学生の理解度を考慮しない講師が多い。先生によって差がある。

### 3. 理解不足の教員がいる。

[電気電子]：

1. おもしろい。
2. いいのと悪いのがある。みんなの過去問を頼りに試験前に詰め込む時、最も効率よく学習している、講義の毎にそういう密度の濃い勉強時間になればいいけど現状は退屈。科目により千差万別。楽しいのもそうでないのもあった。教員によって熱意が違いすぎる。授業による。
3. 参考資料なさすぎ。勉強するにもできない。取得すべき単位数が多く一つ一つの科目に時間が費やせない。難しい。実験の単位が少ない。

[情報]：

2. くだらないものが多い。もう少し専門的なものを望む。どうもそれまでの教養というか知識でなんとかなるものが多いのもっと最先端ではどういうことをしているのかという話を増やしてほしい。

[工化]：

1. 教科・教師によって大きく差があるが平均的にはよい。
2. 当たりはずれが激しい。結局教科書を読んで勉強したため。先生による。むごい先生が多い。
3. 先生が陰湿だから。良い講義が多いが、一部の講義がヘタクソ。

## 4回生

[地球工]：

1. おもしろい授業があった。学習する分野・量は非常に多い。進度が少し速いと思う。興味のある講義だったため面白かったから。興味のわく内容が多く、どれも真剣に取り組めたから。自分の興味深い内容だったので学習意欲が違った。自分の進路を考える上で参考になった。全学共通科目に比べてはるかにわかりやすかった。全共よりわかりやすい。授業らしい。専門分野の幅広さを知り、奥深いものだと分かったから、それなりに得るものはあった、それなりに楽しかった。大事な科目はわりと演習があったりして重点的に教えてくれた。特に不満はないです。分野によっては非常に興味深いものもあった。勉強したくて大学入った訳やし、勉強しているとおもしろかった。まあまあ。目的が明確で自分としても勉強しやすかった。やはり興味があるので多少の意欲は湧く。
2. 興味・関心を持てた科目はそれなりに面白かった。授業によって面白いものと全くそうでないものがあった。そこそこたのしい。それなり。体系的。実利的な講義に終始していた感あり。もっと横道にそれた話が聞きたかった。人による。良いものもあれば悪いものもあった。
3. 科目によりばらつきがある。授業の技能を向上させようとする意思が感じられない授業が多い。表面だけとりつくろったような授業が多い。研究者であると同時に教師であることを自覚してほしい。中には熱意を感じる先生もいました。分かりにくい。いくつかの科目はよ

かった。1 回生のときからもっと専門科目をするべき。退屈で分かりにくい般教だらけの 1 年で、自分も周りも勉強意欲を失わされた。

[建築]：

1. 各教員が熱意を持って講義を行ってくれていた。結構面白い。建築は面白い講義が多いと思う。自分の興味のある講義が多かった。設計演習では自己形成の点でもいろいろと考えさせられた。幅広く学べた。毎日が充実していたから。
2. 面白いものとそうでないものとの差が大きい。科目による。したいものは自分です。先生の差が激しくて一概にはいえない。興味があるのは面白かったし、ないのはつまらなかったし、先生の個性が出ているという点ではいい講義なのかも。

[物理工]：

1. 1 回生から学びたい。工学を学んでいるという意識がわいた。実験や実習が面白かった。実用的で質が高い。先生の意欲が感じられる。役に立った。演習の時間が少ない。興味があったから。どの先生も個性的。
2. 演習の時間が少ない。難しすぎる科目があった。授業によって差がある。何をいっているかわからない授業もある。
3. 教授に合わせるのに苦労した。先生によって差がある。分野が広すぎて大変。まともな授業をやってほしい。レベル・内容に一貫性がなかった。

[電気電子]：

1. やや難しくはあったが興味深い内容のものが多かった。一般教養と違って大半の先生に熱意がある。科目間のリンク等も感じられたので。基本的に内容が膨大なので自学自習していくのが基本。電気系として不可欠。興味ある分野だから。興味の範囲が広がった。広く専門科目を学べたので良かった。講義ごとの役割がはっきり分かれていて意欲がわきやすかった。今思い返すと重要な要素をいっぱい学んだと思える。自分の興味のあることについて知識が得られた。自分の興味のある分野については楽しかった。興味のなかった分野についても講義を受けるうちに考えが変わった。実験が多くてよかった。実験は今後役に立つと思った。講義は科目による。色々身についた。選択してません。多様で十分な量の講義が開かれていた。大学は専門に集中するべきだと思います。内容が充実していた。幅広い知識に触れることができた。役に立ったと思う。
2. 1 日に連続してあるので疲れる。あまり出席できなかったため。いい先生、そうでない先生両方いて一言で言うと真ん中ぐらい。科目数が多すぎるのが不満。一つ一つは満足。教える側の力の入れ具合が人により差があった。教員によりけり。専門的なことをわかりやすく説明してくれる熱意のある人が少ない気がする。興味のない講義もあったので。研究内容の話をもっとしてほしい。講義によります。講義によりまちまち。差が大きい。色々やるのは良いがカリキュラムの変更で大きく不都合をこうむった。先生によって大きく異なる。先生のあたりはずれが大きい。電磁気など、基礎の数学なしに学び始めるのでカリキュラム順序の検討が必要。内容が広く浅い気がした。もっと深い内容のものがあってもよかった。難しかった。



3. コース分け等がなく範囲が幅広すぎる。電電\*は範囲が広すぎる。その上細かいので集中しにくい。半期をさらに二人で分けて担当するのはやめてほしい。話をしている連中がうるさくて授業に集中できない。

\*電気電子工学科

[情報]：

1. わかりやすく役に立ちます。回生が上がるにつれて面白くなっていく。基礎からハイレベルな内容まで充実していた。興味を持って学べる科目が多かったから。興味深い内容が多かった。内容が理解しにくいものもあったが試験等はバランスが良かった。幅広い知識を吸収できた。役に立つので。
2. ためになったものもあればなかったものもあった。ムラがありすぎる。もっと興味を持てるように話してほしい授業もあった。めんどくさい。基本的には興味のあるものばかりだが、数が多いのでやはり中にはどうしても良いものもあった。講義における質、難易度の差が大きすぎる。講義中だけで理解できるものが少ない。結局ほとんど自習して身に付けた気がする。
3. パワーポイントでしかもわかりにくいと頭に入らない。実習を増やしてほしい。担当の先生によって、理解のしやすさが大きく異なる。

[工化]：

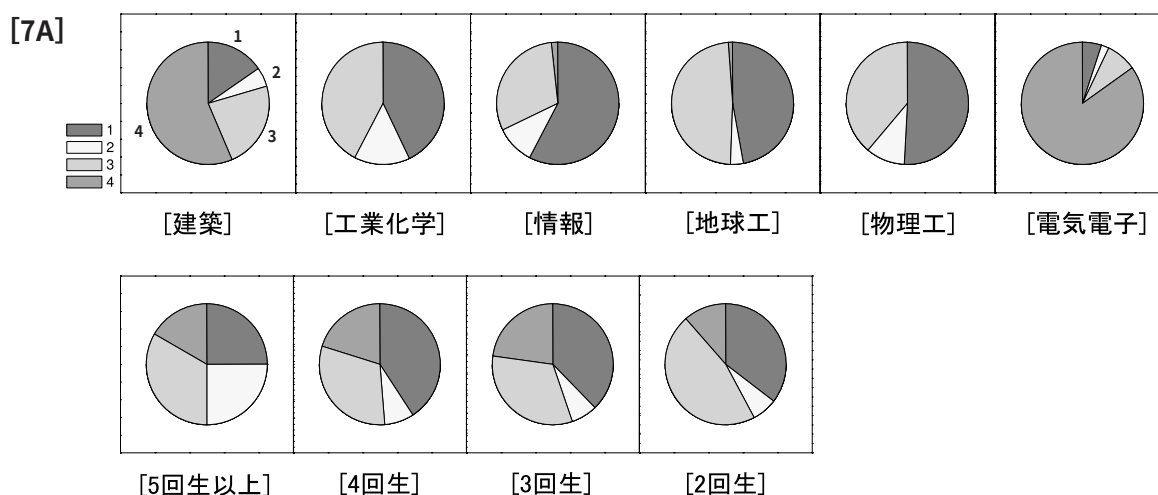
1. 一番身についている。今思うと、一番重要だと思うし、ちゃんと受ければすごくいい講義だと思う。多くの分野があり、それぞれ面白かった。思ったよりも分かり易かった。教員の熱意が感じられた。興味があったから。工業化学科の教員の質の高さには他学部・他学科も学ぶべきとおもうところがある。この学科、コースを選んでよかったと思えた。これから役に立つから。今後の勉強に必要。自分の興味のある分野のことだから。自分の興味のあるものだったから。将来必要であると思われる。先生が一生懸命。多少難しく、易しすぎない。だんだん専門的になってくるので、自分のやりたいと思うことや興味を持てることが多くなっていったから。丁寧だった、特にコースの専門は分かり易かった。なかなかよかった。熱心な授業でよかった。必要な知識を得ることができたから。勉強していて興味がわく。教え方が上手。勉強になった。まあまあ。ムズかしかったが、自分にとって必要な知識がきちんと学べてよかった。物事の原理などを学べた。役にたった。よく準備されていることが多い。分かり易かった。どの教科も理論的な展開がなされていて素敵でした。
2. 概論は3回生で受けたかった（配属直前ため）。2回生・3回生の忙しさのギャップが大きすぎる。科目・教員による。クラスによって違いがある。興味を持てるものと持てないものがあった。科目によって面白さが違う。可もなく不可もない。教科書+αがもっと欲しい。教員によるところが多い。強制的に取られる科目が多かった。講義の当たり外れが大きい。講義のよしあしが教員による。高校までの化学とは異なるものであったから。自分で勉強しようと思えばできる。自分で勉強できそう。十分理解するための時間が設けられていなかった。授業のペースを考えてほしい。出席していない。出席していないから。先生によって差がありすぎる。何とも言えない。難しい。もう少し、わかりにくい部分のフォローを充実させてほしかった。もっと少人数のほうがよいと思う。役にたってい

るか不明。良い授業はよかったが、ダメなのはほんとにダメ。時間の無駄。良いものもあれば悪いものもある。1回生の授業には教えるのがうまい先生を用いて欲しい。分かりにくかった。

3. 教え方が下手（な人が多い）。出席を取る。担当教員による授業の質の当たり外れが多い。つまらない。もう少し出席点も考慮して欲しかった。もう少し早くから学びたかった。やる内容が幅広すぎて消化不良を起こす。

【7】 A. 2回生または3回生の段階でのコース分属\*をどう思いますか。

1. 良い制度である 2. 悪い制度である 3. 良いとも悪いともいえない  
4. コース分属とは関係ない学科なので回答できない



\*平成17年度における各学科の分属の時期とコース名等とは以下のとおりである。

地球工学科：全コース3回生

土木工学コース  
環境工学コース  
資源工学コース

物理工学科：全コース2回生（平成16年度入学者から適用）、全コース3回生（平成15年度入学者）

機械システム学コース  
材料科学コース  
（エネルギー理工学コース）  
エネルギー応用工学サブコース  
原子核工学サブコース  
宇宙基礎工学コース

情報学科：2回生から

計算機科学コース  
数理工学コース

工業化学科：2回生後期（平成16年度入学者から適用）、3回生（平成15年度入学者）

創成化学コース

工業基礎化学コース

化学プロセス工学コース

建築学科、電気電子工学科はコースは分属なし。

## 理由

### 2 回生

[地球工]：

1. 1・2回生に、コース配属までの考える時間があるから。3回になったらある程度将来を見据えた専門的なことを学ぶべきだと思うから。意識が高まる。いろいろ勉強してから進路選べるのはよい。むしろ当然のシステムである。気合が入る。教養科目は1回、2回の間に試してみても悪くなかったから。コースによってやるのが全然違うので、はやく分かれるべきだと思う。コース分属されたほうが自分の知りたいことについてより深く知ることができるから。自分の関心のある方向に進める。進路を考えるきっかけになる。専門性を高めるにはコース分けが必要だと思うから。専門的なことを学ぶ必要がある。同じ意識を持った人と勉強できる。専門的なことをやると少しやる気が出てくる。その方が勉強に対してやる気が出る。それまで、勉強のモチベーションを保てるから。大学で学べることは底が知れているので、専門知識を持つには早い段階で分属すべきだと思う。大学に入ってから考える時間があるから。大学入学時にそこまで進路を決定しておくことが難しいから。勉学に対するモチベーションがあがる。方向性は人それぞれ違うと思うが自分がこれをやりたいという人にとっては早くとりくんだ方がよいと思って。より専門的な勉強ができるから。
2. 1・2回生時の講義とコース分けがほとんど結びつかない。ピンとこない。3回生で土木・資源・環境に分かれていては何のために「地球工学」を創立したのか意味が無い。院ならともかく学部の間は土木工学・資源工学・環境工学ではなく地球工学を学びたい。行きたいところに行けなかったらいやだなと思うから。
3. I don't know.。実感がないので。自分の興味のある分野により深く関われるのはよいが本当に自分の興味あることができるかは分からない。それぞれのコースの特徴を知るには大学に入ってからじゃないとよくわからないと思うから。ちょうど適切な時期だと思ったから。特になし。どちらにもメリット・デメリットはあるから。何とも言えないため。早く決まっている人はいいがまだ悩んでいる人にとっては思考時間が欲しい。お試し期間みたいな感じで他とは比べられないから。まだ実際の利害を特に感じていない。まだ体験していないのでなんともいえない。まだ分属されていないのでよくわからない。良い点も悪い点もあると思う。
4. よくわからないから。

[建築]：

1. 自分のしたいことが出来るのでよい。適性を見極められる。

2. 2回・3回の時点では、コースの具体的内容や困難さがよく解っていないと思うから。まだやりたいことを模索中である。
3. 選別の基準による。人それぞれいろいろ理由があるから。まだよく解っていない。未だ別れてないのでよいとも悪いともいえない。よく分からない。

[物理工]：

1. 物工は分野が多岐にわたるので早めの分属は必要。早くから専門的な内容が学べる。早めに目標を定めることができる。目標を定めやすい。興味のある分野に早く触れられる。授業の目標がわかりやすい。むしろ入学の時点で決めてほしい。目標を定めやすい。ある程度知識を得てから選ぶことができる。早くから専門的な内容が学べる。
2. 2回生では早すぎる。コースをあとから変える条件が厳しすぎる。受講する科目によって当たりはずれがある。分属後も各コースでやっていることがあまり大差ないから。目標を定めやすい。
3. 成績が教師によるので不公平。定員があるのが不満。やりたいことが決まっていない人にはよくない。総論とガイダンスだけでは決められない。もう少しコースについての情報がほしい。2回生での選択は少し早い気がする。2回生での分属は早い。内容の多さからしたら妥当。別にいつでも変わらない。

[電気電子]：

1. 興味を持った分野に対して重点的に学べるから。
3. やってみたいとわからないがある程度絞ってしまわれたほうが目移りせずに済む。一種バクチ的要素がある。留年があるのがつらいが当たり前のような気がするから。

[情報]：

1. 自分の将来の進路について早くから考えることができるから。
3. コース分けで悩むのが面倒だったが、単位をとる動機にはなった。特に困りもしないし特に恩恵もない。

[工化]：

1. 早いうちから専門性の高い勉強をしておくことは重要だと思うので。研究室のことなどを考える機会になったから。早くに専門知識を学べるから。好きな道に比較的進みやすそう。中だるみしない。早く専門的な勉強がしたい。目標を定めやすい。
2. 2回生後期からというのは中途半端。2回生での選択は少し早い気がする。
3. 早くから自分の専攻の方向性が決まり、専門知識を長期間かけて身につけることができる一方で、早く将来の方向を確定することは良いが、授業を選択する自由度が低くなる。別のコースの専門科目の授業を取ったら単位は2科目ぐらい承認すればよかったのに。2回生での選択は少し早い気がする。具体的にどんなことを勉強できるのかという情報がもっとほしい。サークルなどに入っていない人にはいい制度。配属されてみないことにはわからない。まだコース配属されていないからわからない。目標を定めやすい。やりたいことが具体的に人によって異なるがまだ決まっていない人もいると思うから。

### 3 回生

[地球工]：

1. 1、2 回生でまんべんなく教養科目や基礎科目を勉強して 3 回生からコースそれぞれの必要な内容を勉強するのがよいと思う。1 回から決めるというのはまだ右も左もわからないので入ってから決めれる方がよい。3 回生くらいで自分の専門を決めるのがちょうどいいと思う。自分がこれからやっていくことについて関心が持ちやすいと思う。自分の将来を考えるいい機会になった。入学するときにコースまでえらぶより大学の授業をうけてから決めたほうがよい。
2. 希望のコースにいけなかった時にショックだから。自分は受験の段階ですでに行きたいコースが決まっていたので、それに関係のない授業も 2 回生のとき受けねばならないというのはしんどかった。
3. 行きたいところに行けない可能性があるから。今は判断できない。具体的にどのコースで何ができるかを表示していないから。学科に対して具体的なイメージをつかめていないから。研究室や院でどのような研究をしているのか、しっかり理解した上でコースを選択したかった。コース分け自体は良いがもっと自分のしたい科目を取れるようにするべき。◎\*とかでしぼられるためコース分けに向けて勉学に励むので、学力はつくかもしれないが学んだ知識がコース分け先で大いに役立つかは疑問。こんなもんかなと思った。専門的な授業をたくさんうけたい。そんなに差がないから。地球の多くは本来資源や環境に興味を持っているはずなのに大半が土木に行かざるを得ないから。どのコースにもあまり興味が持てていなかったのも何とも言えない。

\*必修科目

[建築]：

2. まだ早いと思う。

[物理工]：

1. 目標を定めやすい。ちょうどいいタイミング。入学の時点では内容がわからない。
3. できるだけ早く分属したほうがよい。視野が狭くなる。早くから専門的な内容が学べる。入学の時点で分属してよい。もっと早くコースわけすべき。判断材料となる情報がもっとほしい。もっと選択の幅を広げてほしい。

[情報]：

1. 1 回生でがんばるというのは非常によい。方向性の違いを段階的につけていくのはよい。
2. 専門は院に行ってからやるべき。

[工化]：

1. あまり早くても遅くても良くなく、ちょうどよい区切りだと思う。学科で行われている研究や将来の見通しが丁度分かり始めた時期だった。私の一学年下からの 2 回生後期からの配属は良くないと思う。学ぶ内容が大きく異なってくるので仕方がない。3 回生の研究室見学とかぶり、自分たちもいろいろな研究室を見て回れたから。化プロと反応物性は内容が大き



く違うから。ただ新カリキュラムで、創成化学と工業基礎化学を分ける必要はないと思う。2回生後期からの配属は良いと思う。研究室へ配属するに際して、この2つのコースに分けるのは妥当である。将来が具体化されていくから。将来を意識するのにいい時期。入学した時点でまだ目標が決まっていなかった人があるから。

2. 一般教養と専門が混在していてよく分からない。希望したコースに配属されず、第二希望にまわされたから。全員が第一希望に配属されればよいと思う。
3. 他の方法がいいのか悪いのか分からない。先のことは分からない。制限がきつい。勉強だけをしに来たのではないと思う。方向付けはしたくないが、ある程度絞らなければ掘り下げた勉強が出来ないから。皆が希望するコースに行ける訳でない。専門の勉強を出来るのはよい。遅すぎず、早すぎないので。

#### 4 回生

[地球工]：

1. 1回生からコースに分かれていたら学ぶことのできなかった分野の講義をうけられたから。扱う範囲の広い学科なので専門的に学ぶには必要なことだと思うので。あまり自分の興味に関係のない教科をよく分からないまま単位のためだけにとる必要がなくなるから。学科共通の基礎をしっかりと学んだ後に更に専門的内容を学べるから。コース分属前に進路について色々考えることができるのでよい。高校生のうちにそこまで考えておけというのは酷。コース別に専門科目も分かれるのでより専門的な授業が受けられる。コース分けは始めの段階ではできないが少したてば少しは考えができるので。時間があるので考えやすい。自分の興味ある分野を早くから学ぶことができるから。自分の進みたい分野があればそれに向けて成績を保持しなければならず、モチベーションを保てた。自分のやりたいことだけできるので。選択するものがあるので。少しやりたいことがかわっても大丈夫であるから。専門科目にやる気が出る。専門知識をある程度身につけた段階でなければコース分属はやるべきではない。3回生とはちょうど良い時期である。専門の内容を充分に知るだけの時間がある。それに向かって多少は成績を気にして勉強するから。そろそろ進路を決めていく時期だと思うから。単位を取らなければというモチベーションにつながる。とうとう専門的だと思いやる気が出た。歳をとるにつれて専門的になっていくのは自然なことだと思う。入学時に具体的に専攻する分野を定めなくてよいので。早いうちに専門科目を分けた方がよいと思うから。早い段階から具体的な目標を見つけ将来を考える上では良いと思うが、それに対するインセンティブが沸いてこない学生も多いと思うので。大学側もある程度のアプローチが必要ではないですか。早い段階でより専門的な知識を得られるから。早めに進路を考えるので良いと思う。分属時に自分の進路について考えることができよかった。成績によりコース分けされるシステムだったのでそれを目標にとりくめた。勉強するうえでいい刺激になる。勉強内容を絞れるが、選考基準をもっと明確に示したほうが1、2回の勉強に身が入ると思う。目的が明確にしやすくなる。より専門的な話を聞ける。より専門の勉強を集中的にすることができるから。

3. 2回生でコース分けするとそのコースに合った学習ができるが、選択の自由が下がる。今の制度でいいと思う。今の段階ではわかりません。希望は歳を経て変わることが多いから。強制的に決められる（惰性で決めてしまう）。コースと学科の意味合いが明確でない。コー

ス分属の時期としては適当だとは思いますが留年するわけでもないしあまり影響はないと思う。コースへの理解が足りないまま選ばされている。時期的に良い(考える期間があるので)。自分の人生を考えるポイントにはなったと思う。自分のやりたい事がまだわかっていない人もいると思うので。全体的なことを学ぶのは良いけども、負担が大きくなる。選択の幅は広がるが専門について学ぶ機会が少ないため。専門科目の勉強を1、2回生の時からしたいと思ったから。コース配属は3回生春より早い方がよかったです。専門知識は結局あまり頭に入っていないので、もう少し早く配属してもいいと思う。他の例を知らないのによく分からないが、早い段階で専門基礎科目を学習するのは良いことだと思う。どこへ行くかを大学に入ってからしばらく考えられるのはいいがそれを決めるのが遅いと不要な科目を履修することになってしまう。早いうちから専門的なことを学べるが早いのでどのコースにいったいかわからなかった。早い段階でのコース分けにより学習科目が偏ってしまうことなどがあるがなんともいえない。人それぞれ。自分的には早い段階で決めた方がいいと思うので時期的には妥当だと思うがもっと幅広く勉強したい人には逆のほうがいいかもと思うから。無駄な教科を勉強した気もするし、幅広い知識が身についた気もするから。もう少し専門分野を勉強してから自分の適性を見きわめたかった。

[建築]：

1. 詳しく学べる。自分の専門を選ぶ時期として適当である。
3. 2,3回生ではまだ自分の特質がつかめていないためコース選択しにくい。
4. 学科で教えている範囲が非常に広いのでその一通りの履修が終わるまで分属が出来ないのは仕方ないが、もう少し早くても良いと思う。

[物理工]：

1. 無駄な講義がなくなるので。ゆっくりと自分にあったコースを選べるから。入学時に決めるより考える時間があるから。ちょうどいいタイミング。3回生ぐらいでやりたいことが見えてくるから。競争が起こってみんなが勉強する。興味のある分野が学べる。コースわけは慎重にすべき。将来を考えるきっかけになる。早くから専門的な内容が学べる。早くから専門的な内容が学べる。分野が多いので早期の分属は必要。目標を定めやすい。2年間でいろいろ考えることができてよかった。早くから専門的な内容が学べる。受験時からわけておくべき。専門の勉強が長くできる。必要のない科目を勉強しなくてすむ。
2. 2,3回生で専門は難しすぎる。2回生で分けてほしかった。最初からコースに分けて欲しい。入学時に分属すべき。入学時に決めてほしい。2回生で分属すべき。
3. ちょうどいいタイミング。機械と宇宙を学部で分ける必要がない。成績が教師によるので不公平。目標を定めやすい。2回生での選択は少し早い気がする。2回生で分属してほしかった。分属の方法がよくない。

[電気電子]：

1. 講義をある程度しっかり聴くようになった。早く決まればそれだけ自分の専門の勉強に集中できるが、2回だと少し早いので3回くらいがちょうど良いと思う。
2. 配属の基準を公表しない理由がわからない。

### 3. 変更による弊害のほうが大きいので現状維持。

[情報]：

1. 1回生のときになまけずにすんだ。自分が興味ない分野の勉強を概論程度で終わらすことができるから。1年間勉強しながら自分が進みたい分野について考える機会ができてよかった。2回生でのコース分属が一番いい時期だと思う。2回生でハードルがあったほうが気の緩みが少ない。2回生で配属があることが必要単位取得の意欲に繋がる。より早く専門的な勉強に取り掛かれるから。基礎的な学習はマスターした上で早い段階でより専門的な内容に取り組んだほうが良いから。私はすでにコースを決めていたので早い段階でコースが決まることは必要な講義を履修するためにいいことだと思います。自分がすべきことが早いうちに決まると集中できる。コース選択時期は遅くても早くてもその決定は変化しないと思う。自分の進みたい分野が早いうちに明確になったから。少しでも早く専門的なことを学びたい。早いうちにコース分けすれば興味のない分野の勉強をせずにすみ、希望するコースの勉強に集中できるから。早いうちにより専門的なことを学ぶのは良いことだと思う。早い段階で進む方向が見えてくるので。早くから専門科目に取り組めるから。早くに専門を決めることで方向性が決まり、モチベーションになるから。早く専門的な科目に特化して勉強できるため。大学は自由意志によるところが大きいので人によっては気が緩みがち。定期的に引き締めたほうが良い。入学時からコースに分かれているよりは、共通の基礎科目を1年か2年学んでから決められるほうがよいと思う。目標を意識できる。
2. 3回生の時にしたほうがもっとじっくり考えられるのでは…。私自身はこのコースに満足していますが。うちの学科は2回生にコース配属があったのだけれども、そのおかげで2回生のときの勉強に対するモチベーションが下がったように思う。まだ研究の内容についてほとんど何もわかってないのに決められない。むしろ、大学院と学部の不整合をどうにかしてほしい。
3. 2回生でのコース分けは先が見えていないしわかりづらかった。2回生のコース配属は定期的に早いと思う。ほとんどの人が将来の研究テーマがはっきりとしていないのでこの時期での決断はきついのではと思う。コース配属は今の2回生の段階で行うのに賛成だが、学生がコース分野の内容を積極的に知ることが可能な環境を整えて欲しい。コース分属が良いか悪いかというより、中途半端に低学年から専門を入れるのがどうも気に入らない。行きたいほうにいけなかった人はいくら勉強しても一年遅れることになるから。特に気にしていなかった。留年が多そうだし自分もやばかった。
4. 1年で概論を学んだ上で選びやすいです。

[工化]：

1. 基本的には2回生修了の時点で化プロか反応、物性が決まっている人が多いと思うので良いと思う。高校生の段階で具体的にやりたいことが固まっていなかったから。最初は何もわからないが、1,2年専門科目に触れるとやりたい方面が見えてくる。自分のことを考えるようになる。自分の進路を具体的に考えるよい機会になる。自分の専門分野に集中できるので。分属の際に（研究室紹介など）情報をもっとあればいいと思った。自分の専門を学ぶようになって将来が見えてきてやる気が出るから。自分のやりたいことについてより専門的に学べ

るから。将来に向けて何を勉強すべきかということが見つめ易くなる。進学時の段階では何も分からないから、選べるはずがないので分けるのはよくない。途中で分属があったほうが勉強しなければという気になると思う。進路がはっきりするのでよい。少しは大学のことにについて理解でき始めているから。選択する情報が与えられじっくり考えて選ぶことができる。専門性が高まった。専門的な分野を深く学べるから。専門の勉強をする時間が増える。専門分野の科目が多くなりすぎないから。大学生活に慣れた2,3回生に自分のやりたいコースを選べるという制度は良いと思います。ちょうどよい時期だと思う。適度な進路決定ができるから。入学試験の段階で細かく分けるよりは入学後に講義を受けてある程度の具体的な内容を知ってからの方が、より自分に合ったコースを選べるのではないかなと思う。入学してしばらくして進路を考え直すことが出来るから。入ってすぐでは専門についてわからないことも多いから。早いうちに進路について考えるから良い。早い時期に自分がやりたいことに集中しやすくなる。早い段階から自分の専門科目に集中できるから。早い段階で進むべき道を決めるのも、勉強の効率が上がっていいと思うから。早い段階で専門的なことを学べるから。早い段階で学ぶ専門科目を絞ることで、より深く学習することが可能になると考えるため。早く決まるので、自分の好きな分野を大学在籍中に長くできる。早めに自分の進路について考えることができるから。必要な専門分野の数が減ることにより、その科目への集中力が増し、その科目の重要性、必要性を実感できる。不必要な講義を取ることが無いので良いと思う。不満は感じなかった。より専門的な内容を学ぶことができ、やる気が出るから。より専門的な勉強ができるから。基礎を学んだ上でより専門的な学習をするのにちょうどいい時期であったと思う。これを目安に勉強できるので良い。自分の専門以外を勉強する必要性が減った。入学時にコース分けがあるよりもまだ。早くから専門科目の勉強が出来るから。早めに専門的な学習に入るのが望ましい。

2. (新しい制度について) 2回生前期終了段階で各コースの明確な違いなどが分からないため。1回生から研究室に入れた方が工学部としての自覚を持てていいと思う。2回生の後期で決めるのは早すぎると思います。今の2回生後期からのコース分けは早すぎると思う。興味はあるが、取れない授業が出てくるから。自分で進級を決められない。真剣に考えるだけの知識がまだ学生にはないと思うから。専門科目をほとんど受けていない2回生での分属は意味が分からない。知識の幅を広くすべき。早い段階で留年生が出る。反応、物性の制度のままでいくべき。勉強(講義)だけでは自分の興味がある分野なんてわからない。もっと早い時期から実験すべきだと思う。基礎実験よりも専門的な実験も少し経験した方がいいと思う。留年するから。1回生のころから専門科目について学んでおくべき。3回生ですでに留年が決まった。他の学科なら4回生から取り戻せた。人生の分岐点であるからもう少し慎重に選びたい。早すぎる。迷惑をこうむった。

3. 2回生でのコース配属は選択の幅が狭くなると思う。2回生でのコース配属は専門知識の量から見て性急であるように感じる。やはり3回生からがよいのではないだろうか。2回生の分属は早すぎるし、分属がなければ広く浅くになる気がするので、3回生分属がよい。軌道修正が効かないが配属前に全科目を学ぶわけにもいかないのでは仕方ないと思う。興味のある科目に集中することは良いと思うが、強制的に配属された人はかわいそうに思った。結果が現れるのは先の話なので、良い悪いを結論づけることはできない。結局学部生のうちは、そこまで専門的なことを実際にはしないから。コース配属が曖昧すぎたため。コース分属後

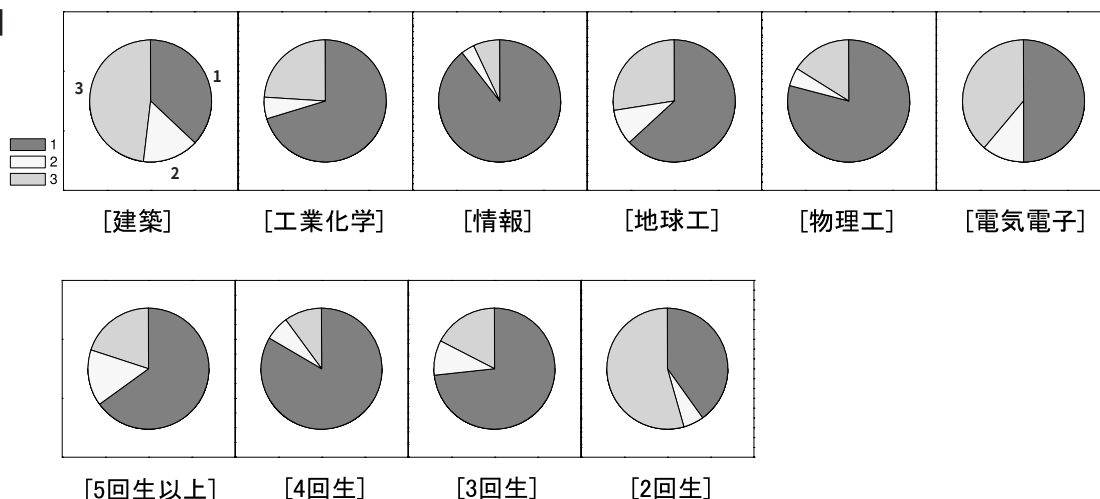


は授業の選択性に幅がなくなり、特化してしまうので。コース分属をすることによって、関係のない科目の勉強がおろそかになるが、院試にその科目が出たりするので困る。自分の進みたい専門の勉強を多くできるのは良いと思うが、3回生までは他の分野の専門も習いたかったので。進路がはっきり決まっている人にとってはいい。進まなかった分野もある程度勉強することになるから。選択するのが難しいから。専門分野に入るのが早ければ早いほどよいと思うが、そのためにはガイダンス的なものをより多くして、コースの概要を十分に説明する必要がある。専門分野を効率的に勉強できるが、不本意の分野にコース分けされると意欲に影響する可能性がある（自業自得とも言えるが）。大人数と少人数に分かれるのではあまり意味がないと思う。単位取得のプレッシャーとなっている（良い意味で）反面、「無党派属」の存在のためにコース間で成績の格差が生じ易い。どちらでもいい。化プロと他でわけるのはいいと思うが、反応、物性で分ける意味はない。早い段階で自分のやりたいことが決まっている人には良いが・・・早いとも思えなくもないが、カリキュラム上仕方ない。時期が早すぎる。人によってはやりたいことが後々変わることもあると思うし、早いコース分けは、勉強に対する意欲を高めると思うから。本来良いシステムだと思うが、工業化学科の2回生後期から配属するシステムは、配属が早すぎると思う。メリット・デメリット（早くから選ぶ判断材料、早くに決まってしまったことによる制限、早くからそのコースの専門）がある。よくわかりません。2回生でのコース配属は早くから専門的なことが出来るが、大方のコースが決まってしまうのは早い気がする。2回生でのコース分属は反対だ。ある程度同分野だけでない知識でも大きく見れば同じ分野なのであるから学問を進めていくうちに必要となってくることもある。幅広く学ぶことも必要だと思う。いつ分けても悩むと思う。コースは入ってみてからわかることが多いが、いろいろ体験してから配属するほどの時間はないこともわかる。途中で希望が変わることがありえるのに対して柔軟性がない。入るときではなく、入ってからある程度学ぶ内容を知ってから選べるのが良い。コースわけがあいまいすぎるのでもっと多くのコースへくっきり分けるべき。編入したときにすでにコースが決まっていた。編入なのでわかりません。

## B. 希望したコースへ進学できる配属システムでしたか？

1. はい（そうだと思う） 2. いいえ（そうは思わない） 3. わからない

[7B]

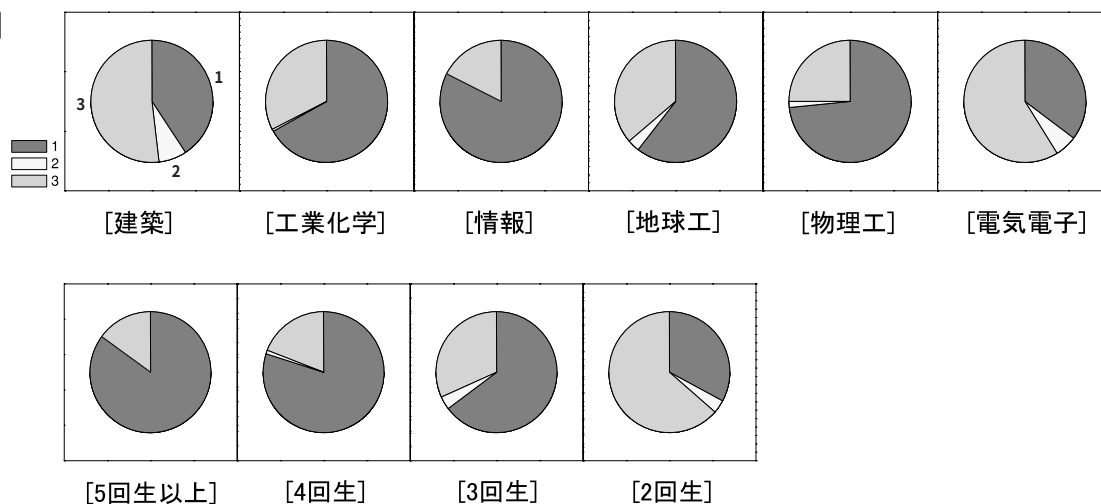




C. 進学した（する予定の）コースに満足ですか？

1. 満足 2. 不満 3. どちらともいえない

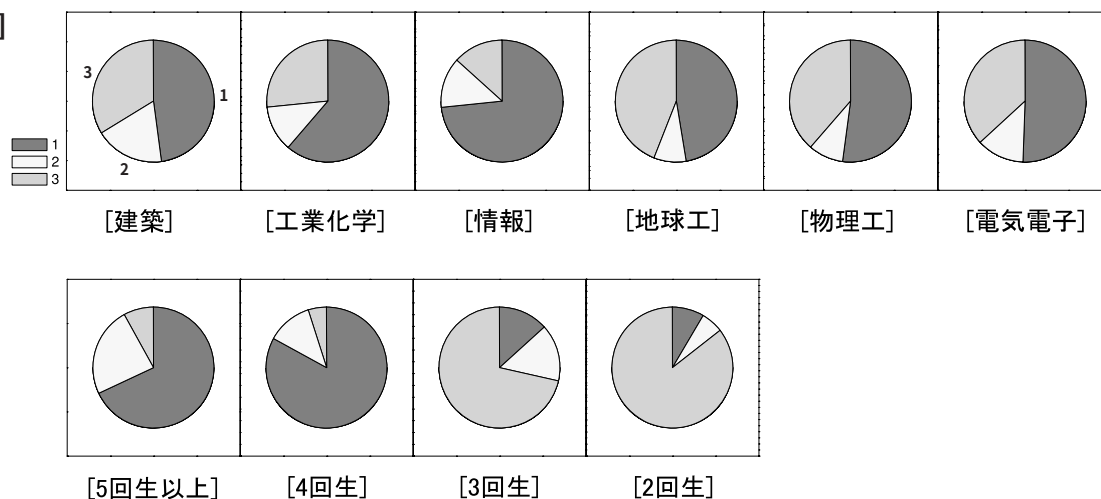
[7C]



【8】 A. 4回生の研究室配属では希望する研究室へ配属されましたか（されそうですか）？

1. できた（できそうである） 2. できなかった（むりそうである） 3. わからない

[8A]

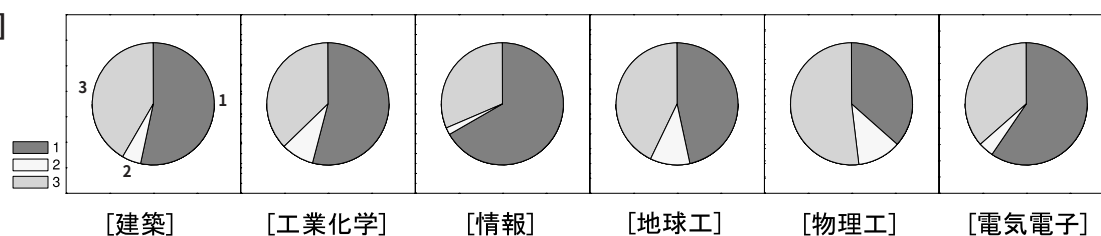


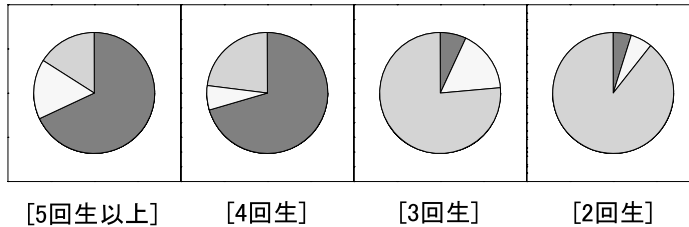
B. 研究室配属に対する満足度はどうですか？

1. 満足 2. 不満 3. どちらともいえない

理由 \_\_\_\_\_

[8B]





## 理由

### 2 回生

[地球工]：

2. 配属方法を確立してほしい。
3. まだよくわからない。分からない。

[建築]：

1. 自らの進路を決めるいいチャンスだと思う。これがないと自らの進路決定を先延ばししてしまう。

[物理工]：

3. 配属をじゃんけんできめるのは問題あり。

[電気電子]：

3. 下手したら希望するところには入れないし、楽しそうな研究室はたくさんありそうだ。

[情報]：

3. まだわからない。研究室配属についてまだ良く知らないから。知りません。

[工化]：

2. じゃんけんで決まるとか聞いたことがある。
3. システムがまだよく分かっていない。まだその時期ではないから。よくわからない。見学とかしてみたい。先のことなのでまだなんともいえない。

### 3 回生

[地球工]：

2. じゃんけんで決めるのはおかしい。じゃんけんはダメでしょう。もし希望の研究室に配属されなかったら大学にきた意味がなくなる。人数オーバーのときに単純に成績順とかとかジャンケンで振り落とすのはやめてほしい・・・。
3. まだ4回生ではないので。まだ配属されていないし詳しく研究室のことについて知らない。配属方法も知らない。まだ分からないことが多い。

[建築]：

3. 興味がない。まだ配属のことについて知らないのです。

[物理工]：

2. じゃんけんで決めるのはよくない。

[電気電子]：

1. 成績順だし。
3. 配属基準が不透明。

[情報]：

2. 単位が足りたら配属させてほしい。必修が厳しい。
3. 未だ不明な点が多い。

[工化]：

1. システムが明確。
2. 希望のところに行きたい。非常に大事な事柄なのにギャンブル性が高いと感じる。点数がわからないし、運みたい制度である。みんなの希望を公開してほしい。
3. まだまだ必死で努力しなければならない。

#### 4 回生

[地球工]：

1. いきおいがある。行きたい所にいけたので。思っていたより良い雰囲気。環境だと思う。興味のある分野なので。いろいろなことが勉強になり、またそれが楽しく感じられる。静か、環境がいい。自分たちで話し合いの末に決めたので納得はしている。成績順は手っ取り早い。それで研究室を決めるのは賛成できない。自分としては希望の研究室に配属されたので満足。自分の興味があった分野だから。十分な設備と研究・勉学に適した環境がある。十分な選択時間が与えられていたので。成績による配属は良いと思う。先生・先輩ともにめんどろを見てくれる。第1希望だし雰囲気も良い。人気のある研究室で定員オーバーを起こすのは仕方がない。話し合いで行うから。雰囲気がよいから。まだ研究が始まっていないので何とも言えないが・・・今のところは学ぶのにいい環境である。みなさん素晴らしくまじめ。優しい先輩方が多くて楽しいから。
2. 1人だけが成績で決定し、残りはじゃんけんというのが納得できない。じゃんけんってのは・・・。本気で入りたい人と何となくで選んだ人が対等になるのがどうもふにおちない。じゃんけんはなしだと思う。成績トップ以外はじゃんけんかくじ引きで決めるものであったから。人気の研究室をじゃんけんで決めていたので。
3. 自分がまだ甘いため多少のことでもキツく感じたり研究分野に対し本当に自分は興味があるのか分からなくなるときがある。自分のやりたいことがまだ分からない。ジャンケンで決まるのは納得いかないと思います。成績で分けたほうがみんなの不満がへると思う。配属されてまだ日が浅いため。まだ判断しかねる。まだ院試勉強しかしていないから。まだ具体的な研究が始まっていないのでなんともいえない。まだ研究に着手していないので分からない。まだ日が浅い。まだ分からない。よくも悪くも期待通り。

[建築]：

1. 学生の都合を聞いてある程度合わせてくれる。希望するところではなかったが入ってみてよさがわかった。希望通りだった。自分の興味に合っているから自分は満足。不条理にワリを食っていた人も結構いる。視野が広がった。周囲がよい環境。尊敬できる教員・先輩・同回生とめぐり合えたから。楽しい。
3. 院試の勉強でまだ本格的に研究室に行っていないので。希望通りにならなかったから不満ではあるが視野を広げることにはなるともいえるから。研究室配属までに授業で触れていない分野がある。まだ本格的に研究を始めているので。

[理工]：

1. 実験が忙しすぎて院試勉強ができない。ちゃんと勉強ができる環境だから。不便。希望通りのことができそう。雰囲気が良い。人付き合いが楽。皆で話し合った結果なので。
2. 教授の移動や退職など研究室の情報をもっと公開すべき。じゃんけんで決めるのはよくない。成績順で決めるべきである。不公平さが否めない。
3. 事前に研究内容を検討できなかった。じゃんけんで決めるのはよくない。配属の決め方を統一すべき。

[電気電子]：

1. いい研究室だった。とても雰囲気が良い。とりあえず希望どおり配属されたので。ほぼ期待通り。やりがいがありそうな研究室に配属されて良かった。希望した研究ができる。希望するところに入れたし有意義な4回生の一年になりそうだから。希望する分野の研究室に配属されたから。希望どおりだから。希望どおりであり満足している。気楽に過ごせる環境なので。教授も含めてすばらしい環境である。興味のある分野についての勉強をするには最高の環境。単純に居心地、雰囲気が良い。結果的に興味を持てた。視野が広がった。研究、学習面でよい環境であると感じている。研究自体は取り組んでいないのでなんともいえないが院試への配慮があっている。自分は希望どおりに配属されたから。配属されなかった人はみんな不満があるはず。周りの人が面白い。成績に応じての配属は公平だと思うから。成績順ならば妥当だと思う。基準をもっと明確にしてほしい。成績順になり不公平がなくなってよかった。先生や先輩がよい。色々と教えてくれる。第二希望は通ったし、じゃんけんより成績順のほうが納得できる。努力した人が報われるのは良いシステムである。雰囲気が良い。先輩方の研究に対する態度や人格もすばらしいと思う。雰囲気もよく、Dr 以上の人が多くて自分を磨くには良い環境だから。雰囲気もよく研究内容にも興味がある。満足ではあるが配属での詳しい情報がなかった。理解のある人が多い。
2. 一部とんでもない講義もありましたがそれ以外は満足でした。結局基準をどこにおいて配属されるのか説明がない。入学時点では成績順ではなかったのに突如として成績順になった。
3. 1年ぐらいたたないとわからないものだと思うから。まだ研究を始めてないから。研究内容はいいが部屋が狭い。今の段階でははっきりとわからないから。今は院試勉強中でまだ研究してないから。大学院で再び研究室配属が行われるので。特に何もないから。配属システムが不透明。

[情報]：

1. 学習環境が良い。環境としては十分である。希望の研究室にいったから。希望通りの研究室へ入れました。興味のある分野の研究ができそうだから。拘束時間が短い。志望どおりだった。志望どおりに配属されたから。自分が興味を持つ分野を研究している人が上にいるから。自分の興味を持てる研究ができている。先生が熱心に学生の指導を行ってくれる。先生が優秀だから。第5だったが入ってから第1や第2に近い内容のことをやらせてもらえているので。入れたから。雰囲気が好き。予想したように進んだから。
3. まだあまりわかりません。まだ今ひとつ何をしていいのかわからない。まだ深く関わっていないのでよくわからない。もう少し時間がないと研究室についての認識がいかげんになる。人が少ないのは残念だがその分研究室の機器を豊富に使える。

[工化]：

1. 3回までより、確実に生活も充実した。いい感じ。いい研究室だから。いい研究室だと思うから。いい雰囲気の研究室だったから。今まで先生として授業なされていた方々に直に話を聞けるので。面白い。思ったとおりの研究室であった。希望が通れば満足である。希望する研究室に入れたから。希望通りだったから。研究が興味深いもので、充実感がある。研究内容、人間関係が自分に合っている。実験も楽しいから。実際研究内容が面白そうだから。自分が行きたい研究室に行けたから。自分が興味のある研究ができ、研究室の雰囲気もよいから。自分の好きなことが勉強できそうだから。自分のペースででき、かつ指導もしっかりしてもらえる。すごく毎日が充実している。素晴らしい先輩方がいるから。成績順なら、例えば希望がかなわずとも納得できたと思う。第一志望でした。楽しい。楽しいし、自由だから。研究が活発だ。適切な制度だったと思う。できるかぎり希望を優先されるから。人間関係が円満で雰囲気がとてもよいから。配属前の印象通り、環境が良く、希望していた研究ができているため。雰囲気がよい。雰囲気もいいし、やりたい事ができそうだから。周りの人がよかった。居心地がいい。快適。メンバーが良い。厳しくしてもらっています。希望する研究室に配属されたから。成績順なものも良い。研究室の人が楽しい。研究内容が面白そう。第一希望だから。楽しい。
2. 自分が希望していた研究室が、自分の研究室配属年度に協力講座研究室から外れ、不本意な内容の研究室しかなくなったから（そのために大学に入ったのに・・・）。成績差が大きい場合は第1希望優先にすべきでない。人気の集中に対する配慮がない。配属先が確定するのが遅すぎて、春休みの間に準備（勉強、引越し）がしにくい。配属のシステムが博打である。
3. いいところも悪いところもある。今現在楽しいから。今の段階では分からない。帰る時間が遅くなる。学生同士の事前の話し合いを認めるなど、もう少し柔軟なシステムにしてもよいと思う。興味のある科目に集中することは良いと思うが、強制的に配属された人はかわいそうに思った。実験（研究）自体に興味がない。実際友達で希望に沿えなかった者がいるため。自分の時間が多くてやりたいことができるが、その道の研究で一生やって行こうとは思っていないから。志望順位優先で配属されるのがよくない。完全に成績順に決めてくのも問題があるが、もう少し工夫してほしい。取得単位不足のため、まだ研究室に配属されていない。成績順と運というのは別にかまわないですが、下手をすると全く興味のない、むしろ嫌いな

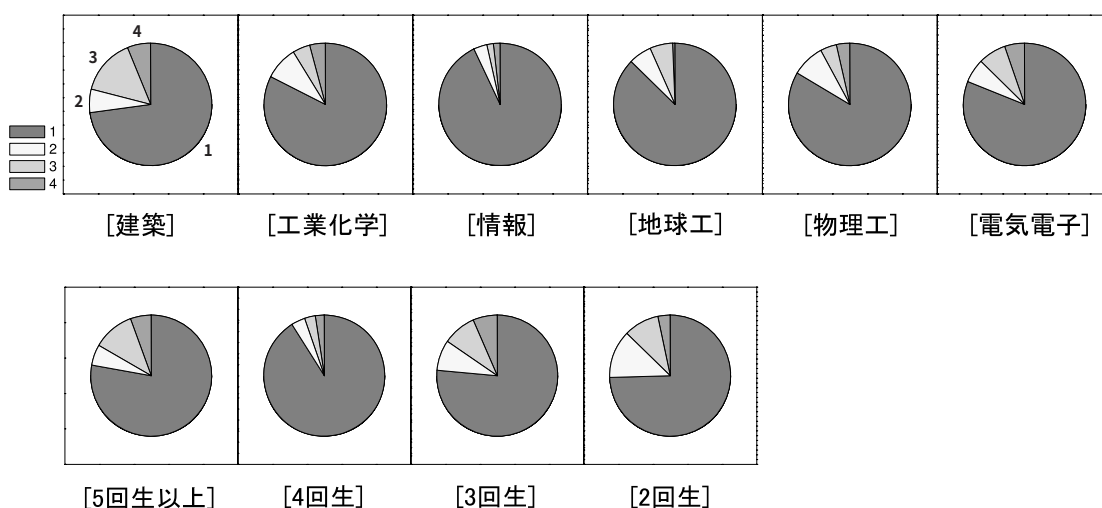


類の研究を一年間させられると思うと、どうかと思った。制度がよくない。配属方法を変えた方がいい。まだ配属されたばかりでわからない。希望通りの者は良いが希望が通らなかった者はつらいので。研究内容には多少興味はあるが将来役に立つかどうか解らない。他の研究室の状況が分からないから。他の研究室も見たい。まだ具体的な研究を始めていないため。まだわからない。

【9】大学院進学を考えていますか？（複数回答可）

1. 修士課程進学    2. 博士課程進学    3. 他大学へ進学    4. 留学

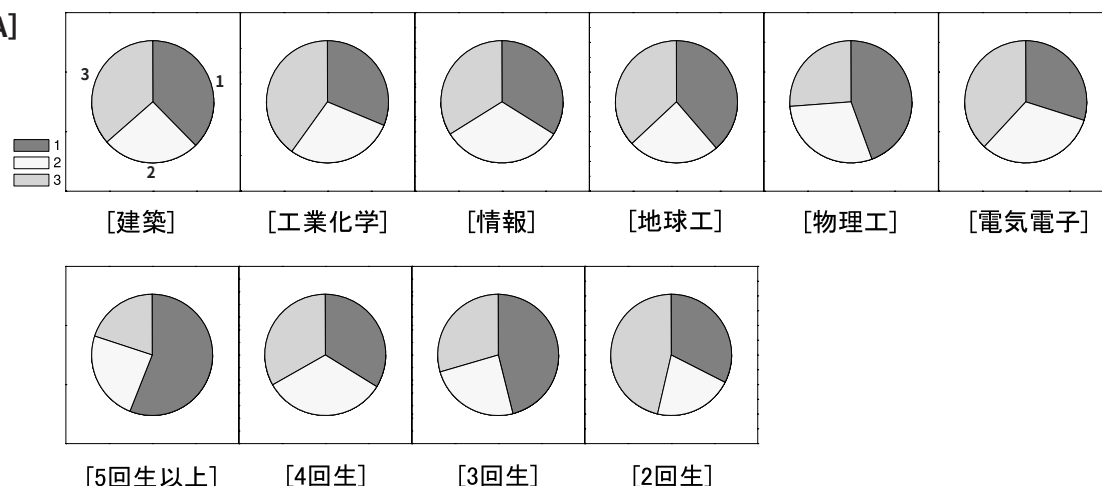
[9]



【10】A. 平成 16 年 4 月から京都大学は従来の国立京都大学から国立大学法人京都大学となり組織が大きく変化しました。このことで大学の教育・研究の方法・内容が少しずつ変化しています。あなたはこの変化を実感していますか？

1. 変化していると思う    2. 変化していないと思う    3. わからない

[10A]

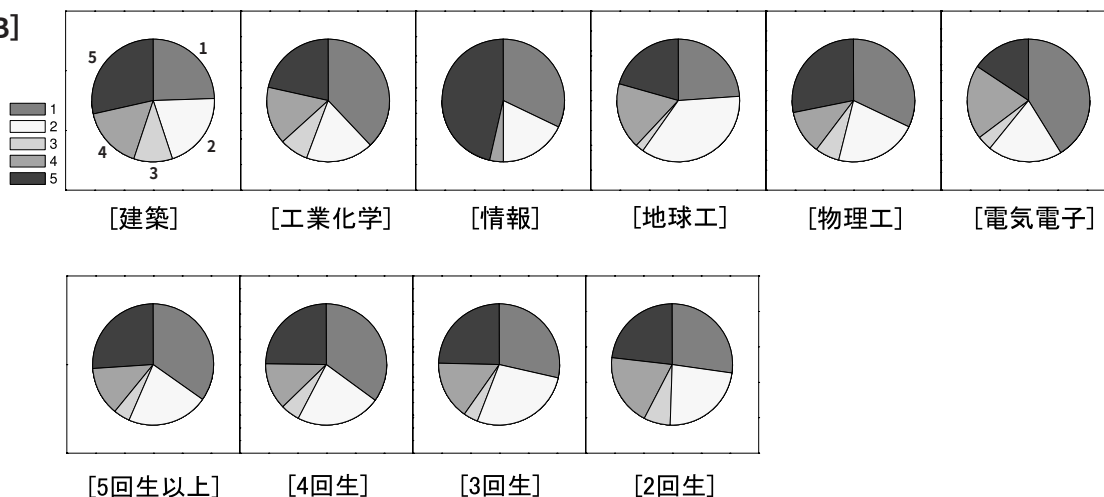


B. 「変化していると思う」を選択された方にお聞きします。どのようなところで変化を実感していますか？（複数回答可）

1. 建物 2. 授業内容 3. 研究内容 4. 教員の対応 5. 事務の対応

そのほか具体的に法人化の影響が大学生活にあればお書きください。

[10B]



理由

2 回生

[地球工]：関係ないかもしれないが大雨警報で休校にならないのはおかしいのでは。厳しくなっている。京大生の自主性を失わせることになる。コンビニが入って便利になった。H16 入学だから比べようがないかも。授業料が高くなった事と学生に対して強引な点が多々ある。出席重視の授業が多くなったが授業は今一つ。授業料減免。出席せなあかんようになった。正直なところ二重登録が出来ないのはかなり痛いです。大学が 24 時間使えない。非常に不自由。堅苦しさが拭えない。大学の自由度。中央食堂の日替わり定食の値段が高い。国立時代を知らないのもムリ。

[建築]：ローソンが出来た。節電節約の張り紙が増えた。今までは放っておかれたことも学科内で注意されるようになった。アンケート調査が激しくなった。学費が上がった。

[物理工]：いろんな規制が厳しくなった。空き教室の使用が不自由になっている。反対運動している人が目に付くようになった。学生援助のシステム。授業料が上がった。ルールや規制が厳しくなった。

[電気電子]：成果主義が強くなった気がする。勉強に対する姿勢がどんどん阪大にちかづいていと思う。サークル活動に対する寛大さというか美点が失われていきそうな気がする。少し羽目をはずしたくらいが京大らしくてちょうどいいと思いますが...

[工化]：授業料の増加。福利厚生複雑化。講義やコースの外見が変わったが、実は何も変わってない感じ。文化祭実行委員なので。

### 3 回生

[地球工]：お金。京大らしさがなくなる。不必要な改革はいらない。授業料 UP。学生相談所。駐輪指導が厳しくなったのは法人化の影響でしょうか。やっぱり単位でしょう。

[建築]：経費節約で非常勤講師の制度がなくなったのは大変残念。履修システム。

[物理工]：このようなアンケートがあること。単位認定が厳しくなった。

[電気電子]：授業料の値上げ。独法化前の建物の増設。大学内での規則の変化。色々とうるさくなった。

[情報]：冬休みの縮小。入試の独自色。昼でも事務が開いてる。

[工化]：授業料値上げ。ケチになった。休講が少なくなった。組織の改廃。テストの時期。ローソン。

### 4 回生

[地球工]：エアコンの温度を下げられなくなった。おしゃれなレストランができた。授業料があがった。学費・授業料の値上げ。建物が変わり授業料も上がった。二重登録ができなくなった（単位の少ない学生にとっては非常にツライが当たり前のことだと思う）。授業料の振り込みに手数料がかかると親が文句いった。

[建築]：学科内では JABEE への対応や産学連携に積極的になっていると感じられる。休講が激減して先生がよく課題を出すようになった。

[物理工]：院と大学のつながりがわかりにくくなった。お金に厳しくなった。大学院入試の内容が大幅に変わってきている。単位認定が厳しくなった。授業料免除・奨学金の制度。このようなアンケートがあること。省エネ対策。

[電気電子]：紙代。授業料の値上げ。免除人数の削減など。サークル活動で使える教室が大幅に減った。学生のことをあまり考えなくなったと思う。自由空間が減ってきている。事務の連中が横柄な態度でなくなった。管理が厳しくなって「自由の学園」が失われているような気がする。他の大学と雰囲気似てきた。

[情報]：授業料。設備費とかすごくけちるようになってきていると思う。A 号館の南側はずっときたないままなのでは。アンケートが増えた。学費が少しずつだが高くなっている。

[工化]：学生主体で使う設備への費用が優先されず、どんどん後回しになり、消耗品がなかなか揃わない。学費が高くなった。研究費の節約などが目立つ。様々なアピールが増えた。しめつけが厳しくなった。授業料 up がキツイ。授業料アップ。駐輪、駐車が厳しくなった。特定

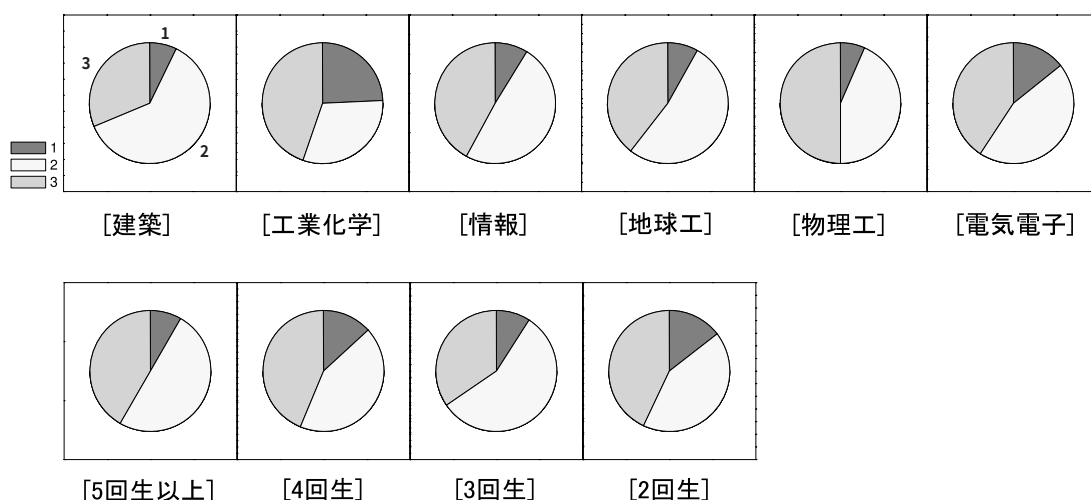
の銀行を優遇しているため、納入等において不公平が生じている。京大ブランドが企業に身売りされているような感覚がする。図書館が暑い。薬品などの管理が細かくなっているそうです。労働安全衛生法。自己点検・評価についてのアンケートが行われていることも変化の表れだ。授業料の値上がり。薬品の管理。周辺環境への配慮。ローソン。

# 【11】 工学研究科と情報学研究科の桂移転の影響についてお聞きします。

1. 良い影響    2. 悪い影響    3. どちらともいえない

理由を具体的に書いてください

【11】



理由

2 回生

[地球工]：

1. キャンパス内の人口密度が減る。研究に適した環境。充実してそう。
2. 3つのキャンパスを渡り歩くのは時間ももったいないと思う（移転期だからしょうがないのかもしれませんが・・・）。田舎。学部内での閉鎖性を加速させる。キャンパスを分けるのならわざわざ京大にくる必要がない。むしろ東大に行く方がよい。桂キャンパスが市街地から（駅からも）遠すぎる。桂はとおい。通いにくい。京都大学は比較的吉田キャンパスに集まっているのが魅力的だったのに残念。下宿から遠くなる。駅から遠い。下宿の問題（引越さねばならない）もあるし桂キャンパスは交通の便が悪すぎる。交通手段を変更する必要がある。共通科目が残っている場合桂との往復に尋常ではない費用と時間を要する。交通の便が悪すぎる。本部とのつながりが希薄になる。サークルに参加できなくなる。サークルは大学生活におけるかなり大切な部分。住みにくい。通学が変わるなど様々な苦労がかかってくる。勉強に支障をきたしかねないが最新の設備があるのはいい。遠い。教職とろうと思ってるから吉田まで来なきゃいけない。慣れない環境だから。途中で移転されると通学など大学生活に問題が出てくると思うし引越をしなければならなかったりするからやめてほしい。引越し。引っ越しするのが面倒だし環境の変化も悪影響であると思う。法学部（ロースクール）の定員が増えることにより、どうして工学部の生徒が移動しなくてはならないのだろうか。法学部が移ればいいと思う。本部から遠い。田舎。研究が限られるという話を聞く。

ISO かなんかで、まとまっている方が便利だと思う。いったり来たりするのは大変。めんどくさい。吉田の地に全学部・院が揃っているからこそ刺激のある大学生活を送れる。桂に移転するとそこに閉じこもってしまう。教職を考えている身としても不自由。サークルをしている身としても不自由。

3. 行ったことがないのでわからない。移動が非常にめんどろ。京都市という土地柄をふまえて規模が大きくなると外へ出たくなるのはわかるが、大学生・院生にとって都市の中にある方が大学町という感じがして良いと思う。あまり田舎に行くと、研究に没頭できるが時代の流れに鈍感になる。吉田キャンパスにあれば他学部との交流の機会がありそうに思えるので。景観などは良くていい雰囲気であるが交通の便が悪すぎる。施設は整っていきそうだけど交通が不便である。実感がなくて。他学部との交流がなくなるのでは。どうなってるのか知らない。まだ桂に行ったことがないのでなんとも言えない。

[建築]：

1. 吉田から結構離れてしまったのは悪い影響だが広々としたスペースで自由に研究が出来るのであれば非常によい。
2. 一箇所に集まっているほうがよい。教授が近くにいない。遠い。本部との交流が難しい。面倒。やっぱり他学部と一緒にいい。

[理工工]：

1. 設備が整っている。
2. 引越しをしなければならない。孤立している。他学部との協力がしにくくなる。立地条件が悪い。交通の便が悪い。いつ移転するのかははっきりして欲しい。引越しをしなければならない。
3. 生活が不便。

[電気電子]：

1. 新しくなっていると思う。敷地が増えて研究スペースが確保される。
2. 宇治の研究室に配属される可能性もあるのでどこに下宿しているのかわからない。遠い。設備が最新になるのはいいことだと思う。遠くて引っ越さなくてはならない。家からいきなりところにあるから。交通の便が悪い。通学に遠くなる。不便。他学部の友人と会いにくくなる。本部から遠いと言き来が大変だから。
3. きれいになったのはいいことだと思うが立地的には吉田のほうがいいので。吉田からの交通アクセスが解消されれば問題ないと思う。研究そのものには最高のパラダイスだと思うが生活面では不安がある。研究設備が新しくなるのはいいが吉田とのつながりがなくなる。アクセスが悪いなどは良くない。必要な措置なのだろうか。遠くて不便。良い点：規模の大きい実験施設ができた、悪い点：学部生の間の生活拠点である本部キャンパス周辺から遠すぎる。

[情報]：

1. 建物等設備が新しくなる。



2. 「京大」なのに市内にないのが、とりわけ工学系がしいたげられているのが理解できない。下宿生は引越ししなければならないなど面倒。クラブ、サークルに参加しにくくなる。自宅（実家）から遠い。

[工化]：

1. 新しいキャンパスで気持ちよく研究に打ち込める。環境がよい。静かな場所で研究できるから。施設はとてもすばらしくなったからです。家に近くなった。広いところに移ったから。実験室がよくなる。設備が整っている。
2. 通いにくくなるから。もっと交通の便のいいところに移転してほしかった。交通の利便性が悪いように思えるので。桂は吉田ほど開発されていなくて不便。交通の便が悪い。サークルが続けられなくなる。引越ししなくてはいけないから面倒。不便。
3. 設備の先進を喜んでいる。生活の不便を悩んでいる。専門を極めるには良いが交通の便が悪すぎる。男臭そう。

### 3 回生

[地球工]：

1. 桂はいいところだから。遠いけどのんびりとした環境。
2. 移転する理由が明確に説明されていない。田舎に造った意味が分からない。遠い。不便。とにかく納得いかない。研究のためには新たな施設ができたりして便利になるのかもとは思いますが・・・。桂に引っ越さなければいけないのが大きな負担だから。桂の研究室に配属されたあともおそらく吉田に取りこぼしの授業を受けにくることになると思うので。移動が大変。交通が非常に不便。自宅通学が難しくなる。交通の便が悪い・遠い。交通費がバカにならない。文系の方が普通に考えて生活しやすい。法律で郊外にしか作れなくなったことや敷地の取得など理由があり何とも言えない。遠い・・・山の上・・・。遠すぎて無駄な時間がかかる。周辺が住宅地。非常に不便で下宿場所を変えなければならないかもしれない。桂の駅から遠いし吉田キャンパスからも離れすぎている。引越ししんどい。
3. 桂キャンパスへの交通が不便。吉田キャンパスに期待して大学に入ったという立地条件もあるのに移転されるのは悲しい。桂は本部とはなれすぎていて隔離されている感じがする。新しくてよい。研究がはかどるなら良いと思うが工学部のみ孤立しそうに感じる。設備が新しくなりスペースが広がるが交通の便が悪い。悪いとは思わないが不要なと思う。

[建築]：

2. 研究室が近くになく上とのつながりがやや薄くなってしまい残念。孤立している。だるい。遠い。坂道。学食以外で食べるところが多くない。吉田の専門図書館が移動してしまった。不便。吉田キャンパスと桂キャンパスは遠く桂キャンパスでの様子がわかりにくく先輩などとかかわる機会を減らしていると思う。吉田近辺の街の雰囲気が好きだから。交通の便が悪く実家から通いづらくなる。

[物理工]：

1. 遊園地みたい。

2. 総合大学の意味がなくなる。いつ移転するのかはっきりして欲しい。
3. 離れたところで研究できるのはいい。

[電気電子]：

1. 広々としていて気持ちよさそう。自然環境がいい。新しいのはいいことだ。
2. アクセスに時間がかかる。遠い。京大は一つの土地にたくさんの学部があるのが良いところだったのに工学部隔離はひどい。遠いし何もない。不便。最悪。工学部だけ隔離。遠すぎる。交通が不便。本部の施設が利用できない。学生の引越が必要。市内中心部からとおく生活しにくい。京都にあるメリットが感じられない。工学部のみが隔離されることへの違和感。授業の行き来がめんどい。生活が変わる。交通が不便。他分野とも交流が少なくなる。田舎。
3. 遠い。学生にとっては不便な点が多いとは思いますが研究環境が整うという点では仕方ないと思う。研究施設は充実していると思うが生活環境が心配。都会にあってこそ top レベルの大学といえるが、田舎への移転は逆行している。

[情報]：

2. 実社会から離れて社会に還元されないことばかりしてそう。僻地。
3. アクセスと周辺設備が不足している。意味・必要性を見出せない。無駄。文系と同じキャンパスにいることはそれなりに意味のあることだと思っていたのですがむしろ遊ぶところがなくなって研究が進むそうですね。

[工化]：

1. きれい。心機一転して研究が出来そう。
2. 桂移転により学生が手軽に触れられる図書の絶対数が減った、吉田ならば理学部や農学部  
の図書でも触れることができる。下宿を変えなければならん。研究室配属が確定するまで下宿を決め辛い。孤立している。本部での扱いが悪すぎる、再履修科目の受講や部活動が不便になるから。周囲の生活環境がよくなるまでは不便だと思う。総合大学の良さが失われる。  
3 回生までは研究室との距離が非常に大きく。4 回生以降は他の分野との距離が非常に大きくなってしまった。総合大学である意味が失われてしまったといっても過言ではない。遠い。何もない。
3. 学生生活は良いかもしれないが暮らすには悪い環境。研究環境としては良いが住みにくい。研究する環境としてはよさそうだが不便。施設が新しくなり良いが交通が不便。遠い。引越ししなくてはいけないから面倒。本部と桂は離れすぎ。

#### 4 回生

[地球工]：

1. 新しいキャンパスで研究できるから。家から近くなった。設備がととのっている。行ったら行ったで慣れると思う。キャンパスが広くて開放的だから。吉田に飽きてきたから。
2. 移動・通学に負担がかかる。移動に時間がかかる。いなかで通いにくい。引っ越しのお金がありません。往復に時間がかかる。学生にとっては生活上不便が多い。交通が悪い。桂へ

いく用事がある時に往復に時間がかかる。キャンパス間の移動がしんどい。教職をとる学生  
のことが「数が少ない」「自分の都合」という理由で全く考慮されていない。大学院に進学し  
て教職科目をとるのに吉田に来なくてはならないのが不満。京都の町で生活した方が大学生  
としていいと思うが、切りはなすとこれからどのようなリズムで生活すればいいのか分から  
ない。研究場所と院での授業の場所が離れてしまうから。交通の便がよくないので。交通の  
便を全く考えていない。学生や教授の立場になって考えてほしい。研究環境でいうならば桂  
はいいところである。実験施設が吉田に残ったままなので吉田と桂を行き来しなければなら  
なくなる。住んでいる所から引っ越すこと。総合大学でありながら他の学部との交流が断絶  
されてしまう。他学部の資料・授業等で不便が生じる。他学部生との交流がなくなる。他学  
部との交流が減り刺激が得られなくなるのではないか。他の研究科との距離が広がる。中途  
半端に遠くアクセスが不便な所だという印象があるから。通学が不便になる。夜おそくや朝  
早くに通学しないといけない場合立地条件が悪すぎる。遠い。山がきつい。遠くて不便。土  
地が不便（坂がきつい・駅から遠い）。非常に学生生活が不便。ひっこし。金銭的に。工学  
部の孤立化。引っ越しが面倒。入学当時はそんな話きいてなかった。便の悪さ。本部キャン  
パスと遠すぎる。本部とのアクセスが良いとは言えない。研究室が桂だと特に4回生は吉田  
と桂を行き来しなければならないのに……。大がかりな器具を必要とする分野はともかく、  
桂へ移転するメリットは少ないのではないのでしょうか。ある意味研究に没頭しやすい環境で  
はありますが本部と離れているので移動に時間がかかりすぎると思うから。街から離れるこ  
とによりその土地の文化との密接な関わりが持てなくなる。立地が悪い。交通手段がとぼし  
い。大学側がもっとバスなどを提供すべきだ。

- 3.** 家がすごくとおい&不便！！。行ったことがないので判断基準がない。外出しないし、実  
際に移転してみないと分からない。自分自身が桂に行ったのではないので分かりません。自  
分は吉田に残るので分からない。新キャンパスはいいが地球系は9月移転とのこと。中途半  
端で引越しかびみょ〜。生活環境は悪くなると思うが研究施設などが新しくなる分メリ  
ットが大きい。設備が新しくなるが通学時間が延びる。設備が新しくなるのは良いが遠くな  
るから。どうせ移転するならば学生や教員が桂と吉田をあまり行き来しなくてよいようにな  
ってほしいと思います。遠くなるのは不便だが、設備・施設はよくなるから。広い環境  
が得られるのは良いが本部を離れるのは不便である。勉強するにはよい環境ではあるが交通  
などの不便や時間の無駄がよろしくないと思う。まだ移転していないのでわかりません。ま  
だ分からない。研究環境はよくなるのかもしれないが、場所が遠くなって不便になるのも事  
実。メリットはおちついた環境で研究できることだが、他学部との分離や生活面での（山奥  
なので）不便さなどデメリットのほうが多い。吉田からのアクセスが悪い。研究設備が新し  
くなるのはいい。

**[建築]：**

- 1.** 新しい施設で勉強すると気分的にやる気が出る。静かで落ち着く。設備が充実している。
- 2.** 4回生の授業は桂、研究室は吉田、行き来が大変すぎる。バスの時間も本数も少ない。活  
気がない。かつては大学院生がTAとして身近な存在でありTAを通して各研究室の活動内  
容・雰囲気などを窺い知れたが、移転によって各研究室と学部生とが完全に隔離しているか  
ら。桂と吉田の行き来が生じた。桂と吉田の往復をしなければならない。桂はただの研究施

設。吉田にはあった京大らしさが失われてしまった。なぜ他の研究科ではなく工学研究科が桂に飛ばされたのか理由が知りたい。キャンパスの移動時間が無駄。坂の上に学校を作るなんて傲慢だ。出来たキャンパスも無駄に広くてさびしい。今すぐ吉田に戻ったほうが良い。キャンパスを分けたら違う分野の人と交流しづらくなる。環境も吉田のままで充分。建築のような人文系のカラーの強い学問分野にとっては悪い影響がある。講義を両キャンパスで取ることが困難。交通の便が悪い。個人的に大学までの距離が遠くなっていたので。通学するのに時間がかかる。さまざまな環境が吉田の方がよい。桂の校舎は新しいけれど使い方に融通の利かないところが多い。通学に時間がかかる。遠い。交通の便が悪い。他の学部との交流が出来ない。吉田や宇治との連絡が悪い。

3. 「研究する」という雰囲気ではあるが男くさい。影響について言えば吉田だけでなく桂にも行くというふうに世界は広がる。利害について言うと出町柳⇄桂御陵坂で往復 1280 円は高い。私のように宇治・桂へ吉田から通うものとしては非常につらいです。桂での生活にあまり慣れないため。桂に行っていないのでよく分からない。キャンパス自体はきれいで広くて十分すぎるほどですが遠すぎる。山すぎる。不便。きれいになったけど不便になった。設備が整っていてよいと思うが交通手段の整備がまだ足りていないと思う。

[理工]：

1. 学校が広がる。研究設備が整っている。
2. 総合大学の意味がなくなる。他学部との協力がしにくくなる。引越しをしなければならない。文系学部を移転させればよい。北部キャンパスを移転すべき。立地条件が悪い。
3. お金ももったいない。桂に寮が欲しい。交通の便が悪い。

[電気電子]：

1. スペースが広い。周囲に余計なものがないという点において吉田より適していると思う。シャトルバスの便数がもう少し多いとより利便性が上がると思う。せせこまい吉田より好き。桂の掃除の業者も非常に丁寧。建物・設備がきれいで新しくなったのでやる気が出るし研究もしやすそう。広いスペースがあるから。広くて静かだから。下回生配当を取りこぼしてる4回生にはつらいかもしれないが。人が少なく住みやすい。静か新しい等々、短所は交通の便が悪い。良い環境で実験できるので。
2. 4回生配当の科目が吉田と桂にあるから不便。あんな田舎まで通えない。キャンパス間の移動が大変なので。やはり交通の便が悪い。引越しが面倒。桂は不便。引越しなど考えると大変と思う。引越しや生活環境の変化など面倒が多い。吉田が狭くなったなら仕方ないと思うが遠い。せめて東の山にすべきだった。吉田が遠い。手前の坂がきつい。吉田とのかかわりがどうしても薄くなってしまう上に場合によっては吉田宇治桂を行き来しなければならず、時間と金の無駄。吉田と桂の移動コストが大きい。桂の環境が良くない。研究室選びが2,3回生の授業カリキュラムなどにも影響が出ていると思う。現在の段階では両キャンパス間の交通手段がとばしい。交通の便が悪く毎日研究室に行こうという気にならない。交通の便が吉田に比べて悪い。坂がしんどいから気軽に行きにくい。受講の複雑化。授業が別の場所になってしまう。学部間の交流がなくなる。生活するのにかなり不便。教員が桂に多いので授業以外で直接会いにくいのが難しくなった。先生が常駐していないので質問



にいきづらい。移動時間の損失も大きい。総合大学としてのメリットがなくなる。他キャンパスの友人知人と連絡が取りにくい。通学が不便になった。不便すぎる。

- 3.** キャンパスの空間は嫌いではないが場所などは不便を感じる。メリットもデメリットもあるから。移転によりどの学科も厳しくなった感がある。桂と吉田を往復せざるを得ない人が発生するが研究するに当たり桂で広いスペースを使えるのはよいことだと思う。移動が面倒。遠い。引越しが面倒だった。まだ不便。きれい。広い。確かに研究環境としては良いと思うが、本部キャンパスとの距離、山の上など生活しにくい。もっと他の場所があったのでは。桂は不便だけど広い構内、新しい設備は魅力的。建物や設備が良くなったが生活環境が整っていない。研究には良いかもしれないが桂という土地が学生には優しくない。研究面だけ見ればよいのかもしれないが学生の下宿先の決定が4月にならないと決められないので不満がある。工学部では良い研究を行うために大きな施設や装置が必要になる場合があり、そのためには広い敷地のある桂への移転もやむをえない。ただ、吉田から桂への移動が面倒である。広いスペースもあり研究に専念できる環境ではあるが他学部生との交流もなくなりその他生活面に関してはとても不便である。広くてきれいなほうが研究には良い。交通の便が悪いので通うのが大変。実感していない。人が少なく静かな場所だがこれまで京大は1つの場所で全て集まってやってきたメリットがなくなるのと、思ったよりも桂が手狭だと聞くから。正直上回になってから引越すのは面倒。4回になってから桂とか言われたら移動に困る。大規模な実験施設を備えた研究室にとっては良いことだろうが学生のみとしては通学や引越しなどで負担が大きい。

[情報]：

- 1.** 狭い場所から広い場所に移り研究もはかどるのではないかと思います。交通機関があまりないので自宅通学者にはつらい。
- 2.** あまりに立地が不便。移転しない学科があったりで無計画すぎる。移転する理由がわからない。駅から遠いし引越しなどが面倒。遠い。田舎。桂が不便だし引越しの敷金・礼金などで出費がかさむ。研究環境としては申し分ないのかもしれないが生活には不便な場所である。交通の便も悪い。後々の生徒が単位取得の点でかわいそうである。交通の便が悪く生活しにくい。山の中に移されて世の中と隔離された感じがする。私は移っていないが友人が吉田と桂の行き来をすごい大変そうにしている。教授に気軽に会えない。桂は不便すぎるといっていました。授業が受けにくくなる。交通の便が悪い。色々と不便。他学部との連携が取りにくくなりそうでいや。他分野との交流がしにくくなる、例えば情報科学は生命科学・経済学との関わりがありそうである。通学しにくいです。もっと授業に行きたくなりそうです。不便になる、特に吉田の図書館には用がありまくるので。そもそも現在の建物に移転の必要を感じるほどの不満はない。面倒。
- 3.** まだ移転していないので何とも言えない。まだ移転してないから。まだ関係ない。影響がわからない。桂は研究する環境としてはいいのかもしれないがやはり学部の講義との両立させる必要が旧課程ではあるようなのでどちらともいえません。研究の施設や環境は向上すると思うが生活的にはこちらのほうが断然上である。研究施設が新しくなるのは良いですが吉田のほうでやっている授業を取りにくくなるのは困ると思います、特に教職などは4回生までかかるし院でとりたい人もいるはずなので。研究等に専念できそうという期待がある反面、



生活はしにくそうという先入観を持っています。広い場所で研究するのは設備の面からはいいことだと思うがいかなせん本部キャンパスから遠い。施設が新しくなるなど良い面もあるが、工学部のみの大学生活、近隣環境の未整備など学生にとって負担は大きいと思う。自分にはあまり関係がないから。設備が新調化されるのはよいが交通の便が悪すぎる。遠くから通っている学生にはつらい。

[工化]：

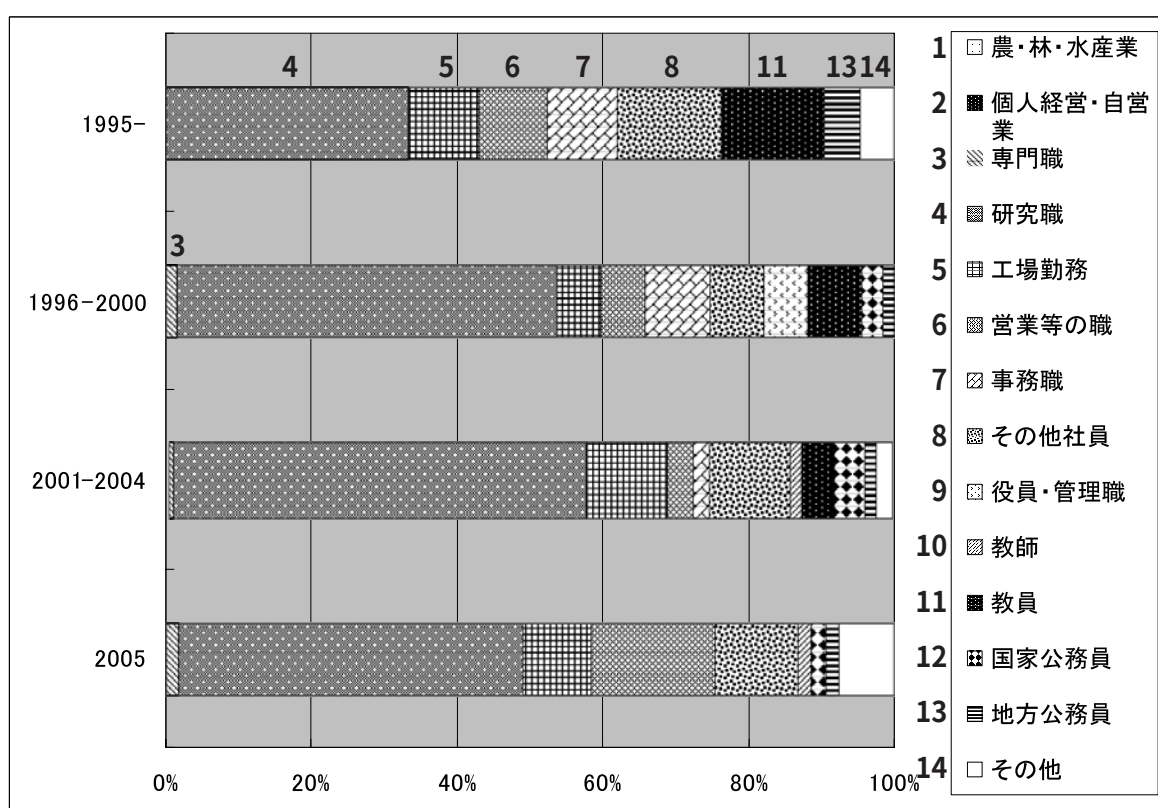
1. 家が近いから。環境がいい。綺麗。綺麗だし広いが少し遠いのが玉にキズ。研究室が広くなってから。研究しやすい環境になると思うから。研究するにあたって十分に満足できる施設であり、良い環境が整ったと思う。研究設備の充実。研究に集中できるから。静かな環境で研究に集中できる。施設が充実している。設備がきれい。設備が整った環境で研究できる。設備が非常によくなった。自分は行きたい研究室へ行けた。他大学と比べて設備がかなり充実していると思う。建物がきれいで良い環境であると思う。建物が綺麗で研究室も広い。のどか。広い。勉強しかやることがないから。家から近くなった。周りに遊ぶところがないので集中できる。外部から隔離されているので研究に集中できそう。勉強・研究に集中できる。
2. 教育学部（教職関連）の授業に出られなくなったので教職課程の単位が揃わない。遠隔講義等の対策は取るべきでは。4回になって引越しをしないといけないからイヤでした。キャンパスがどこにあるかというのも大学を選ぶ理由になるので工学部人気がなくなると思う。自分自身桂が嫌で桂の研究室配属を希望しなかった。交通が不便。以前よりはよくなった。交通の便が悪い。駐車場の有料化はやめて。自宅から遠くなった。自由な学風に偏りができたと感じる。授業の際の移動が不便。生活環境が悪い。生協の一階レストランをなんとかしてくれ。選択の幅が狭まる。学生の負担が大きい。吉田に残る研究室との連携がとりにくくなる。他学部・他学科との連絡が悪い。他学部との交流が少ない。建物が新しく実験設備が充実しているが、百万遍から遠く、また桂キャンパス周辺は一人暮らしをするには余りにも不便である。遠い。吉田から通っているため事故しかけて死にそうになったことが何回もある。不便である。辺境。駐輪（車）場の有料化は横暴では。他学部の友達とあまり会えない。他の学生とのふれあいがいい。周りに何もなし。吉田から週に何度も桂へ講義を受けに行く必要があるため、研究活動に割く時間がなくなる。吉田に比べて不便な面が多すぎる。立地条件が悪く交通が不便である。あんな不便なところにわざわざ行かなくても吉田キャンパスで他学部の人ともコンタクトのとりやすいままのほうが良いと思うから。宇治・吉田と連絡が悪い。移動が困難。学際的な雰囲気京大のよさと思っていたので。他学部・文系などとのかわりが希薄になったのはとてもさびしく思う。桂には何もなし。下宿から遠くなるのが大変だと思う。引っ越さねばならないから。引越し、生活への慣れ等4回生で経験する必要があることが多くあったように思われる。不便。
3. 遊べるところが減ったが値段は安い。特に食堂など、移動が不便。環境はいいが孤立感がある。研究環境としてはよいと思うが生活や交通の面では吉田に比べるとまだまだ不便だから。研究設備は充実していたが学生は桂への引越しなどの問題があるから。研究設備は整っているが生活基盤が不十分と思われる。人口の少なさのため福利厚生が採算に合わず不便。研究だけを考えればいい影響だと思うけど学部と離されているのはやはりよくないと思う。

研究に集中できる環境だとは思いますが、住みにくそうだし、交通の便（桂⇄吉田、宇治など）もあまりよくないから。研究に集中はできるが、娯楽がない。学生にとって生活しにくい場所。研究には打ち込めるが、文系の人達との関わりが持ちづらくなった。研究の規模という面から考えれば、広大な面積の中で最先端の設備が整っているので良いと思うが、工学系の人間しかおらず。研究をするという環境は整っているが、交通の便など、そのほかの事で不都合がある。交通の便が悪い。近くにコンビニ等がない。坂がきつい。建物が新しくて綺麗。しかたない。施設がきれいなのはよい。他の学部と離れて孤立したため、課外活動がしにくくなったのが悪い。施設自体は良いが移動がちょい不便、立地も……。設備はいいが立地が悪すぎる。設備はいいと思うが非常に不便だから。この施設が吉田にあれば申し分なかった。設備は良くなったが交通の便は悪くなった。そんな短時間では分からない。建物は綺麗だが、生活する環境（一人暮らしの学生が）としてはあまりよくない。遠いが研究環境はよくなっている。特に困ることもないが良いことも特にない。場所が広い。広いし充実の設備。自然に囲まれ環境も悪くないですが交通の便がやはり気になるのと、吉田の友人達と離れてしまうのはいささか残念でした。不便。不便になったが広々と研究ができる。雰囲気が変わるのはよいと思うが山の上にあることや、駅から遠いなどの立地条件が非常に悪い。良い：広いキャンパス、新しい設備、悪い：立地条件が悪い。立派な研究施設を使えることは非常に好ましく感じるが周辺の環境が吉田キャンパスの方がよかった。新しい良く整った建物になった。吉田から遠い。3回生までと4回生からの生活が大きく変化してしまう。学生にとっては研究に専念できてよいが。周囲の住民には近所に工場が出来たようなものでよいとは思わない。関係ないから。京都大学は1箇所にとまっているのがいいところと思っていたので。移転して設備・建物はきれいでいい。研究には集中できそうだがサークル活動は吉田キャンパスでしているので不便。交通が不便。坂がきつい。吉田キャンパスに用があるとき不便。しかしキャンパスはきれいなので良いと思う。同専攻なのに宇治と桂に研究室が分かれており、講義で移動するのはどうかと思う。時間と体力の大変な無駄。吉田で研究したことがない。

## (V) 卒業生へのアンケート集計

工学部・工学研究科出身者を各専攻の研究室の教授が研究室の名簿から選んで 794 名に対してアンケートを郵送した。各研究室の教授が封筒の宛名書きを行った。これは個人情報保護法に対する要件を満たすためであった。今回のアンケート対象者は、おおむね卒業後 10 年程度までの人、30 歳までの方を中心とした。宛先不明で返送されたもの 60、回収数は 287、回収率は 43 %であった。アンケート内容はおおむね前回（2002 年）の工学部アンケートと同じ内容であった。

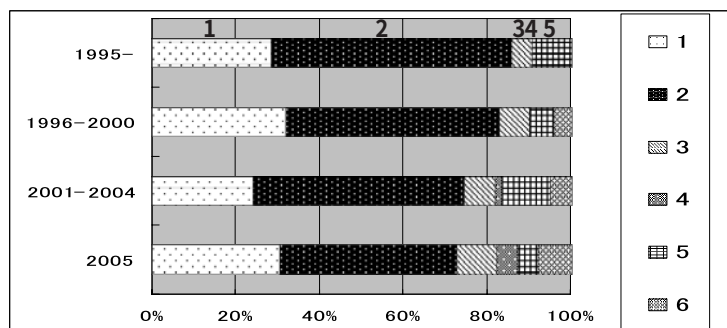
**現在のあなたの職業**（図中の年度は卒業年度を示す）



### 【1】 京都大学工学部入学に際して

#### 1.1 入学を希望された動機についてお尋ねします。

1. 京都大学工学部に自分の関心の強い分野があり、是非そこで勉強したかった。
2. 京都大学の学風に惹かれた。
3. 高校の先生や両親など周りが進めた。
4. 友達等が希望したので自分もつられて受験した。
5. 高校等の成績が合格圏であった。
6. その他



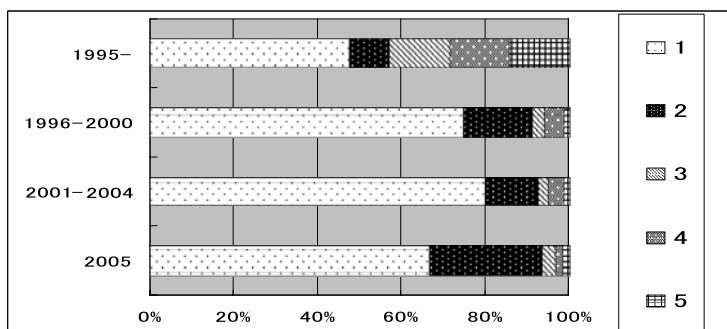
### その他理由・・・

・アメリカンフットボール部に入部したかったため ・学費が安く、距離も近かった、下宿の必要がなかった ・通学圏内の国立大学であったため  
 ・なんとなく ・京都という土地柄 ・鳥人間コンテストに参加したかった ・家から通える大学なので ・京都が好きで ・京都に住みたかった ・自分の能力を知るため ・あまり深く考えていませんでした

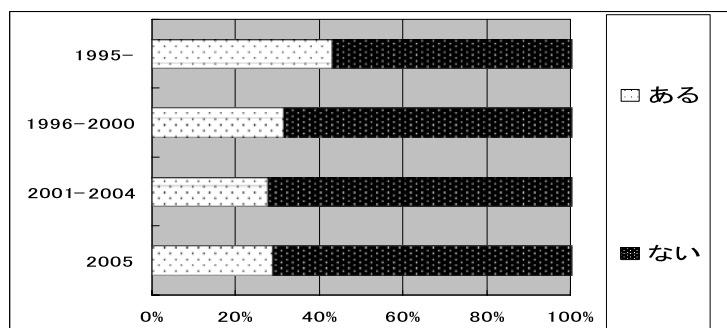
## 1.2 入学後の分野についてお尋ねします。

### 1) 入学時の分野について

1. 入学時の希望と実際入学した分野が一致していた。
2. 入学時とくに強い希望分野はなかった。
3. 入学時の希望と実際入学した分野が異なっていた。
4. 希望分野があったが、入学を優先して異なる分野に入学した。
5. 希望分野はなく、第一に京大に入りたかった。

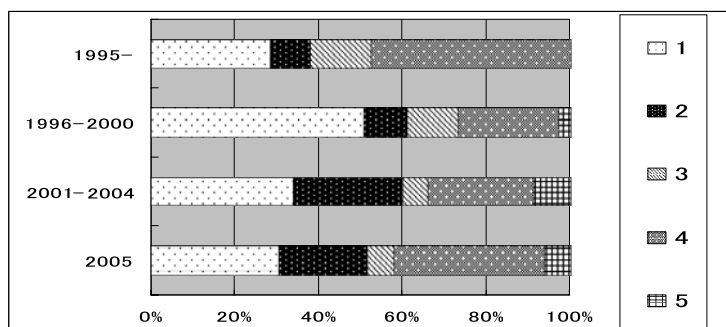


### 2) 入学後に分野を変えたいと思ったことがありますか。(転学部・転学科を含む)



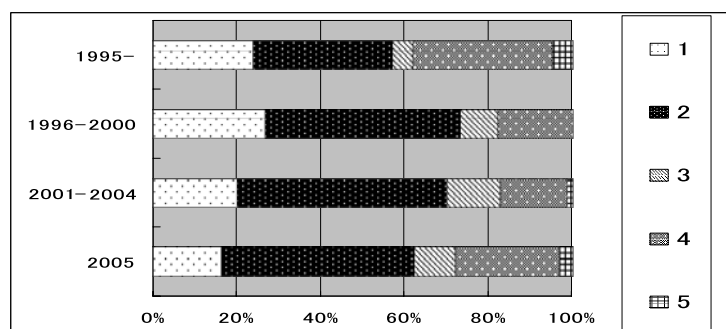
### 1.3 在学中に自分の勉強したい分野がありましたか。

1. 入学の時点で勉強したい分野が固まっており、その方向を通すことができた。
2. 入学時点で勉強したい分野があったが、在学中に自分の意思でその分野が変わり、その道に変更することができた。
3. 入学時点で勉強したい分野があったが、在学中にそれが失われ、別のものが見つからなかった。
4. 入学時点で勉強したい分野はなかったが、在学中に見つかった。
5. 入学時点、在学中もとくに勉強したい分野は見つからなかった。



### 1.4 入学時に、自分の将来（社会人になった後）と大学で勉強することをどのように関連づけていましたか。

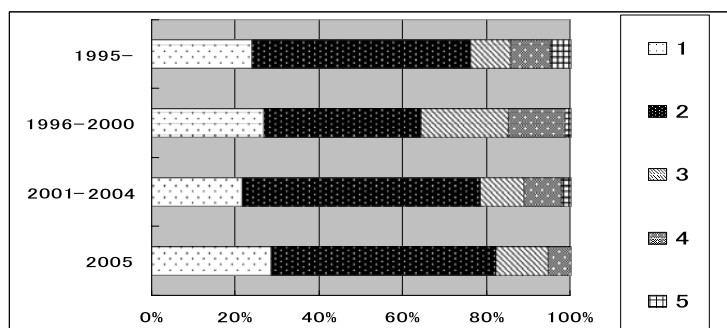
1. 自分の関心のある専門分野を勉強し、それを直接活かす領域で働きたい。
2. 自分の関心のある専門分野を勉強し、それと関連した領域で働きたい。
3. 専門分野に限らず工学全般に関する広い知識を習得し、それを直接活かして働きたい。
4. 工学部に入学したいと積極的に思っていたが、将来の進路についてはあまり考えなかった。
5. 工学を学びたかったわけではなく合格圏であるから受験して入学した。



### 1.5 卒業後の最初の職種・分野についてお尋ねします。

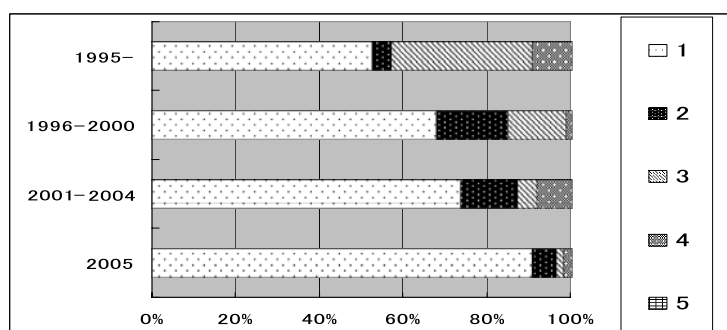
1. 京都大学入学にあたって希望していた職種・分野であった。
2. 入学時とは異なるが在学中に自分が希望していた職種・分野であった。
3. 自分の希望とは異なるが納得できる職種・分野であった。
4. 特に希望はなかった。
5. 希望とは合わない不本意な職種であった。





1.6 卒業してから現在に至るまでについてお尋ねします。

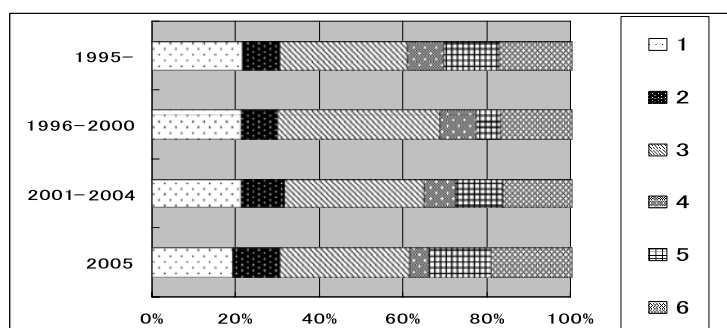
1. 最初の仕事に近い分野で仕事を続けており満足している。
2. 最初は希望した分野ではなかったが、それを続けて満足している。
3. 途中で職種・分野を変えたが満足している。
4. 希望した分野・職種に就いたが失望して現在は不満足。
5. 途中で職種・分野を変えたが不満足。



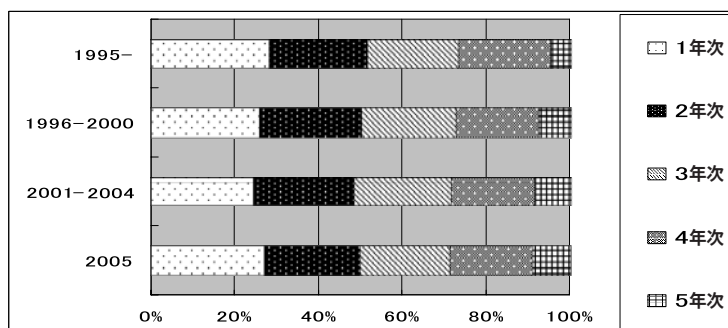
## 【2】在学中の課外活動について

### 2.1 京都大学に関連するクラブ活動等について

1. 体育会系のクラブに入っていた。
2. 文化系のクラブに入っていた。
3. 京大に関係する体育会系のサークル（同好会）に入っていた。
4. 京大に関係する体育会系と文化系の中間のサークル（同好会）に入っていた。
5. 京大に関係する文化系のサークル（同好会）に入っていた。
6. 京大に関係するサークル等には入っていなかった。

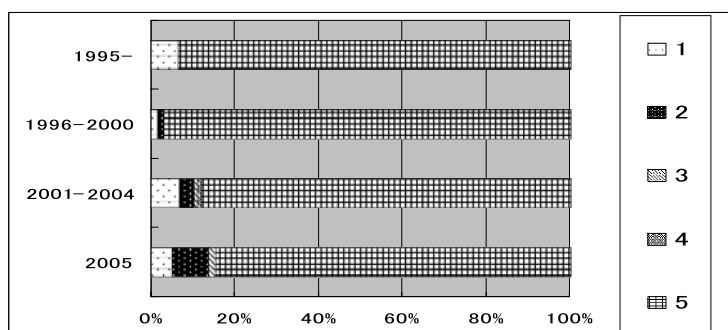


2.2 (2.1) で何らかのサークル等に入っていたと答えられた方にお尋ねします。  
加入しておられた学年年次をすべて解答してください。

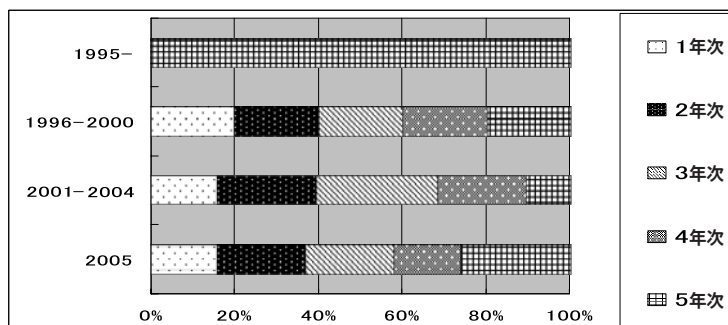


### 2.3 京都大学とは関係ない大学外のサークル・団体について

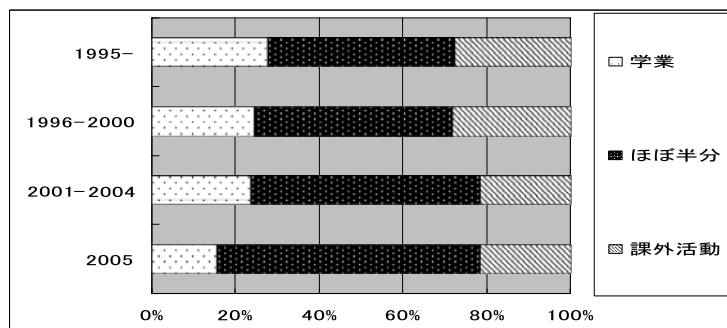
1. 体育会系の団体・サークルに入っていた。
2. 文化系の団体・サークルに入っていた。
3. 福祉、ボランティア関係の団体・サークルに入っていた。
4. 体育会系と文化系の中間の団体・サークルに入っていた。
5. 入っていなかった。



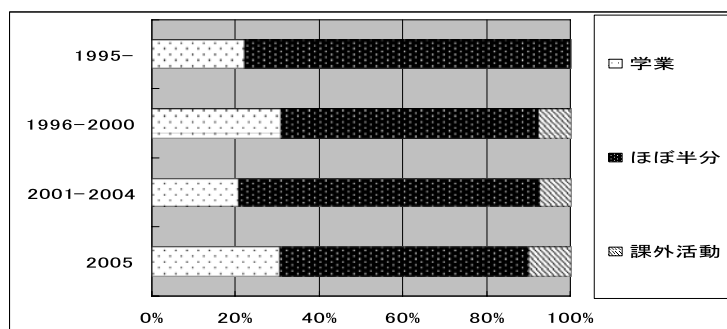
2.4 (2.3) で何らかのサークル等に入っていたと答えられた方にお尋ねします。  
加入しておられた学年年次をすべて解答してください。



2.5 (2.1)、(2,3) で課外活動をされた方にお尋ねします。  
在学中に、学業と課外活動のどちらに力をいれていましたか。



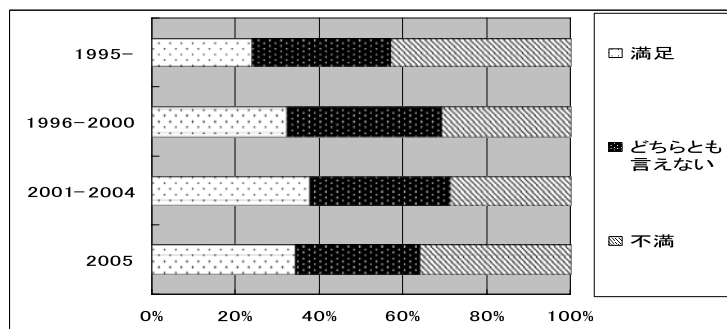
2.6 (2.1)、(2.3) で課外活動をされた方にお尋ねします。  
 学業と課外活動のどちらが、その後の人生に役立っていると思いますか。



### 【3】学習環境について

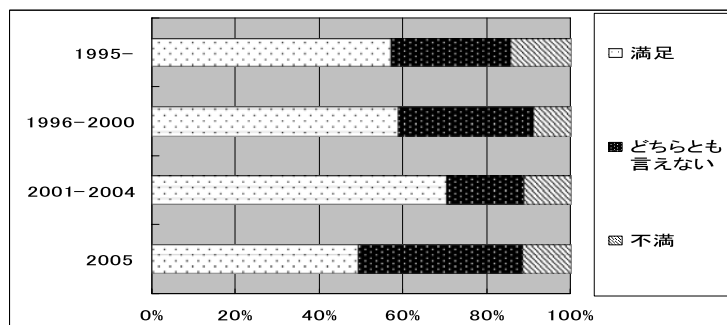
#### 3.1 授業環境についてお尋ねします。

##### 3.1.1 教室の広さ、照明、音響、空調などの状況について

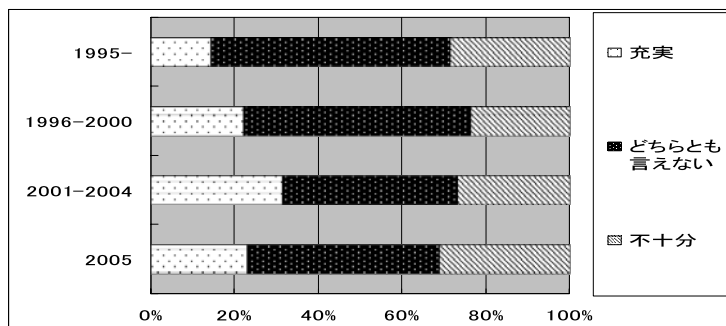


##### 3.1.2 教育学習環境について

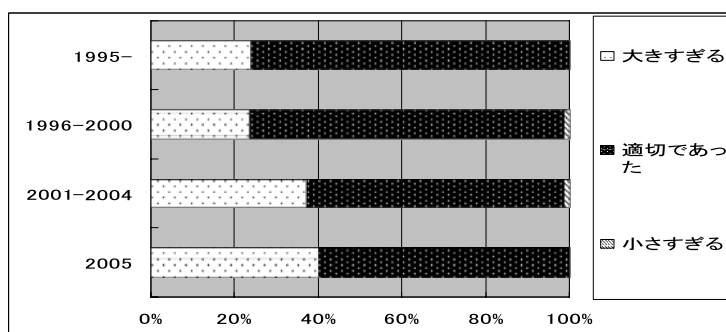
###### a. 図書館・自習室等について



## b. 実験室・演習室等について

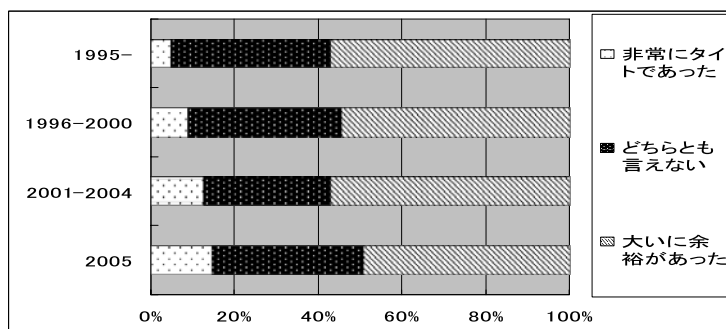


### 3.1.3 授業のクラス人数規模について（印象でお答え下さい）



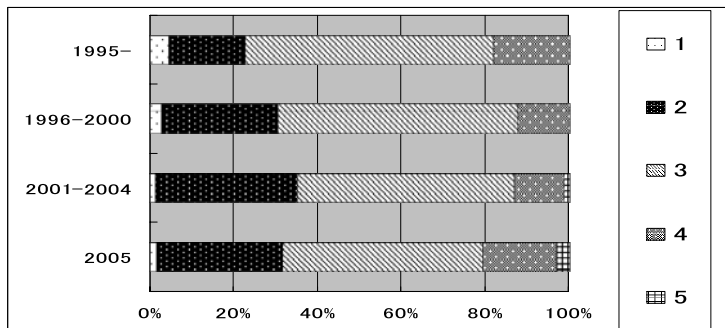
## 3.2 学生時代の時間的ゆとりについてお尋ねします。（学部学生時代の平均的印象でお答え下さい）

### 3.2.1 授業時間について



### 3.2.2 時間的ゆとりを、主にどのように使いましたか。

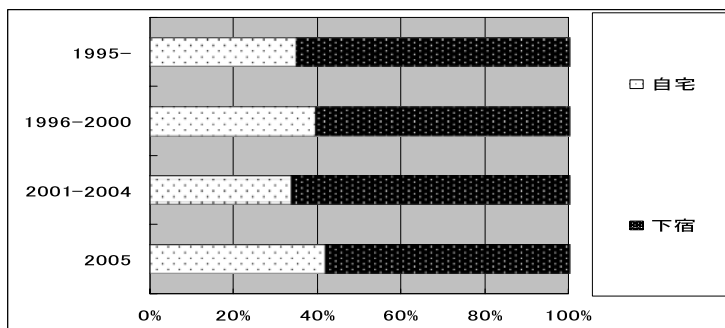
1. 授業の予習復習などで殆ど時間を使った。
2. アルバイトに時間を使った。
3. クラブなどの課外活動に時間を使った。
4. 何となく時間が過ぎた。
5. 時間的余裕が殆どなかった。



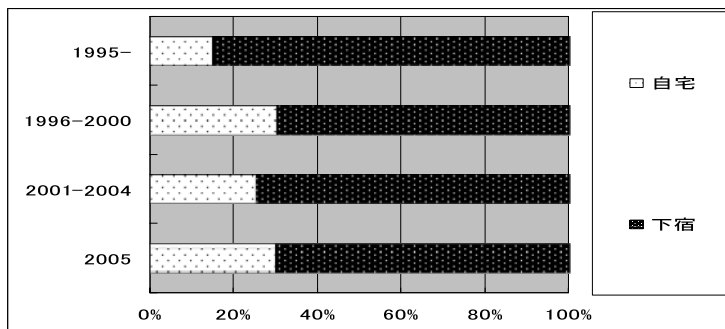
### 3.3 通学についてお尋ねします。(下宿には親類宅なども含めてください)

#### 3.3.1 各年次で、自宅通学だったか、下宿だったかをお答え下さい。

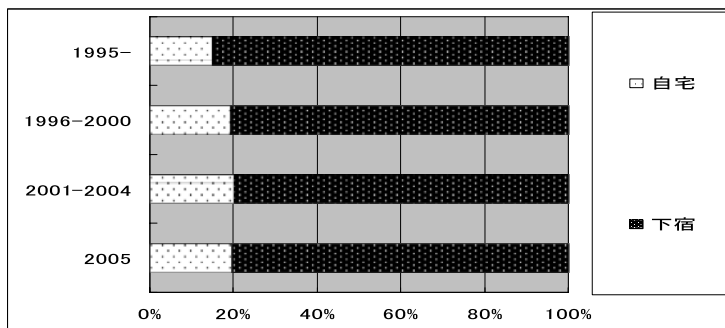
##### 1 年次



##### 2 年次

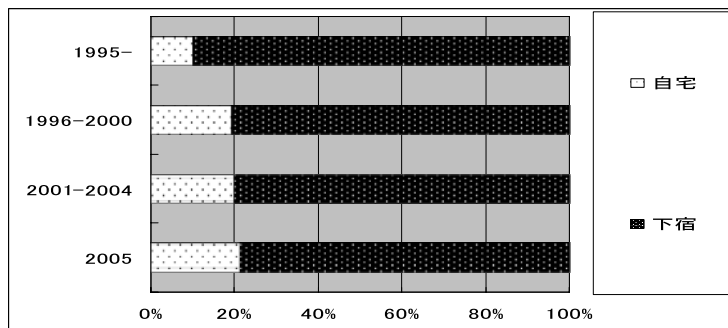


##### 3 年次

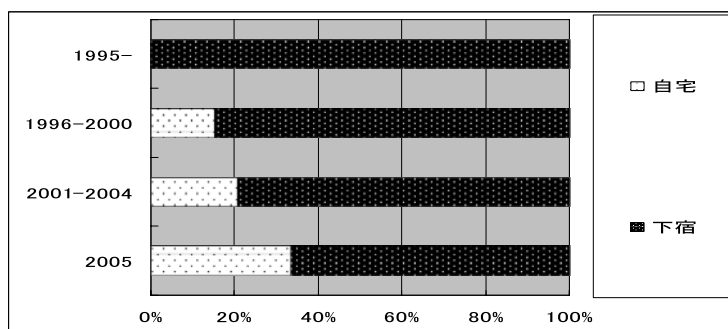




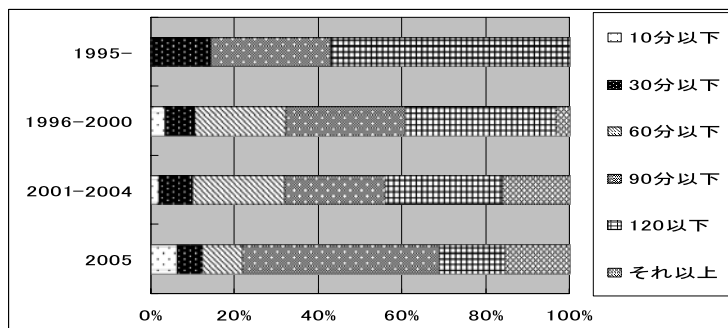
#### 4 年次



#### 5 年次以上

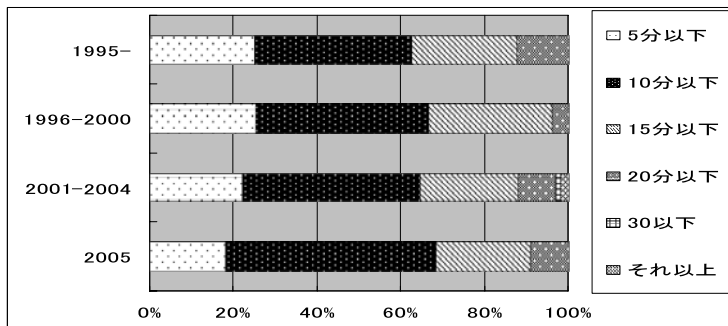


#### 3.3.2 自宅通学の場合、通学時間は何分でしたか。

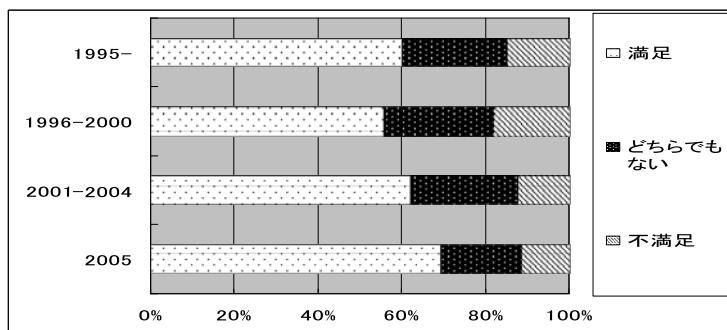


#### 3.3.3 下宿の場合、当時の一般的な生活水準と比較して、次の質問にお答え下さい。(途中で引越した場合には、全体の印象でお答え下さい)

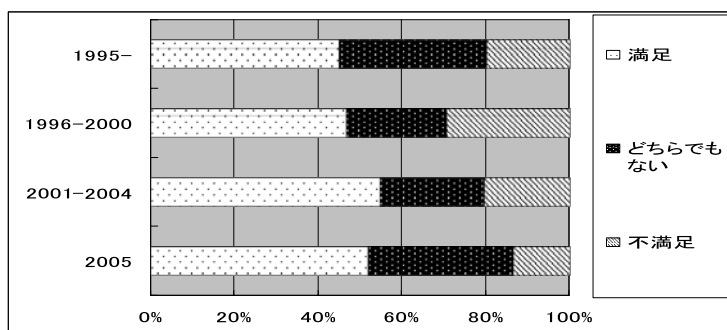
##### 通学時間



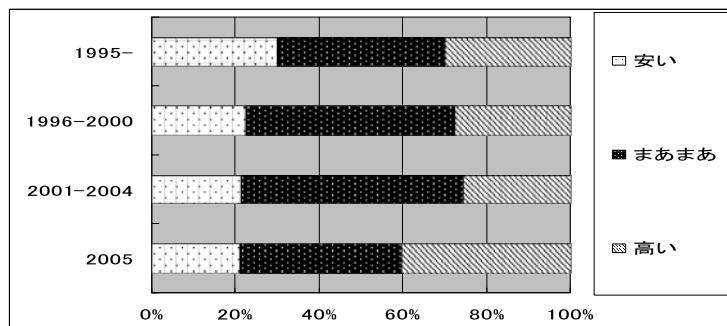
## 部屋の広さ



## 部屋の設備



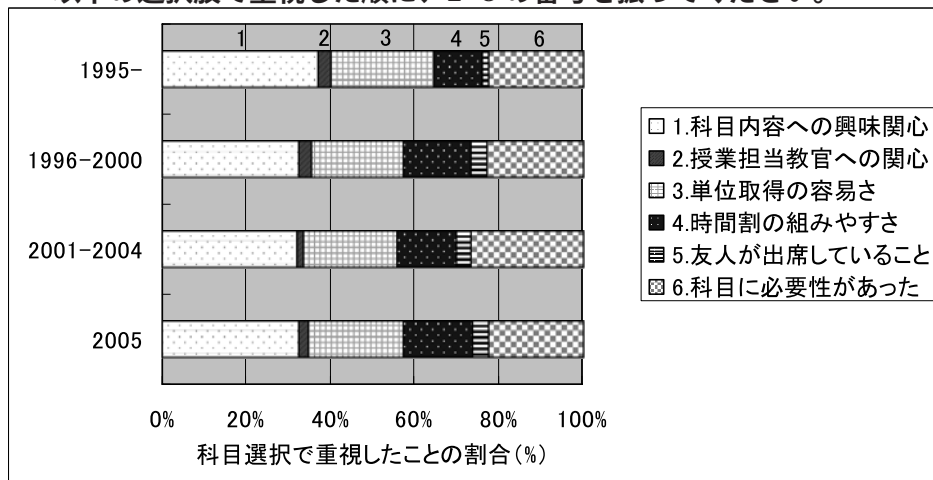
## 部屋代



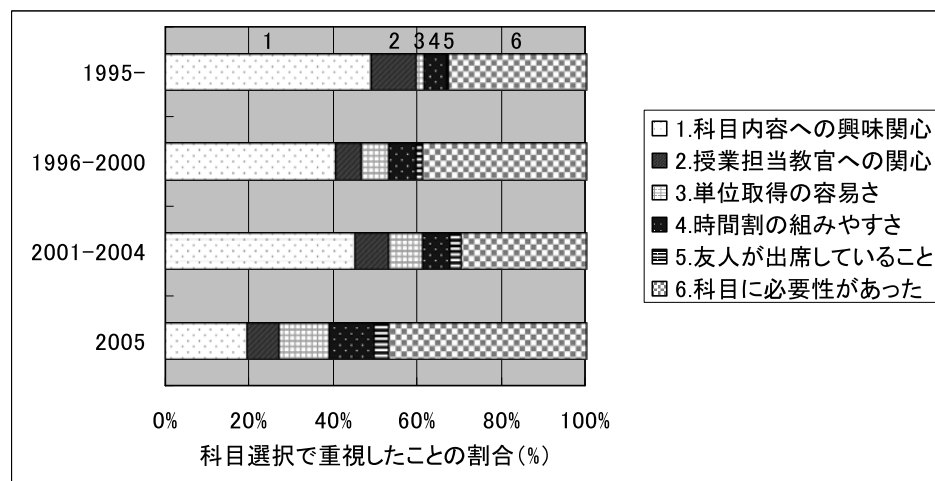
### 【4】科目履修について

#### 4.1 一般教養科目（全学共通科目）の履修科目選択で、あなたが重視したことは何でしたか。

以下の選択肢で重視した順に、1~6の番号を振ってください。



4.2 専門科目の履修科目選択で、あなたが重視したことは何でしたか。以下の選択肢で重視した順に、1~6の番号を振ってください。

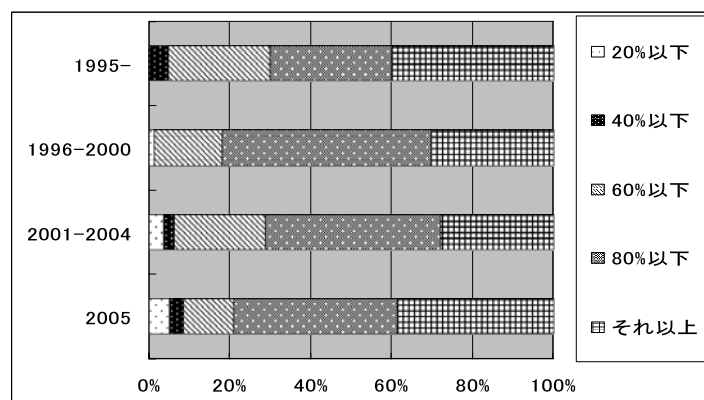


4.3 履修登録科目の中の取得単位

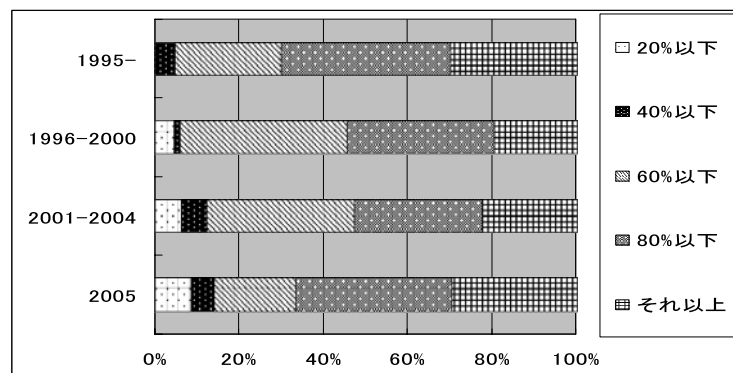
履修登録をした科目の中、どれくらいの割合で単位を取得しましたか。

学部 一般教養科目（全学共通科目）

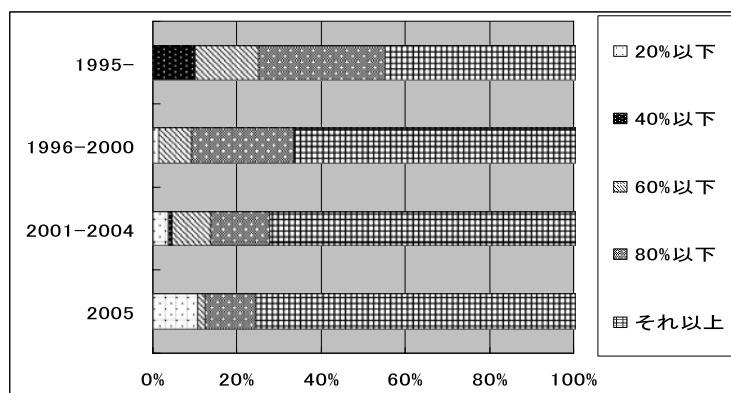
自然系科目



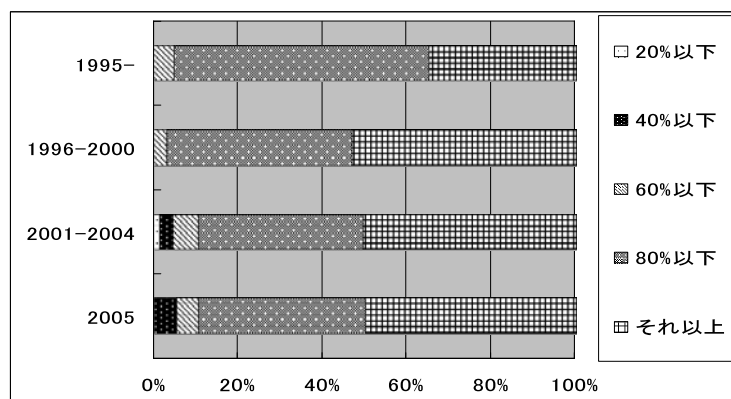
人文・社会系科目



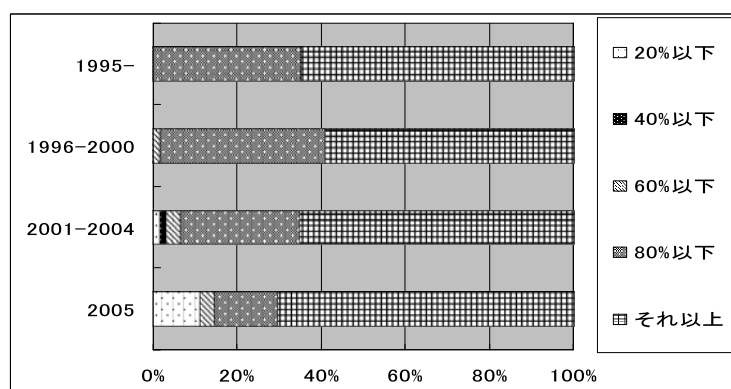
## 外国語



## 専門科目（学部科目）



## 大学院

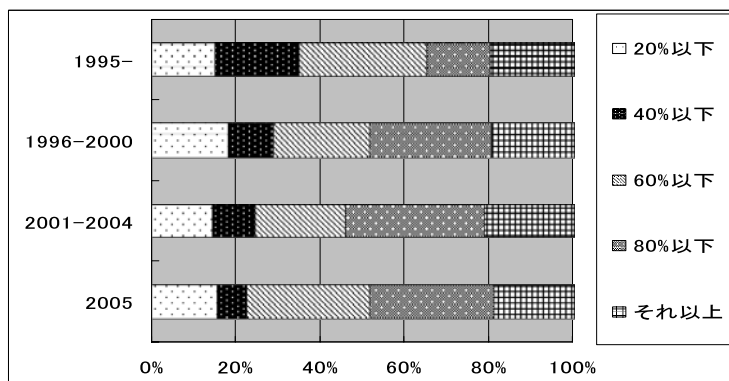


### 4.4 取得単位の授業の出席割合

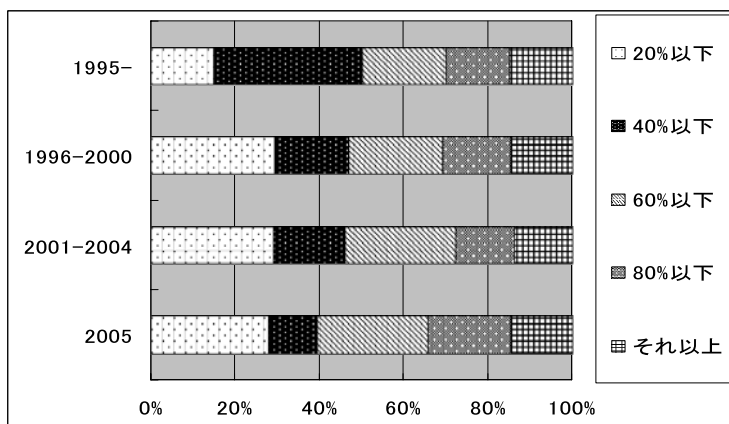
単位を取得した科目の中、どれくらいの割合で講義に出席しましたか。

学部 一般教養科目（全学共通科目）

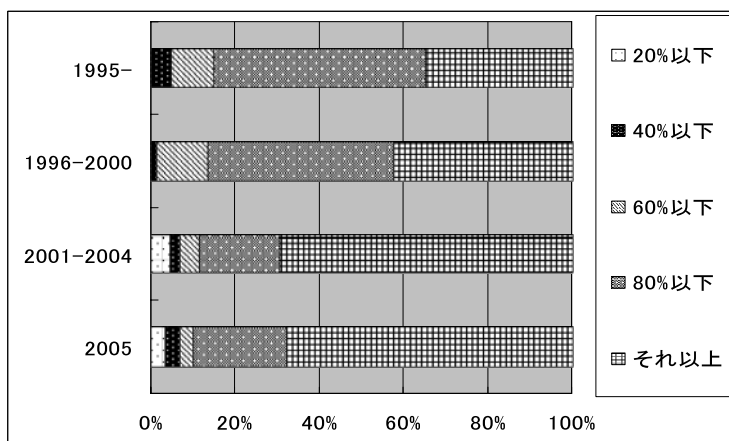
## 自然系科目



## 人文・社会系科目

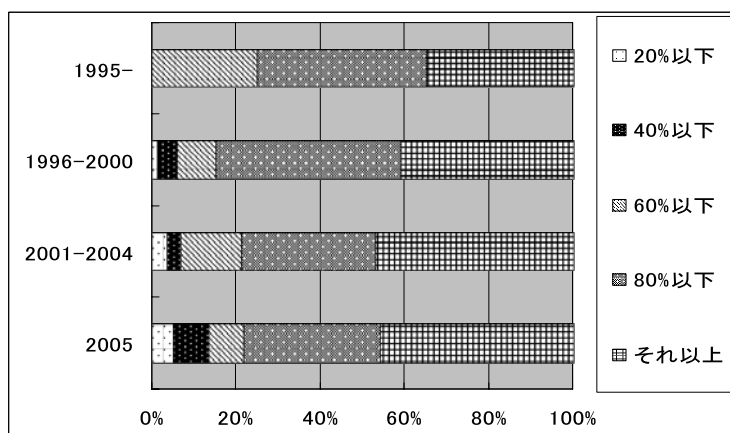


## 外国語

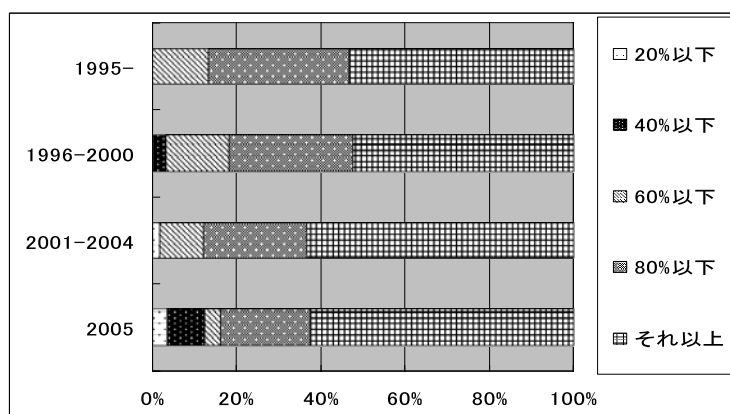




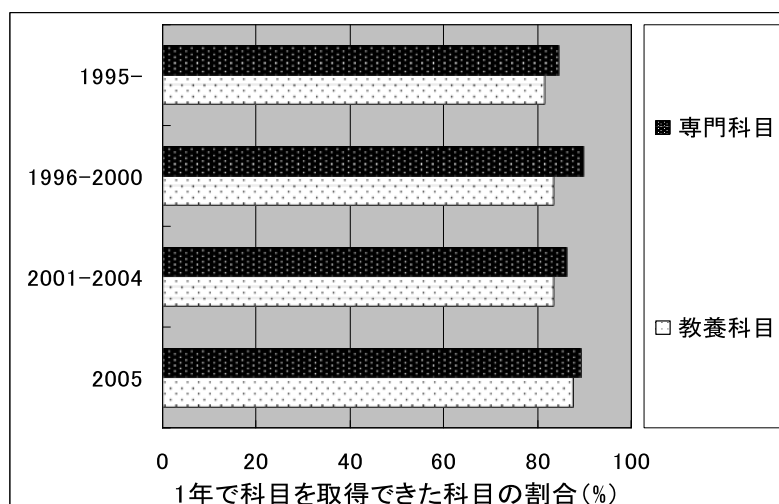
## 専門科目（学部科目）



## 大学院

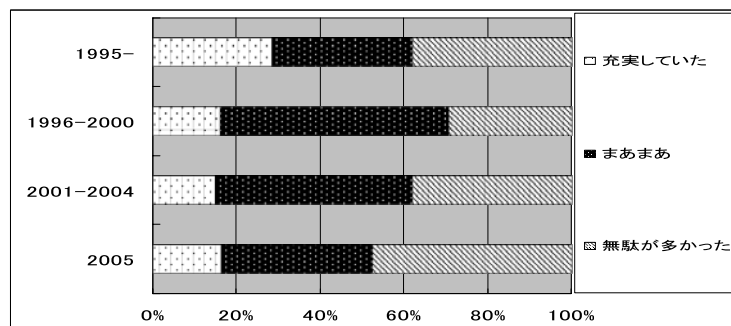


### 4.5 一般教養科目、専門科目それぞれ、1年で単位を取得できた科目、単位取得に2年以上かかった科目（1年目は不合格であったもの）は、どれくらいの割合でしたか。



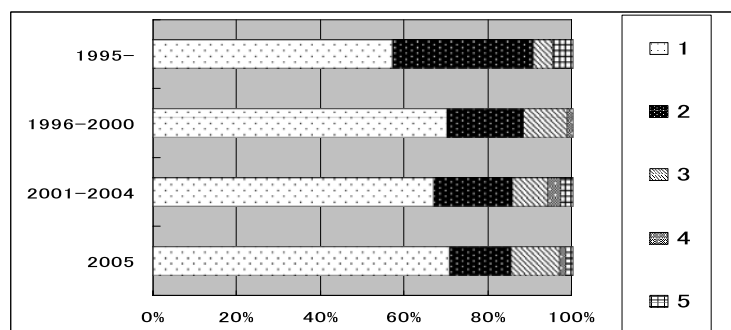
## 【5】カリキュラム・授業について（外国語を除外してお答え下さい）

### 5.1 授業及びそれ以外を含む学生生活全体で教養課程２年間についてはどう思いましたか。



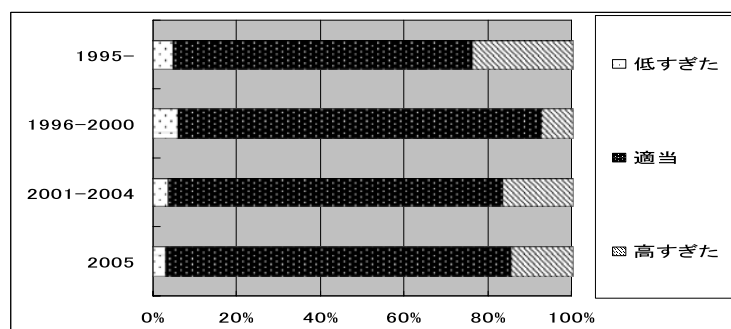
### 5.2 一般教養科目（全学共通科目）の２年次までの単位取得状況はどうでしたか。

1. ２年次までに（２回生までに）ほとんど取得
2. ２年次までに（２回生までに）75% 取得
3. ２年次までに（２回生までに）50% 取得
4. ２年次までに（２回生までに）25% 取得
5. ２年次までに（２回生までに）25% 取得以下

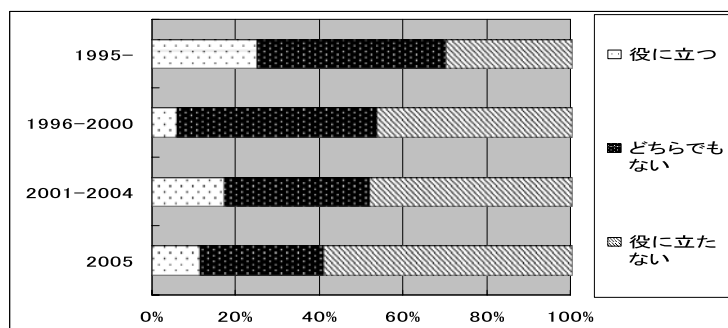


### 5.3 基礎・教養科目（全学共通科目）についてお尋ねします。

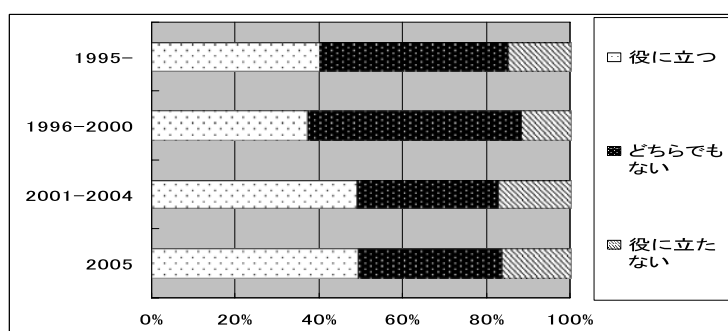
#### 5.3.1 基礎・教養科目（全学共通科目）の授業レベルについてお尋ねします。



### 5.3.2 人文社会系科目（全学共通科目 A 群科目）を履修して、後で役に立っていますか。

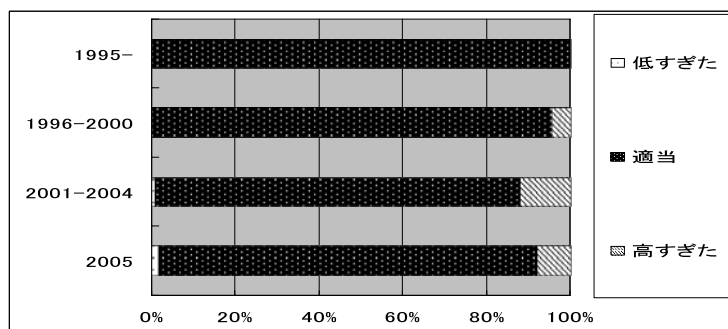


### 5.3.3 自然系科目（全学共通科目 B 群科目）を履修して、後で役に立っていますか。

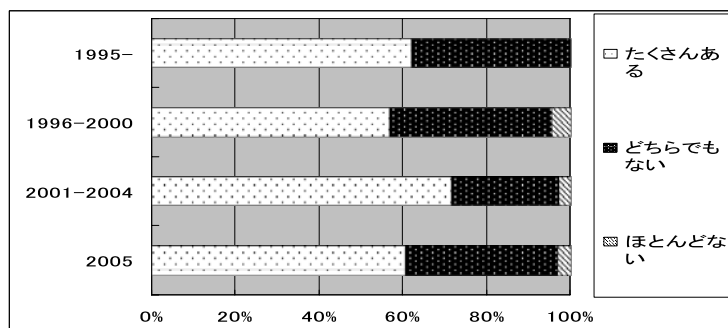


## 5.4 専門科目（学部科目）についてお尋ねします。

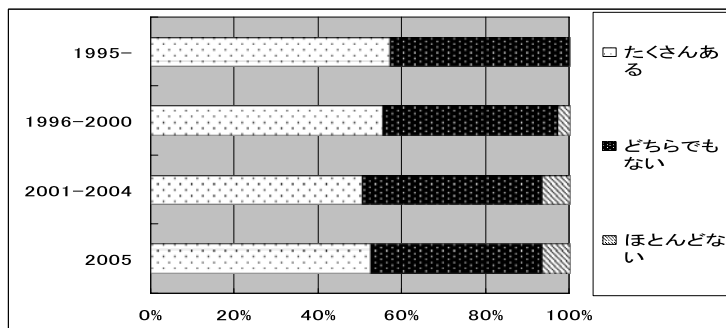
### 5.4.1 専門科目（学部科目）の授業レベルはどうでしたか。



### 5.4.2 専門基礎科目で、後で役に立ったものが数多くありますか。

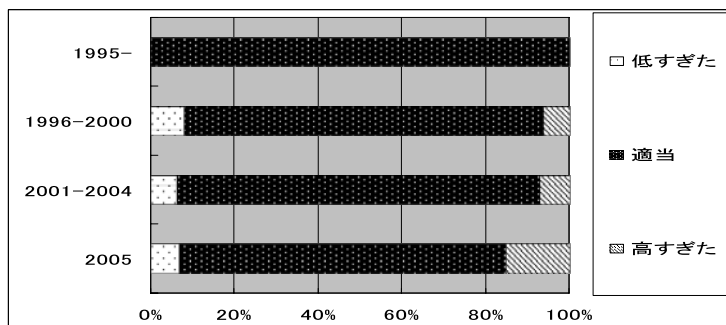


### 5.4.3 専門の応用科目で、後で役に立ったものが数多くありますか。

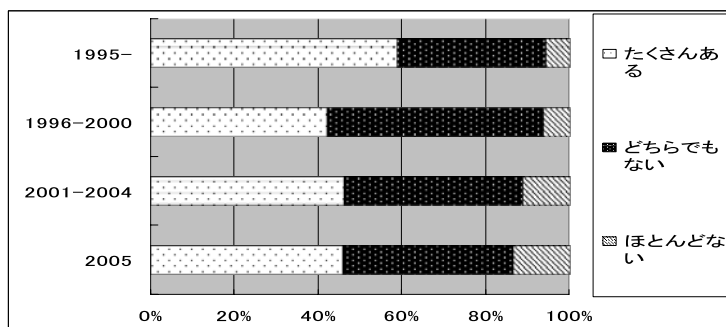


## 5.5 大学院修士課程科目についてお尋ねします。(該当者のみお答えください)

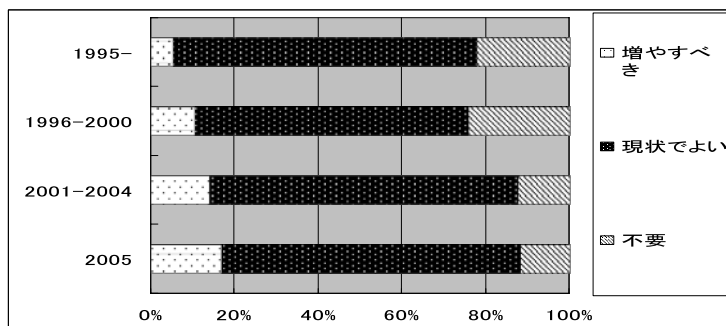
### 5.5.1 大学院修士課程科目の授業レベルはどうでしたか。



### 5.5.2 大学院修士課程科目で、後で役に立ったものが数多くありますか。

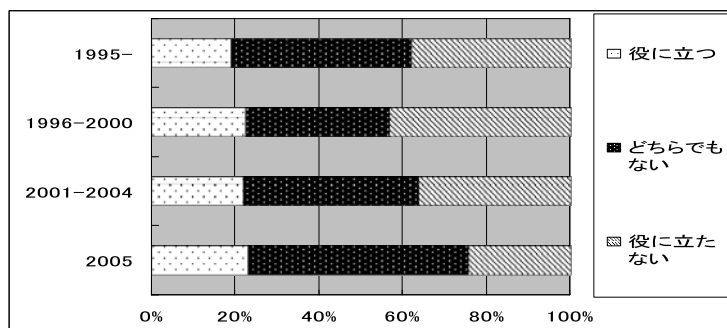


## 5.6 体育実技の授業は現在選択ですが必要とお考えですか。



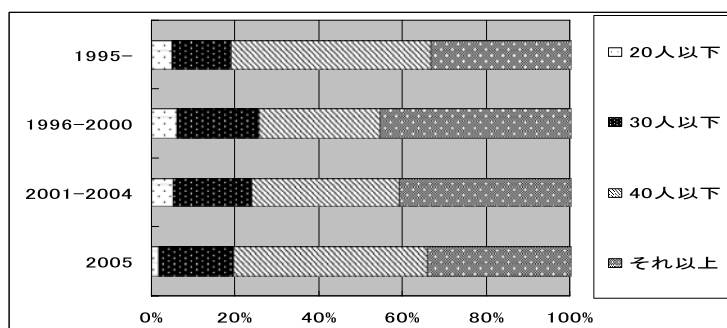
## 【6】 外国語の授業について

### 6.1 英語の授業内容は

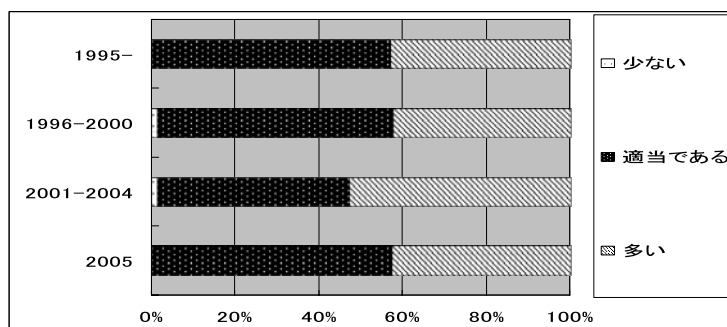


### 6.2 英語のクラス編成について

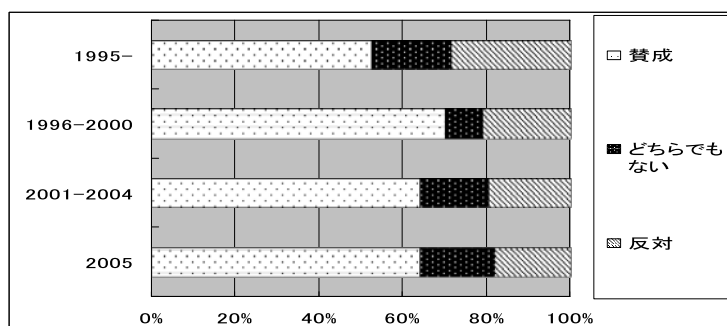
#### 1) クラスは何人でしたか？



#### 2) その人数は

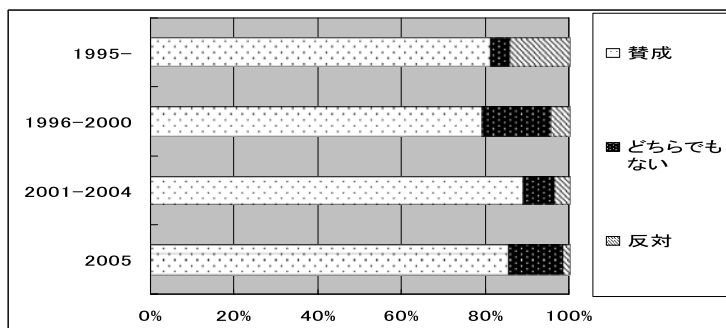


### 6.3 英語の授業について英検、TOEICなどを単位に認めることについて

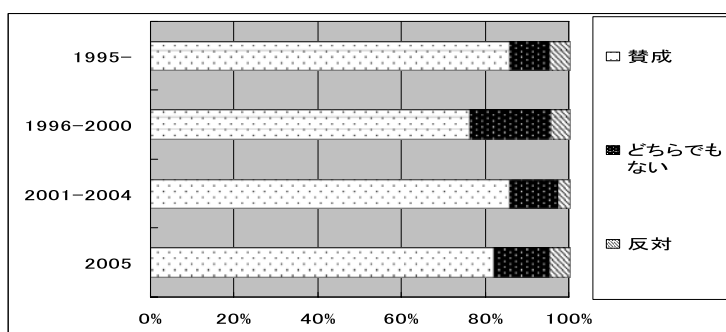




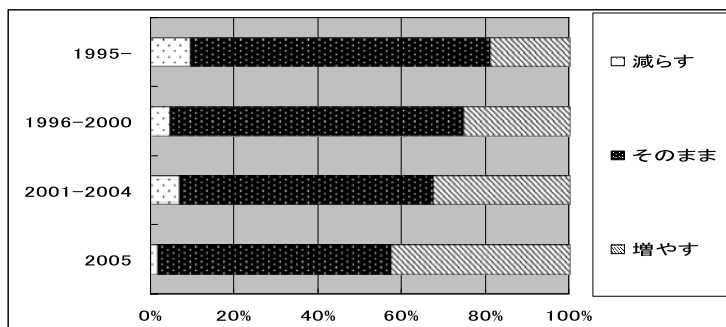
#### 6.4 会話、LL 等の教育を充実すべきである。



#### 6.5 工学英語などを導入することについて

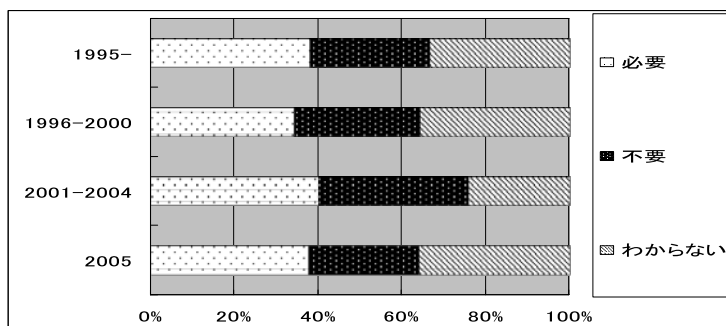


#### 6.6 語学は通年 1 コマを 2 単位としています。第一外国語（英語）は現在 6 単位必修となっています。単位数をどのようにするべきだと思いますか。

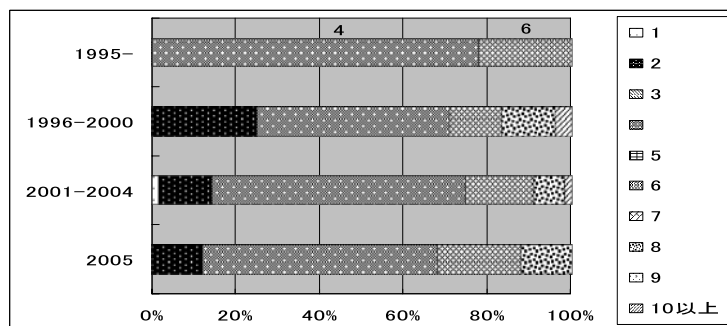


#### 6.7 第 2 外国語（初修外国語）は現在 4 単位必修となっています。

##### 1) 第 2 外国語を履修することは必要ですか。

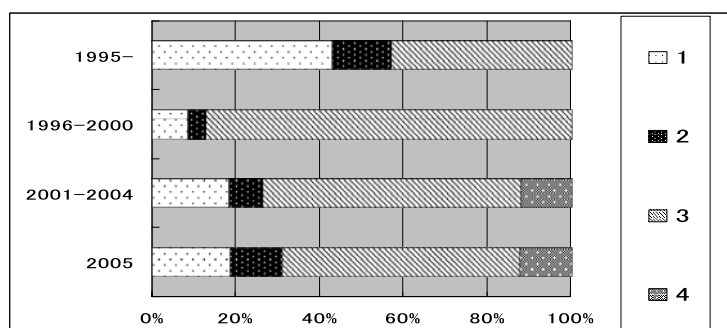


2) 1) で 1. 必要 と答えた方へお尋ねします。  
 通年 1 コマを 2 単位として何単位が適当ですか。



3) 1) で 2. 不要 と答えた方にその理由をお尋ねします。

1. 語学は英語だけで十分である。
2. これ以上語学の授業に回す時間的ゆとりがない。(語学よりも必要な科目がある)
3. 第二外国語を学習するより、英語会話や英語作文、工学英語などの能力を高める方がよい。
4. その他



その他理由・・・

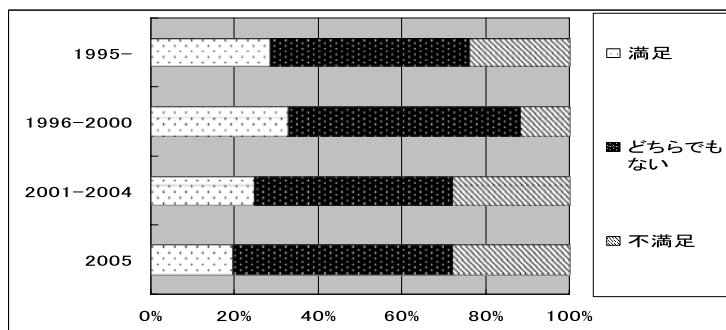
・むしろディベート等の thinking & speaking に力を入れて欲しかった。これからはもっと重要  
 ・身につかないから  
 ・授業が少なく身につかない、中途半端に終わる・必修の必要はない  
 ・語学は継続してやるべき  
 ・必要と思う人が勉強できる授業を用意する程度でよいのでは  
 ・大学の第 2 外国語の講義程度のカリキュラムだと、語学習得できず意味がない  
 ・本人の希望に任せればよい。それで私は仏・独を身に付けた  
 ・初級のみでは実用に値しないと思うので

【7】 授業に対する満足度について大まかな印象でお答え下さい

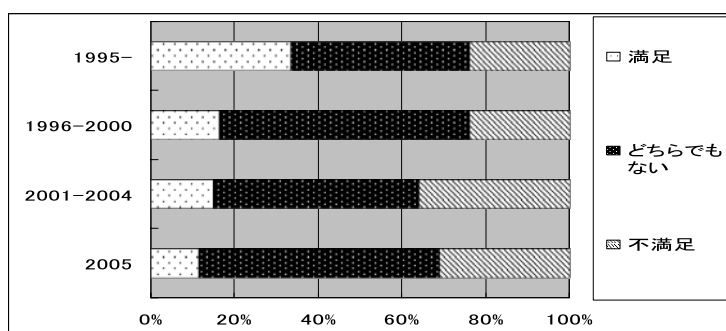
#### 7.1 授業の満足度

学部 一般教養科目（全学共通科目）

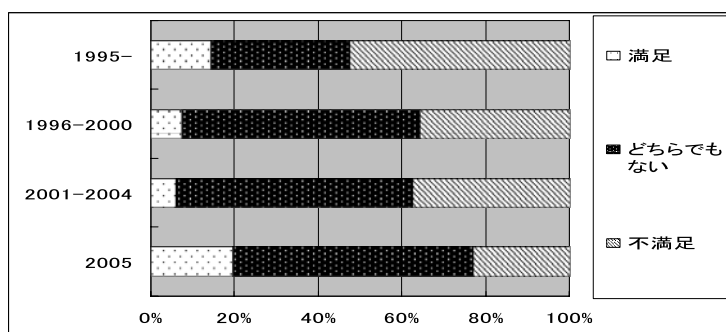
## 自然系科目



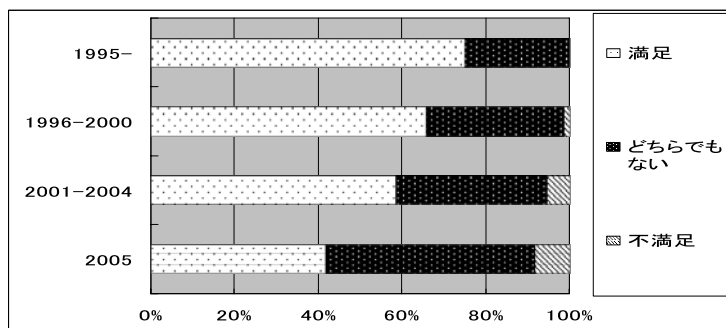
## 人文・社会系科目



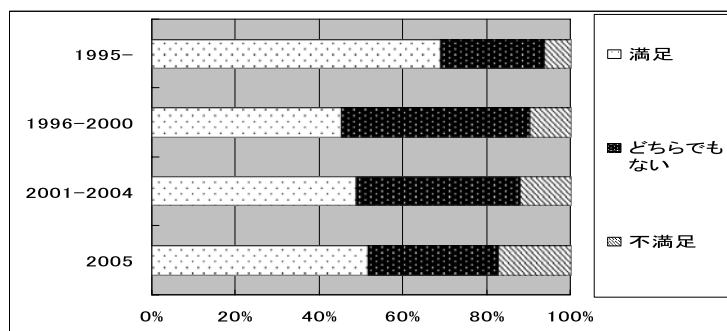
## 外国語



## 専門科目（学部科目）

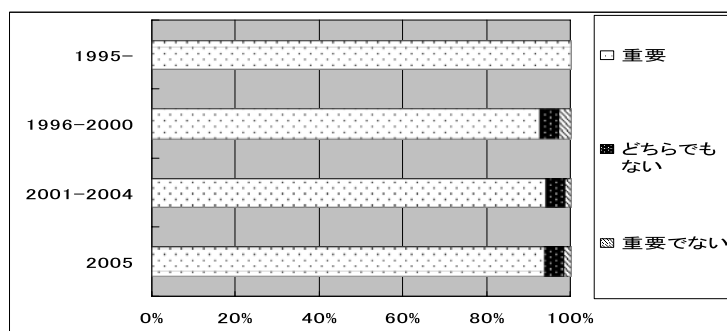


## 大学院

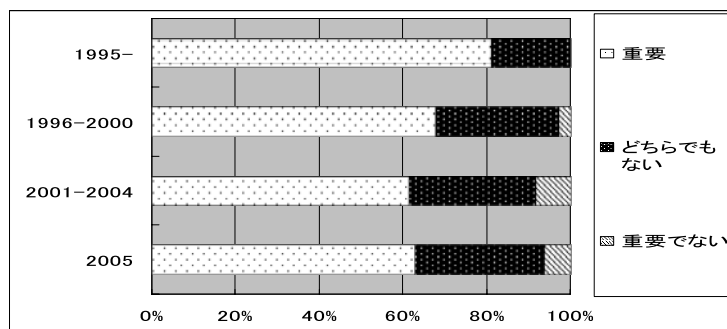


## 7.2 授業の満足度を決めていた要因についてお答え下さい。

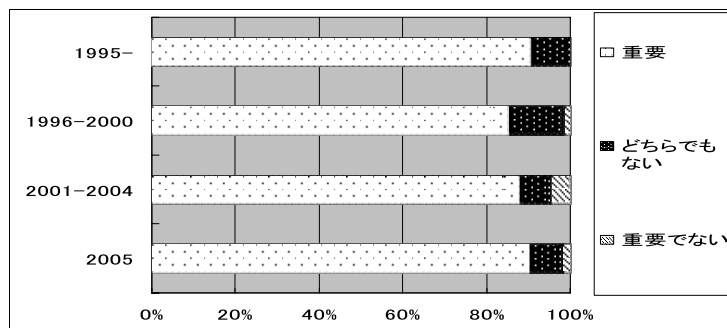
### a. 講義内容



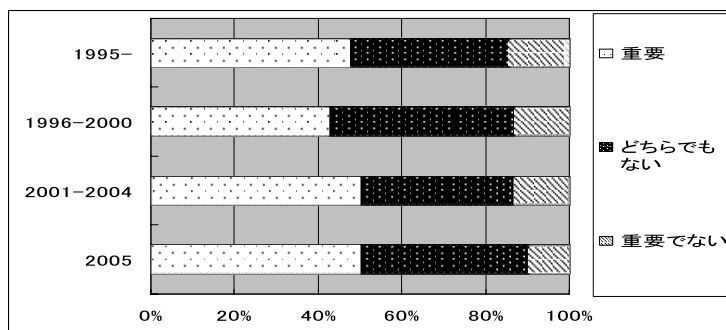
### b. 内容のレベル（高い、低い、丁度よいがあると思いますがすべて含めて）



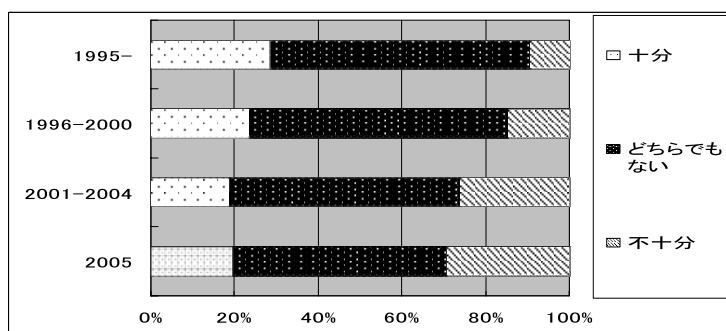
### c. 教え方



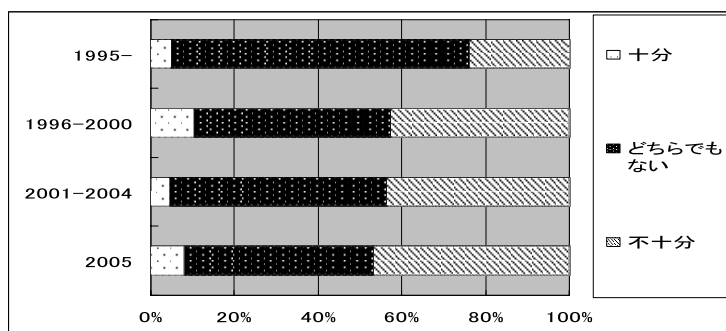
#### d. 先生のキャラクター



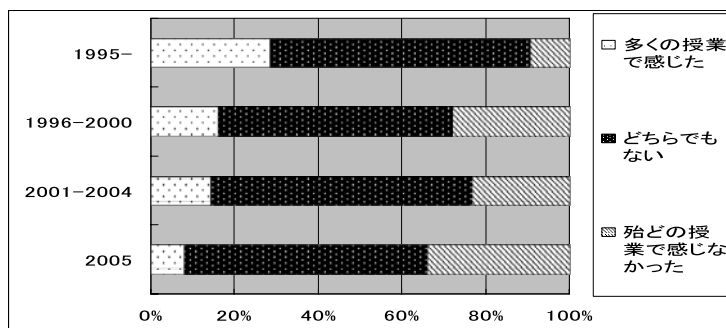
#### 7.3 教員は授業の準備を十分にしていたと思いますか。



#### 7.4 教員は授業の理解をしやすくするように授業に工夫をしていたとおもいますか。



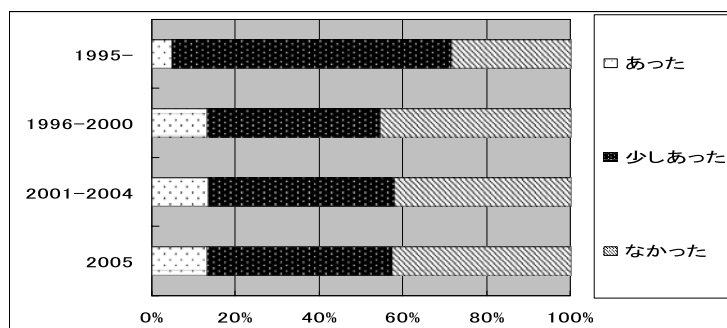
#### 7.5 授業中に教員の授業に対する熱意が感じられましたか。



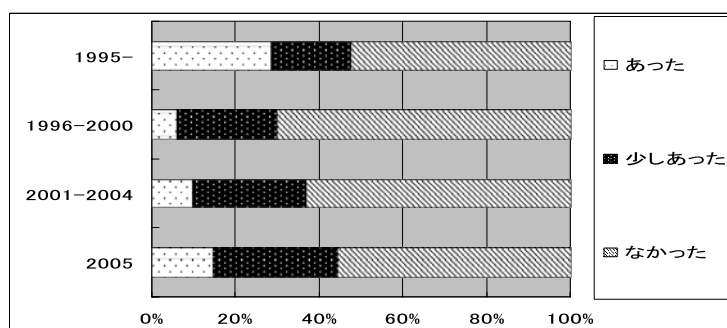


## 【8】 学部の授業における教員との対話機会について

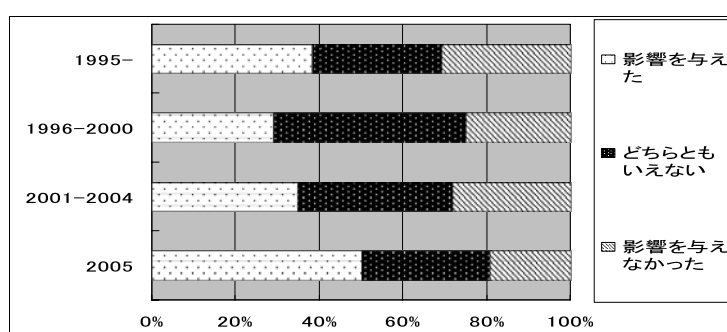
### 8.1 科目（実験と演習は除く）を担当した教員と質問等を通しての対話について 質問等で教員との対話がありましたか。



### 8.2 学部学生時代に教員と授業を通じて以外に対話を持った経験がありましたか。（卒論指導やクラブ等の活動を通じたものは除いて下さい）



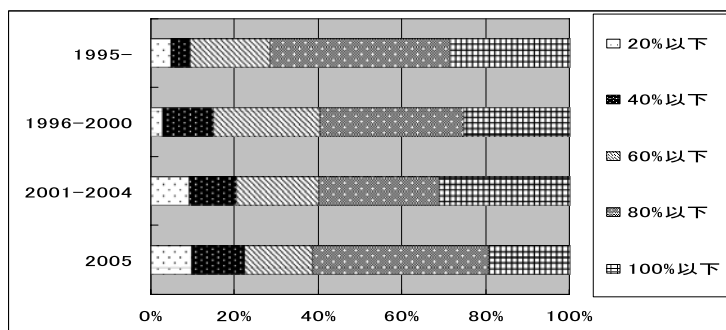
### 8.3 上で「あった」「少しあった」と答えられた方へお尋ねします。 その対話はその後の貴方に影響を与えましたか。



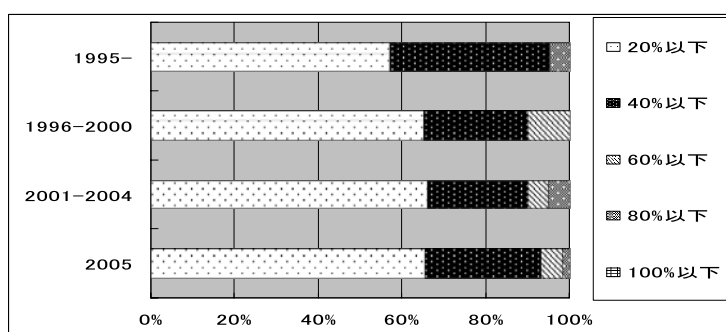
## 【9】 学生時代の経済状況について

### 9.1 貴方の学費、生活費の出所源についてお尋ねします。

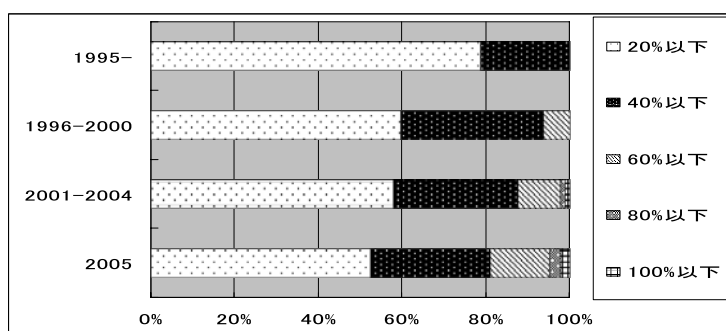
### a. 両親が支出した割合



### b. アルバイト等で自分が稼いで支出した割合

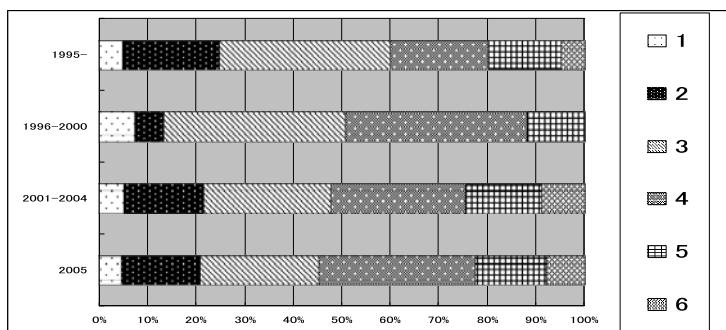


### c. 奨学金等を当てた割合



9.2 学生時代にどの程度アルバイトをしていましたか、学生時代全体での平均時間をお答え下さい。

1. 全くしていない
2. 週に 2 時間以内
3. 週に 2~5 時間
4. 週に 5~12 時間
5. 週に 12~20 時間
6. 週に 20 時間以上

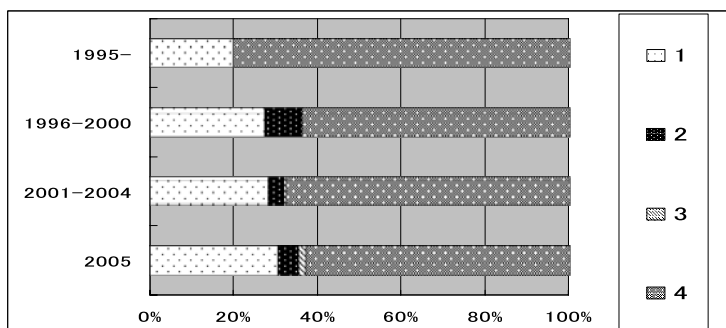


### 9.3 奨学金についてお尋ねします。

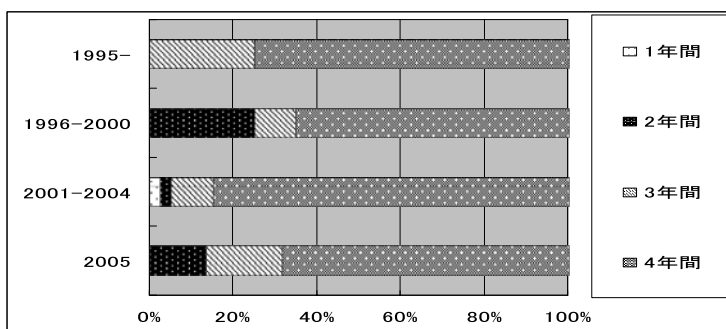
#### 9.3.1 学部学生時代

1) 貴方は学部学生時代に奨学金を受けていましたか。

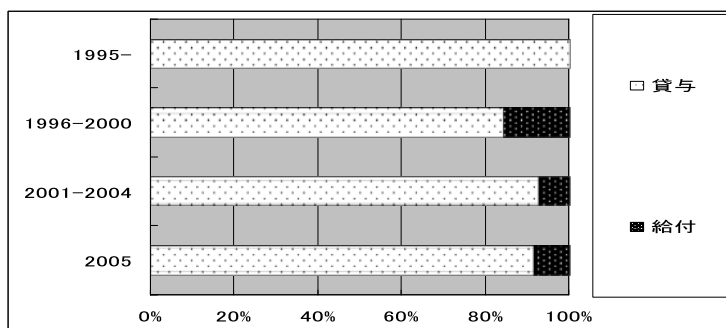
1. 日本育英会の奨学金を受けた。
2. 育英会以外の財団などのいわゆるひも付きでない奨学金を受けた。
3. いわゆるひも付きの企業の奨学金を受けた。
4. 奨学金を受けなかった。



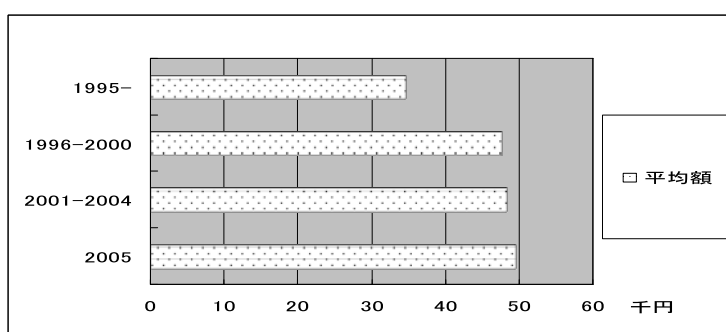
2) 上記 1) で 1 もしくは 2 と答えられた方にお尋ねします。  
何年受けましたか。



貸与ですか、給付ですか。（返済免除の場合は給付として下さい）

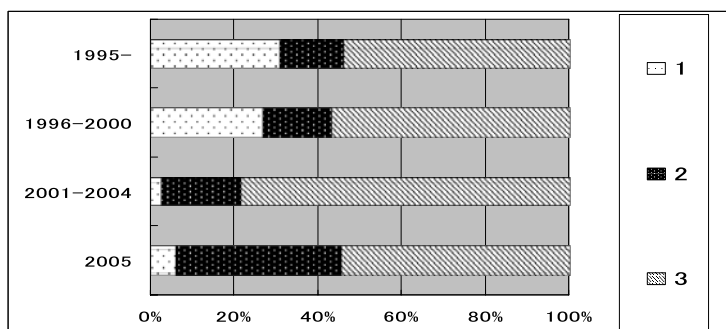


受けた奨学金の月額はいくらでしたか。



3) 上記 1) で 4 と答えられた方へ、その理由をお尋ねします。

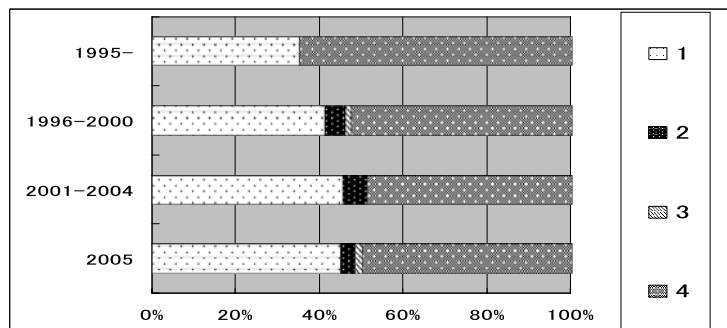
1. 欲しかったがもらえなかった。
2. 欲しかったが、返済・利息等の条件が付いているので受けなかった。
3. 必要としなかった。



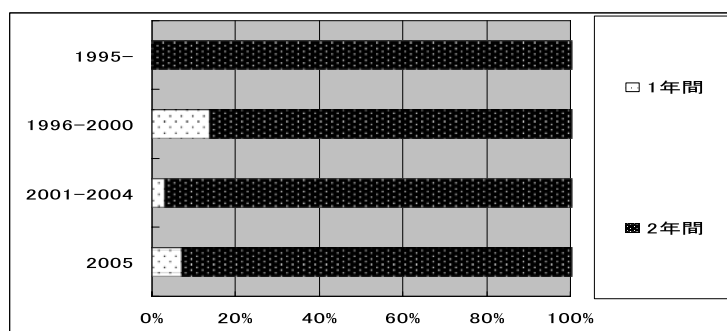
### 9.3.2 大学院修士課程時代

1) 貴方は修士課程時代に奨学金を受けていましたか。

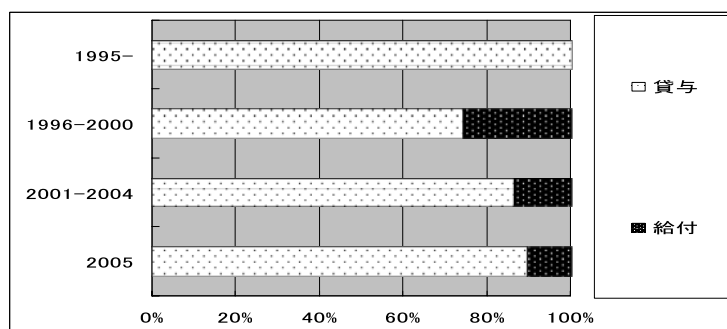
1. 日本育英会の奨学金を受けた。
2. 育英会以外の財団などのいわゆるひも付きでない奨学金を受けた。
3. いわゆるひも付きの企業の奨学金を受けた。
4. 奨学金を受けなかった。



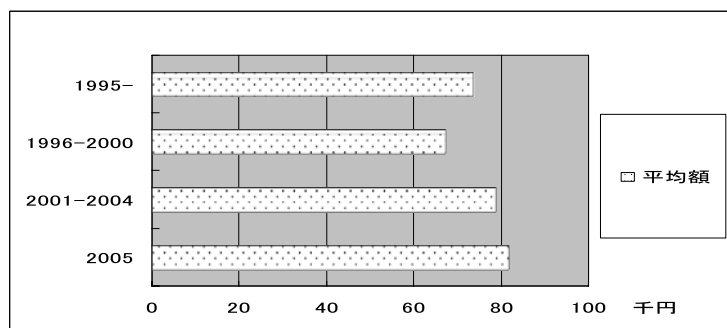
2) 上記 1) で 1 もしくは 2 と答えられた方にお尋ねします。  
何年受けましたか。



貸与ですか、給付ですか。(返済免除の場合は給付)



受けた奨学金の月額はいくらでしたか。



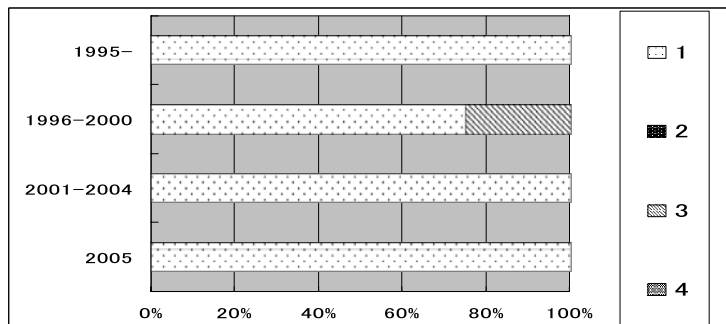


3) 上記 1) で 3 と答えられた方へ、その理由をお尋ねします。

1. 経済的理由から

2. 就職を決めることが第一の目的

3. その他



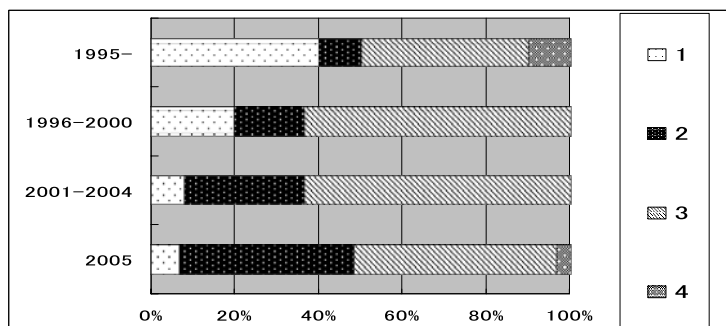
4) 上記 1) で 4 と答えられた方へ、その理由をお尋ねします。

1. 欲しかったがもらえなかった。

2. 欲しかったが、返済・利息等の条件が付いているので受けなかった。

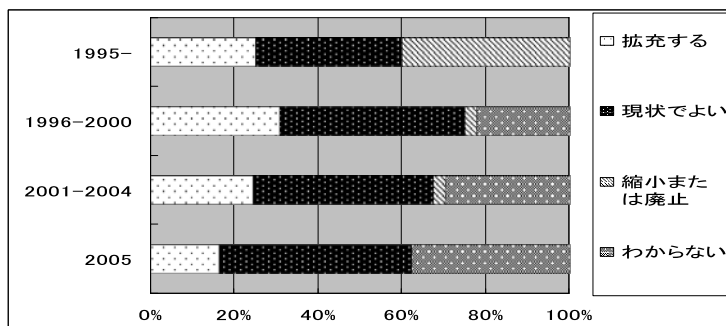
3. 必要としなかった。

4. その他



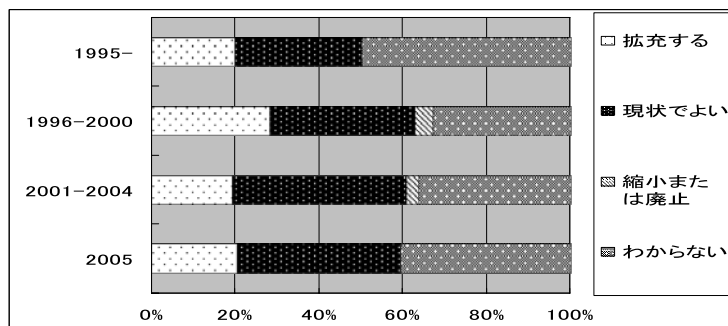
## 9.4 日本育英会の奨学金についてお尋ねします。

### 9.4.1 日本育英会の奨学金制度について



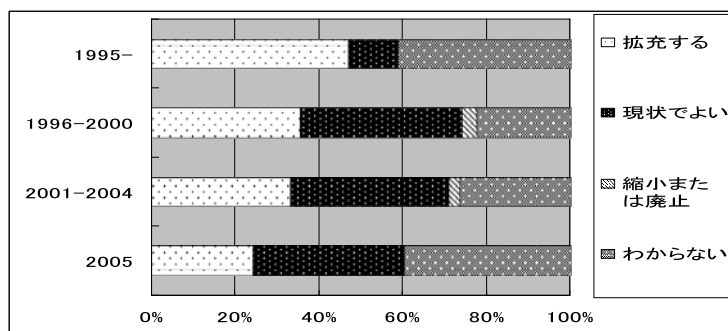
#### 9.4.2 学部の奨学金についてお尋ねします。

現状の額、人数について

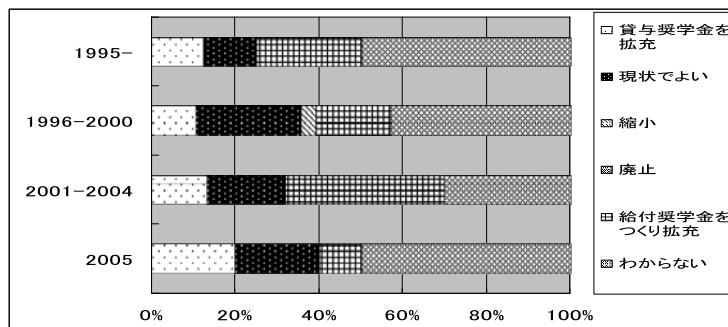


#### 9.4.3 大学院修士課程へ進学された方へ、修士課程の奨学金についてお尋ねします。

現状の額、人数について

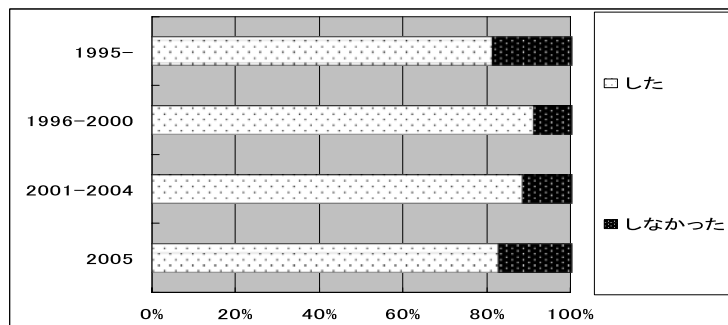


#### 9.4.4 大学院博士課程へ進学された方へ、博士課程の奨学金について



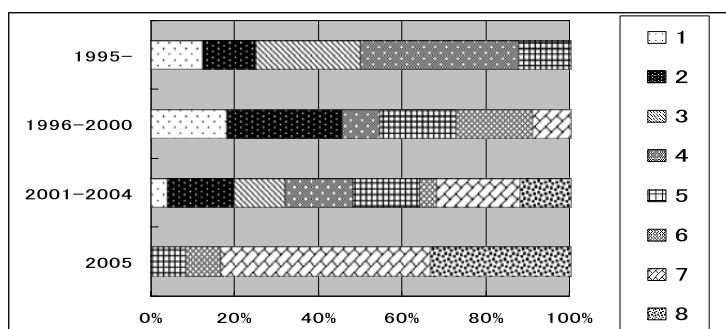
### 【10】 大学院について

#### 10.1 本学大学院工学研究科修士課程に進学されましたか。



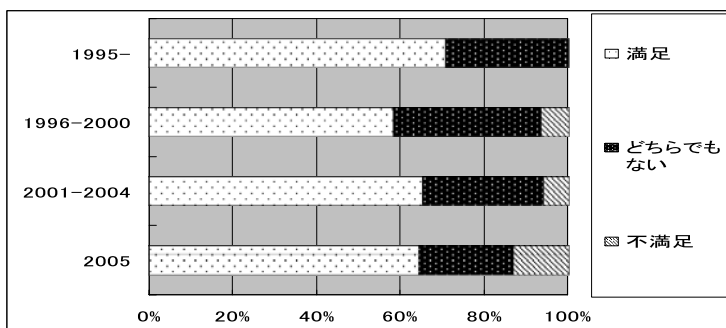
## 10.2 本学大学院工学研究科に進学しなかった方に理由をお尋ねします。(複数回答)

1. 大学院進学による経済的負担が大きく、その余裕がなかった。
2. 早く社会人になって働く必要があった。
3. 大学院工学研究科での研究・勉学に魅力を感じなかった。
4. 大学院に進学するよりほかの事をしたかった。
5. 大学院入学試験に失敗した。
6. 大学院に進学することに能力的限界を感じた。
7. 他の大学院に入学した。
8. その他

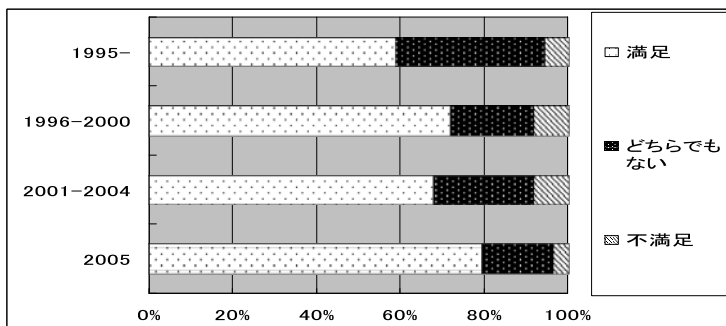


## 10.3 本学大学院工学研究科修士課程に進学された方にお尋ねします。

### 1) 修士課程の教育環境は満足できましたか。

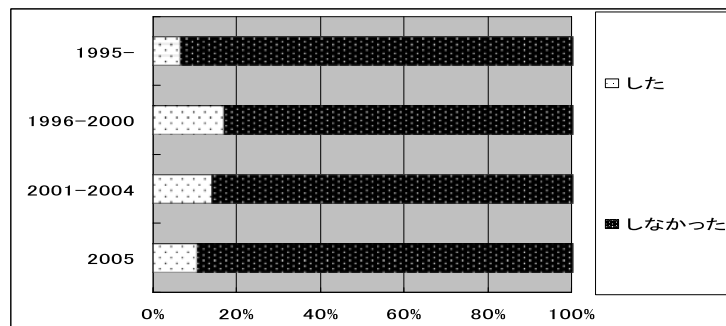


### 2) 修士課程の研究環境は満足できましたか。



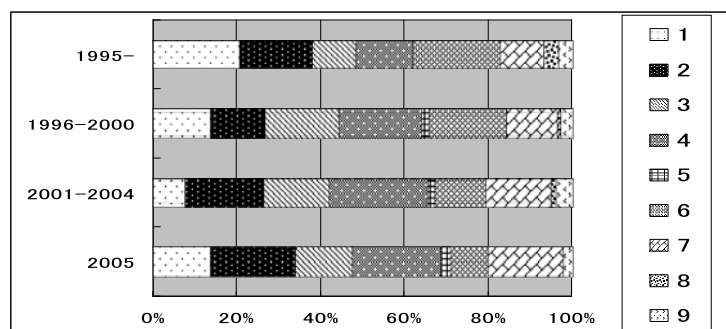
## 10.4 大学院博士課程についてお尋ねします。

### 10.4.1 本学大学院工学研究科博士課程に進学されましたか。



### 10.4.2 本学大学院工学研究科博士課程に進学しなかった方に理由をお尋ねします。(複数回答)

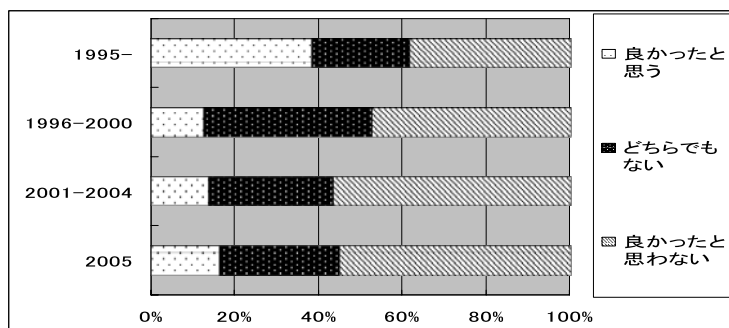
1. 大学院博士進学による経済的負担が大きく、その余裕がなかった。
2. 早く社会人になって働く必要があった。
3. 大学院工学研究科博士課程での研究・勉学に魅力を感じなかった。
4. 大学院に進学するより他のことをしたかった。
5. 指導教授等との考え方の相違など。
6. 博士号を取得しても社会的にメリットがあるとは思えなかった。
7. 大学院に進学することに能力的限界を感じた。
8. 他の大学院博士課程に進学した。
9. その他



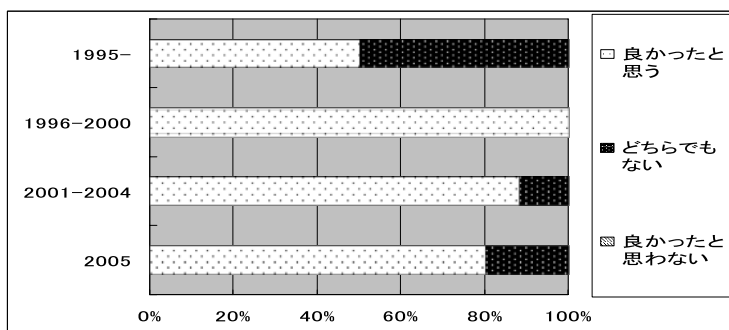
#### その他理由・・・

・研究の方向付けができていなかった。企業での研究に興味があった ・進学を希望でしたが、就職への教官の説得に安易に応じてしまった ・修士での研究テーマに発展性がとぼしかったから ・社会人となって働いた方が自分の力がよりつくと考えた ・教官の退官・一度外部に出てみたかったことと、博士号取得後の就職先の不安から ・ほかの事をしたかったが、3年で形になるとは思えなかった ・博士進学後の道に不安を感じた ・博士号にはすごく魅力を感じたが、金も欲しかった ・女性の場合、博士に進むことは家族の理解を得がたいことが多く断念

10.4.3 博士課程に進学されなかった方にお尋ねします。進学しなかった方が後の貴方にとって良かったと思いますか。

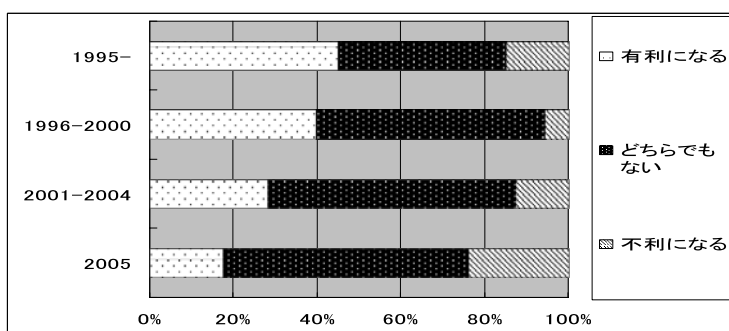


10.4.4 博士課程に進学された方にお尋ねします。進学したことが後の貴方にとって良かったと思いますか。



10.5 全員にお尋ねします（学部卒業、修士修了、博士修了など全員の方）。

京都大学工学研究科で博士課程に進学することは社会人になった後で自分にとって有利になると思いますか。



【自由意見】

■社会に出て役立つこと、自分の財産になることは、勉強以外に大学生活で経験したことかもしれない。部活動、海外旅行、バイト、出会った友達。そのような経験は京大のような自由な学風であったからこそ、得られたものだと思う。学業は大切であるが、自由な学生時代でしかできないことをするためにも、ある程度のゆとりをもったカリキュラムにすべきだと思う。(2002年 環境地球工学専攻修了)



■博士課程に進むべきかどうかは、将来何をしたいかによると思う。京大が好きです。学生時代は学業とそれ以外（サークル、バイト等）のいずれも重要だと思う。（どちらかだけではダメ）（1997年 情報工学専攻（東大）修了）

■学生の自由意志を尊重するのが京大だと思います。これからもこの伝統を守りながら改革を続けていてもらいたいと思います。実習は課題と資料だけ与えて、あとは放任というスタイルでした。当時は大変でしたが、「物を考える」姿勢は今でも役立っています。（1997年 情報工学専攻修了）

■学部時代は野球に打ち込んでおり、あまり勉学に励んでおりませんでしたので参考となる意見とはなっていないかと思います。申し訳ありません。学部卒業後、早や9年となりますが、今思うことは、企業の訪問をもっとすればよかったということです。あの頃は、4回生になってやっていた自分の研究が、どの様に社会の役に立っているのか、また、卒業生の方がどの様に社会でご活躍されているのかわからないまま就職しましたので、その点については後悔しています。まとめますと、インターンシップ等の制度が多くあればと思います。（1997年 工業化学科卒業）

■私のような修士課程からの進学者にとっては、どの設問に答えればいいのかが大変わかりにくいアンケートでした。回答できる範囲で行いましたが、今後の実施するにあたっては改善すべきであると思います。（2005年 都市社会工学専攻修了）

■京大のDr. は、働くのではなく大学に残って研究すべき。あと、京大は授業なんていらない。授業は内容よりも先生を制約するためのもの。（2003年 都市環境工学専攻修了）

■講義については、科目によって教官の熱意、内容などに対する印象がまったく違ったので、一概には言えません。しっかり準備してくださっていることがわかる先生がいる一方、授業する気が感じられない先生も少なくありませんでした。都市環境工学専攻の修士を修了しましたが、授業でプレゼンテーションやディスカッションの機会が予想以上にあったのがよかったと思います。私たち以下の学年ではそれより減っているようですが、プレゼン、演習の機会はもっとあっていいと思います。環境地球工学演習に代わる科目が都市環境工学専攻ではなかったことを寂しく思います。博士課程進学については就職して、興味ある分野について視野を広げてから考えたいと思っています。今の仕事は専攻内容とも関連したのですが、仕事現場に反映させられるかどうかを最重要視して、大学、研究室を選ぶことになると思います。仕事自体がまだ覚えられていないので、現段階ではまだなんともいえません。都市環境工学の博士への進学率が低下しているような、いないような数年ですが、環境系についてのみ言及すれば「環境の現場を見てまた大学に戻りたい」という人は私の周囲にも何人か見られました。乱筆をお詫びします。今後もますますの発展をお祈りいたしております。（2005年 都市環境工学専攻修了）

■10.5については各人の状況、気持ち次第だと思います。ただ、前向きな印象を受ける博士課程の方は少なかったと思います。（2005年 都市環境工学専攻修了）

■教官が授業を判りやすく工夫する努力していないと思う。自身の専門から外れた授業をするときもきちんと準備をしてほしい。自身の専門分野の授業をするときは、深く入り込まないでほしい。（1994年 建築学第2専攻修了）

■社会人になってからでも博士課程に進学することも出来る。もし博士号をほしくなった場合、是非京大で取得したいと思います。（2001年 建築学専攻修了）

■私が学部にあった頃は、自然科学系の科目では数学・物理のみ、単位として認められていましたが、それ以外の授業も教養として役立ちそうなものもあり、そういったものも幅広く教養の単位として取得できたら良いのに、と思っていました。（勿論、工学部で数学・物理の知識は絶対に必要なので、その代わりに、ということにはならないと思いますが）1回生の時、1つだけそういった（単位として認められていない）授業をとっていたのですが、非常に面白く、人文系の授業より熱心に出席していました。今も当時とかわっていないのなら、お考え頂けたら、と思います。（2000年 建築学専攻修了）

■自分への反省をこめて・・・もっと研究に打ち込む雰囲気、打ち込まざるを得ない環境を造って、“いい加減に卒業させない”ことが必要である。目標、期限を定めて、教授、学生共に成果を要求、評価される制度、仕組みが必要、研究の進歩が遅すぎる。（2002年 機械工学専攻修了）

■講義内容は当然のごとく教官によって大きく差があり、ひとつの回答をするのは難しかった。しかし、教官のやる気で講義の良し悪しが決まってしまうとは思わないです。大学までいって他人に頼るのは違うと思うからです。よって、それは教官の個性といった程度のものだと考えます。（2004年 機械工学専攻修了）

■京大という大学は今でも大好きですが、桂に移転後周囲の環境が大きく変わって「京大らしさ」が失われることを恐れています。（2001年 機械物理工学専攻修了）

■指導教官との人間関係がこじれると、研究室での生活は大変です。私の指導教官は移り気な人で言うことがころころと変わり約束等も守られず大変な思いをしました。現在いる英国の大学では学生と指導教官のミーティングの回数や時間は全て記録され、さらに半年ごとに第三者による査定があり、もし指導教官が不十分な働きしかしていなければ、学生は教官を訴えることも可能です。さらに第三者によって研究の進め方や、進度が査定されています。日本では研究室によっては指導教官が王様のように振舞っているところもあり公正なシステムの導入が大事だと思います。（航空宇宙工学専攻修了）

■このアンケート自体に不満。内容の把握しにくさや回答の必要、不必要のわかりにくさなど・・・（2005年 航空宇宙工学専攻修了）

■学部卒業後10年程度の人にアンケートを送ったと聞いたが、30歳までの人を対象とするとあり回答をするか迷った。このアンケートはそれなりに意味はあると思うが在学生に直接意見をもっと聞いたほうが良いのでは（1997年 原子核工学専攻修了）

■教養2年間の講義は概論的なものが多く、身についたものはほとんどない。自然科学分野はテストや演習、課題などで理解を深めながら進める必要があるが、その時間が取れない。高校からの流れのギャップが大きく、補完するのが大変であった。工学部の講義は非常によいものが多く、教養との差に愕然とした。4回生、院での研究室での3年間は研究者としての今の自分を作り上げた礎となっている。大学では新しい事象に出会った時、対処できるだけの基礎力となる分野の理解の深さが重要で、変に即戦力をつけるための施策は必要ない。（1997年 原子核工学専攻修了）

■学部、大学院で学んだことは大いに役立っています。（1996年 材料工学専攻修了）

■質問自体に回答者の意図を反映できないものが多い。意図的な回答を引き出したい等の理由があるのであれば、公平性に欠く。総計処理後、導き出した解釈、集計は回答者全員に公表、送付してもらいたい。真に改革を目指すのであれば、これまでの大学の閉鎖性、視野の狭さを

前提として提言、フレーム見直しを行ってほしい。大学で働く若手、パートナーとして協力している民間企業の担当者の意見を生かす仕組みが必要。教育機関（を目指しているのかどうかは中計次第だが）として、優秀な若手教官に光を当ててほしい。（1995年 材料工学専攻修了）

■大学の授業が高校や予備校と分かり易さの面で違って戸惑った。大学の先生としては、学問は自分から方法を見つけてするものということを伝えたいのかもしれないが、（あるいは分かりやすくする工夫をするのが面倒くさいだけ？）ある程度基礎的な手法を扱えないと将来にわたって苦労する。受験勉強の感覚を忘れていない1回生のうちからある程度詰め込むべきではないか？そうしたとしても京大生のアカデミック性、創造性を失われないばかりか、もっとよいものづくりを行えるのではないか？（2002年 電子物性工学専攻修了）

■最後の問い（10.5）は「有利」の意味があいまいに思います。（2001年 電子物性工学専攻修了）

■在学中（B4）、学内で行われていた工事業者に下宿までつけられ、ストーカーまがいのことをされたことがあります。しかし、教官に相談しても取り合ってもらえず、登校するのに不安を覚えた上に、安心して院試に臨めなかったのを未だに残念に思います。教官には多くを望みませんがせめて「ここに相談してみたら？」としかるべき学内組織などを紹介してほしい。工事業者への監督責任を大学として果たしてほしい。女子学生の相談窓口を各学科内に作ってほしい。私は現在会社でリクルーターもやっていますが、リクルーターの立場から言えば「社会人として当たり前のこと」のできない学生が多いと思います。会話が成立しない、周りの雰囲気によめない、自分の基準でしか物事を判断しない、といったように。学生時代に学業だけでなく、最低限のマナーを身に付けさせてほしい。産学連携、インターンシップなどを利用しても良いので。（2003年 電子物性工学専攻修了）

■もっと研究室配属が早いほうがよい気がします。一つ専門を持つことで他分野の授業などに対する興味も生まれてくると思います。1回～3回の授業は、幅広かったが必要性を生で感じる事が出来なかった。（2002年 電子物性工学専攻修了）

■桂キャンパスに移られてハード面では充実した教育環境になられたと思います。その中でさらに優秀な卒業生が輩出される事を期待いたします。（2002年 電気工学専攻修了）

■社会人になって英語の重要性を痛感している。また、社会人になってデスクワークが多いため運動不足になっている。学生には時間があるうちに英語のリスニング強化、部活動での体力作りに取り組んでいただきたい。（2003年、電気工学専攻修了）

■今後とも京都大学から多くの優秀な人材が生まれますよう、教官、教育環境等の質の評価を適正に行っていただければと存じます。（2002年 電気工学専攻修了）

■今後ともこの様な調査を実施し、工学部や工学研究科の教育や研究の体制などにフィードバックすることは大切だと考えます。今回だけの取り組みではなく、継続して実施されることを希望します。（2003年 電気工学専攻修了）

■勉学は本人の意志に基づくものですが大学初年～2年次までの教養と3年次からの専門基礎について少しレールを敷いてもよいと思います。（丁寧な授業と出席の必要性。少人数制）。また学部生の早い段階から研究について（研究室）積極的に交流できる情報を与える場を設けたほうがよいと思います。京都大学の発展を祈っております。私も微力ながら影より力添えいたします。（2003年 分子工学専攻修了）

■私自身、真面目に勉学に励んだとは言えませんが、吉田キャンパスで過ごした学生生活は本当に素晴らしかったです。工学部として新たに桂キャンパスができたことで、これから研究施設等の充実が図られてくると思いますが、学業だけでない京都大学の学風をこれからも維持してってもらいたいと思います。(1999年 化学工学専攻修了)

■集計が大変だと思うので、可能な人に限り Web アンケートでも良かったのではないのでしょうか。(2001年 化学工学専攻修了)

■大学学部において、ぜひとも英会話とコンピューターのスキルが向上するようなカリキュラムを組んでいただきたいです。英語のリーディング、ライティングは大学入試に合格するレベルであれば十分でしょう。私は学部時代、英語の授業で複雑な英文学の文章を読まされましたが、そんなレベルの英語力は多くの学生にとっては全く不要です。それよりもリスニング、スピーキングのみを行い、会話する力を身に付けられるようにしていただきたいです。また、パソコンに関しては、私の場合、情報処理の授業で UNIX の使い方、VI エディタの使い方なんかを教わりましたがこれこそ大部分の人には不要な知識です。それよりもパソコンパーツを組み上げて自作 PC を作る実習、windows の使い方、操作法、レジストリの編集法、office の使い方なんかを教えてあげたほうが時代のニーズに合っていると思います。もちろん、単にパソコンを教えるだけでは巷のカルチャー教室と一緒にいるので、情報処理の基礎はしっかりと教える必要があるし、エクセルの使い方、実験データの分析や解析を VBA プログラミングを組んで行うなど、色々と工夫は必要かと思いますが。(2002年 化学工学専攻修了)

■そもそも、「教育」が何故必要かと言えば、「教育」を受けることにより、受けない場合に比べて社会に出た時に産み出す「付加価値」が大きくなるからだと思う。この観点で京都大学・大学院の教育を考えると、下記に示す様な利点・欠点があった様に思う。

利点：図書館が充実しており、調査活動がしやすかった。教官だけではなく、先輩・同級生・後輩から刺激を受けることが多かった。

欠点：教官が忙しすぎるためか、学生の教育に十分な手間と時間を割いているとは思えなかった。大学入学後に生活が乱れる者が多く、高校卒業時よりも知力・気力・体力が低下している者をよく見かけた。

さて、教官の中には、あたかも学生を、「就職や学位をエサにして、タダで働かせることのできる労働力」のように見なす者もいたように感じられたが、そもそも学生には「大学に授業料を支払って教育を受けに来ている」という面のあることを忘れてしまうと、大学の存在意義が失われてしまうのではないかと思う。なお、「研究重視」の評価システムのせいか、ものごとを歴史的・空間的に考えることのできるような、スケールの大きな教官が若くなればなるほど少なくなっているように感じた。「教官の教育」が必要になりつつあるのかもしれない。最後に、京都大学卒業生の一人として、益々の母校の発展を願っている。(2000年 化学工学専攻修了)

■京都大学での6年間には非常に満足しております。ありがとうございました。しかしながら、幾つかの点で残念だったことがあります。

- ① 一般教養の授業の quality の低さ、熱意がない。
- ② 当初2年間授業に興味を持てなかった。(←これは私の責任)
- ③ 6年間を通じてビジネスに興味を持つことがなかった。

以上を鑑み、以下をご提案いたします。



④ 一般教養の質向上かつ単位数減

⑤ 1、2年生時にグループワーク、工場見学などを通じて、工学に興味を持てるようにする。

⑥ MOT\*的な講義を多く取り入れる。(これはすでにやられていますか？よいことだと思います。)

以上、これからも優秀な学生を輩出し続けてください。(2003年 精密工学専攻修了)

\* Management of Technology, 技術経営

■このアンケート自体大雑把過ぎてははっきりと答えられるところが少なかった。博士課程への進学を一時本気で考え、進学についてさまざまな人の話を聞いた。一度社会にでてやはり研究がしたいと戻ってこられる方は非常に魅力的であった。社会を知らずに研究は出来ないと思った。大学が法人化してさらに大切になった社会での大学、研究者の位置。専門的に深い分野を知る前に、広い視野の必要性を強く感じた。(2005年 精密工学専攻修了)

■私は社会へ出てから20年以上経た者ではありますが、何故か今回アンケートを送付いただきましたので、嬉しく思い答えさせていただきます。授業(講義とはなっていませんでした)に対する満足度の質問に環境、教え方、レベル等が項目としてありましたが、私にとっては多様性が重要でした。一般教養科目は科目が同じでも内容が興味深ければ、2人の先生の講義を受けましたし、他学科、他学部の専門科目もよく受けました。履修届は同じ時期に重複して出していた場合もあります。授業は自分にとって未知の分野へのとっかかりを掴むためのもので、教え方や環境がどうあろうと、とっかかりさえつかめれば、後から必要ならば自分でなんでも学べると信じていました。今でもそう信じています。ただ、そのとっかかりをつかむためには、多様性のある講義が手の届くところを選べるようになっていなければなりません。授業で受けた科目が役に立ったかという質問は、卒業後の職種、分野が入るとき、在学中に希望していたものと一致したかという質問と関連して質問するとより意味が出るのではないかと思います。質問の仕方は難しいですが、単に役に立ったかではなく、どういう場合に役立ったかが大事だと思います。私の場合は、最初コンピューターサイエンスの世界に就職しましたので、数理工学で学んだ専門の応用的科目がそのまま役に立つということはありませんでした。その後20年間に何回か自分にとって新しい分野に転進し、その度に在学中に学んだ一般教養科目、専門基礎科目にいったん立ち戻って、新しい分野を勉強しています。その意味で、これらはおおいに役立っています。例えば、数値流体力学のアルゴリズムの並列化を始めたときは、数値解析、流体力学に限らず、ひろく数学と物理を学んでいたことが役に立ちました。半導体デバイス設計に移ったときは、在学中に学んだ量子力学と統計力学に立ち戻り、固体力学を独習した上でデバイスの仕事に分け入っていきました。今はアナログ回路設計に移ったところで、必要に応じて古典制御理論等を紐解こうとしています。

最近の工学の分野は栄枯盛衰が激しく、特に企業においては、ひとつの狭い応用分野で研究および開発を一生涯やり続けるというのは現実的にはありえません。もしそのような希望を持つならば、自分のもくする専門を応用から一步抽象化した基礎的分野において、時代とともに関連した応用分野を開拓し、うまく渡り歩いていくのが次善の策であると考えます。そのような戦略を取るならば、一般教養科目と専門基礎科目をどれだけしっかり自分のものにしておくかが、どれだけの確に新しい応用分野をものにしていけるかに反映します。

最後に残った“専門の応用的科目”についてですが、今から思うに、私にとっての専門の応用的科目の位置づけは、卒業後に自分が従事するであろう(開拓するであろう)応用分野の実



例を学ぶ機会であったと思います。その意味では、在学中に幅広くいろいろな応用的科目が見られればよいのですが、実際には表面的にいくつかの科目を眺めるのが関の山でした。普通の学生にとっても、ひとつの応用的科目を深く学ぶことができれば十分ではないかと私は思います。後は卒業後に自分でこなしていくとともに、経験を積むのだと思います。ただ、方法論や手段につながる応用的科目は有益です。私の場合、コンピューターサイエンスの基礎（といっても工学から見れば応用分野だと思います）に関わる科目は、卒業後も役にたちました。言語理論、アーキテクチャなどです。

大学での教育が自分の受ける最後の教育ならば、その効果が自分が死ぬまで続かなければ意味がない。役に立つことを学んでも、5年後に古びてしまい次に繋がらなければ、別の教育が必要になります。そのようなことのないように、役に立つだけでなく、次に必要なことも学んだことから再生産できるような。そういうものを学ばねばなりません。もし“教育”と本当に言うのなら、そこまで責任もって教育せねばならないでしょう。卒業して5年くらいですぐに役に立ったことと、この先本当に必要となることは、おそらく異なると思います。そして後者は見えにくく、また今回のアンケートは考慮の対象外としているように思えます。その点を不安に感じました。

もうひとつの考え方として、大学の教育はせいぜい5年から10年の間は有効である専門的知識を学生に与え、人材として供給するというのを目標に据えることができます。この場合、専門的知識が有効でなくなった後の自己の教育は個人に委ねられます。仮にそうなるならば、大学はあまり教育を厳密に設計すべきではないと私は考えます。なぜならば、学生はそうでないと大学で5年から10年分の教育を受けると並行してその後の自分の必要とするであろう知識まで自力で学習しなければならなくなるからです。これは大変な負担です。そのようなことにならないことを願っています。(1984年 数理工学専攻修了)

■スタンフォード大学と産学連携を強めてほしい。(1998年 数理工学専攻修了)

■単位取得には出席を重視すべきです。また、絶対評価でなく、相対評価にすべきです。大学生はぬるま湯状態で過ごしていて、人生を無駄にしています。逆に優秀な人は2、3年で大学卒業を認めてあげてもいいでしょう。(1999年 数理工学専攻修了)

■私の在学当時の衛生工学科のカリキュラムでは他学部の単位を12単位まで卒業単位に含めることができ、私は文学部4単位、農学部8単位を取得した。私にとっては、総合大学のメリットを活かし、学びたいものを選択できる自由な環境が有意義であった。本アンケートは「場合による」「科目による」としか答えられないような質問が多く意味のある答えが出来た気がしなかった。(1994年 衛生工学専攻修了)

■日本の学生は全体的にプレゼンテーション能力に劣る。博士課程とて例外ではない。日常の授業でもっと人前にたって自分の意見を述べる練習を取り入れたほうがよい。学科間の交流がもっとあってもよいのでは？上回生にすすんでももっと広い視野を身につけさせるべき。教養学部では将来の選択肢をみせるようなことを主眼においてほしい。私は会社に入ってからもっと自らにあった道を見つけ進路を変えたがあまりにリスクが大きい。OBとのつながりをもてるようなしくみがあってもよいのでは？(1995年 金属加工学専攻修了)

■全学共通科目の講義で、受講生が多すぎて教室に入れないことが多々ありました。このように勉強したくてもできない／しにくい環境というのは改善すべきだと思います。(2005年、資源工学専攻修了)

■大学院修士課程を修了して、博士課程に進まず、社会に出たことは自分にとっては良かったと思う。現在の社会情勢では新社会人として博士を受け入れる余裕があまりないこと、また、厳しさという点で学生と社会人とのギャップは大きく、なるべく早い時点で社会になじむ必要があると感じており、この点で博士課程に進まず社会に出て良かったと思う。ただ、社会人を10年以上やってくると自分の専門性の重要度を認識しだしている。そこで、大学には社会人博士の枠を充実させて欲しいと思う。(1994年 資源工学専攻修了)

■設問多すぎ。答えにくすぎ。調査を業務とする卒業生より。(2001年 環境専攻修了)

■Jabee 対応アンケートと思われますが、授業は大学の一部でしかありませんので、それ以外の部分も大切にしてください。(1993年 交通土木工学専攻修了)

■京都大学は、異才を世に送り出す、といったイメージが社会にはある様です。(特に、私の働く東京では、概ねそれがいい方向へ解釈されている)ただし、それは、一般的なイメージで、実際組織の内にと、京大卒の常識はずれの行動も耳にする事もあります。おそらく、学生への締めつけは、全国的にみて、かなり緩い京大、自由放任ならまだしも、教授や、大学側の怠慢であってはならないと思います。(2003年 交通土木学科卒業)